

識番	本文(日本語)	頁行数		
0	……われなんじの行為を知る、なんじは冷かにもあらず熱きにもあらず、われはむしろなんじが冷かにもあらず熱きにもあらず、われはむしろなんじが冷かならんか、熱からんかを願う。	004-①		
1	その頃も旅をしていた。	005-⑦		
2	ある国をでて、べつの国に入り、そのの首府の学生町の安い旅館で寝たり起きたりして私はその日その日をすごしていた。	005-⑧		
3	季節はちょうど夏の入口で、大半の住民がすでに休暇のために南へいき、都は広大な墓地か空谷にそっくりのからっぽさだった。	005-⑨		
4	毎日、朝から雨が降り、古綿のような空がひくたれさがり、熱や輝きはどこにもない。	005-⑩		
5	夏はひどい下痢を起し、どこもかしこもただ冷たくて、じとじとし、薄暗かった。	005-⑪		
6	膿んだり、分泌したり、醗酵したりするものは何もなかった。	005-⑫		
7	それが私には好ましかった。	005-⑬		
8	旅館のすぐまえに川が流れ、木立にかこまれた寺院が対岸にある。	005-⑭		
9	いつ見ても川は灰黄色にどんよりにごり、数知れない小穴をうがたれ、寺院の屋根の怪獣は濡れしょびれている。	005-⑭		
10	咆哮しようとして口をあげた瞬間に凝視を浴びせられた姿勢で怪獣は凍りついている。	005-⑯		
11	私はベッドに腰をおろしてウオッカをすすりつつ黄いろい川に輪が広がっては消え、消えてはあらわれるのを眺めた。	005-⑯		
12	じっと見つめているとやがて無数の菌糸が消えて、たった一滴の雨が降っているように見えてくる。	006-①		
13	それにあきると毛布にくるまって眠りこける。	006-②		
14	さめるとパンやハムを買いに外出し、本屋にも映画館にも料理店にもよらないで帰り、ベッドのなかで食事をしてまた眠った。	006-②		
15	窓のカーテンはしめたままなので、赤い闇がたちこめるほかは、朝とも夜ともけじめがつかない。	006-④		
16	私は形を失い、脳がとけかかっているらしく、いくら眠ってもつぎまた眠れた。	006-⑤		
17	部屋は学生下宿である。	006-⑦		
18	古い壁紙はところどころ破れたままで、ナンキン虫をつぶしたらしい褐色の血痕が幾条もついている。	006-⑦		
19	洗面所の鏡はY字型に大きくひび割れ、浴漕があるにはあるが、湯はでたりでなかつたりする。	006-⑧		
20	ベッド一つとテーブル一つで部屋はいっぱいで、体をよこにしなればすきまを通ることができない。	006-⑨		
21	麻袋のような赤いカーテンが窓にさがっている。	006-⑩		
22	その赤のおかげで、古ぼけたチューリップ型の豆スタンドに灯をつけると、部屋いっぱい血をみたしたようになり、荒涼が消えて、あたたかく柔らかい優しさがあらわれる。	006-⑪		
23	壁や天井に、崖とか、森とか、洞窟とか、空などの影ができる。	006-⑬		
24	トウモロコシ葉からつくった紙で巻いた、いがらっぽい塩漬けの黒葉のタバコをふかしながらそれらを眺めていると、さめたばかりなのにまたうとうとしてくる。	006-⑬		
25	人もこず、電話もならず、本もなく、議論もない。	006-⑮		
26	私は赤い繭のなかで眠りつづける。	006-⑯		

27	蒼白い、ぶわぶわした脂肪が頬や腹でふくらみ、厚くなり、眼がさめて体を起すと、まるで面をかぶったようである。	006-⑩		
28	どんよりした肉のなかにこもってさまざまなこの十年間の記憶を反芻してみるが、いとわしいけだるさに蔽われて、苛烈も、歓喜も、手や足を失い、薄明のなかの遠い光景でしかない。	006-⑪		
29	それらは温室の蔓草のようにのびるままのび、鉢からあふれて床へ落ち、自身で茎や枝を持ちあげる力もないのにはびこりつづける。	007-②		
30	私からたちのぼったものは壁を這い、天井をまさぐり、部屋いっぱいになり、内乱状態のように繁茂する。	007-④		
31	ちぎれちぎれの内白や言葉や観念がちぎれちぎれのまからみあい、もつれあい、葉をひらき、蔓をのばして繁茂する。	007-⑤		
32	パンを買いにでたとき、雨が小止みになったりすると、私は大通りのゆるやかな坂をのぼって、公園へいってみる。	007-⑦		
33	そこで一人の初老に近い男が仕事をしているのをちよつとはなれたベンチに腰をおろして眺めるのがひそかな愉しみである。	007-⑧		
34	ここへくると彼が健在かどうかをたしかめずにはいられない。	007-⑨		
35	去年もそうしたし、三年前もそうした。	007-⑩		
36	ここ数年間、ずっと彼はおなじ仕事をつづけてきたらしく思えるが、はじめて見かけたときにくらべると、腹が丸くなってせりだし、眼のしたに袋ができ、背がたわんでいる。	007-⑩		
37	けれど生きた蛙を呑んだり吐いたりする動作はずっと洗練されたように見える。	007-⑫		
38	彼は木かげであらかじめ水を飲んでおいてから通行人がくるのを見ると道へでていき、口をいっぱいひらき、大きな、厚い、黄緑がかった苔のこびりついた舌をいきなりだらりとだしてみせ	007-⑬		
39	そこへ蛙をのせ、一気にごくりと呑みこむ。	007-⑮		
40	眼をしばたたく。	007-⑯		
41	ついで右手をあげ、手刀にして、ふいに太鼓腹をはげしくうつ。	007-⑯		
42	口からドツと水がとびだしてあたりに散る。	007-⑰		
43	同時に蛙もとびだし、胃液にまみれて砂利のうえをとびまわる。	007-⑰		
44	男はそれをひろって金魚鉢に入れてから見物人にむかって手をさしだす。	008-①		
45	見物人はポケットをさぐって一枚か二枚の硬貨を男の手にのせ、ぼんやりしたまなざしで散っていく。	008-②		
46	ずっと男はだまってきたきりである。	008-③		
47	ひとことも口をきかないのだ。	008-③		
48	クスリともしないのだ。	008-③		
49	そうやって一日に何度か蛙と水を呑んだり吐いたりだけで暮しているらしい。	008-④		
50	いつか私は彼が酒場で金魚鉢をよこにおいて酒を飲みつつ主人と談笑しているのを見かけたことがあるから唾ではない。	008-⑤		
51	この男は戦争中も右往左往の群集に向って蛙を呑んだり吐いたりしてみせていたのであるまいか。	008-⑥		
52	死ぬまでつづけるつもりなのではあるまいか。	008-⑦		
53	私はそう思うことにしている。	008-⑧		
54	その徹底的な侮蔑を眺めていると小気味いい。	008-⑧		
55	何となくホツとせずにはいられないのである。	008-⑧		

56	まだこんな方法がのこっていたかと思う。	008-⑨		
57	食品店でパンとハムを買って部屋にもどると、さきほど着たばかりのシャツと靴をぬいで私はベッドにたおれる。	008-⑨		
58	毛布には体の形の鑄型ができていて、しっかりとくわえこまれてしまう。	008-⑪		
59	枕に頬が沈むともうそこに睡気が煙のようにのぼりかかっている。	008-⑪		
60	きれぎれのもの、柔軟なもの、形のないものがふたたび葉をだし蔓をのぼし、部屋いっぱいには繁茂しはじめる。	008-⑫		
61	ある朝早く、私はジャンパーを着て停車場へいった。	008-⑬		
62	うつろで冷たく薄暗い町角のあちらこちらに夜が去りがてに這っていた。	008-⑭		
63	駅の暗い構内には緑いろの大きな影がそびえ、食堂にはピンクのネオンが輝いているが壁は荒寥としていて、夜と朝がひっそりとせめぎあっている。	008-⑮		
64	男や女の顔はコーヒー碗のふちで皺に閉じこめられるか、霧になるかしている。	008-⑰		
65	食堂の入口近くに何人ものヒッチハイカーがリュックや水夫袋を枕にして眠りこけているが、長髪や首すじから足の指の垢のようなねっとりとした匂いがたちのぼり、顎を胸に落したまま水にとけそうな眼をぼんやり瞠っているところを見ると、陰毛ひげのなかへすっきり後退して、敵を見ないうちに敗北してしまった兵のようである。	008-⑰		
66	私は席をとると熱くしたラムをたのんだ。	009-④		
67	熱いラムの滴が香りをたてながらくたびれて軟らかくなった腸の皺に沁みていくと、一滴一滴花がひらくようだった。	009-⑤		
68	よどんだ疲労のしたで期待がゆっくりうごきはじめた。	009-⑥		
69	それは急速にラムとまじって湯気をたてつつひろがり、背をもたげ、顔を見せないで私を蔽いはじめた。	009-⑦		
70	女は寝台車でくるのだが、よく眠れただろうか……	009-⑨		
71	十年になる。	009-⑩		
72	かれこれ、十年になる。	009-⑪		
73	朦朧としている。	009-⑪		
74	とらえようがない。	009-⑪		
75	私は人ごみのなかにいるのに繁茂しかかっている。	009-⑪		
76	一昨日、となりの国の小さな首府の郊外から女が電報をうってくるまでは回想がしっかりしていた。	009-⑫		
77	毛布のなかで声や、まなざしや、光景を並べ、何時間も私はそれらをおきかえたり、組みかえたり、ひとつだけはなして凝視したりしてすごした。	009-⑬		
78	ほかに何人もの女の顔が明滅するなかで、一つの顔が薄明のなかで最前面にあらわれた。	009-⑭		
79	それは白い咽喉をそらせて笑ったり、薄いくちびるを噛みしめて眼を伏せたり、額の髪をはらったりした。	009-⑮		
80	けれどもいま、ラムの甘い匂いとタバコのいがらっぽい霧のなかでは、別れた日の遠景が小さく見えるだけである。	009-⑯		
81	東京の郊外の駅の夜八時頃である。	009-⑰		

82	その日までに何度か女は食事や情事のあとで日本を捨てる決心をうちあげたのだが、暗示のようにほのめかすだけだった。	009-⑰		
83	決意としては語らなかつたし、計画の細部も語らなかつた。	010-②		
84	話そうにも話しようがなくて途方に暮れていたらしいのだと、あとになって、外国から手紙がきて察しられた。	010-②		
85	それまでのあらゆる場合とおなじように私は何もいわなかつた。	010-③		
86	だまって耳をかたむけてよこたわっているきりであった。	010-④		
87	女が語ろうとしないことや語りたがらないでいることにして私は立入ったことがない。	010-⑤		
88	いまでもそれは変らない。	010-⑥		
89	責任のわずらわしさに耐えられない自身の脆弱さが不安なためなのだが、あまりに自身に執しすぎる心をときに憎み、厭いながら、顔をそこからもたげることができないのである。	010-⑥		
90	この無気力が冷酷を分泌するのではあるまいか。	010-⑧		
91	汗にまみれて全身発光しながらのしかかってくる広くて白い胸とあらそいながら私は女の肩ごしに障子窓のむこうにある桧葉垣を眺め、遠くの人声を聞いていた。	010-⑨		
92	女が絶望から力をぬきだしてその無限界さにおびえきっているのだと私はさとることがまったくできなかつた。	010-⑩		
93	ただ牡の誇りで呼応することにふけり、自身を確認することに腐心していたようだ。	010-⑫		
94	なだれ落ちる髪の毛で女がきれぎれに叫び、夜半の子供のように口のなかで転生しきらない言葉をもてあましてささやく声を私は完全に誤解していた。	010-⑬		
95	そうと知ったのは女が声を実践してほとんど無一文のまま日本を去ったとわかってからであった。	010-⑭		
96	手紙を手にして私はしたたかに自身の愚昧を知らされた。	010-⑮		
97	しかし、どこかに、もう身辺に苦しむ女の眼や、声や、体重を感じなくてすまされそうになった事態を歓迎する心もうごいていた	010-⑯		
98	女の果敢さにうたれたのは荷が軽くなった心のたわむれではあるまいか。	010-⑰		
99	負担が消えてのびやかになったはずなのにその後、何度も、一人で、女といっしょに訪れて冗談や議論にふけた場所を訪れ、眼で席を求めずにはいられないということを私はしているのだが、あのさびしさはやましさのかけろうではなかつただろうか。	011-①		
100	手のなかにあるうちは玩具なのに失われたとわかるのにわかになんかそれを宝石と感じて心身を焦がす。	011-④		
101	あの子供の心に私はしばらくとらわれた。	011-⑤		
102	舌がうつろなのに心は感傷にある食事を一人で何度もかさね	011-⑥		
103	そしてかつて二人でいったときにでてきた給仕がいるあいだは彼の視線や挨拶をわずらわしいと思いつつもかよったのに、その給仕がいなくなると私はその店から遠ざかった。	011-⑥		
104	その後、女はいくつもの国を渡り歩き、国を変えるたびに手紙をよこした。	011-⑨		
105	それによって私は女が日本商社のタイピストをしていることや、キャバレーのタバコ売り娘をしていることや、やがて奨学金をもらえるようになって学生にもどったこと、イギリス人の若い原子科学者に結婚を申込みられたこと、ドイツ系アメリカ人の言語学者と恋をしていることなどを知らされた。	011-⑨		
106	文面からするかぎりには女はいつも不屈で、勤勉、精悍、好奇心にあふれるまま前進し、国から国へ移動し、生を貪ることにふけていた。	011-⑬		

107	日本にいて専攻科目の学者になろうとしても学閥に出口を制せられていることや、翻訳者になろうとしても出版社が閥学者に制せられてフリー・ハンドを持たないでいること、考えぬいたあげくルポ・ライターになろうとして新聞社のグラフ雑誌ではたらいてみたがうまくのびられなかったこと、日本にいたとき私と顔をあわすたびに痛嘆し、罵倒したそれらのことについて女はもうひとつも手紙でふれようとせず、自身をうけ入れてくれる機関をようやく発見したことにもっぱら熱中し、おどけたり、雀躍したりし	011-⑭		
108	私は手紙をすべてうけとり、一字々々に重錘をおろすようにして読んでいった。	012-③		
109	しかし私は私でとらえようのない渴望のままこの十年間に十三回、外国へでかけ、旅から旅へ自身を追いたてて歩くことに熱中していたのだった。	012-④		
110	女からの手紙のうち何通かは外国のホテルでうけとったが、読んだあとはかねてからの約束にしたがって、こまごまに裂いて川へ投げた。	012-⑥		
111	激情にひしがれて茫然となっているか、そうでなければ懈怠でとけきっているかということがしばしばだったので、女が読まれたいと思っっているように読むことはおそらく私にはできないことだっ	012-⑦		
112	それでいて私は女に手紙を送り、原子科学者や言語学者との恋に水をさす結果となる文章を書いたと思う。	012-⑨		
113	何の効果も期待できないのにそういう文章を書いたのは、はっきりわかっているが、その場にゆらめいた嫉妬からであった。	012-⑩		
114	何もできず、何の資格もないのに私は女をとどめられるものならとどめておきたかったのだ。	012-⑫		
115	きみは自由に知りすぎたから誰との家庭生活にも安住できないはずだ、というのが私の手紙の主旨であった。	012-⑬		
116	孤独に耐えられないために結婚を選ぶのなら、フランス人のいう、オムレツをつくるためには卵を割らねばならない、という諺にあうが、それならば、オムレツをついたあとでそれが不出来なためにいわれもなく卵をののしってさびしくなるということも同時にあるのではないだろうか。	012-⑭		
117	何回もやってみなければわからないことらしいが。	012-⑰		
118	女の手紙が軽快でいきいきとしていたので私はそういう返事を書いたと思う。	013-①		
119	いま私が知っているのは、女がABCも知らないでたどりついた国に六年すごして、その首都の大学の東方研究室で客員待遇をうけていて、秋に提出する博士論文のためにいそがしい、ということだけである。	013-②		
120	そして、タバコの霧のかなたに見える小さな遠景である。	013-④		
121	夜の郊外の駅の改札口に女が真紅のレインコートを着て佇み、駅員が寡黙な横顔を見せている。	013-⑤		
122	女が大学を卒業して二、三年にしかならない鋭い顔で毅然としながらおびえたまなざしで私を眺めていなかったこと、私の頭よりちょっとうしろを眺めるまなざしでいたこと、髪の毛のうしろに小さなタバコ屋の蛍光灯があったことが、私に見える。	013-⑥		
123	女の顔の高い頬骨のあたりにある表情があったが、それが情事のあとの優しい疲れであるよりは諦観のあげくのやわらぎだったのだと、いまになって知るのだが、遠景にはけだるいが鋭いまなざしと、かつては水泳選手だったこともある白いたくましい足にピアノ線のような筋が強く走って消えている。	013-⑧		
124	きた。	013-⑬		
125	時刻である。	013-⑬		
126	私はグロッグの受皿に小銭をおき、自動販売機で入場券を買って、プラットフォームへでていく。	013-⑬		
127	遠い北の湊町で構成されて二つの国を通過してきた、頑強な緑いろの古鉄の箱が線路のぬかるみを注意深く選んで、円天井の影のしたに入ってくる。	013-⑭		

128	無数の蒼白くむくんだ顔やおぼろな眼が寝台車の窓を埋めてこちらを見おろしている。	013-15		
129	一輛々々点検していくと、円天井から雨のなかにでてしまった。	013-16		
130	暗い空から雨はびしゃびしゃ容赦なく落ちかかってきた。	013-17		
131	プラットフォームもずっとはずれのほうで真紅のレインコートを着た女がスーツケースをひきずりおろそうとしているのを発見し	014-1		
132	それをめがけて小走りにかけだしたはずみに雨が音をたててしぶきはじめ、陸橋も、車輛も、線路も、すべてが水のなかに消え	014-2		
133	「……………」	014-5		
134	「……………」	014-6		
135	女がふりかえって何か声をあげた。	014-7		
136	蒼白くて高い頬に髪が濡れてこびりついているが、眼がいきいきと輝き、くちびるがひらいていた。	014-7		
137	女が背を起すと微笑が顔いっぱいひろがった。	014-8		
138	「電報、とどいた？」	014-10		
139	「とどいたよ」	014-11		
140	「来てくれたのね」	014-12		
141	「もちろんだ」	014-13		
142	両足をひらいてしっかりと踏みしめ、女は肩をうしろにひいて私を見あげた。	014-14		
143	成熟しきって、肩も、腰も、すでに中央山塊のようにたくましく深くなった女が、まつ毛を雨にうたれるまま、「会えたわ、とうとう」激しかかるのをおさえて、「会えたわよ」といった。	014-14		
144	「何年ぶりかしら」	015-4		
145	「十年だね」	015-5		
146	「そうね」	015-6		
147	「かれこれ十年だよ」	015-7		
148	「そうね」	015-8		
149	「たくさんの水が流れたのさ」	015-9		
150	ふいに女が高い声で笑い、「橋の下をね」といった。	015-10		
151	緑いろの暗い構内をぬけると駅前広場にでるが、そのふちに一軒の店がひらいていたので入ることにした。	015-13		
152	駅ではもうとくに夜が明けていたが、この店ではまだはかなく最後衛がテーブルに伏せた椅子の林のなかをさまよっているよ	015-14		
153	皺ばんだ白服を着た中年のバーテンダーがむっつりした顔つきでコップや茶碗を洗っている。	015-15		
154	がらんとした店のすみっこで黒人青年がパチンコ遊びをしていて、長い骨ばった指やひきしまった腰でパチンコ台をゆさぶりたてる音がときどき鋭くこだまする。	015-16		
155	それが車庫で重い道具を投げだすようにひびく。	016-1		
156	女はミルク入りコーヒーと三日月パンを注文した。	016-3		
157	私はパステリスを注文した。	016-3		
158	乳黄色の液のなかで氷が鳴り、茴香の新鮮な香りが鼻さきをしっとり濡らしてくれた。	016-3		
159	コーヒーと三日月パンを女がべつべつに食べようとするので、少しずつちぎってコーヒーに浸して食べてもいいのだと教えた。	016-4		
160	女はおとなしくそのとおりにし、寝台車でよく眠れないので車掌に不平をいつづけたこと、ねむれないまま博士論文の修正にふけて徹夜したことなど、とりとめもなく話した。	016-6		
161	訴える相手をやっと見つけたのではじけるようにはしゃいでいる気配もあったが、徹夜の憔悴でうなだれそうになっている気配も	016-8		
162	コーヒーを飲みほしたあとで女は碗を受皿に伏せた。	016-10		
163	しばらくしてからそれをたて、碗の底にのこった渣をしげしげと眺める。	016-10		
164	「占ってあげる。」	016-12		
165	私はなかなかうまいのよ。	016-12		
166	研究室の連中によくほめられるの。	016-12		
167	ジプシー直伝とはいかないけれど、評判がいいんだから。	016-12		
168	これはですね、蛇だナ。	016-13		

169	三匹の蛇ですね。	016-13		
170	三匹の蛇が集まって眼鏡をかけてるんだわ。	016-13		
171	眼鏡をかけた三匹の蛇がいるのよ。	016-14		
172	いったい何のことかしら」	016-14		
173	「何だろうね」	016-16		
174	「待って。」	016-17		
175	「占ってあげるから」	016-17		
176	ふいに雨が音をたてて降りはじめた。	017-①		
177	ハンバーガーやサンドイッチの値段を白ペンキで書きなぐった大きな窓のそばにすわっていたのだが、雨はどしゃ降りひたむきに窓をたたき、舗道で白く跳ね、たちまち広場にいくつもの小流れができた。	017-①		
178	駅も広場もすべてがとけてしまった。	017-③		
179	東西南北から迫ってくるはげしい雨音のなかでここは孤島のようにひっそりとりのこされた。	017-④		
180	「よく降るわね。」	017-⑥		
181	夏だというのに。	017-⑥		
182	私のところも毎日こうだわ。	017-⑥		
183	いまはどこへいってもおなじなの。	017-⑥		
184	いやになるわね。	017-⑦		
185	朝目がさめたとたんにも十も老けたみたい」	017-⑦		
186	「去年もおなじだったね。」	017-⑧		
187	毎日降ったよ。	017-⑧		
188	洪水期の前兆じゃないかと書いている新聞もあった。	017-⑧		
189	新氷河期がぼつぼつ来かかっているんじゃないかというんだ。	017-⑨		
190	真剣な口調なんで、笑うわけにもいかなかったけど」	017-⑨		
191	「私がそうかもしれない。」	017-11		
192	すっかり老けちゃって。	017-11		
193	いい年をして学生の仲間入りして追いつき追いこせでやってきたけど、どうかしたはずみにガックリすることがあるの。	017-11		
194	外国でつんのめるのは、人格剥離が起るのは、つらいわ。	017-12		
195	一日も二日も寝こんじゃってただぼんやりしてるのよ。	017-13		
196	その日その日の運勢を腕で見ることにしてるの。	017-14		
197	私の腕はいいのよ。	017-14		
198	朝目がさめると、こう、のぼして、表返しにしたり裏返しにしたり	017-14		
199	すると、白磁みたいに白いなかに血が青く沈んで、しっとり脂がのってるようだけど透明に澄んだ感じがするときがあるの。	017-15		
200	そういう日は元気がでるわ。	017-17		
201	何かいいことがありそうですね。	017-17		
202	コーヒー渣よりはたよりになるわよ。	017-17		
203	この十年私は腕だけがたよりのだったわ」	018-①		
204	「昔もそうだったよ」	018-②		
205	「昔はほかにもあったの。」	018-③		
206	肘とか。	018-③		
207	肩や足なんかもね。	018-③		
208	御自慢だったの。	018-③		
209	けどもうダメ。	018-③		
210	腕しかないわ。	018-④		
211	よくわかっているの。	018-④		
212	これで赤い帽子に青い制服を着たら救世軍よ。	018-④		
213	ときどき男の子で悪口をいうやつがいる。	018-④		
214	憎いったらないんだけど、ひっぱたいてやろうと思ってるうちにふと気づいちゃったりして。	018-⑤		
215	だらしないったらないわ」	018-⑥		
216	「おれはもっとひどいよ。」	018-⑦		
217	腕すらないな。	018-⑦		
218	きみがうらやましいくらいだよ。	018-⑦		
219	ぶくぶくしちゃって、ものおぼえがわるくなって、首に筋ができた	018-⑦		
220	眼もあてられない。	018-⑧		

221	朝からごろごろ寝てばかりだね。	018-⑧		
222	とめどもなく眠れるな。	018-⑨		
223	競争にでたいくらいだ。	018-⑨		
224	どうしてこう眠いのか」	018-⑨		
225	「はげましていただくのはうれしいけど、あなた、変ってないわ	018-⑩		
226	うらやましいわ。	018-⑩		
227	自信持っていていいわよ。	018-⑩		
228	手紙ではもっとひどいことを想像してたんだけど、ホッとしたわ。	018-⑪		
229	白髪もないようだし」	018-⑪		
230	「マジックをぬってきたのさ」	018-⑬		
231	「明るいところがつらいわ」	018-⑭		
232	「……………」	018-⑮		
233	「顔が見られたくないの」	018-⑯		
234	女は静かに、ひくく、いいすてた。	018-⑰		
235	ちらっと私を見て、顔を伏せ、タバコに手をのばした。	018-⑰		
236	雨を散らし頭をそらせて輝いたさきほどの昂揚が消え、強健な肩に成熟があらわれていた。	019-①		
237	聡明な眼に悲しみがあつた。	019-②		
238	重そうな腕をゆっくりテーブルにおいているところは船首のように堂々としているが、にがにがしげにコーヒー碗を眺めるくちびるのわきや眼じりに見慣れない傷のようなものが、細いが鋭いものが、どう消しようもないものがあらわれていた。	019-②		
239	そむけた女の眼に映った自分を私はまざまざと読んだような気がした。	019-⑤		
240	肥厚し、膨張し、どこもかしこもすりへって丸くなり、手のつけようなく崩れ、残酔でむくみきっている四十歳をそこに見たと思っ	019-⑤		
241	女がきざまれたのなら私は崩れてしまったのだ。	019-⑦		
242	十年はやはりあつたのだ。	019-⑦		
243	ふいに圧倒的な気配が店の冷暗のあらゆる箇所からたちのぼってのしかかってくる。	019-⑧		
244	だまってグラスをとりあげ、はげしい雨音を聞きながら、私はきつい茴香の匂いのうごく冷たい液を、一滴、二滴、すすする。	019-⑩		
245	「それ、ウーゾ？」	019-⑫		
246	「似たようなものだよ」	019-⑬		
247	「いいお酒ね」	019-⑭		
248	「むしむしした夏の夕方にはいいよ」	019-⑮		
249	「ギリシャで飲んだことがあるの。」	019-⑯		
250	何年前になるかしら。	019-⑯		
251	オリेंट専攻の連中といっしょにいったのよ。	019-⑯		
252	アガメムノンの墓の近くだったと思うわ。	019-⑰		
253	道ばたの小さな飲み屋で。	019-⑰		
254	ハエの糞のいっぱいついたコップだったわ。	019-⑰		
255	みんなはコークだったけど、私はウーゾを飲んだの」	020-①		
256	「夏？」	020-②		
257	「ええ。」	020-③		
258	夏。	020-③		
259	ギリシャのよ」	020-③		
260	「それはよかった」	020-④		
261	いたましいだけだった女の顔にふいに晴れやかな微笑がひろがった。	020-⑤		
262	女はテーブルに体をのりだすと、じっと私の顔を見つめ、いきなり眉をあげて眼をいっばいに丸くした。	020-⑤		
263	それからいきなり眉をよせ、眼をくしゃくしゃに細くした。	020-⑥		
264	丸くしたり、細くしたり、だまって何度かそれをくりかえした。	020-⑦		
265	私たちは声をたてずに笑った。	020-⑧		
266	部屋に入ると女はスーツケースをすみっこにおき、赤い闇のなかを歩きまわった。	020-⑨		
267	ドアのノブをひねったり、掛金をいじったり、洗面所に入って水道栓を開閉したり、旅慣れた熟練のまなざしで点検していった。	020-⑨		

268	私の荷物がベッドのしたにおしこんだリュック一つしかないとわかると女は両手を腰にあて、咽喉をそらし、若い声で高笑いし	020-11		
269	指紋や、ニコチンや、アルコールや、パン屑などでいっぱいのお繭がいきいきとゆさぶられ、ふいに顔が変り、あの繁茂がどこにも感じられなくなった。	020-12		
270	女がたのむので灯を消すと赤がしりぞき、穴だらけのカーテンに早朝の灰いろの光が射して粉のように閃めいた。	020-14		
271	しばらくしてある気配にふりかえると、女が全裸になって佇んでいた。	020-15		
272	おぼろな薄明のなかに橋脚のようにたくましい太腿が青銅の青白さで輝いている。	020-16		
273	女は両腕をさしかわしてたわわな乳房をかかえ、掌で顔を蔽い、低くおずおずと、「私、まだ見られる？」とたずねた。	020-17		
274	指のすきまからこちらを見ている。	021-4		
275	「もちろんだ。	021-5		
276	おいで」	021-5		
277	ふいに重量が走った。	021-6		
278	女は暗がりをかけ、ベッドにとびこむと、声をあげてころげまわっ	021-7		
279	朝の体は果実のように冷たくひきしまり、肩、乳房、下腹、腿、すべてがそれぞれ独立した小動物のようにいきいきと躍動し、ぶつかりあい、からみついてきた。	021-7		
280	広い胸に鼻を埋めようとする女が長い腕をあげてはげしく抱きしめた。	021-9		
281	冷たい、しっとりした膩のしたから熱が放射され、それが爽やかな湯のように私の胸にしみとおった。	021-10		
282	私は女の腕をゆっくりときほぐすと、ベッドに膝をついて体を起し	021-11		
283	昔はいつもそうしていたように女の手をベルトにみちびいた。	021-12		
284	女はぶるぶるふるえながらはずそうとしたが、途中でやめてしまい、「待ってた。	021-12		
285	待ってたの」	021-14		
286	うめいてたおれた。	021-15		
287	雨はまだ何日かつづいた。	022-1		
288	ずっと私は部屋にこもったままですごした。	022-2		
289	たいてい窓にカーテンを降ろしたままで、ベッドの中で寝たり起きたりし、食品の買出しは女がした。	022-2		
290	女は四カ国語が自由に操れるようになっていたが、この国の言葉は出来ないで、新聞紙やノートのはしに簡単な店頭の挨拶や品物の単語を書いたのを渡すと、女はそれを持って町にでかけ、雨の中を平底靴で歩きまわって、いわれたものはきつと買っ	022-3		
291	そして外出から帰るたび、アリのように小さいが勤勉な字で明細書を書いてテーブルのはしにおいた。	022-6		
292	それは徹底的に細密で、地下鉄の割引乗車券一枚の値段までが落す事無く書きこんである。	022-7		
293	わたしはテーブルに金をばらまいたままにしておき、女が買物にでかける時自由に持っていくようにといてあるのだが、女はきつと明細書を書いた。	022-8		
294	それが二枚、三枚とたまる。	022-10		
295	「そんなに気を使わなくてもいいんだよ」	022-11		
296	「お金はお金よ。	022-12		
297	ハッキリしとかなくちゃ。	022-12		
298	私はいずれ決算してフィフティ・フィフティ、おたがい貸借なしにしようと思ってるの。	022-12		
299	お金のことでこじれるのはいやだわ。	022-13		
300	これまでにずいぶん苦しめられたのよ。	022-13		
301	ずいぶんイヤな思いをした。	022-14		
302	だから気にせずにはいられないの。	022-14		
303	それはそれ、これはこれよ。	022-15		
304	こうしたほうがいいのかよ。	022-15		
305	友情が永続き出来るの。	022-15		

306	あなたに甘えたら、はじめはかわいいけど、いずれイヤがられ	022—⑬		
307	それがわかっているから、だから」	022—⑬		
308	「初心忘るべからずか」	022—⑰		
309	「孤独な女のかなしい知恵だわよ」	023—①		
310	「観察と覚悟がいいといってるんだよ」	023—②		
311	「どうでしょうね」	023—③		
312	女はつぶやいて、晴朗に微笑し、堂々としたしぐさで明細書を テーブルにおき、ネグリジェ姿になると椅子に正しく腰をおろす。	023—④		
313	眼を丸くしたり、細めたりして私を眺めてから、ふいに凝縮して、 部厚い論文の草稿に鼻を突っ込む。	023—⑤		
314	指を髪に突っ込んでくしゃくしゃに掻きまわすが、広い額に冷智 と意志があらわれ、左手につまんだボール・ペンを外科医のピン セットのように操って原稿のあちらこちらにすばやく走らしたり、 とめたりする。	023—⑥		
315	欧文も和文も左から右へ、かけるようにして書きこんでいく。	023—⑧		
316	そのすばやさには私はしたたかな知力の堆積を感じさせられる。	023—⑨		
317	窓とカーテンがあるとしても部屋はとだえることのないエンジンの にふい唸りにとりかこまれ、ときどきその潮騒のかなたで鋭い 歯ざしりが起る。	023—⑪		
318	雨が壁や窓をうち、無数のひめやかな、小さな拳の気配がたち こめる。	023—⑫		
319	私はうとうと眠ってはさめ、さめては眠った。	023—⑬		
320	そして体表の繊毛のどこかがそよぐと女をベッドにさそった。	023—⑭		
321	いつ、どのようなときにさそっても、女は眼鏡をはずすようにして ボール・ペンをおいて椅子からたちあがり、ベッドにネコのように 肩をすぼめてしのびこむ。	023—⑭		
322	そして全身で応じて果てたあと、ときにひくく苦笑の声を洩らしな がら、蒼白い額を髪にかくされたまま、手と腰で這うようにして、 テーブルのほうへよっていきのだった。	023—⑯		
323	足を踏みしめ踏みしめベッドからおりて蒼白い光の射す、荒寥と した浴室に入って、剥げたコンクリート壁のしたでおたがいの体 を洗いあったり、しゃぶりあったりするが、ベッドにもどると、ふた たび私は飲んで、抱いて、眠り、女は抱いて、眠って、勉強し	024—①		
324	数知れない声と、垢と、脂がしみこんでいるはずの古くて頑強な 壁は、何を叫んでも声を外に洩らす気配はなく、厚い石の防禦 材というよりは何かの厚くて柔らかい肉質のように感じられた。	024—④		
325	形も顔も見えない何かの巨獣の厚い脂肪膜に保護された体腔 のどこかに私はそうではない、そうではないと感じつつも、いる らしかった。	024—⑥		
326	私は女の腋毛に鼻を埋め、なだらかなぶどう酒の酔いのどこか でふとおぼえる甘い嘔気をおぼえ、けだるいままにほどけ、ふく らむままにふくらんではびこる。	024—⑦		
327	匂いが熟れすぎて、鼻孔や顔いちめんをみっしりした花粉のよ うなものに蔽われてくると、ときどきまどとカーテンをあける。	024—⑨		
328	ひよつとしてそれが深夜だったりすると、対岸の寺院や、スズカ ケの並木道あたりからわきたっらしい、ぴりぴりひきしまった、 青い空気が流れこんでくる。	024—⑩		
329	それは優しくてあざやかだけれど緯度の高い国の峻烈の気配 もふくんでいて、ベッドや、静物の群れを、カミソリで削ぐようにこ そいでいく。	024—⑫		
330	私たちの指にふれたために生じた無数の菌のようなもの、茸の ようなものを、ことごとく削ぎとり、もとの形にもどし、室内を一巡 して靴のなかまで洗ってから、余力をかってふたたび窓外へ	024—⑭		
331	この鋭い微風に一撫でされたあとでは花粉にまみれてくにかく にやになったはずのシーツが、皺はそのままなのに、いつのま にか、とつぜん糊でパリパリに仕上げられたばかりのように感じ	024—⑯		
332	風には、ときどき、笑う人声や、グラスの碎ける音や、野良ネコ のくぐもってはいるが傲然とした恫喝などが、含まれている。	025—①		

333	広くて冷たい空谷をあちらこちらと迷ってわたってきたはずなのに風にはさまざまの兆候や傷痕がきざみこまれている。	025—②		
334	ときにはどこからか焼きたてのパンの香りが縞となってまじっていることがあって、眼のさめるような気のすることもある。	025—④		
335	「毎年からっぽになるようだね」	025—⑥		
336	「そうらしいわね」	025—⑦		
337	「おれはこれが好きだね。」	025—⑧		
338	人の姿が見えなくていいな。	025—⑧		
339	どこへいっても、からっぽで、清潔で、腐るものがなくて、まるで動物園のマッコウクジラの骨みたいだ。	025—⑧		
340	ぐにゃぐにゃしなくてすむ」	025—⑨		
341	「あいかわらず人間嫌いね」	025—⑪		
342	「御明察だ」	025—⑫		
343	「だけど私たち、ヘンよ。」	025—⑬		
344	こんなところでキャンプ生活などして。	025—⑬		
345	御馳走を食べにもせず、散歩にもいかず、穴のなかにこもったきりで、何だかヤドカリみたいだわ」	025—⑬		
346	「御馳走はいずれ食べにいくよ。」	025—⑮		
347	この季節じゃろくな店はないけれど、探せばそれなりのはある	025—⑮		
348	二、三軒、知ってる。	025—⑯		
349	だけど、もうちょっとしんぼうするんだね」	025—⑯		
350	「どうして？」	025—⑰		
351	「美食と好色は両立しないよ」	026—①		
352	「そうかしら」	026—②		
353	「どちらかだね。」	026—③		
354	二つに一つだよ。	026—③		
355	一度に二つは無理だよ。	026—③		
356	御馳走は御馳走、好色は好色。	026—③		
357	どちらかを選ぶかだ。	026—④		
358	二つ同時では眠くなるだけだ。	026—④		
359	もともと両方とも眠るためのものらしいけれど、味ぐらいは知っておきたいね。	026—④		
360	あとは眠るだけだ。	026—⑤		
361	なら、二つに一つだ」	026—⑤		
362	「昔はそんなこと聞かなかったと思うわ、私。」	026—⑥		
363	心細いこというじゃない。	026—⑥		
364	しっかりしてちょうだい。	026—⑥		
365	昔は理窟めきに、あなた、ひどいばかりの一点張りだったわよ。	026—⑦		
366	変ったわね。	026—⑦		
367	私、うけてたちます」	026—⑦		
368	「たしかに昔はそうだった。」	026—⑨		
369	そうだったらしいと思うね。	026—⑨		
370	しかし、あの頃、どうだろう、力はあったが、味は知らなかったのじゃないか。	026—⑨		
371	どれか一つの味、それとも二つどちらもの味、何も知らなかったのじゃないかな。	026—⑩		
372	眠くなるほど知るすべがなかったのじゃないか。	026—⑪		
373	おなじ眠るにしてもマヒして眠るのと、マヒしないで眠るのと、たいそう違いがあるだろうよ」	026—⑫		
374	「小理窟のような気がするわね」	026—⑬		
375	「そうかな」	026—⑭		
376	「チャプスイが食べたいな、私」	026—⑮		
377	「もっといいのを御馳走するよ」	026—⑯		
378	「でも私、チャプスイ、好きなんだもの。」	026—⑰		
379	オカキなら“柿の種”よ。	026—⑰		
380	こないだ日本から石油罐にいっぱいとりよせたの。	026—⑰		
381	コーヒーも飲まないでお金を貯めたのよ。	027—①		
382	あれさえあったら、私、たいていのことに耐えられそうね。	027—①		
383	ほかのやつらがどうなろうと独立排他的に幸福でいられるな、	027—②		

384	今度くるとき、ビニール袋にいっぱい詰めてきたの。	027—③		
385	見せたましょうか」	027—③		
386	女は鑄鉄製の窓わくから艶やかな胸を波打たせてひくと部屋のなかへ足早に入っていた。	027—④		
387	薄いネグリジェから乳房や陰毛がすけて見えるのもかまわずしゃがみこんでスーツケースから女は大きなビニール袋をひきずりだし、高くかかけてみせた。	027—⑤		
388	「ほら、こんなにあるの」	027—⑦		
389	白い手でひとにぎりつかみだし、「独立排他的に幸せだわよ」	027—⑧		
390	咽喉をそらせて哄笑すると、ベッドにころがり、子供のように足をばたばたさせながら歯のあいだで気持ちよい音をたててみせた。	027—⑩		
391	こみあげる笑いを噛み殺そうとして女はミルクをもらった仔ネコのように咽喉をごろごろ鳴らした。	027—⑪		
392	“柿の種”のほかにも女は“トゲトゲちゃん”も持っている。	027—⑫		
393	塩化ビニール製のハリネズミの玩具で、風呂へ入ったときに体を掻くのに使う。	027—⑬		
394	ずいぶん使い古したらしくて眼も鼻も剥げちよろけになっていて、おすと笛が鳴り、不平がましいような、狼狽したような声がで	027—⑭		
395	女はよく風呂のなかでそれを鳴らして何かひとりごとをいいつつ遊んでいる。	027—⑮		
396	仕事にとりかかるときはそれを一度か二度鳴らしてからノートや大型辞書を開くのだった。	027—⑯		
397	毎日攻めている論文は、もし題をつけるとすると、『ロシヤ政治における伝統としての東方志向とアジアへのその影響』となるような内容のものであるらしいとしか私は知らないのだが、数年の精力と注意をつぎこんだらしいその原稿は正確な細字でぎっし	027—⑰		
398	女がふとノートから顔をあげ、「クーアイツって言葉、ごぞんじ？」とたずねたことがある。	028—④		
399	知らないと答えると、女は紙きれに『孤哀子』と書いて、そっとベッドに入ってきた。	028—⑦		
401	中国語なの。	028—⑦		
402	親のない子、孤児のことをそういうらしいの。	028—⑧		
403	大学の研究室にいるジャオ先生に教えられた。	028—⑧		
404	ジャオ先生は大学で中国語を教えているんだけど、奥さんが書家で、かたわら中華料理店も経営してる。	028—⑨		
405	私はチャプスイに眼がないものだからしょっちゅうお店へ行ってチャプスイだけたべる。	028—⑩		
406	チャプスイも出来不出来があつて屑物のよせ集めだと思ったら大変なまちがいなのよ。	028—⑪		
407	簡単な料理ほどむつかしいんだわ。	028—⑫		
408	ある晩、食事をしながら私が身上話をしたら、ジャオ先生が皿ごしに『孤哀子』と紙に書いてわたしてくれた。	028—⑫		
409	「さすが文字の民だと思ったわね。	028—⑭		
410	孤児とか親なし子というよりよっぽど感じがでてるじゃない。	028—⑭		
411	感心しちゃった。	028—⑮		
412	ほんとは喪中に死亡通知の肩書に遣う言葉で、ま、“喪服の孤児”ってところらしいけど、私はクーアイツなのよ。	028—⑮		
413	お父さんもいない。	028—⑯		
414	お母さんもいない。	028—⑯		
415	親類縁者はこちらから捨ててやったし。	028—⑯		
416	お兄さんが一人いるんだけど、故あって名前が変っちゃったし	028—⑰		
417	私、お兄さんが好きだけれど、こう離れてしまっちゃね。	029—①		
418	それに私、もう二度と日本に帰ってなんかやるものかと思って	029—①		
419	だから私、クーアイツなの。	029—②		
420	自然のいたずらなの」	029—②		
421	女はそれだけいうと、ひとつまみの体温を毛布にのこしてベッドから静かにでていった。	029—④		
422	テーブルに向かうと指を髪につっこみ、峻烈なまなざしでトゲトゲちゃんを鳴らした。	029—⑤		

423	いつでも女はいさぎよく椅子からたちあがった。	029—⑥		
424	歳月を埋めるためか、ぐにやぐにやしたものの膨張を食いとめるためか、私は真摯と即興を思いつくまま尽した。	029—⑥		
425	ベッドでし、床でし、椅子でし、浴漕でし、うしろからし、よこになってし、すわってし、たってした。	029—⑦		
426	女も私も体が変形してしまったことを恥じて灯よりは闇を好んだけれど、親和が進むと、かまわなくなった。	029—⑧		
427	登山と水泳とスキーでたたみあげられた女の肉は精妙で強健であった。	029—⑩		
428	全裸のままで歩くと赤い闇の中でも腿と腓に鋭い影がいきいきと明滅するのが見られた。	029—⑩		
429	昔のようにどの箇所も爽やかなばかりで、健康のほか、何の匂いもしない。	029—⑪		
430	「カイメイホンという中国語知ってる？」	029—⑬		
431	「知らないわ」	029—⑭		
432	「開く、門、紅と書く。」	029—⑮		
433	サイゴンの華僑に教えられたんだけどね。	029—⑮		
434	正月とか、お祭りとか、祝いごとのあるときに使う言葉らしい。	029—⑮		
435	門が大八文字に開かれていて通りがかりにのぞいてみるとなかでチラチラ赤いものが見え、まことに盛大なるさまをいうらしい。	029—⑯		
436	やっぱり文字の民だよ。	029—⑯		
437	「見えるようじゃないか」	030—①		
438	「うまいこというじゃない」	030—②		
439	「やってみようじゃないか」	030—③		
440	「灯を消して」	030—④		
441	「それじゃ開門黒になるね」	030—⑤		
442	「しょうがないですね」	030—⑥		
443	鼻さきすれすれのところに壮観があらわれる。	030—⑦		
444	顔をもたげるまでもなく全容が眺望できる。	030—⑦		
445	そこにまるで時間が流れなかったかのような気配なので愕きをおぼえさせられる。	030—⑧		
446	なつかしさがあがってくる。	030—⑧		
447	小皺を集めてしっかりと閉じた肛門のかなしげな、とぼけて親しそうな、それでいて嘲っているような奇妙な顔つきも、淡褐色のくちびるをひらけるだけひらいた、びしょぬれの玄も、そのはげたような赤いせりだしのたたまいも、小さな鬘の群れのさざめきも、ざわざわするあたたかい森も、すべてがその位置にあり、	030—⑨		
448	壮大な峡谷のなかによこたわったままわずかに顔をあげて舌でくすぐったり、くちびるにくわえたりしながら私は遠くにある光景を眺めている。	030—⑨		
449	埃りをかぶった桧葉垣にかこまれた離れにあの頃女はひとりで暮らして、高くかかげた白い髻のすみずみに障子紙に漉された秋の午後の日光が射していた。	030—⑭		
450	春に私と知りあって早くも秋に女は不幸になっていたが、けつして口にだそうとせず、むしろ快活な冗談をいう工夫にふけてい	030—⑯		
451	けれど忘我でうねるときにはいくらこえても不幸はまざまざとあふれてきて、形をあたえまいとする必死の努力はかろうじて成功したけれど、気配の氾濫はとどめようがなかったのだ。	030—⑰		
452	私はわざとそれを無視し、玄からせりだしてくる不幸を玄へ押し戻し封じこめてしまうことにひたすら熱中したのだった。	031—②		
453	果てると女はげばだった古畳にたおれ、あえぎあえぎ涙をしたたらせるだけだった。	031—④		
454	「どうした？」	031—⑤		
455	「いいのよ」	031—⑥		
456	ときに壮麗な体のそこかしこから悲慘が膿のように流れだしている見えることもあった。	031—⑦		

457	それは女が不幸になるより以前にもふとしたはずみにまなざしや言葉のはしに顔をだすことがあったのだが、あとになってあらわれた不幸の光景に圧倒されるあまり、私はまたしても誤って、不幸がそれを誘発したのだとばかり思いこんでいた。	031-⑧		
458	女が外国へ去ってずっとたつてから私は二人のことをつづさに回想し、点検していくうちに、悲惨はあの不幸よりもさきに、女の背骨の中にあつたのではないかと思うようになった。	031-⑩		
459	あれは背骨から分泌され、過去から分泌されていたのではなかったかと思うようになった。	031-⑫		
460	“弧哀子”であることはよく聞かされた。	031-⑬		
461	母、父、兄、幼年時代、少女時代のことはよく聞かされた。	031-⑭		
462	けれど、女の口から洩れる自伝と挿話をたどっていくと、少女期のある時期から以後かなり長い時期が全く空白となる。	031-⑭		
463	完全に欠落している。	031-⑯		
464	その時期、弧哀子がひとりで、どこで、何をしてどのように食べていたのか、まったくわからないのである。	031-⑯		
465	おそらく悲惨はそこから持ちこされてきたものである。	031-⑰		
466	体臭のようにしみついてしまって、どうおさえても分泌されてしまう性質のものなのである。	032-①		
467	私も少年時代の悲惨や汚辱にいまだにひたっていてその大きな手の影からぬけでることができないでいるけれど、あの時期の日本に、私とあまり年齢のちがわならしい娘が、弧哀子としてアスファルト・ジャングルをさまようしかなかったとしたら、何をしないですませられたか、何をやるしかなかったか、はっきりと	032-②		
468	どこか一点をつけば一瞬に全体が瓦壊してしまいそうな、そういうものを女はくぐってくるよりほかなかったのであるまいか。	032-⑥		
469	ただ黙って耐えしのぐよりほかなかったのではあるまいか。	032-⑦		
470	日本を去らずにいられなかった衝動のうしろに学閥への憎悪や私と結婚できないことの絶望もさることながら、その口にだしようなない経験のたてる瘴気がおぼろながらしづとくからみついていたのではあるまいか。	032-⑧		
471	女は毎日、日本語ではなく、今住んでいる国の言葉で日記をつけているらしい気配なのだが、そのことにひそかに私は舌を巻いているのだが、そうするしかないのではあるまいか…	032-⑩		
472	壮大な臂がふるえる。	032-⑬		
473	太腿につたわる汗の微粒が霧となって散る。	032-⑬		
474	赤い闇のなかで臂はいよいよかかげられる。	032-⑬		
475	腿がふるえ、力を失い、玄が落下する。	032-⑭		
476	私の鼻と口はあたたかいぬかるみに埋もれてしまう。	032-⑭		
477	液があふれて顎にしたたる。	032-⑮		
478	「ほら、ほら、もっと」	032-⑯		
479	「こう？」	032-⑰		
480	「そうして、もっと、もっと」	033-①		
481	「そこを舌でくるむようにしてごらん」	033-②		
482	「こう？」	033-③		
483	「叫べ、わめけ、日本語だ」	033-④		
484	「無理よ、あなた、それは無理。」	033-⑤		
485	こんなもの頬ばって。	033-⑤		
486	叫べなんて。	033-⑤		
487	二つに一つよ。	033-⑤		
488	どちらか。	033-⑤		
489	どちらかだわ。	033-⑥		
490	独立的に排除して。	033-⑥		
491	ほら。	033-⑥		
492	あ」	033-⑥		
493	ふいにびしょ濡れの全面積が顔いちめんにかぶさってきて、私はつきとばされ、ヘッド・ボードに頭がゴツンと音立ててぶつか	033-⑦		

494	赤い闇のなかを長い、孤独な、咽喉いっぱい呻吟が走り、それまで腹筋と背筋で支持されていた女の体重すべてが落ちかかってくる。	033—⑧		
495	シーツが炉のように白熱している。	033—⑨		
496	船腹いっぱい荷を呑みこんだ船のようにゆらゆらしつつ女は私を蔽い、ときどき広い戦慄を起しながら、したへ、さらにしたへ、部屋の床をぬけて地下鉄の線路床へ、石油を分泌する層まで、音もなく沈んでいく。	033—⑩		
497	風呂の湯はでたり、でなかったり、熱いときもあり、ぬるいときもあり、その日其日栓をひねってはじめてわかるという気まぐれさだったが、熱い湯がでるとわかると女は全裸になってかけつけ	033—⑬		
498	しみだらけの古風で大きな浴槽に湯を入れて、バーデダスのチューブをしぼると緑いろの液がしたたる。	033—⑮		
499	湯にふれるとそれはたちまち白い泡となって綿菓子のようにふくれ上がる。	033—⑯		
500	女が持ってきた物だが、これはいい。	033—⑰		
501	体をこすったり磨いたりしなくても、ただそのなかに浸っているだけで泡が全身をくまなく浄化してくれる。	033—⑰		
502	泡が衰退してくるとまた滴下したらしい。	034—①		
503	湯からあがってもいちいち体を拭かなくていい。	034—②		
504	私はぬるま湯にひたり、顎まで泡に埋もれ、右手に細巻の葉巻、左手にウオッカのグラスをにぎって、壁にたてかけた新聞を	034—③		
505	女がトゲトゲちゃんと遊んでいるのを眺める。	034—④		
506	「こうするとタバコがうまいな」	034—⑤		
507	「そうオ」	034—⑥		
508	「どうしてかな」	034—⑦		
509	「どうしてでしょう」	034—⑧		
510	「お湯で煙がしっとりしてくるんだよ」	034—⑨		
511	「お風呂に入って葉巻をふかすのはギャングの親玉のすることなんじゃない。」	034—⑩		
512	映画でよくあるじゃない。	034—⑩		
513	E・G・ロビンソンなんてね。	034—⑪		
514	『キー・ラーゴ』というのが昔あったじゃない。	034—⑪		
515	肝臓か腎臓[じんぞう]がわるいみたいな顔して、お風呂に入っ て、葉巻をくわえてね、三下を呼びつけて、何かしゃがれ声で命令するのよ」	034—⑫		
516	「ギャングの親玉だけじゃない。」	034—⑭		
517	批評家もするらしいよ。	034—⑭		
518	こうして右手に酒、口に葉巻、左手に新刊本をもってな。	034—⑭		
519	チラチラと斜め読みするのさ。	034—⑮		
520	それで何か書く。	034—⑮		
521	荘重に、デリケートにね。	034—⑮		
522	ときに予言者みたいに、ときに犠牲者みたいに。	034—⑯		
523	その双方をかきまぜたりして。	034—⑯		
524	しばしばね。	034—⑯		
525	そういうのを“バスタブ・クリティック”というらしいよ。	034—⑰		
526	書き手のほうもおなじことをやってるかもしれない。	034—⑰		
527	大いにありうることだな」	035—①		
528	女は激しくて熱い湯を好んだ。	035—②		
529	膚にチカチカと針のように食いこんでくる新鮮な、はしゃぎたつた湯を女は好んだ。	035—②		
530	汗をこらえながら膝を抱いてそこにしゃがんでいると、やがて血が全身のあらゆる箇所できわげ、わきたって、みごとな転生ぶりを眺めてたなしめることを知っているのてある。	035—③		
531	じっさい熱い泡のなかから女がいきなりたちあがると、白い豊満な膩から湯玉がころがり落ち、全身の山岳や平野や森を音をたててなだれ落ちていき、そのあとくまなく淡桃色に輝きわたった、やわらかい靄にかすむ、みごとな磁器があらわれるのだった	035—⑤		

532	白い膩の奥深い芯から女の全身は雪洞に灯がともされたように輝きわたり、荒寥とした壁や、しみだらけの浴槽や、ひび割れた鏡などをことごとく声なく制覇してしまうのだった。	035-⑧		
533	女は白い泡をつけたまま全裸で部屋に入っていき、葉巻の残香や汗で濡れている赤い闇のなかを見まわし、ほかにどこにも場所がないと知って、ベットにとびあがる。	035-⑪		
534	「見て、見て」	035-⑬		
535	快活に笑って足を大きく閃めかし、臍も、陰毛も、玄も、さらけだすままにさらけだし、とんではねる。	035-⑮		
536	「ほら、コッペリアよ」	035-⑯		
537	いきいきと叫ぶ。	035-⑰		
538	「ほら、眠れる森の美女よ」	036-①		
539	うたうように、	036-②		
540	「ほら、白鳥だ」	036-③		
541	と笑う。	036-④		
542	「博士にやもったいない」	036-⑤		
543	このような瞬間、女の顔はいきいきとひらき、小さな、白い齒が光り、眼に痛烈な、いどみかかるような、はばかることを知らない輝きがゆれた。	036-⑥		
544	泡に埋もれた女のたくましくて広い背をトゲトゲちゃんてこすりながら、私は安葉巻をくゆらし、ひとこすりごとにあらわれる芯からの雪洞の灯にみとれた。	036-⑧		
545	白人女のような細毛や、粗毛や、小穴がどこにもなく、それはしなやかでしっとりとして、絨のようになめらかであり、しかも、徹夜や、日光や、苦業の浪費を、何とも思っていないらしい気配で	036-⑨		
546	酷使に酷使してもその膚は早朝の死灰からよみがえって、平然としているかのようだった。	036-⑪		
547	肉の厚い肩に灯が射したり消えたりするのを泡のゆれうごきのなかに眺めながら、私はいう。	036-⑫		
548	「君の先祖はどうやら逸脱したらしいな。」	036-⑭		
549	それもかなり近い世代だ。	036-⑭		
550	お父さんか、お母さんか。	036-⑭		
551	お祖父さんか、お祖母さんか。	036-⑮		
552	そのあたりだ。	036-⑮		
553	おぼえがないかね。	036-⑮		
554	白人と交渉したのがいたんじゃないの」	036-⑯		
555	「いたかもしれないわね」	036-⑰		
556	「膚の肌理がいいのはアジア人だよ。」	037-①		
557	男も女もね。	037-①		
558	ことに朝鮮女となったら絶品としかいいようがない。	037-①		
559	異様なばかりだ。	037-②		
560	ただ、ざんねんなのは、ちよつと膩にかけるということだね。	037-②		
561	白人女の膚はしろいけれど、あれはチョークの白さだ。	037-③		
562	粗くて、脆くて、穴だらけなんだ。	037-③		
563	中身がすぐ洩れちゃう。	037-④		
564	けれど、したたかな膩があって、それを支えている。	037-④		
565	アジア女の膚に白人女の膩があると、いいだろうね。	037-④		
566	きみはそれを体現しかかっているように見えるぞ」	037-⑤		
567	「ペルシャの奴隷商人みたいなことじゃない。」	037-⑥		
568	知らないまに遊んだな。	037-⑥		
569	批評してるんでしょう。	037-⑥		
570	意地わるくジロジロ見てるんだ。	037-⑦		
571	テラコッタや李朝の壺でも見るようにして私のこと見てるんでしょ	037-⑦		
572	「物」としてね。	037-⑧		
573	わかってるわよ」	037-⑧		
574	「しかしきみは自身満々のようだよ」	037-⑨		
575	女はひくく笑って泡のなかに体を沈める、大きな、輝きわたる雪洞が緑と白のまじった湯にゆっくりと沈む。	037-⑩		
576	いくつかのゆるい渦が肩のあたりに起こって消える。	037-⑪		

577	あたたかい玄の室に入って闇のなかにたゆたっていると、ときどき、とろりとした甘い吐気が起こるのをおぼえる。	037-12		
578	それをこらえながら私は知らず知らず鬩のざわめきやそよぎに歳月を読もうとしている。	037-13		
579	女の閨暦をまさぐるうとしている。	037-14		
580	ここを通過していったにちがいない、少なくとも二人の男の事業の跡を知ろうとしている。	037-14		
581	室に入ってあまりいかない右のあたりと思えるところに、やわらかくて小さいが敏捷にうごく小鳥のくちばしのようなものがあつた	037-15		
582	それが減っていないか、それとも大きくなったかを知ろうとして感官をすべて集め、耳を澄ませるようにして一步一步入っていく。	037-17		
583	嫉妬からではない。	038-1		
584	むしろ淡いが友情に近いものからである。	038-1		
585	ある。	038-2		
586	たちどまる。	038-2		
587	あつた。	038-2		
588	それは私を迎え、ぴくっとなって体を起こし、やわらかく小きざみだが敏捷に刺し、しりぞいたり、ふえたりしはじめる。	038-3		
589	恋矢、とでも呼ぶのだろうか。	038-3		
590	いきいきとした小人の踊りに似てもいる。	038-4		
591	変ってない。	038-4		
592	何も変ってない。	038-4		
593	なつかしさが広い領域にわたってゆっくりひろがり、あがってく	038-5		
594	肩のうしろのあたりに午後の陽の射す障子窓が感じられる。	038-5		
595	そのむこうに埃りをかぶった桧葉垣がある。	038-6		
596	遠くにぐもつた人声がある。	038-7		
597	湯からあがったばかりの女の熱い太腿にこめかみをのせて、毛の穂さきに泡が輝くのを眺める。	038-8		
598	飽満にぐったりとなり、たわむれに舌とくちびるを使い、茂みのなかにひそむ芽のようなものをきわだたせようとふけていた。	038-9		
599	臀も、けもの道も、いつもの闇にかくれていず、見慣れない光輝にすみずみまでぶしつけに照されているのを私はけだるく眺め	038-10		
600	ようやくそれに気がついて眼をあけると、窓とベットがおなじ高さにあつた。	038-11		
601	いつのまにかカーテンがあいていて、高緯度国の水銀のような黄昏がキラキラ輝いているのだった。	038-11		
602	赤、紫、紺青、すべての光彩が淡く、高く、晴朗に輝いて、はかない雲のふちが白銀の糸で縫取りをされたように光っていた。	038-13		
603	窓が輝き、辞書が輝き、部屋が輝いていた。	038-15		
604	光は茂みにくまなく射しこみ、濡れた淡褐色のくちびるの小さな皺のひとつひとつで液が結晶のようにひかっているのが見え	038-16		
605	テーブルに手をのばして時計をおとりよせてみると、八時だっ	038-17		
606	夜の八時だった。	039-1		
607	私は鼻を埋め、	039-2		
608	「雨がやんだようだよ」	039-3		
609	といった。	039-4		
610	裏通りは谷のようでもあり、溝のようでもある。	039-7		
611	狭くて、暗く、壁は雨でぐっしり濡れ、立小便、糞、汚物がいたるところに散らかっている。	039-8		
612	このあたりは諸国からの亡命者や移民の区で、貧しい、小料理屋やまっ暗な床屋があり、舗石、壁、窓、すべてが刺すようだったり、ねっとりだつたりの分泌物の匂いをたてて冷たく汗ばんで	039-9		
613	あちらこちらに落書があつて、『バカはおまえだ』、『サル』、『労働者よ、学生よ、団結だ！』、『暴力と強姦、バンザイ』、『イヤ』、『やって』などとある。	039-12		
614	活力はひそめているけれどむせそうな悪臭のたちこめるこの暗い溝を私はゆっくり歩いていって表通りにでる。	039-14		
615	ふいに陽があふれ、夏は下痢から回復していて、空、寺院、スズカケの並木、河岸の胸壁、すべてが北の湖のように輝いてい	039-15		

616	陽は私にも射し、体内のすみずみまで照らしたし、澄明で稀薄な輝きに私はみたされる。	039-⑯		
617	溝のなかを歩いているときは部屋から持ちだした女の体温や、息づかいや、囁きなどが体のあちらこちらに花粉のようにつき、それが消耗しきった私をかるうじてくるんでくれているかと感じられたのだが、この瞬間、すべてが霧散してしまう。	039-⑰		
618	ただ淡くまばゆいだけである。	040-②		
619	音もない。	040-②		
620	滴もない。	040-②		
621	「病人みたいだ、漂ってるみたいだ」	040-③		
622	「腕をとってあげましょうか」	040-④		
623	「いや、いいよ。歩くよ」	040-⑤		
624	「……………」	040-⑥		
625	女は何か口のなかでちぶやき、ひくく笑った。	040-⑦		
626	眼のしたには翳りもなく、たるみもない。	040-⑦		
627	不屈の成熟が苦笑いしている。	040-⑧		
628	大通りのゆるやかな坂をのぼっていくと、大きな飾窓に赤や金や黒が輝き、長髪の学生が鬭争の機関紙を売ったたましい声、水が一滴ずつしたたり落ちるような手回しオルガンのつぶやき、給仕たちの正確でものうい返答、一瞥で本質を見ぬく若い女の眼、タバコのやにのしみた教授たちの顎ひげなどでごったがえす舗道のはしに一人の老人がすわっている。	040-⑨		
629	道にチョークで円を描き、その円のよこにブリキの銭箱があり、そのよこに一本のナポレオン・コニャックがむきだしのままでお	040-⑫		
630	老人は手に五枚の古ぼけたボール紙の円板を持ち、一枚ず	040-⑭		
631	「ごらんよ」	040-⑯		
632	「こうだ」	040-⑰		
633	「そら、そら」	041-①		
634	誰にともなく声をかけながら無造作に投げる。	041-②		
635	円板は一枚ずつとんでいき、円周のなかに落ち、一ミリとかさなることなく並び、それが五枚ならぶと、まるで精密幾何図のよう	041-③		
636	通りがかりの学生がやってみるが、きっと二枚め三枚めで円板がかさなってしまう。	041-④		
637	老人はおだやかな顔にひきつれたような微笑をうかべて学生の手からいんぎんに硬貨をつまみとり、チャリンと音をたてて銭箱に落とす。	041-④		
638	「あれだけのことなの？」	041-⑦		
639	「そうだよ」	041-⑧		
640	「五枚がかさなりあわないで円の内側に並べたらあのお酒がもらえるってわけなのね？」	041-⑨		
641	「そうだ」	041-⑪		
642	「ちょうどお酒がきれたところね。」	041-⑫		
643	とってあげましょうか。	041-⑫		
644	私、子供のときからこういうことには強いよ。	041-⑫		
645	夜店をよく荒したものよ。	041-⑬		
646	射的だとか、金魚すくいだとか、いい腕だったのよ。	041-⑬		
647	兄を負かしてやったし、お母さんをよろこばせてあげたし、ほら、いま持ってるトゲトゲちゃん、あんな景品でいつも玩具箱がいっぱいだったわ。	041-⑭		
648	小銭ある？」	041-⑮		
649	「三回だけだぜ」	041-⑯		
650	「あなたケチね」	041-⑰		
651	女は道ばたにしゃがみこむと老人から円板をうけとり、指をポキポキ鳴らしてから、よく狙いをつけて投げた。	042-①		
652	一回めは二枚めでかさなった。	042-②		
653	二回目は三枚目でかさなった。	042-③		
654	三回目も三枚めでかさなった。	042-③		
655	老人はひきつれたような微笑をうかべ、くやしがる女のでからそっと三枚の硬貨をつまみあげて銭箱へ落とした。	042-④		

656	すでに銭箱は硬貨でいっぱいになり、あふれかかっている。	042-④		
657	「何か仕掛があるんじゃないの？」	042-⑥		
658	「何もないね」	042-⑦		
659	「何だかダメされたみたいだけどナ」	042-⑧		
660	「巨匠の至芸なんだ」	042-⑨		
661	そこからちよといくと一人の初老の小男と若い女がたくさん の学生に包囲されていた。	042-⑩		
662	小男はちょっといびつな卵型の禿頭を持ち、服は貧しいけれど きちんとし、真摯なまなざしで何か演説しているのだが、彼が話 だすとたちまち学生たちがあちこちから嘲笑を浴びせにかり、 どっとはやしたてる。	042-⑪		
663	男はいくら嘲られ、罵られ、笑われてもびくもしないが、あまり 学生たちがよるこんでさげびたてるので話のすすめようがなく、 小さな澄んだ眼に当惑のいろをうかべて佇んでいた。	042-⑬		
664	すると若い女が昂奮して鉄柵にかけのぼって片手でぶらさが り、鋭い、激しい声をあげて学生を罵りはじめた。	042-⑮		
665	学生たちはいよいよはしゃぐ。	042-⑯		
666	女は右から嘲られると右に顔を向け、左から罵られると左に顔 を向け、眼を閃めかし、をとがらし、茫然と佇んでいる小男をか ばうようにして学生たちを一人一人だまらせにかかる。	042-⑰		
667	「これは何かしら？」	043-②		
668	「よくわからないがあの男は電気技師で詩も書くというんだ。	043-③		
669	それが、人間は一年はたらいたら三年は遊ばねばならない。	043-③		
670	それが理想の社会というものだ。	043-④		
671	そういう社会を作らねばならない。	043-⑤		
672	私が議員に当選したらそういう運動をする、と演説してるらしん	043-⑤		
673	あの女はファンかもしれないし、秘書かもしれない。	043-⑥		
674	同志かもしれない。	043-⑥		
675	親子じゃないかときもある。	043-⑥		
676	ああして二人で毎日できては学生のなぶりものになってるん	043-⑦		
677	しかし、いくらヤジられてもいっこうにへこたれる気配がない。	043-⑦		
678	正気なんだ。	043-⑧		
679	気がいいじゃない。	043-⑧		
680	まさに荒野の叫びというところなんだが、この界限にはかわった のがいっぱいいる」	043-⑨		
681	「一年はたらいたら三年遊ばせてやるというのなら賛成だけど	043-⑩		
682	いいことじゃない。	043-⑩		
683	私なら一も二もなく投票してあげるけど。	043-⑪		
684	何もああヤジることないじゃない」	043-⑪		
685	「それじゃ賛成っていつてあげなさい」	043-⑫		
686	「教えて」	043-⑬		
687	私に教えられた単語を女はいきなり高い声で二度叫んだ。	043-⑭		
688	鉄柵にぶらさがっていた女がそれを聞きつけ、顔をろちらに向	043-⑮		
689	牝豹のように輝いていた眼がふいに微笑で細くなり、軽く会釈し	043-⑮		
690	そしてまた精悍な首をひねって学生たちを折伏にかかった。	043-⑯		
691	公園へいっていつものベンチにすわる。	043-⑰		
692	アイスクリームの屋台、鳩の餌を売る老婆、風船屋、綿菓子屋 などが水銀のようにキラキラ輝く淡い夕陽のなかでぞろぞろ通 りかかる観光客を相手に仕事をしていた。	043-⑰		
693	蛙男も仕事に精をだしていた。	044-②		
694	今日は金魚鉢に蛙が三匹も入っている。	044-②		
695	雨が何日も何日もつづいたので彼は屋根裏でじっと忍耐して、 蛙をかわいがり、今日は人出があるものと、瓶に水をしこたまつ めてやってきたのではないか。	044-③		
696	道ばたにたちはだかつて彼は大きく口をあげ、舌をだらりとだ し、ポンプのように水がふきだし、蛙がとびだす。	044-④		
697	見物人がぼんやりしたまなざしでさしだす硬貨をうけると彼は 金魚鉢と瓶を持って木かげへいって寝ころぶ。	044-⑥		

698	見物人が散ってしばらくし、新しい通行人の一群がやってくるのを見ると彼はゆっくりと体を起こして水をごくごく呑み、金魚鉢を持って道へでていく。	044-⑦		
699	「唾なんじゃない？」	044-⑧		
700	「いや、酒場で話をしてるのを見たことがある。	044-⑨		
701	唾じゃないよ。	044-⑨		
702	去年もああしてたし、三年前もああしてた。	044-⑩		
703	おれはここへくるたびに先生がいるかどうかを見にくることにしてるんだ。	044-⑪		
704	あれを見てホッとするんだ。	044-⑬		
705	いっさいがっさいを頭からバカにしてるだろう。	044-⑬		
706	小気味いいじゃないか。	044-⑬		
707	老子にみせたらよろこぶだろうな。	044-⑭		
708	「懶是真だ」	044-⑭		
709	「いささかグロだわよ」	044-⑮		
710	「なかなかあそこまでなまけられるもんじゃないぜ。	044-⑯		
711	おれは好きだね。	044-⑯		
712	感心してるというくらいさ。	044-⑯		
713	戦争中もみんなが右往左往してきよろきよろイライラしてる時にあいつ一人だけはだまったきりで蛙を呑んだり吐いたりしてたんじゃないか。	044-⑰		
714	おれはそう考えることにしてるんだけど、寂滅もここまでくるのは容易じゃあるまい。	045-①		
715	精神のダンディというところさ。	045-②		
716	ネグレクテット・ダンディというお洒落用語があるらしいけど、先生はまさにそれだよ。	045-③		
717	「どうだ？」	045-④		
718	「おっしゃりいことはよくわかるけど。	045-⑤		
719	私にいわせるとこれはオブローモフだわね。	045-⑤		
720	そうよ。	045-⑤		
721	オブローモフが蛙を呑んだり吐いたりしてるのよ。	045-⑥		
722	オブローもふは一日中寝たり起きたりしてただおしゃべりしてるだけだけど、それが町へでてきて蛙を呑んだり吐いたりしてるの	045-⑥		
723	ベットにもぐりこんで自己反省というおならにむせてるのが知識人だって、誰かえらい哲学者がいったけど、これは蛙にむせてるんじゃない。	045-⑧		
724	蛙とおならのちがいでいいだけのことじゃない。	045-⑨		
725	そんな気がするけど。	045-⑩		
726	老子に見せたらよろこぶだろうっておっしゃいますけれど、むしろイヨネスコかベケットあたりじゃないかしら」	045-⑪		
727	「いや、老子だろうよ。	045-⑫		
728	先生をよくごらん。	045-⑫		
729	悲劇の匂いがまるでないじゃないか。	045-⑫		
730	ゆうゆうとやってるんだ。	045-⑬		
731	放下していない。	045-⑭		
732	発作なんだ。	045-⑭		
733	どちらをとるかよいわれたら、おれはこちらだね。	045-⑭		
734	じつは何かにこれが使えないかと思って、小説か芝居にね、考えては見たんだが、いまだにか。	045-⑮		
735	さっぱり見当がつかないんだよ。	045-⑯		
736	だからこうやって見物してる」	045-⑰		
737	「そりゃ無理かもしれないわよ」	046-①		
738	「どうして？」	046-②		
739	「だってあれはその道の完璧なものなのよ。	046-③		
740	完璧なものは無残だっていうじゃない。	046-③		
741	だから応用なんかできないのよ。	046-④		
742	そっとしておくことね。	046-④		
743	巨匠の至芸だもの」	046-④		
744	夕陽のなかで女が眼をしかめ、ふいに胸を波うたせてふきだし	046-⑤		

745	いま一群の見物人を処理し終った男が、誰も見ているものがいなくなったのにいんぎんなしぐさで水を呑み、蛙を吐いたのだっ	046-⑤		
746	ぴよんぴよん跳ねる蛙を金魚鉢にいれていとしげに洗ってやると、男は瓶を腋にかかえ、ゆっくりした足どりで公園をでてい	046-⑦		
747	砂利道には透明な陽の燦爛と、おびたしい水のしみがのこっ	046-⑧		
748	夜になるまでのひとときは橋のたもとの安酒場ですごすことにしてある。	046-⑩		
749	赤や黄や黒のビニール紐で編んだ椅子が舗道にだしてあるので、それにもたれて一杯の酒をゆっくりと時間をかけてすす	046-⑩		
750	昼でもなく夜でもないこの時刻には何か新しいことのありそうな、あてどない希望がグラスにも、灰皿にも、並木道のざわめきにも感じられる。	046-⑫		
751	こまかい汗にぐっしより濡れたドライ・マーティニのグラスをとりあげると宝石のように充実した重さがあり、くちびるに冷えきった滴を一粒のせると、硬い粒のまわりにほのかな、爽快な苦がただよっていて、粒のつめたさはいきいきしているが、芯まで暗く	046-⑬		
752	淡くて華やかな黄昏はゆっくりとすぎていき、やがて夜が水のように道や、木や、灯や、人声からしみだして、大通りいっぱいひろがっていき、いつとなく頭をこえ日蔽いをし浸し、窓を犯し、屋根を消して、優しい冷酷さで空にみちてしまうのだが、そうなるまえにほんのわずかのあいだ、澄明だが激しい赤と紫に輝く董いろの充満するときがある。	046-⑯		
753	ほんの一瞬か、二瞬。	047-③		
754	気付いて凝視しにかかるともう消えている。	047-③		
755	きびしい、しらけちゃた、つらい一日はこのためにあったのかと思いたくなるような瞬間である。	047-④		
756	大通りいっぱい輝く血がみなぎり、紙屑から銅像、破片から構造物、爪から胸、すべてを暗い光耀で浸して、ひめやかにたゆ	047-⑤		
757	熱帯、亜熱帯、温帯の黄昏には混濁した活力がギシギシひしめいてどよめくが、むっちりうるんだ湿気があるために憂愁をおぼえさせられ、このように明晰をきわめた激情を目撃することはなかったと思う。	047-⑦		
758	大通りは動乱と騒擾と叫喚にみたされるかのようである。	047-⑨		
759	女の顔や、首すじや、髪が董いろに侵され、そこかしこにみおぼえのない悲痛や威厳が一刷きされてあらわれる。	047-⑨		
760	体をたてなおそうとすると、もう消えている。	047-⑪		
761	明るい灯のしたで三十歳代の女子大学生が小さな歯を見せて微笑している。	047-⑪		
762	「火をつけましょうか？」	047-⑬		
763	「いや、いいよ」私はポケットに手をいれ、ジッポのライターをさぐりあてて火をつける。	047-⑭		
764	惑乱は消えた。	047-⑮		
765	はっきりしている。	047-⑯		
766	もう夜である。	047-⑯		
767	“逢魔が時”はすぎた。	047-⑯		
768	魔は顔を見せ、車道で踊ったり、新聞売場のまわりをとび歩いたり、酒場のテーブルのふちへこっそりしのびよったりして火をそそのかしたが、するだけのことをすると効果をたしかめることもなく消えてしまった。	047-⑯		
769	まるで拍手喝采が消えるように消えてしまった。	048-②		
770	「いま夕刊売りがきたわ」	048-③		
771	「気がつかなかった」	048-④		
772	「顔を見せて何か叫んだなと思ったらもういないの。」	048-⑤		
773	どこかへとんでいった。	048-⑤		
774	いくらピリピリしてなきゃならないといっても、ちょっと度がすぎるじゃないかしら。	048-⑤		
775	まるでコウモリだわ。	048-⑥		
776	追っかけて買ってきましょうか。	048-⑦		
777	今晚読むものあるの？」	048-⑦		

778	「新聞なんかどうでもいい。」	048-⑧		
779	それより、もうそろそろ鍋が熱くなっている頃だよ。	048-⑧		
780	これからどこへ行って何を食べるか、それを考えなさい。	048-⑧		
781	きみは勉強ばかりしてるから運動不足かもしれないけど、チャブスイの柿の種じゃもたないはずだよ。	048-⑨		
782	このところずっとキャンプ生活みたいなものだったしね」	048-⑩		
783	「そういわれると困っちゃう。」	048-⑫		
784	何しろ私のところはジャガイモとソーセージの国でしょう。	048-⑫		
785	そこで十年暮してごらんなさい。	048-⑬		
786	質実剛健、勤儉力行ですわよ。	048-⑬		
787	いいかげん舌がポケちやて、どうしようもないわ。	048-⑬		
788	教えていただきたいようなものよ。	048-⑭		
789	御跡したいとどこへでもいくわよ。	048-⑭		
790	何でも食べる。	048-⑮		
791	あなたならまちがないとにらんでるもの。	048-⑮		
792	あなたの真似してたらまちがないと思うの。	048-⑮		
793	官能をバカにしちゃいけないわ。	048-⑯		
794	風呂屋でも阿片窟でも、どこでもつれてって！」	048-⑯		
795	「皮肉をいっちゃいけない。食べる話だよ。」	049-①		
796	今晚いまから何を食べるかという話だ。	049-①		
797	モツ料理はどうだろう。	049-①		
798	これはいいものだよ。	049-②		
799	あのウンコ通りに一軒いい店を知っている。	049-②		
800	席につくと給仕が望遠鏡をもってきてドアに貼ったメニューを覗かせる。	049-②		
801	できますものはその日その日でちがうんだが、モツをぶどう酒や香料でコトコト煮こんだやつだ。	049-③		
802	壺にはいってでてくる。	049-④		
803	心臓、肝臓、胃、腸、睾丸、腎臓、何がでてくるかもしれないが、何でもうまい。	049-④		
804	腎臓についていうとだね、これは徹底的に浄化して血ぬきしたのよりちょぴりオシッコの匂いがのこってるやつのほうがコクがあると思うね。	049-⑤		
805	すみからすみまで意識しつくして描いた絵のどこか一点にさりげなく破綻を作っておくとかえって全体が生きているという絵がある。	049-⑦		
806	そういうもんだよ。	049-⑧		
807	腎臓はオシッコくさいのがいい。	049-⑨		
808	ちょっと匂うのが」	049-⑨		
809	「じゃ、睾丸は？」	049-⑩		
810	「まだわかってないね。」	049-⑪		
811	もっと勉強しなければいけないよ。	049-⑪		
812	睾丸はオシッコと関係がない。	049-⑪		
813	これもわるくないよ。	049-⑫		
814	ぼわぼわしてて、含みが深い。	049-⑬		
815	マドリードの凄い貧乏人町の安酒場で犢の睾丸のフライをサンテリアのさかかに食べたことがあるが、これはじつに上品で清純な味だった。	049-⑫		
816	柔らかくて、丸くてね。	049-⑭		
817	説明してもらわないとソレとわからないし、説明してもらってもソレとわからなかったな。	049-⑭		
818	懐石料理にでる自身の魚の清蒸みみたいな歯ざわりだった。	049-⑮		
819	総じてモツをバカにしちゃいけないよ。	049-⑯		
820	魚でも獣でも相手を倒したらまっさきにモツから食べてかかるといじゃないか。	049-⑯		
821	今晚ひとつそれをどうだろう。	049-⑰		
822	前菜にはカタツムリだな。	049-⑰		
823	それも罐詰のじゃなく生のやつ。	049-⑰		

824	ここの先生方は何しろ墓場へお参りにいって墓石のまわりにいるカタツムリを見て大粒だ、小粒だといって先を争って家へ帰って帰るといふんだよ。	050-①		
825	右の眼で祈って左の眼で食べるらしい」	050-③		
826	「いい精神だわ。	050-④		
827	賛成よ。	050-④		
828	御先祖様もおよろこびでしょうよ。	050-④		
829	何だか食べたくなってきたわ。	050-④		
830	チャプスイなんてすっかりいわなくてよかった。	050-⑤		
831	あぶないところだった。	050-⑤		
832	いきましようよ。	050-⑤		
833	さあ。	050-⑥		
834	ウンコ通り」	050-⑥		
835	女は眼じりに皺をよせて大きく笑って椅子から立ちあがると、タン・チェックのスポーツ・シャツの袖をちょっとたくしあげてカむポーズをみせた。	050-⑦		
836	たくましいがよくひきしまったその腕にはしっとりとした、蒼白い膩が青を沈めている。	050-⑧		
837	舗道と日蔽いを浸して店内になだれこもうとしては拒まれてたゆっている夜のなかで青銅のように閃めく。	050-⑨		
838	裏通りの小料理屋は貧しくて狭くて汚れに汚れて、テーブルにも壁にも一センチからの厚さで人の垢や脂がぬりつけられているように見える。	050-⑪		
839	洞穴さながらの暗さだが、ドアの一箇所にだけ小さなライトが円光を投げている。	050-⑫		
840	そこにコンニャク版のメニューが貼ってある。	050-⑬		
841	給仕は客があると黙って一本の望遠鏡を持っていく。	050-⑬		
842	それもメッキや塗りがぼろぼろに剥げた海賊時代のしろもので	050-⑭		
843	「見えた、屠畜場が見えた！」女が声をあげた。	050-⑯		
844	「見る格好をするだけでいいんだよ」	051-①		
845	ナイフのようにやせた店の老主人が寄ってきたので私はパン、ぶどう酒、カタツムリ、内蔵は本日の特選品をたのんだ。	051-②		
846	この店ではカタツムリを殻ではなくて小さな玩具のような壺に入れてくる。	051-③		
847	壺のなかで香ばしいニンニクの香りをたてて泡を浮かべている黄金色のバターをカタツムリを食べるあとあとから皿にあげていき、パンをそれに浸して食べる。	051-④		
848	さいごにはパンで皿を拭うようにして一滴のこらず吸収してしま	051-⑤		
849	パンの香ばしい皮や、ニンニクや、バターや、カタツムリの脂などが舌にのこる。	051-⑥		
850	そこを一杯のぶどう酒で洗う。	051-⑦		
851	「教えてあげよう。	051-⑧		
852	これは知っておいたほうがいいよ。	051-⑧		
853	どの酒でもそうだけど、口に入れたら、歯ぐきへまわしてしみこませるんだ。	051-⑧		
854	そこでしばしためらって本質が登場するのを待ち、かつ、眺め	051-⑨		
855	歯ぐきはたいせつなんだよ。	051-⑩		
856	鑑定家が酒を飲むところをみていると頬っぺたがコブみたいにブクッとふくれるが、あれはこのためだ。	051-⑩		
857	これを、ぶどう酒を“嚙む”という。	051-⑪		
858	もっともおれは嚙みしめたいほどの正宗をまだ飲んでいないので、しょっちゅう舌や咽喉でウガイ飲みだがね。	051-⑫		
859	それとね、うまいパンさえあればぶどう酒にさかなはいらないということ」	051-⑬		
860	「モツは何がでるの？」	051-⑮		
861	「何かわからない。	051-⑯		
862	だされるものを食べてりゃいいんだよ。	051-⑯		
863	こういうところでは店にまかせておくのが一番さ」	051-⑯		
864	「匂いでわかるわね」	052-①		

865	「何ならきつくするようにたのもうかね」	052-②		
866	「いいの。冗談よ」	052-③		
867	やがて壺がほかほかと湯気をたててあらわれる。	052-④		
868	フォークを入れてべろべろしたものをひきあげて皿にとってみると、胃袋だった。	052-④		
869	とろとろに煮込んであってむっちりと柔らかいがどこかに弾力ものこしてあるので、歯ごたえをたのしむことができる。	052-⑤		
870	濃厚なソースが芯までしみこんでいて、そのとろとろさとくると、“煮込む”というよりは“熟し”ている、熟しきって果汁でハチきれそうになっているといたいようなものだった。	052-⑥		
871	はじめのうち女はおいしいとかすばらしいとかいってたが、やがて口をきかなくなり、壺から胃袋をひっかけては皿に移し、パンをちぎり、ときどき手をやすめてぶどう酒をすすり、吐息をついてはまた仕事にもどった。	052-⑧		
872	皿のソースを一滴のこらずパンで拭いとり、そのパンのさいごのひときれを呑みこみおわると、女はぐったりとなって壁にもたれ	052-⑬		
873	薄く汗ばんで、頬が薔薇いろに輝き、うつろな眼がうるんで、暗がりでもキラキラ閃めいていた。	052-⑭		
874	「完璧だわ」	052-⑮		
875	女はひくくつぶやいた。	052-⑯		
876	「どうしようもなく完璧だわ。」	052-⑰		
877	眠くなりそう。	052-⑰		
878	くたびれちゃうのね。	052-⑰		
879	御馳走食べるとマヒしちゃうんだわ。	053-①		
880	あなたのいうとおりだ」	053-①		
881	はずかしそうに軽く腹を撫でて女は微笑した。	053-②		
882	眼は輝いているがうつろで、煙のようなものがたちこめ、汗にまみれて男の腕のなかからのがれていくときにそっくりのまなざしであった。	053-③		
883	飽満が仮死ならば美食が好色とおなじ顔になっても不思議ではなかった。	053-④		
884	ぶどう酒の酔いは豊沃な陽に輝く、草いきれのたちこめた、なだらかな丘なので、頂上をすぎたあとも豊沃は緩慢につづいていき、いよいよそれは性に似てくる。	053-⑥		
885	しかもただ味わいたいばかりで求めていながら、たとえば女のくちびるのきわあたりに冷酷の傲然の残影が一翳りもあらわれていないのは、どうしてだろうか。	053-⑧		
886	ふいに女は体を起こした。	053-⑨		
887	「ねえ。」	053-⑩		
888	もう何日かここにいて、それから私のところへいきましょよ。	053-⑩		
889	今度は私が御馳走するわ。	053-⑪		
890	ピッツアを作ったげる。	053-⑪		
891	それもただのピッツアじゃなくて、いちいちイーストを買ってきて粉から練りあげるのよ。	053-⑫		
892	それを何時間も寝かしてふくらましてから、サア、たいへん。	053-⑬		
893	アンチョビだ、サラミだ、オリーブだとありったけ入れるの。	053-⑬		
894	何ていったかな。	053-⑬		
895	こんな小さい、青い木の実で、塩漬けにしたのがあるでしょう。	053-⑭		
896	あれも一瓶買ってきて埋めるのよ。	053-⑭		
897	何でもどっさり入れることにするわ。	053-⑮		
898	あなたのお気に召すようにするのはたいへんだわ。	053-⑮		
899	私のピッツアは研究室じゃ有名なのよ。	053-⑯		
900	何月何日に作りますと紙に書いて掲示板に貼っておくと、や、くるわ、くるわ。	053-⑰		
901	オリエントだ、スラヴだ、老教授だ、若手教授だ、助手だと、ぞろぞろくるの。	054-①		
902	食べながらつぎはいつでしょうかなんてたずねるのがいるくらいなのよ。	054-①		
903	だからわかるでしょ。	054-②		

904	実力なの。	054-②		
905	私の主義通りよ。	054-②		
906	実力あるのみななの。	054-②		
907	それに、いま私のいるところは、ガラスと鋼鉄のお城なの。	054-③		
908	長方形の箱なの。	054-③		
909	ある学術財団が学者たちの宿舎にといって建てたんだけど、ちょっとしたものよ。	054-④		
910	ダイヤル一つで湿度、乾度、温度、何でも自由に調節できるようになってるの。	054-⑤		
911	もちろんガラスの大戸を手であけたてすることもできるから、夕方暑かったらバルコンにでてもいいわ。	054-⑥		
912	デッキ・チェアを一つ買って来るからそれにパンツ一枚でひっくりかえってちょうだい。	054-⑦		
913	あなた、すぐ裸になりたがるから。	054-⑦		
914	ところが不思議なのはそんな超モダン建築の三階なのに、お風呂に入っていると、コウロギの鳴声をするの。	054-⑧		
915	はじめトゲトゲちゃんかしらと思ったけど、ちがうの。	054-⑨		
916	コウロギですよ。	054-⑨		
917	パイプをつたってあがってくるのよ。	054-⑩		
918	いつも二匹で、へい、毎度ありがとうございます、といっただてくるの	054-⑩		
919	おかしくてね。	054-⑪		
920	名をつけてやったの。	054-⑪		
921	元気そうなのをハンス、おとなしそうなのをインゲというの。	054-⑫		
922	不思議に夜にならないとでてこない。	054-⑫		
923	それも私がお風呂に入っていると、でてくるのよ。	054-⑬		
924	チョロチョロ、チョロチョロって鳴くんだわ。	054-⑬		
925	孤独な女のヴァイオリンってとこね。	054-⑭		
926	ぜひ会ってやってほしいわ。	054-⑭		
927	きっと気に入ってもらえると思うんだけど。」	054-⑭		
928	「ピッツアのほかに何ができる。」	054-⑮		
929	「搾菜麺はどう。」	054-⑯		
930	ジャオ先生の菜館へいって太太に搾菜と麺をわけてもらうの。	054-⑯		
931	何なら魔法瓶を持っていってスープをわけてもらってもいいわ	054-⑰		
932	これわ東南アジアできたあなたのお気に召すかどうかは疑問だけど、やってみましょう。	055-①		
933	太太は書道の大家だけど気さくなひとで、何かといえば、アイヤアなんていうの。	055-②		
934	シッカリしてるって評判よ。	055-②		
935	夫婦二人でスーツケース一つでやってきて、三年たったら菜館を一つ持っているというんだからかなわないわ。	055-③		
936	そうだ。	055-④		
937	搾菜麺のほかにできますものは太太直伝のチャプスイ。	055-④		
938	笑わないで。	055-④		
939	またかって顔してるけど、一度批評してみて。	055-⑤		
940	いまシャンピニオンが出盛ってるからそれを入れてやってみた	055-⑥		
941	ウンと入れましょうね。」	055-⑥		
942	「おねがいがある」	055-⑦		
943	「なあに？」	055-⑧		
944	「ママゴトでやってほしいんだ」	055-⑨		
945	いっただから私は口をつぐみ、タバコに火をつけた。	055-⑩		
946	女は私の狼狽に気がついたようではなかった。	055-⑩		
947	つきでた高い胸のしたに腕を組み、首を少しかたむけ、夢中のまなざしで堂々と微笑していた。	055-⑪		
948	ママゴトにしてほしい。	055-⑫		
949	ピッツアも、デッキ・チェアも搾菜麺も、チャプスイも、ママゴトにしてほしい。	055-⑬		
950	それ以上のものにも以下のものにも、できたら、しないでほし	055-⑬		
951	血を見ることになる。	055-⑭		
952	ふたたび繰り返さずこよになる。	055-⑭		

953	私はそういいかけて口をとぎしたのだ。	055-15		
954	ぶどう酒と豊熟した料理がさそいだして顔のそこかしこにのこしていったものではあるにせよ、洞穴じみた暗がりにローソクの灯をうけてうかびあがっている女の顔にはこれまでに目撃したことのない、安堵しきった昂揚があった。	056-1		
955	そこに射したり、にじみでたりしている微光は、女の頭のうしろ、深い遠くから、歳月をこえてわたってきているもののように見ら	056-2		
956	それは私にはまさぐりようなものだった。	056-3		
957	女はしあわせそうだった。	056-3		
958	苦闘や孤独を漑しきってしあわせそうだった。	056-4		
959	眼を細め、全身で発光し、それに気づかないでいる。	056-4		
960	かすかに耳をかたむけているのは二匹のコオロギの声を聞きとろうとしているのだろうか。	056-5		
961	しあわせがこんな浪費に耐えられるとは思えない。	056-6		
962	私は少し不安をおぼえる。	056-6		
963	息苦しくもある。	056-6		
964	旅館にもどろうとして二人で裏通りを歩いていった。	056-7		
965	夕方のひとときはざわめいてたのにもうまっ暗な下水溝となっていて、人の姿がどこにもない。	056-8		
966	あちらこちらに酒場や料理店の灯が虫歯の穴のような入口を照らしているが、壁には私たちの足音が低くこだまするだけであ	056-9		
967	闇しかない路地に入っていくと汚水に浸りこんでいくような気持ち	056-10		
968	この市ができたときに山からはびこまれてそれ以来一度も日光を浴びたことがないのではあるまいかと思いたくなるような石が積みあげられている。	056-12		
969	冬を吸収したままで凍てついている、ぬれた、かたくななその壁のよこをすぎたとき、むせるような立小便の酸っぱい腐臭のさなかに、ふいにあたたかい花な香りとすれちがった。	056-14		
970	私は闇のまかでたちどまった。	056-14		
971	「誰か歩いていったのかな」	056-15		
972	「どうかしら」	056-16		
973	「靴音を聞いたかい？」	056-17		
974	「ずっと私たちきりだわ」	057-1		
975	「ドアのしまる音も聞かないね？」	057-2		
976	「そう思うけど」	057-3		
977	「だけど香水の匂いがする。」	057-4		
978	君のじゃない。	057-4		
979	いますれちがった。	057-4		
980	女とすれちがったみたいだ。	057-4		
981	フレッシュで、うごいていた。	057-5		
982	誰もいないのに不思議だな。	057-5		
983	どういうわけだろう」	057-5		
984	「幽霊と浮気したの」	057-6		
985	ひくく含み笑いでからふいに女が腕をからみあわせ、うむをいわせぬ力でひきよせると、背のびしてくちびるをよせてきた。	057-7		
986	一週間ほどしてから移った。	057-11		
987	女はレインコートとスーツケースを手にはさげ、私はリュックサックを背負って停車場へいった。	057-12		
988	広場の食品店でパンとぶどう酒とハムを買ってから列車に乗っ	057-13		
989	コンパートメントに入ったのだが、出稼ぎにいく人びとでいっぱいだった。	057-13		
990	この人たちは小柄だがたくましく、くすぶったように膚が浅黒く、眉が濃い。	057-14		
991	南の貧しい諸国の農村や貧民街からでてきて、これから北の富める国へいき、建築現場でセメントをこねたり、道ばたでアスファルトを煮たりするのである。	057-15		
992	女は料理店で皿洗いをしたり、ビルや駅の掃除をしたりする。	057-17		

993	北からおりてくる列車は花の匂いがするが、北へのぼっていく列車は汗の匂いがする。	057-⑰		
994	人びとは声高くしゃべったり、叫んだりし、身ぶりが機敏でゆたかだが、放埒で、図々しい。	058-②		
995	しかし、仲間が消えて自分たちだけになってしまうと、ふいに男の眼はさびしくなり、女にはいたましい荘重さがあらわれる。	058-③		
996	男たちは爪が焦げそうになるまでタバコを惜しみ吸ったが、昼飯時になるとニンニクとコショウのぴりぴりきいたサラミや、キュウリの甘酸漬や、サクランボなどをつぎからつぎへと網袋からとりだして私たちにすすめてくれ、私たちのすすめるぶどう酒を遠慮深く飲んで、あちらこちらの国の道ばたや駅でかき集めたにちがない単語の端切れをつないで、すばらしい、とか、健康にいい、とか、男の飲みものだなどというのだった。	058-⑨		
997	夏はようやく熟しつつあった。	058-⑩		
998	新しい洪水期と氷河期のしるしはしばらく消えて、淡いながらも熱とふくらみをもった陽がいちめんにあふれていた。	058-⑪		
999	畑では麦が金いろに輝き、森はたくましく暗く、湖岸ではキャンピング・カーとテントがひしめき、栄養疲れのした白い肥満体がよこたわったり、水を浴びたりしている。	058-⑫		
1000	海のようにゆったりとうねる丘の牧場では牛がものうげにうなだれている。	058-⑬		
1001	列車が山間部をゆっくりといくときはなだれ落ちる鋭い断崖のしたに青く澄みきった水が岩から岩へ、鬱蒼とした森の影のなかを、白い泡をたててころがり落ちていくのが見られた。	058-⑯		
1002	眼は岩から森へ、森から水へ、水から峰へとうごき、この地帯の年齢を考えたり、無垢ぶりを嘆賞したり、さんざめく孤独にひかれればなしになったりした。	058-⑰		
1003	深淵、瀬、よどみ、落ちこみ、渦などを見るたびに眼は私をそこにたたせて毛鉤をどこからどうふりこんでどう流したものだろうかと思案にふけらした。	059-②		
1004	流血と惨禍の光景は遠ざかって、にぶい歯痛のようなものになり、私は窓に顔をよせ、泡だつ日光の中でぶどう酒をすすりつつ、鉤の鋭さ、マスの白くて固い口、ぶりぶり肥ってはいるが指をはじきかえしそうな筋肉、日光のなかに散る宝石の粉のようなその斑点のことを思いつづけて倦むことがなかった。	059-⑤		
1005	はじめての町に行くには夜になって到着するのがいい。	059-⑦		
1006	灯に照らされた部分だけしか見られないのだからそれはちょっと仮面をつけて入っていくような気分で、事物を穴からしか眺めないことになるが、闇が凝縮してくれたものに眼は集中してそそ	059-⑨		
1007	翌朝になって日光が無慈悲、苛酷にどんな陳腐、凡庸、貧困、悲惨をさらけだしてくれても、白昼そのままである状態入っていったときよりは、すくなくとも前夜の記憶との一変ぶりにおどろいたり、ときにはふきだしたくなったりするものである。	059-⑪		
1008	白昼に到着しても夜になって到着しても、遅かれ早かれ、倦怠はくるのだから、ひとかけらでもおどろきのあるほうをとりたい。	059-⑬		
1009	視線は嗅覚とおなじように機敏で聡明だけれどたちまち慣れて安心してしまい、熱を滅殺することしかしてくれない。	059-⑮		
1010	それならば一瞬の打撃があるようにして、せめて夜と昼のどんでんの効果ぐらいは愉しみ、自身を一步さがって擲擧してもいいではないか。	059-⑯		
1011	そう思ったので私は時刻表を女に買ってこさせ、二度の乗換えと待機時間のたいくつ、わずらしさがあるとしても、わざと不便な列車を選んで、夜遅くなって到着するよう工夫したのだった。	060-①		
1012	「はじめてじゃないんでしょう？」	060-③		
1013	「そう。」	060-④		
1014	ここには二度来てる。	060-④		
1015	あちらこちらにいった。	060-④		
1016	けれど、この町ははじめてだよ。	060-④		
1017	何も知らないな。	060-④		

1018	めくらを案内するみたいに案内してほしいね」	060-⑤		
1019	「わかった。	060-⑥		
1020	まかしといて。	060-⑥		
1021	私はネズミの穴まで知ってるわよ。	060-⑥		
1022	不自由はかけないわ。	060-⑥		
1023	何でも聞いてちょうだい。	060-⑥		
1024	これからが私の出番ってわけだ。	060-⑦		
1025	いきましょう」	060-⑦		
1026	「一国の首府にしては静かすぎるね」	060-⑧		
1027	「そりゃあたりまえよ。	060-⑨		
1028	ここには役所と大学しかないんだもん。	060-⑨		
1029	東京とはちがうわよ。	060-⑨		
1030	おまけに住民は夜九時になるとさっさと家へ帰っちゃうから、ひっそりかんもいところよ。	060-⑩		
1031	私のところはちょっといった郊外だけれど、昼間からフクロウの鳴声がするくらいよ」	060-⑪		
1032	「フクロウが昼間に鳴くのかね？」	060-⑫		
1033	「夜は哲学本を読んでるのよ」	060-⑬		
1034	「聞きはじめだな」	060-⑭		
1035	「だから寝不足なのよ」	060-⑮		
1036	すわりっぱなしだったのであちらこちらで肉や骨がミチミチと音をたてるのをおさえながらリュックを背に背負ってプラットフォームにおりると、列車からは数人の人影がこぼれただけで、冷えびえした夜が、ところどころ蒼白い蛍光灯の円光に穴をあけられて、あたりいぢめに沈んでいる。	061-①		
1037	どこの首府の駅にもある叫び、笑い、眼の輝き、歯の閃めき、朦朧としながらも巨大な唸りというものが、どこにもない。	061-③		
1038	女は昂揚して、肩をそびやかし、堂々としたそぶりで暗い地下道を、靴をカツカツひびかせて歩いていった。	061-④		
1039	トロリー・バスがまだあるはずだからそれに乗ろうと女が主張したが、私はタクシーを主張した。	061-⑤		
1040	気品のある戦車といいたくなるようなベンツにスーツケースやリュックを積みこんだが、女は口早に流暢に行先を告げたあと、革張りのシートに背を沈めて、真剣な非難の口調で、バスとタクシーの値のちがいをこまかく数字をあげて力説し、これはバカげた贅沢だ、私ならこんなことはしないと、いいつづけた。	061-⑧		
1041	女はこれまでとはすっかりちがう口調になっていた。	061-⑨		
1042	ときに大胆になるとはしてもたえず眼のすみや声のはしでしなやかに体をこごめてつつましかだつたのが、ふいにほどけて厚くなり、自信にみち、私を背後から包囲して蔽おうとし、優しくひめやかだがしっかりした決意で大羽根をひろげようとしている	061-⑫		
1043	私は闇に凝縮された勤勉で禁慾的な首府の深夜を眺めることにふけた。	061-⑬		
1044	いくつかの広場があり、並木道がたくましい下枝の影を舗道に沁ませ、ネオンは音なく叫びたてているが、酒場、料理店、服飾店などに清潔な灯は輝いているものの、佇む人影もなければ、それをめざして広場をよこぎっていく人影もない。	061-⑮		
1045	路地にはひたすら整理された闇がつつましくこめられているだけで、光は光、字は字乱されることもなく、影で分断されることも	061-⑰		
1046	市電の線路に沿って走るうちに気品のある戦車は木の多い、ひっそりとした区に入っていた。	062-①		
1047	それがよほどの豪富の区であるらしいことは静寂の気配の深さで知られた。	062-②		
1048	並木道の下枝はいよいよたくましくなり、繁茂し、葉の一枚々々に光と闇がこめられ、どの窓もどの灯も、遠く、あたたかくて、ゆがみ、しばしば閃光でしかない。	062-②		
1049	ネオンもなく、ガソリンスタンドもなく、ところどころに家のある森を走っているかのようなのである。	062-④		

1050	どの窓もさえぎられてあらわに窓の形を見せることができないでいることから推すと、この区の家はどれもこれもよほどの木にかこまれているものと思われた。	062-⑤		
1051	この木とこの静寂からすればフクロウが白昼鳴くという女の言葉も誇張でないように思われはじめた。	062-⑦		
1052	「たいへんお屋敷町らしいね」	062-⑨		
1053	「そうね。」	062-⑩		
1054	お屋敷のほかには大使館、官邸、別邸などというのが多いわね。	062-⑩		
1055	明日散歩してみたらいいわ。よく旗がでてたり、紋章があつたりするわよ」	062-⑩		
1056	戦車は屋敷町を通過するとそのはずれで左折してしばらくいてからとまった。	062-⑫		
1057	右に深い森があり、左に灯があふれていた。	062-⑫		
1058	戦車からおりとあたりには静寂と夜がしんと降っていて、声も音もなく、巨大なガラス箱がいくつともなく組みあわされて闇のなかにそそりたっているのが見あげられた。	062-⑬		
1059	明るい階段をのぼって三階に達し、その部屋に入ってみると、前面と右側面が巨大なガラスの壁で、女がカーテンをあけると、暗い湖がキラキラ輝くのを見るようであった。	062-⑯		
1060	かなたに深い森のあるらしい気配だがそれは見えない。	062-⑰		
1061	長方形の部屋の床にはカーペットが敷かれ、あちらの壁ぎわにはシングル・ベッド、こちらの壁ぎわに総革張りのスランバレット式のソファ・ベッドがあり、柔らかいトルコ風腰かけ、ガラスの丸テーブル、扉つきのテレビなどがおかれ、ガラス壁のそばの机にはタイプライターや辞書類がきちんと積まれている。	063-①		
1062	洗面所、浴室、キッチンなどは壁のなかにあった。	063-④		
1063	タイルは光り、金属は輝き、オー・ド・トワレットの残香は華麗だがしめやかだった。	063-⑤		
1064	室内は堅牢、豪壮だが、すみからすみまで清潔をきわめていて、それが簡素と剛健の気配をただよわせている。	063-⑥		
1065	よごれてきたびれたリュックをどこにおいてよいのかわからないのでドアのそばにおろしてから私はソファ・ベッドに腰をおろし、靴をぬいだ。	063-⑦		
1066	そこに白と茶の斑点のある大きな獣の皮が敷かれてあって、その長い毛のなかに裸足をおくと、気持ち良かった。	063-⑨		
1067	「それ、ヤクの皮。」	063-⑨		
1068	チベットの牛よ。」	063-⑨		
1069	このあいだ買ったの。」	063-⑨		
1070	一苦労だったわ。」	063-⑨		
1071	買ってからわかったんだけど、毛足が長いのはいいんだけど、よく抜けるの。」	063-⑨		
1072	それに気がつかなかったのは失敗だったわ。」	063-⑪		
1073	女は浴室に入って軽化粧をすると冷蔵庫からシェリー、ウイスキー、火酒、三本の瓶と水を持ってきて丸テーブルにおいた。	063-⑭		
1074	磨きぬかれたハーフ・クリスタルのグラスに私は火酒をついだ。	063-⑮		
1075	それは冷えきっていたので切子模様がたちまち霜でくもった。	063-⑯		
1076	「おどろいたな。」	063-⑰		
1077	「乾杯しよう。」	063-⑰		
1078	「おどろいたでしょう？」	064-①		
1079	「おどろいた」	064-②		
1080	「ソファやベッドや机はもの部屋の備えつけで財団のものだけど、あとはみな私がコツコツ貯めて買ったのよ。」	064-③		
1081	タイプライターもテレビもヤクも、それから、地下室にもっとある	064-④		
1082	ウンとあるのよ。」	064-⑤		
1083	明日、見せてあげるわ。」	064-⑤		
1084	アザラシの皮のコートなんかもあるのよ。」	064-⑤		
1085	これなんか傑作だわ。」	064-⑤		
1086	救世軍みたいな服を着てるくせにそんなもの買ってどうするんだと研究室でさんざんからかわれたのよ。」	064-⑥		

1087	でも、どうしてもほしかったの。	064-⑦		
1088	おめうどになって着てみるとよく似合うのよ。	064-⑦		
1089	ちょっとマタ・ハリみたいな凄味がでるの。	064-⑧		
1090	夜なかに鏡のまえですっぽだかになって、いろいろポーズをつくってみたら、わかったのよ」	064-⑧		
1091	女はトルコ風に腰かけに腰をおろし、火酒を一滴ずつすすり、ひっそりと笑った。	064-⑩		
1092	眼をいたずらっぽく輝かせ、のびのびと自信にあふれ、まるで舟のようにどっしりとしている。	064-⑩		
1093	「十年前に流れついたときは」	064-⑫		
1094	おんなはグラスをおいてつぶやいた。	064-⑬		
1095	「十年前に流れついたときはそれこそレインコートとスーツケース一つで、言葉もできない。	064-⑭		
1096	それこそABCも知らなかったのよ。	064-⑮		
1097	ひとつずつヨチヨチとおぼえていったの。	064-⑮		
1098	アルプスをお匙で掘りくずそうとしてるんじゃないかと思ったわ	064-⑮		
1099	何度自殺しようと思ったかしれないわ。	064-⑰		
1100	死んでも日本には帰りたくなかったし。	064-⑰		
1101	よく泣いたの。	064-⑰		
1102	皿洗いもしたし、キャバレーのタバコ売りもしたわ。	064-⑰		
1103	骨にひびくような意地悪をされたり、踏みにじられたり、そりゃあひどかった。	065-①		
1104	いずれゆっくりお話しますけどね。	065-②		
1105	奨学金がもらえるようになってからはわりに楽だったけど、それまでがどうにもこうにもお話にならないのよ。	065-②		
1106	いまでも夢に見るくらい。	065-③		
1107	ウナされちゃって。	065-④		
1108	思わずワツと叫んで眼をさますようなことがあるわ。	065-④		
1109	ここで寝ててね。	065-④		
1110	そのベッドで。	065-⑤		
1111	ところで、このお部屋、どう。	065-⑤		
1112	気に入った？」	065-⑤		
1113	「気に入ったとか何とかより、まずおどろいたね。	065-⑥		
1114	まだぼんやりしてるところさ。	065-⑥		
1115	話には聞いていたけどこうも立派だとは思ってもよらなかった。	065-⑥		
1116	いや。	065-⑦		
1117	参った。	065-⑦		
1118	君はえらいよ。	065-⑦		
1119	みごとなもんだ。	065-⑦		
1120	やってくれるじゃないか。」	065-⑧		
1121	「女ってこわいわよ」	065-⑨		
1122	「まったくだ」	065-⑩		
1123	「温度、湿度、乾燥度、どうにでも自由になるんだけど、どうしましょう。	065-⑪		
1124	おっしゃって。	065-⑪		
1125	お好みのままに調節するわ。」	065-⑫		
1126	「暖房もごめん、冷房もごめんだね」	065-⑬		
1127	「そうしてあげる」	065-⑭		
1128	女はグラスをおいてたちあがり、ドアのそばの壁についている精巧なダイヤルをちょっといじってからもどってきた。	065-⑮		
1129	右側面のガラス壁は巨大だけれど戸になっていて、掛金をはずしておすと、なめらかにゆっくりとうごいた。	065-⑰		
1130	そこがバルコンになっていて、森でできたばかりの深くて鮮烈な空気が潮のようにうねって浸透してきた。	065-⑰		
1131	ひりひりするようなそのしめやかさには苔や、雨や、影や、樹液などがみなぎっていた。	066-①		
1132	裸足のままでバルコンにでていき、その胸壁のふちに火酒をひとくちすすっておいた。	066-③		

1133	冷たい滴が熱い筋をひきつつ暗がりをころげ落ちていき、どこかで炸け、閃く。	066-③		
1134	女がでてきてならんでたつと、肩にそっと頬をよせてきた。	066-④		
1135	「論文のほうはどうなっている？」	066-⑥		
1136	「ありがとう。」	066-⑦		
1137	あと二、三日で手入れが終りそうだわ。	066-⑦		
1138	製本屋にまわして、教授室に提出したら、それでおしまいなの。	066-⑦		
1139	あとは何もかも秋になってからよ。	066-⑧		
1140	四方八方からとんでくる質問を切りぬけ、うちかえし、ねじふせ、つまり”防衛”ってのをやるわけ。	066-⑧		
1141	それは秋のことだし、何がでるのか、準備のしようもないのよ。	066-⑨		
1142	日頃からの素養だけがたよりなのでジタバタしたってはじまらないわ。	066-⑩		
1143	だからこの夏はいさぎよく遊ぶつもりなの。	066-⑪		
1144	もう二、三日しんぼうしてちょうだい。	066-⑪		
1145	そしたらピッツァでも、チャプスイでも、搾菜麺でも好きなものを作ってあげる。	066-⑫		
1146	搾菜麺なら明日にでもつくれるわ。	066-⑬		
1147	亜州飯店へいって太太に搾菜とスープをもらってきたらかなり のところまでいくんじゃないかしら」	066-⑬		
1148	「論文ぐらい念入りなのができるといいね」	066-⑮		
1149	「独立排他的にすばらしいのを作ってみせるわ。」	066-⑯		
1150	孤独な女の手料理もたまにはオツなものよ。	066-⑯		
1151	コクがあるにちがいないわよ。	066-⑰		
1152	パンに涙の塩して食べるっていうけれど、私の手料理なんてまさ さにそれだわ。	066-⑰		
1153	孕まぬ腹、主なき犬の類だわ。	067-①		
1154	これは辛口すぎるかしら」	067-①		
1155	「女の涙をスープにしたのはまだ知らないからぜひためしてみたい ね。」	067-②		
1156	しかし、きみはいいよ。	067-②		
1157	勉強がたのしそうでうらやましいよ。	067-③		
1158	じつにたのしそうに勉強してる」	067-③		
1159	「この年になってね」	067-④		
1160	「昔からそうだったようだよ」	067-⑤		
1161	「昔はしたくてもできなかったのよ」	067-⑥		
1162	晴朗さに苦みのひそんだ声をたてて女は低く笑った。	067-⑦		
1163	それがガラスが砕けるような声ではなかったので私は安堵し	067-⑦		
1164	朦朧のなかにたちこめる惨苦を女は肩ごしにふりかえって微笑 しているらしい気配であった。	067-⑧		
1165	晴朗は充実から分泌されたもののようであった。	067-⑨		
1166	その晴朗もまたわたしにはまさぐりようないものであったが、少く とも悲惨は、いまは、膿ではなくなっている。	067-⑨		
1167	勝ったものの寛容を女は匂わせている。	067-⑩		
1168	昔も笑うときは敏感で痛烈だったが、それはすぐ翳り、永くつづ かず、笑ったあとでずっと沈思に陥ちこむ癖があった。	067-⑩		
1169	頬骨の高い、鋭い顔だちなので、女は思案にふけると、余力の あるうちは精悍、そうでないときは悲痛が口もとにきざまれて、 いたましかった。	067-⑫		
1170	女が私のまえにあらわれたのは大学を卒業してからのことだ が、諸外国を放浪して帰国してから旅行記を一冊書き、そのあ と定職につくことなく、翻訳を試みたり、ときには医師たちのア マチュア劇のためにチャーホフ劇の演出を買ってでたりして暮し	067-⑭		
1171	アマチュア劇ではたのしんだが、生計を得るには苦しんでいた。	067-⑰		
1172	こまぎれの原稿を持って新聞社や雑誌社をまわり歩き、夜にな るとへとへとになって私の待っている料理店や酒場にあらわれ	068-①		
1173	ときどき私は原稿を読んで添削したり、注意したりした。	068-②		

1174	女はおとなしくずわっていつまでも耳をかたむけていたが、その日のうちに接触した人と事柄についてはよく罵り、嘲ったりして、鋭く笑った。	068-③		
1175	しかし、まなざしはあてどなく壁や、灯や、酒瓶をすべっていき、横顔はたいていおびえて、すくんでいるようだった。	068-⑤		
1176	果敢な好奇心、倦むことを知らない知力、たえまなく何かしていると感ぜないことにはがまんならない勤勉、どんな貧苦にあってもお洒落に心を砕いて苦渋をおおいかくそうとする気どりなどのなかに女はいたが、グラスのふちを迷い歩いているときの眼は、しばしば、夕暮れにおびえる子供のそれであった。	068-⑥		
1177	それが現在のあてどなさにおびえることもさることながら、過去の汚辱と悲惨にもどることを心底から恐れていることからきているものだったと察するのには私はずいぶん時間がかかった。	068-⑨		
1178	私は若くて阿保だったから女の絶望や不幸が情事と悦楽にひりひりした辛味をそえてくれる気配だけをむさぼっていた。	068-⑪		
1179	甘さは苦みと手を携えて進んでいかなければ完成されないが、そうと知るにはおびたしい自身を殺さなければならない。	068-⑬		
1180	当時の私は自身を殺さないでにおいて、貪慾だけに没頭していたのだ。	068-⑭		
1181	それしかほかになかったのは、一つには、女もまた壮麗な白皙の下腹で私をむさぼることに忘我で呼応したからでもあった。	068-⑮		
1182	どれほど創意と工夫を凝らした精緻、完璧な交渉も、男と女が、それぞれ同床異夢、玄の玄なる箇所ではついこめいめいの領域の拡張、充填だけに終るしかなく、接すれば接するだけ、膚をひろげればひろげるだけ、いよいよ領域が離れて純化されるばかりであるらしい消息におぼろげながら私は気づいていたはずだが、痛烈さにおいてそれを察知するということが、まったくな	068-⑯		
1183	それを知ったのは情事の後で足をからめあわせながらさめきった粗茶をすすりつつ冗談めいた口ぶりではのめかしていたことを女が徹底的に実践して日本を去り、ふたたび帰国する意志のないことを手紙で知らせてきたときだった。	069-③		
1184	私は阿保ぶりをさとられ、頬をひっぱたかれたように感じた。	069-⑥		
1185	その痛撃が沈むのを待ってから私は女がさりげなく、しかし断固とした気配で言及するのを避けとおしたことについて考えてみ	069-⑦		
1186	あらためて点検してみてもわかったことだが、私は何ひとつとして女について知らないのだった。	069-⑧		
1187	何ひとつとして知らない私が知る手がかりを何もあたえられなくて知ろうとつとめるのは、明瞭に妄想、邪推であった。	069-⑨		
1188	そうと知りながらそのことにふけたのは荷がおりて肩が軽くなったとどこかで感じている私の、圧迫であるよりは回想となつてしまった孤独からであった。	069-⑩		
1189	女はたまゆらの沈思、孵化[ふか]しきらない口のなかのつぶやき、冗談に閃かすえぐりたてるような一言半句、たわむれにくちびるからこぼす卑語、息たえだえの瞬間にふと洩らす自戒の呻[う]めきなどしか私に残していかなかった。	069-⑫		
1190	その泡の群れに、街角や、夜ふけ、私は浸って、邪推を育て	069-⑮		
1191	いつとなく私は、女がその少女期の後半からある時期まで、どこかで、何者かの、妾、情婦、またはほぼそれに類するようなことをしてかつがつ日々をしのいでいたのではなかったかと思うよう	069-⑮		
1192	あくまでもそれは私の邪推だが、そう考えることに何の汚点も不快も私にはしるされなかった。	070-①		
1193	もしあの時代の日本に私が女で孤哀子だったらそうしないですませられたかどうか。	070-②		
1194	そう思うからであった。	070-③		
1195	そう思うことが汚穢よりは切実、屈辱よりは悲壮と感ぜられたが、これは私が冬の運河わきの町工場のすみで寒さと憎しみにみちてふるえていた少年をいたわりたいためにためからでているよ	070-③		
1196	何万回めともしれないのだが、またしても私はあくまでも自身を介して他者に接近しようとしたのである。	070-⑤		

1197	女がひくくささやいた。	070-⑦		
1198	「ちょっと寒くなってきたみたい」	070-⑧		
1199	「そうだね」	070-⑨		
1200	「お部屋に入りましょうよ」	070-⑩		
1201	「そうしよう」	070-⑪		
1202	「ちょっと待って。」	070-⑫		
1203	お風呂にお湯を入れるから。	070-⑫		
1204	バーデダスをたつぷり入れて泡をたてるから、それに浸ってタバコをお吸いなさいよ。070-⑫			
1205	お湯のなかでタバコを吸うとおいしっていったじゃない。	070-⑫		
1206	火酒をそのまま持ってくるといいわ」	070-⑭		
1207	「おれの足、水虫なんだけど、それも洗ってくれるの？」	070-⑮		
1208	「どこもかしこも洗ってあげます」	070-⑯		
1209	「泣けてくるよ」	070-⑰		
1210	「ふざけるなって」	071-①		
1211	女は胸壁から私の火酒のグラスをそっととりあげ、咽喉をそらせて高く笑いながら、乳黄色の明るい灯の室内へ、ヤクの毛皮へ、輝くタイルと金属のほうへ去っていった。	071-②		
1212	湯は爽快に精力的にほとばしった。	071-④		
1213	夜もそろそろ朝に近いが部屋は寡黙ながら力をひそめて待機している。	071-④		
1214	栓をひねってちょっと待つと、たちまち熱でぴちぴちした湯が叫喚をあげてほとばしった。	071-⑤		
1215	わきたつ浴槽に女が緑色の滴をふんだんにふりむくと見る見る白い細緻な泡が浴槽になってふくれあがり、たちあがってきた。	071-⑥		
1216	そこへオー・ド・トワレットの二、三滴をふると、浴室が朝十時頃の春の温室のような香りにみちた。	071-⑦		
1217	豊満だがしつこくなく、めざめたばかりの軽快が右に左にうごい	071-⑧		
1218	あの赤いどんごろすで窓をかくした部屋では湯がでたりでなかつたりで、でるときも栓はたえまなく咳き込んだり、しゃっくりしたりで心細いかぎりだったが、ここはドアの錠の舌から水道管にいたるまでことごとく正確、有能をきわめているらしかった。	071-⑨		
1219	全身を湯に浸し、顎まで泡に埋没し、右手に乾いた火酒、左手にしめやかなタバコを持って恍惚していると女が全裸になって入ってきて、そっとすみから泡のなかにもぐりこんだ。	071-⑫		
1220	湯がうごいて熱が関節や髓にまでしみてきた。	071-⑭		
1221	女はトゲトゲちゃんて私の固い脛を搔き、柔らかい趾のあいだは指で洗ってくれた。	071-⑭		
1222	一本々々すみずみまで洗ったあと、力強く折ってポキポキと鳴らしてくれた。	071-⑮		
1223	「ありがとう」	071-⑰		
1224	「どういたしまして」	072-①		
1225	あたたかく香ばしい霧のなかで女のたくましい肩や背がうるんで淡桃色に輝いた。	072-②		
1226	トゲトゲちゃんて掻いたり流してやったりすると、赤い条痕が膩のうえにきざまれ、しばらくするとそれがとけあって赤い雲となって白い泡や緑の湯にただよい、内奥から射す光でまばゆいような雪洞がうきあがってくる。	072-②		
1227	「このシャウムバードもいろいろあるのよ。」	072-⑥		
1228	海の青だとか森の苔だとかいって。	072-⑥		
1229	薔薇の匂いのするものもあるし。	072-⑥		
1230	いろいろ買ってくるから気に入ったのを選んでちょうだい」	072-⑦		
1231	「森の苔ってのはよさそうだね。」	072-⑧		
1232	薔薇よりしぶそうじゃないか。	072-⑧		
1233	この石鱈は気に入ったよ。	072-⑨		
1234	つかってるだけで泡が勝手に体を洗ってくれる。	072-⑨		
1235	そのあいだ何もしないでぼんやりしてたらいいんだからおれみたいな風呂ぎらいもつい入りたくなるね」	072-⑨		
1236	いま女には恐れもなければ怯えもない。	072-⑪		

1237	泡のなかにのびのびとよこたわり、浴槽に私と二人ならんで寝そべり、まるまるとした自分の肩が発光しつつ緑の湯に消えたりあらわれたりするのを恍惚と眺めている。	072-⑪		
1238	私は寝返りをうってゆっくりと浸透していく。	072-⑬		
1239	女は肩を眺めるのをやめて、ひらき、静かに眼を閉じる。	072-⑬		
1240	泡に耳もとまで埋もれ、そうやって白い雲のなかに顔だけがうかんでいるところは、ある連想をさそう。	072-⑭		
1241	それが女にしみた。	072-⑮		
1242	ものうげに女が眼をひらいた。	072-⑯		
1243	「私の作った詩があるのよ。」	072-⑰		
1244	はずかしいから最初の二行だけいわ。	072-⑰		
1245	孤独な女の手すさびですよ。」	072-⑰		
1246	朝の寝床は大理石のひつぎ	073-③		
1247	女はゆっくりと眼を閉じる。	073-⑥		
1248	「どう？」	073-⑦		
1249	私はひそかに肉のなかをいききしながらいう。	073-⑧		
1250	「全部いってくれなくちゃ」	073-⑨		
1251	「いつかそのうちにね」	073-⑩		
1252	背に焦躁や不安を負わず、不幸を密封するためでもしばらくの避難所を求めためでもないこのことはどうだろう。	073-⑪		
1253	ただ明るく、香ばしく、あたたかく、清潔である。	073-⑫		
1254	おぼえのある右側面に沿うようにして進むと、いくらもいかないうちに、なじみの挨拶がある。	073-⑫		
1255	恋矢がでてくる。	073-⑬		
1256	ちょっとたちどまる。	073-⑭		
1257	恋矢はひくひくと突いたり、そつとふれたり、小虫のように軽く身ぶるいして踊ったりする。	073-⑭		
1258	這いまわるようであったり、ふいにくわえこんでしめつけたりす	073-⑮		
1259	乳房が昂揚し、下降し、泡のなかで明滅するところは、薔薇色の磯岩が波に洗われるのを見るようである。	073-⑯		
1260	眼をとじると、ふいに森がガラス壁をやすやすとぬけて入ってきて浴室の戸口に佇んでいるのが、感じられた。	073-⑰		
1261	牧場や、溪流や、金色に輝く麦畑が小さく閃めきつつ、一つまた一つ、後頭部のあたりを流れていく。	074-①		
1262	とつぜん女が顔をあげた。	074-③		
1263	はげしい動作だったので泡が散り、湯がゆれ、首に強い筋があらわれた。	074-③		
1264	女は耳をかたむけ、眼を澄ませた。	074-④		
1265	「聞える。」	074-⑤		
1266	できた。	074-⑤		
1267	できたわよ。」	074-⑤		
1268	女の顔に微笑がひろがった。	074-⑥		
1269	「ほら。」	074-⑦		
1270	鳴いてる。	074-⑦		
1271	チョロチョロって、鳴いてる。	074-⑦		
1272	聞えるでしょ。	074-⑦		
1273	そこ。	074-⑦		
1274	そのうしろの排水管のところよ。	074-⑦		
1275	ちょっと見てやって。	074-⑧		
1276	私の留守中さびしがってたのよ」	074-⑧		
1277	女のうえにのったまま肩ごしにふりかえり、いわれるところに眼をこらして眺めていると、便器のかげに排水口があり、その金属蓋の小穴から小さな小さな影のようなものが二つでてきた。	074-⑨		
1278	それは臆病そうなしぐさで壁にぴったりよりそってうごきはじめ、便器のかげに消えた。	074-⑪		
1279	しばらくするとそこから嘆息とも泣声ともつかない声が細くきれぎれに流れてきた。	074-⑫		
1280	タオルにしみもつけずに消えてしまいそうな弱よわしい声であつ	074-⑫		
1281	「何だか栄養失調みたいだよ」	074-⑭		

1282	「そうなのよ。」	074-15		
1283	排水管をつたって三階まであがってくるもんだから、それでへとへとになっちゃって、いざ舞台になると、ああなのよ。	074-15		
1284	いつもかすれ声だわ。	074-16		
1285	心配なのよ。	074-16		
1286	どうすればいいかしら」	074-16		
1287	「キュウリを切っておいておくといいよ」	075-①		
1288	「コウロギってキュウリが好きなの？」	075-②		
1289	「煉炭の穴もすきなんだよ」	075-③		
1290	女は耳をかたむけ、微笑しつつ、口のなかでキュウリ、キュウリとつぶやいた。	075-④		
1291	湯は冷えかかっていたが私にはあたたかみがほのぼのとひろがっていった。	075-④		
1292	私は女からそっとぬけだして体を洗い、浴漕をでた。	075-⑤		
1293	甘くて、静かで、柔らかい。	075-⑦		
1294	バルコンにたつて眺めると、この界隈には道がないのではないのかと見えることがある。	075-⑧		
1295	そういう角度がある。	075-⑧		
1296	どの家も深い木にかこまれているので、またしばしば下枝が垣根ごしに道へ張りだしているの、空から見おろすとすべてが緑に蔽われてしまうのである。	075-⑨		
1297	樹海といいたくなるくらい蔽われてしまうのである。	075-⑩		
1298	それを指さして女が、あれは栗、これは菩提樹、それは榆と教えてくれた。	075-⑪		
1299	お屋敷町は樹海のしたにかくれているのだが、ところどころにまるで漂流物のように赤い三角屋根や、白い窓や、ゼラニウムの咲きみだれるバルコンなどが浮き沈みしている。	075-⑬		
1300	道を歩きながら垣根ごしに眺めるとそれらの家はたくましい幹にかくされ、芝生や花壇にかこまれているが、豪奢よりは質朴、豊饒よりは清潔をめざして設計されていて、そのためかえて蓄積の底深さを感じさせられる。	075-⑭		
1301	休暇の季節だから、いつ歩いても家から音や、声や、こだまのひびいてくるのを聞いたことがない。	076-②		
1302	道にはひともし、自動車も少なく、菩提樹の強壯な下枝があちらこちらに淵のようにつめた影を落としている。	076-③		
1303	羽が黒くてくちばしに黄いろい小鳥がゼラニウムの赤い花のあいだをとびまわり、ときどき栗鼠が枯葉のたまった小溝のふちで遊んでいる。	076-④		
1304	森がある。	076-⑦		
1305	そのひんやりとして小暗い道をぬけていくと大きな河の岸にで	076-⑦		
1306	もうちょっといった上流に岩があって人魚が通りかかる舟の水夫を誘惑したという伝説があるのだが、いまは水がすっかり黄濁してしまっている。	076-⑦		
1307	赤・黄・黒の国旗をかかげた頑強な鉄の荷足舟が汚水のなかをゆっくりとうごいている。	076-⑨		
1308	その森や道ばたの木のなかでフクロウが白昼に鳴くのを私は二、三日めに耳にした。	076-⑩		
1309	深い呼吸で竹筒を吹くような、人をおびやかそうたしているような、それでいて自身もおびえているような声である。	076-⑪		
1310	森の道ばたにおき忘れられたように一つの水道栓が佇んでい	076-⑫		
1311	栓は古くて錆びついているのだが、ひねると水がとびだしてく	076-⑬		
1312	栗鼠はそれを知っているのだが栓をひねることができないので根気よく人が通りかかるのを待ちうける。	076-⑭		
1313	彼は水盤の淵にたつて丸い、濡れた眼で私をまじまじと覗めているのである。	076-⑮		
1314	鳴きもせず、跳ねもせず、ただまじまじと覗めているのである。	076-⑯		
1315	私がおびえても彼は平気で、むくむくした灰褐色の毛に蔽われた背を丸めて、栓をひねる手をじっと眺めている。	076-⑯		

1316	水が飛出してくると彼はせかせかせかしたそぶりでほんのちよっぴり飲み、うがいをするようにのどの毛をふるわせてから非情に一閃し、森へ消える。	077-②		
1317	お屋敷町をずっと歩いて行ってガードをくぐると、小さな広場が	077-⑤		
1318	週に何日か、そこが市場となる。	077-④		
1319	近郊の村から農民がトレーラーに収穫物を満載してやってくる。	077-④		
1320	農民は野菜や果物のほかに薔薇やゼラニウムなどの花も売	077-⑤		
1321	黒い土にまみれて汗をかいているジャガイモとならんで薔薇は巨大なイモ虫のような、がさがさした指で、荒あらしく扱われるのだが、細胞の芯が、暗く黒く見えるほど真紅で、強健であり、衰えも乾きも見せずに咲きほこっている。	077-⑧		
1322	どう手荒に扱われてもその繊巧な花が花卉を一枚も落とさないで柔軟に強力にはねかえってゆれているのを見ると、何かの痛烈な、豊満な暗示をおぼえそうになる。	077-⑨		
1323	ジャガイモ、キュウリ、タマネギ、レタス、ブロッコリー、何でもあ	077-⑪		
1324	るが、いまはサクランボとシャンピニオンの季節らしい。	077-⑪		
1325	大量に売りだされ、値が安いらしい。	077-⑪		
1325	女はいくつもの網袋をキッチン戸棚からだして市場へいき、つぎからつぎへと野菜をつめこんだあと、サクランボとシャンピニオンを菜をつめこんだあと、サクランボとシャンピニオンを私	077-⑭		
1326	がたのんだからだけれど 両手に持てないほどかいこんだ。	077-⑮		
1326	そして、それらすべてを背と肩に負って、汗もかかず、吐息もつかずに、長い道を歩いていった。	077-⑮		
1327	ジャオ先生の店でスープを買うときは年下の学生から借りてきた巨大な魔法瓶を持っていき、それも網袋といっしょに無造作に肩へひっかけてバスにのりこむ。	077-⑯		
1328	たいていの場合、女は歩いていくことにしていて、ときたまバスに それものり半ばちぎれの回数券をちびちびと使っただが絶対といっ	077-⑯		
1329	たいていタクシーにたがのろうとしなかった。	078-①		
1329	停留所での女のおしゃべりとバスがこないのに私がいららしてタクシーにのろうという	078-①		
1330	と、女はたちまち眼のいろを変えて抗議、嘲罵し、それは部屋に帰ってからも消えることがなく、キッチンを出たり入ったりしながら、口のなかでブツブツいつづけ	078-⑥		
1330	それを聞いていると、半ちぎれの回数券でバスにのるかわりにタクシーのつたために女のこの十年間の辛苦の全体系が瓦壊してしまうということになりそうである。	078-⑥		
1331	ところが、そんなケチンボのくせに、一度食べる話となると、女はどんな浪費も気にしなかった。	078-⑦		
1332	レタスでもジャガイモでもシャンピニオンでも、自分が食べたいとなると、一も二もなく賛成して買いこみ、どれだけ肩が痛んでも、格好がわるくなっても、道が遠くても、まったくへいちゃらである	078-⑨		
1333	好物や実験物がシュンで安値だとわかると、その屋台やトレーラーのまえに佇んで恍惚となつてしまい、少し子供のように口をあけるのだった。	078-⑫		
1334	それは対象物が安いということがわかったときにかぎってありありと見られる表情であった。	078-⑬		
1335	節儉と食いしんぼはしばしば背反するけれど、シュンで安かったらいいのである。	078-⑭		
1336	女は季節にぴったりよりそうことで難問を解決しているようであ	078-⑮		
1337	サクランボを買おうといういきいきと眼がうごくが、キャヴィアの缶詰を買おうという	078-⑯		
1338	と、たちまち遅鈍、弛緩 があらわれてくるのである。	078-⑮		
1338	いくつとなく網袋を背負ってサンタクロースみたいになった女のあとについていくと、短いタータン・チェックのスカートのしたで白いたくましい足に鋭い臍が正確に明滅するのが見られ、それを見ていると、女は大口をあけて水をごくごく飲むようにいまをむさぼろうとしているのだと察しられた。	078-⑮		
1339	いまは全身にいきたわり、髪の毛まで浸し、まぶたやくちびるからたえまなく洩れて、微笑といっしょにいきいきとうごいていた。	079-②		

1340	それは女の手から流れ出して、あちらこちら勤勉に有能にうごきまわり、激しいけれど澄明な夏の日光を織りこんだ微風の流れこむガラス部屋のなかに冷静な熱狂を生みだした。	079-④		
1341	女は網袋と魔法瓶をキッチンにかつぎこんでしばらくゴトゴト音をたてていたが、やがて大皿にこぼれそうなほどチャプスイを盛りあげてあらわれ、つぎに大鍋に搾菜麺をなみなみ満たして	079-⑤		
1342	さまざまな野菜と肉のこまぎれにそれらが見えなくなるくらいシャンピニオンをまぜて炒めたチャプスイと、麺のかわりに細いスパゲッティを使った搾菜麺を女はくすくす笑いながらとめどなく	079-⑧		
1343	「このシャンピニオン、馬に食べさせるくらい買ってきたから、晩にはバターで焼いてみましょう。」	079-⑪		
1344	グラタンに入れるのもわるくないし、煮込みにも使えると思うの。	079-⑫		
1345	それから酢と油をまぜたなかに漬けておいたらオツマミにいいと思うの。	079-⑫		
1346	オードブルね。	079-⑬		
1347	それからヤキメシに入れたらどうかしら」	079-⑬		
1348	「賛成だね。」	079-⑮		
1349	ヤキメシにキノコはびたりだろうね。	079-⑮		
1350	ヤキメシはむつかしいんだよ。	079-⑮		
1351	みんな馬鹿にしてるけどね。	079-⑮		
1352	飯を軽くフワフワに炒めるところに容易ならぬ苦心があるような気がする。	079-⑯		
1353	これには東南アジアの米がいちばんだね。	079-⑰		
1354	日本人はあれがパサパサで米の腹がはじけるといってイヤがるけれど、料理法を知らないからそういうんだ。	079-⑰		
1355	あれでヤキメシやお粥を作ったら絶品だよ。	080-②		
1356	とても軽くて、おなかにもたれないんだ。	080-②		
1357	日本米やカリフォルニア米ではどうていだそうにもだしようなない軽快さがある。	080-②		
1358	そこだよ。	080-③		
1359	芭蕉もわびとさびのほかにかるみということをとねえた。	080-③		
1360	簡単な料理ほどむつかしいのじゃないかな」	080-④		
1361	「私もそう思う。」	080-⑤		
1362	ちょっと待って。	080-⑤		
1363	メモしておくから。	080-⑤		
1364	ジャオ先生のお店へいったらあのお米、あるでしょうね。	080-⑤		
1365	ちょっとわけてもらいましょう。	080-⑥		
1366	ついでに太太にお粥の作りかたを教えてもらおうわ。	080-⑥		
1367	これはおぼえておいてもわるくないわね」	080-⑦		
1368	「わるくないどころじゃない。」	080-⑧		
1369	粥は傑作だよ。	080-⑧		
1370	おれは竜の肝や鳳凰の髓は知らないけれど熊掌燕巢まではためした。	080-⑧		
1371	だけど粥の一杯は抜群だね。	080-⑨		
1372	あれはいい。	080-⑨		
1373	魚を入れたのや、鶏を入れたのや、いろんなのがあるけれど、おれはモツの五目が好きだ。	080-⑨		
1374	完全に血抜きしてあるからちっともくさくないんだけど、混沌の滋味があつてね、好きだな。	080-⑩		
1375	あれだけ簡素なのにあれだけとろとろ混沌の味があるというのはちょっと例がない。	080-⑪		
1376	それを道ばたにしゃがんで、ゴミ箱のかけあたりで、苦力や車ひきの先生たちと肩をならべてすすめるのさ。	080-⑫		
1377	箸のさきに袋のかけらや管のかけらがひっかかってくるんだけど、それを見てこれは胃袋かな、これは腸かなと考えるたのしみもあるしね。	080-⑬		
1378	一度辣油につけてから食べると、ヒリヒリしていいよ」	080-⑮		
1379	「例の癖がはじまったようね」	080-⑯		

1380	「裏通りの汚い店にかぎって、えてしてうまいもの屋があるというのは事実けどね。	080-17		
1381	香港、サイゴン、バンコックあたりの中華街ときたら店という店、屋台という屋台がことごとく汚いので、どれを選んでいいのかわからない。	080-17		
1382	結局、人がいちばんたくさんたかっているのを狙うしかないわけ	081-2		
1383	そこらじゅう痰だ、ツバだ、涙だ、犬のウンコちゃんだとひどいありさまでね、そこにゆうゆうと腰をおろして帝力何ぞ我にあらんやとうそぶくにはかなりの訓練がいる。	081-5		
1384	おれもはじめは胸がムカムカしたけれど、精神修養の結果、超克しましたね」	081-5		
1385	「そりゃそうでしょうけど、もともとあなたは好きなのよ。	081-7		
1386	そういうのが好きなのよ。	081-7		
1387	好きでやるのなら自己鍛練といえるかどうか疑問だわ。	081-7		
1388	対立物の止揚といえるかどうか、明日研究室へいったらシュタインコップ先生に聞いてみましょう」	081-8		
1389	不潔と食慾の関係を聞いてきてほしいね。	081-10		
1390	きつと汚い店へいったら気分がくつろぐから、そのゆるんだはずみに胃も舌もひろがって、それでうまく感ずるのかもかもしれない。	081-10		
1391	しかし腎臓を煮込みにしたらちょっとオシッコさいほうが味が深くなるということがある。	081-11		
1392	ビフテキだって生血の匂いのあるほうがいいだろう。	081-12		
1393	深さは純粹よりも混濁に手助けしてもらわないとでてこないのじゃないか。	081-13		
1394	小説もそうじゃないか。	081-14		
1395	小説は字で書くけれど、この字というやつが混濁の極だ。	081-14		
1396	事物であると同時に影でもあるし、意味に定量がない。	081-15		
1397	経験によってどうにでも豹変する。	081-15		
1398	たえまなく生きてうごいていてとまるということがない。	081-16		
1399	とめるということもでない。	081-16		
1400	たちどまってじっと凝視していたらたちまち崩壊してしまう。	081-17		
1401	ときたま何かハッとする一瞬があるので、そのとき一言半句をつかむ。	081-17		
1402	つかんだらすかさず眼をそらさなければいけない。	082-1		
1403	じろじろ眺めていたらたちまち指紋でくもってしまうか、粉末になって散ってしまうかだ。	082-2		
1404	玉虫の甲みたいなものだ。	082-3		
1405	君は子供のときに玉虫とりをしたことがあるか？」	082-3		
1406	「紙切虫なら知っているわよ」	082-5		
1407	「ざんねんだ」	082-6		
1408	食事がすむと女は活潑に光と影のなかを往復してキッチンに皿や鍋をはこぶ。	082-7		
1409	全裸である。	082-7		
1410	私も全裸である。	082-8		
1411	前面のガラス壁をカーテンでかくし、半ばひらいておいて、バルコンから光と熱と風が入ってくるようにしてある。	082-8		
1412	部屋にいるときはいつでも全裸でいようと約束をきめたのであ	082-9		
1413	しばらくそうしてみることにしたのである。	082-10		
1414	慣れたらやめることとして。	082-11		
1415	人の体もまた字とおなじように定型をもちながら陽炎ではあるまいか。	082-11		
1416	経験によってたえまなく変らず、かつ変りつづけているのではあるまいか。	082-12		
1417	経験がドラマだけではなくてもんうい瞬間の知覚をもさすものならば女の体も私の体もたえまなく明滅しつづけているはずであ	082-12		
1418	装飾用に鍛えあげられた筋肉の搭はべつとして、布やベルトでかくしたり、しめたり、支えたりしなければ人体はどうてい直視に耐えられるものではない。	082-14		

1419	私たちは醜怪で傲慢な、一瞥してふきださずにはいられないようなオットセイのはずである。	082-16		
1420	しかし私はソファに腰をおろし、睾丸の皺に冷たい皮を感じつつ、勤勉にうごきまわる女の体のうえにあらわれる変化にみと	082-17		
1421	乳房のしたに閃めいては消える小さな影や、臀のうえにある二つのえくぼの浮沈や、憂愁と映る注視のまなざしや、陰毛のかすかなふるえや、鋭く長い筋や、太腿からくるぶしへかけての臍のめまぐるしい出没、たくさんの大きな骨と小さな骨の組みあわせ、また、その解消ぶりに見とれている。	083-①		
1422	それらもまた瞬間のたわむれである。	083-④		
1423	女がこの部屋に家の匂いをつけ、主婦のそぶりになじむことを私は恐れている。	083-⑤		
1424	一瞬でもそれをさきへひきのばし、遅らせ、避けようとしている	083-⑥		
1425	朦朧のなかにあの胸苦しさを予感しているのだ。	083-⑥		
1426	もう女はあの蛙呑み男を眺めて咽喉をそらせて笑いころげたことを忘れて型にはまることをしらずしらず意図しかかっているのではあるまいか。	083-⑦		
1427	ある日のひっそりとした午後、私は女がこの十年間にためた料理店のメニューのコレクションを眺めていた。	083-⑩		
1428	豚、牛、魚、貝、花などの挿画でみたされたそれらを一枚、一枚繰って眺めていると、ソファに全裸でならんですわっていた女が静かに立ちあがって、デニムのズボンに足を通した。	083-⑪		
1429	ドアをあけて鼻唄まじりに階段をおりていくと、女は地下室までいって、その物置室に入れてある品を一つ一つ腋にかかえて部屋に持ちこみはじめた。	083-⑬		
1430	ハイ・ファイ・アンプ。	083-⑭		
1431	掃除機。	083-⑮		
1432	ミキサー。	083-⑮		
1433	デンマーク製ランプ。	083-⑮		
1434	靴。	083-⑮		
1435	靴。	083-⑮		
1436	靴。	083-⑮		
1437	洋皮のコート。	083-⑮		
1438	アザラシのコート。	083-⑮		
1439	それらの物をまるでデパートの特選品売場のように女は床いっぱいにならべ、音波洗濯機と冷蔵庫はうごかせないのでおいてきたといった。	083-⑰		
1440	そしてまんなかになつと、テレビ、ヤクの皮、タイプライター、室内全体をゆっくり腕をふってさしてみせ、ひっそりとつぶやいた。	083-⑰		
1441	「みんな私の物よ。	084-③		
1442	買ったの。	084-③		
1443	タクシーにもものらないで、お茶もケチって、かったの。	084-③		
1444	どうオ。	084-③		
1445	みてよ。	084-④		
1446	がんばったでしょ？」誇りとも苦笑ともつかず女は微笑した。	084-④		
1447	いまが女の全身をみだし、輝きながらあふれだしてきて、ふちでふるえていた。	084-⑤		
1448	肩のあたりと、拳を腰にあてた肘のあたりに精悍と優しさがただよっていた。	084-⑥		
1449	女は足を少しひらいてたち、一つ一つの物を指して、どう遣って買ったか、苦心談を話しはじめた。	084-⑦		
1450	そのときになってやっと私に一つのことが見えてきた。	084-⑧		
1451	女の孤独が十年間にどれだけの物を分泌できるかについての愕きはひっそりと後退していき、ある荒寥がくつきりとあらわれてきたのである。	084-⑧		
1452	女は子供かペットの群れにかこまれたように感じて微笑していたが、まったく剥離しているのである。	084-⑩		

1453	それは事物が工場のベルト・コンベアの最末端にあらわれたときの新鮮さを保っていてどこにも傷や垢や指紋がついていないからなのではなかった。	084-⑪		
1454	さきほどの食事のときの皿や、鍋や、茶碗などは傷や垢を持っていたが、それでもおなじ気配をひそませていた。	084-⑬		
1455	浴槽、ガラス壁、バルコン、この室全体、体のまわりのすべての事物について女は何の影響もあたえることができないでいた。	084-⑭		
1456	事物は触れられ、握られ、使用され、効果を生むが、女は事物から事物へしなやかにすべっていくだけで、事物は女の指のしたで金にもならず、灰にもならず、寡黙だがいきいきした小動物にもならないのである。	084-⑮		
1457	指とたわむれたり、すねたり、からみついたり、かけよったりしようとしないのである。	085-①		
1458	この室に十年棲もうが二十年棲もうが、清潔を保とうが汚そうが、女がでていくときは、室ははじめて女が入ってきた日とおなじたたずまいでいることと思われる。	085-②		
1459	女は室に棲んでいながら、棲んでいないようなものなのである。	085-④		
1460	事物について主人なのではなく、間借人なのである。	085-④		
1461	だからあの赤いレインコートも糸がすりきれ、型がくずれ、皺だらけになるまで使いこなされていながら女の皮膚とはならなかったし、犬にもならなかったのである。	085-⑤		
1462	ていねいに折ってソファにおかれても犬がまなざしや、声や、手を待ちうけるようなそぶりでも女を待つことはないのである。	085-⑦		
1463	「ねえ。」	085-⑨		
1464	「ちょっと凄いでしょ？」	085-⑨		
1465	「よく似あう」	085-⑩		
1466	「私もそう思ってるのよ」	085-⑪		
1467	「いい買物だよ」	085-⑫		
1468	「誰かにそういってもらいたかったの」	085-⑬		
1469	女はズボンをめぎすてて全裸にもどり、アザラシの皮のコートを肩に羽織って鏡のまえにたち、片目をつぶって首をそらしたり、タバコをくちびるのはしにくわえてみたり、劇場のロビーをよこぎる歩調で私のまえをいったりきたりした。	085-⑭		
1470	光と影のなかを緻密でなめらかな光沢を帯びた獣がしなやかに閃めきつつ東へうごいたり、南へ一歩踏みだしたりした。	085-⑯		
1471	しかし私には荒寥がたちこめ、ふくれあがっていて、息をつくのがようやくだった。	085-⑰		
1472	眼をそむけずにいるのがやっとだった。	086-①		
1473	なじみのものがいきている。	086-②		
1474	そこにきている。	086-②		
1475	何度襲われても慣れることのできないものが顔をもたげかかっている。	086-②		
1476	何年も以前に私は蛙呑み男の公園のそばで一人の若い画家と知りあいになった。九州出身だということのほかには私は何も彼について知らない。	086-④		
1477	彼は画家と自分を呼んでいたが、彼が絵を描いているのを私はみたことがない。	086-④		
1478	絵と女についてはめぐりたてるような直感のある話ができ、その話しかできず、ほかのことについて喋らせると小学生なみの知識しか持っていなかった。	086-⑥		
1479	私たちは毎日顔をあわせ、酒場の椅子に埋没して酒をすすりつつ、道を行く女たちの眼や腰を眺めて放埒な冗談をとばして脂っぽく笑ってばかりいた。	086-⑧		
1480	彼はひどい貧乏で、緑色のよれよれのアノラックからねっとりした垢の匂いをたてつつまっ暗な物置小屋から這いだし、路地の壁にぴったり沿って進み、一日に半度か、二日に一度半ぐらいしか食べていない胃をかかえて私の待っている椅子にたどりつ	086-⑨		
1481	彼は口下手で、陰鬱な顔をし、眼が鋭くて暗く、ときどき発作的に稚い笑声をたてるのだが、女についてはいい腕をしていた。	086-⑫		

1482	その酒場へ彼をさがしにあらわれる女の顔がいつもちがった。	086-⑭		
1483	それはお針子や、デパートの売子や、小学校の女教師などだったが、彼は男根を提供し、女たちはサンドイッチやハンバーガーを提供することになっていた。	086-⑭		
1484	絵具やカンヴァスを買う金がないし、部屋代をためすぎて電燈をとめられ、しかもその部屋には窓がないので昼も夜もまっ暗だから、彼は酒場でぐずぐずして女たちに小遣いをみつがせるよりほかに毎日のうちやりようがなかったのだが、あるとき彼の部屋へ私はつれていかれたことがある。	086-⑰		
1485	それは階段下の女中部屋よりまだひどい物置小屋で、じめじめし、正体のわからない腐臭がたちこめていた。	087-③		
1486	コンドームを買う金がないからときどきやむをえないときは瞬間抜去法をやるのだと彼は洩らしたことがあるから、そのもうもうとこもる匂のなかには床へまきちらされた粘蛋白液のそれも多量にまじっていたのだと思う。	087-④		
1487	吐き気をおぼえるよりさきに眼がシカシカしてきて涙がにじむのである。	087-⑥		
1488	その薄暮頃の暗がりのなかに床といわず、壁といわず、彼があちらこちらで拾ってきたガラクタが山積されている。	087-⑦		
1489	便器の蓋。	087-⑧		
1490	自転車の車輪。	087-⑨		
1491	ドアの取手。	087-⑨		
1492	ガラス管のきれっぱし。	087-⑨		
1493	水道栓。	087-⑨		
1494	馬蹄。	087-⑨		
1495	ありとあらゆる種類の自動車の部品。	087-⑨		
1496	つぶれたモンキーや、ジャッキや、ハンマーなどもあった。	087-⑩		
1497	彼はつい一昨日見つけてきたばかりなのだといってイタリア・センベイを焼く鉄のうちのものをとりだして私に見	087-⑩		
1498	どこか駅裏のゴミ捨場に落ちていたものではあるまいかと思う。	087-⑫		
1499	「いいなあ。	087-⑭		
1500	これなあ。	087-⑭		
1501	そう思いませんか。	087-⑭		
1502	凄いじゃないか。	087-⑭		
1503	ちょっとこういう真似はできないよナ。	087-⑭		
1504	ほれほれしてくるなあ。	087-⑮		
1505	おまんことどちらがいいだろ」暗がりのなかで彼は声をひそめ、眼を細くして、何度となくそのこわれたセンベイ焼きを愛撫した。	087-⑮		
1506	上に下に、右に左に、ゆっくりと、またせかせかと、皮と骨だけになった手で撫でまわした。	087-⑰		
1507	心底から彼は感動していて、ほとんど射精しそうになっているのではあるまいかと思われた。	088-①		
1508	盲人の手のようにみだらなほどの執念、力強さ、嗜慾をこめて彼はその古鉄を撫でまわし、私がよこにいることを忘れてしまっ	088-②		
1509	その手と古鉄を眺めているうちに私は一撃をうけたのである。	088-③		
1510	赤錆でゴワゴワになった古鉄の円盤がふいに形からぬけだすのを感じたのである。	088-④		
1511	汚穢と風化のさなかでとつぜん古鉄が柔らかくなり、優しくなり、彼の手にじゃれついたり、媚びたり、体をくねらせたりするのが見られた。	088-⑤		
1512	ある王はその指にふれる事物ごとくを金に変えたと伝えられるが、彼は生物に変えてしまうのだった。	088-⑥		
1513	私にはそれができない。	088-⑦		
1514	何度試してみたかしのれないが、ただ事物に指紋をつけるだけのことである。	088-⑧		
1515	私は事物を見てもいなければ、握ることもできないのである。数日後に私は股引きをぬいで彼に贈ってから空港へいったのだが、記憶はいつまでもものこった。	088-⑨		
1516	女が剥離を知っているのかどうか。	088-⑪		

1517	おぼろに私の感ずる孤独は女があとみしてきたもののこだまであるような気がする。	088-11		
1518	女はいまに酔っていてしなやかにふるまい、堂々と動作し、体のまわりに事物を侍らせていて、荒寥と悲慘には眼もくれようとし	088-12		
1519	私がそれを知らせることはあるまい。	088-14		
1520	知らせたところで女は私の無気力をつたえられるだけで、自身はカスリ傷ひとつ負わないですませるだろう。	088-14		
1521	捨ててきたものに女がとらわれているとしても何ひとつとして私はそれを知らないのだから悲慘は透明なままゆらめき、あっけなく消えて、私は自身の眼を疑うことになるかもしれない。	088-15		
1522	そんなことですぎしてしまうものであるのかもしれない。	088-17		
1523	そう感じさせられたのは、ある日の正午前だった。	089-1		
1524	火酒の残酔で全身がけだるく火照り、ソファによこたわって、私が額と胸にキラキラ輝く日光をうけ、起きようか、起きまいかと、うつらうつらしていた。	089-2		
1525	森からの微風がバルコンを一巡してから部屋に流れこみ、どこかで山鳩がぐもった鳴声をこだまさせていた。	089-3		
1526	ふいに鍵の鳴る音がしてドアがひらき、女がとびこんできた。	089-5		
1527	女はソファのよこにたつと、奇妙なまなざしでじろじろ私を眺め	089-6		
1528	階段をかけあがってきたのだろうか。	089-6		
1529	少しあえぎ、胸を波うたせていた。	089-7		
1530	冷静だが、どこか矢のようなところがあった。	089-7		
1531	「できた。	089-9		
1532	できたの。	089-9		
1533	論文の製本ができたの。	089-9		
1534	いま文房具屋からもらってきたのよ。	089-9		
1535	これ。	089-9		
1536	見て。	089-10		
1537	重くて立派だわよ。	089-10		
1538	今日の昼もう一度でかけてシュタインコップ先生におわたしする	089-10		
1539	そしたらおしまいよ。	089-11		
1540	何もかもおしまい。	089-11		
1541	サイコロは投げられたってこと。	089-11		
1542	丁とでるか。	089-11		
1543	半とでるか。	089-12		
1544	知らないわヨ」	089-12		
1545	女は網袋から一冊の厚い本をとりだすと、私の胸にそっとおき、部屋のなかを大股にいたりきたりしながら、「知らない、知らない、知らないわヨ！」	089-13		
1546	小さく叫んだ。	089-15		
1547	本は濃緑色の厚紙装で角綴りに仕立てられ、表紙と本文のあいだに象牙色の上質紙で扉が一頁ついていた。	089-17		
1548	本文は細緻なタイプ印刷でぎっしり組まれていた。	090-1		
1549	私には一字も読めないがそこにこそ十年が濃縮して充填されているはずである。	090-1		
1550	女の孤独と恐怖と精励がその一冊だった。	090-2		
1551	私は頁を繰ったり、インキの匂いをかいだり、本を撫でたりし	090-3		
1552	アザラシの皮のコートに荒寥をおぼえたのならこの本にも何かがあるはずだったが、あの一瞬はまちがいだったのではあるま	090-3		
1553	あれは女が発したのではなく、私の何かの投影ではなかっただろうか。	090-5		
1554	それともいまの女の全身でする昂揚がたまたま悲慘を蔽っているだけのことなのだろうか。	090-6		
1555	「よくやった。	090-8		
1556	あっぱれだ」	090-8		
1557	女はふりかえって笑い、「寝てないで」といって怒った。	090-9		
1558	「起きてそういって」	090-12		
1559	私はソファから体を起し、女と握手した。	090-13		

1560	しっかりした肉と精密な骨があるのにどこかひよわでもある掌である。	090-14		
1561	午後遅くに大学から帰ってきた女といっしょに部屋で夕方がくるのを待ち、ぶどう酒を飲みに出した。	090-15		
1562	黄昏が沁みだしているお屋敷町をぬけ、森をぬけ、フェリーにのって河をわたり、対岸の河岸沿いの道はかなり歩いて、汗ばむころになって酒場についた。	090-16		
1563	女の話では三〇〇年の伝統を持つ古舗で瓶にレッテルが貼ってない酒をだすが名声はタンポポの種のように広く散っているとのことである。	090-17		
1564	頑強な角材を組んだ古い門をくぐると赤煉瓦を敷きつめた中庭があり、大樽や、馬車や、ぶどう摘みの籠などがころがっていて、熟しすぎたトマトのような大女が微笑しつつあらわれた。	091-2		
1565	「辛口、辛口、どちらにする？」	091-5		
1566	「まず一杯ずつ両方とろう。」	091-6		
1567	それから飲んでみて、あとはどちらかときめて、とことんやってみようや。	091-6		
1568	お金はおれに払わせてくれ。	091-7		
1569	お祝だよ。	091-7		
1570	食べものと夕焼の話のほかはごめんこうむりたいや。	091-7		
1571	それから帰るときにタクシーだ、バスだとガタつくのもかんべんしてくれ」	091-8		
1572	「いいわよ。」	091-10		
1573	賛成。	091-10		
1574	それからお酒は粒選り、遅摘み、粒選り遅摘みと、いろいろあるけれど、どれにしましょう？」	091-10		
1575	「その叔母上にまかせなさい。」	091-12		
1576	今晚飲んでいちばんうまいのはどれかと聞くんだね。	091-12		
1577	それにしよう。	091-12		
1578	まずまちがいないと思うね」	091-13		
1579	「OK！」	091-14		
1580	女の話を書いてトマトのような大女はつぶれて汗がでそうなほど大きく笑い、ひとことふたことつぶやいて母屋に消えた。	091-15		
1581	うっかり肘をついたらどうかなりそうなほど厚くて頑強な檜のテーブルにやがて酒がはこばれてきた。	091-17		
1582	辛口、辛口、どちらのグラスもしっかり冷汗をかいてくもっているが、それに夕陽が射すと、辛口は淡い金、甘口はやや濃い金に輝き、白夜の太陽が小さくなってどちらにも入っているようだっ	092-1		
1583	辛口は水のようにのどをすべり、甘口はひとつまみの匂いを口のなかにのこした。	092-3		
1584	二杯めからは辛口だけにして、九時までそればかり飲んだ。	092-4		
1585	女はうなだれてちよっと泣いた。	092-5		
1586	また、眠くなってきた。	092-8		
1587	論文を正式に提出したあとでも女は休暇前の残務が研究室にあるとかで、買物をかねて、毎日一度は外出する。	092-9		
1588	二、三度私はいっしょについていった。	092-10		
1589	隣町の首府まではバスですぐである。	092-10		
1590	首府といっても夜の灯かげでかいま見たのとおなじくらい白昼光で見ても小さい市である。	092-11		
1591	大きなデパートもないではないが、駅前を古い市電がゆっくりと這い、そのチンチン鳴らす音がタクシーの騒音にかき消されることなくひとつひとつ聞きとれるくらいである。	092-12		
1592	私は地形の記憶力がそれほど強いほうではないけれど、この掌みたいな首府のだいたいの街路図はしばらくするうち体に入ってしまった。	092-14		
1593	私は大学のキャンパスを散歩したり、市場をのぞいたり、釣具店に入って鱒釣のスプーン鉤や毛鉤のコレクションを見せてもらったりした。	092-15		

1594	栗の木のしたでお茶を飲み、町はずれの丘の頂上にあるガラス張りの料理店で簡単な食事をした。	092-⑰		
1595	陽射しはこれまで淡くて乾いて澄明であるばかりだったが、ようやく激しさと熱がみなぎりはじめている。	093-②		
1596	午後になるとそれがでるようである。	093-③		
1597	あらゆる事物がまばゆい輝きのさなかで倦怠を分泌する。	093-③		
1598	光がゆるんだり、うるんだりしはじめる。	093-④		
1599	ショーウィンドウというショーウィンドウは淵の暗さがあらわれるまで磨きこまれ、その奥で脂っぽい頬が閃めいたり、ゆっくりと影がうごいたりする。	093-④		
1600	丘へのぼる森のほの暗い小道と、にぎやかな市場と、古い裏通り、それぞれのある部分が私は好きになった。	093-⑥		
1601	けれど、だいたいの街路図がのみこめると、それきり私は外出するのをやめた。	093-⑦		
1602	女がいくら誘っても、何やかやと口実をもうけて私はソファからおりようとしない。	093-⑧		
1603	女はシュタインコップ教授や、記者で詩人の男や、研究員仲間や、学生たちに私を紹介し、部屋へ呼んできてピッツァ・パーティーをひろこうと考えているらしいのだが、私はのろのろといいかげんな返事ばかりしている。	093-⑨		
1604	枕もとにサイドテーブルをよせて火酒の瓶とグラスをおいてお	093-⑫		
1605	そのよこに外出のたびに女が買ってきてくれた新聞、週刊誌、本などが積んである。	093-⑫		
1606	それはわざわざ駅の売店や書店で私の読める国の言葉で印刷されたのを選んできたのだが、私は一つの記事をさいごまで読みとおす力がない。	093-⑬		
1607	二行か三行読むと、いま眼がさめたばかりなのに、もう眠気がそこにきている。	093-⑮		
1608	寝るまえに飲んだ火酒がニコチンとまじっていやな匂いを口にこもらせている。	093-⑯		
1609	それを新しい火酒ですすいで胃に送ってから私は眼を閉じ、ゆっくりと沈んでいく。	093-⑰		
1610	いくらでも眠れる。	093-⑰		
1611	その気になりさえすれば眠れる。	094-①		
1612	ソファの革にはおぼろげだけど確実な形で私の寝姿の凹みと皺が浮かびあがりかけている。	094-①		
1613	一度か二度寝返りをうつだけでそれを見つけることができる。	094-②		
1614	寝返りをうつまでもない。	094-③		
1615	ただコロリとよこたわっただけではまりこめる。	094-③		
1616	はじめてここへきた夜に一瞥したとき、ソファは磨きぬかれたサラブレッドのようだったが、いまは一変し、従順で親しいばかりで	094-④		
1617	私は読めないし、感じられないし、考えられない。	094-⑥		
1618	ねっとりしたクリームのような眠気が体のなかにひろがっていつて、角張った荷物が泥に沈むようにして私は沈んでいくだけで	094-⑥		
1619	やわらかな無数の繊毛が音もなくうごめいてしのびよってくると、脳だろうと、腹だろうと、感じたその箇所から私は眠ってしまうのである。	094-⑧		
1620	バルコンからの微風が足のうらを撫でてくれる。	094-⑨		
1621	だらりとのびきった睾丸の生湿りした皺のひとつひとつを軽い羽毛のように撫でられるとうきうきしてきそうだ。	094-⑩		
1622	私は足のうらや睾丸の皺から眠りはじめるのである。	094-⑪		
1623	そこから形を失い、体重を失っていくのである。	094-⑪		
1624	全裸の腹にのろのろと毛布をのせ、ときには晴朗な、ときには朦朧とした、まさぐりようのないほど広大な空虚のなかを漂う。	094-⑫		
1625	しびれた脳のどこかで本や議論のないところへいきたいと思うが、無人島などというものはこの時代にはないのだと思う。	094-⑬		
1626	しばらくして、ここが無人島なのだ、ガラス壁で囲まれた無人島なのだ、空のなかの島なのだと思う。	094-⑮		
1627	人声もしないし、物音もしない。	094-⑰		

1628	ときたま電話が鳴ると、女が部屋にいるときは噴水のような高声と笑声がひとときとびかうが、それくらいである。	094-⑱		
1629	女の話ではこの建物にはチリーの学者、日本の学者、インドの学者、北欧の学者などが住んでいるそうだが、誰も訪ねてこな	095-①		
1630	私は部屋から一歩もでないから階段ですれちがうこともない。	095-③		
1631	女が何度もピッツァ・パーティーをしようといいたしたが、私はおびえてしまい、懇願するようにしてその考えを捨てさせた。	095-③		
1632	知らぬ人と合って、握手して、議論して、まなざしの明滅をうかがい、そうしながら相手の肩ごしにべつの男の眼や横顔にも視線をくばり、前後左右からふいにピンポン玉のようにとんでくる言葉をうちかえしたり、うけとめたり……あのいらだたしい空虚のことを思うと、ねっとり汗ばんだ巨大な道具のような手と握手することを考えただけでうなだれてしまいたくなる。	095-⑤		
1633	いまの私はソファから落ちないように努力するだけが精いっぱいなのである。	095-⑨		
1634	人まじわりできる身分ではないのである。	095-⑩		
1635	靴をはいて戸外へでていっても私にできることといえば栗鼠のために水道栓をひねってやることと、椅子からずり落ちないようにテーブルのはしをしっかりとおさえていることくらいである。	095-⑩		
1636	「……誰も何もいわないけれど、私にはわかっているのよ。」	095-⑬		
1637	ちゃんとわかっているの。	095-⑬		
1638	ここでも大学の研究室でもみんなコソコソにやにや噂してるの	095-⑬		
1639	私がちよっと週末旅行して男をくわえてもどってきたなって、いいあっているの。	095-⑭		
1640	あれもやっぱり女でしたな、とか、自然は意志なき偉大でありますな、なんて。	095-⑮		
1641	なかには、男をつかまえたまではいいけれど、ああ寝てばかりいたんじゃ、影のない男か、砂男みたいなもんですな。	095-⑯		
1642	孤独な女には不幸でもないよりはマシなのでしょうね、なんて。	095-⑰		
1643	わかっているんだから。	096-①		
1644	でも私は、平気よ。	096-①		
1645	平気、平気。	096-①		
1646	気のすむだけ寝てくださいな」	096-②		
1647	外出からもどってくると女はそんなことを早口にしゃべりながら、厭味とも誇りともつかない笑いを頬にうかべ、ブラジャーやGパンをぬぎすてる。	096-③		
1648	たわわな全裸になり、首からエプロンをさげる。	096-④		
1649	ポパイや、ミッキー・マウスや、ドナルド・ダックのアップリケを縫いつけた、幼稚園の先生がしそうなエプロンである。	096-⑤		
1650	それで前面いったいをかくしているのだが、キッチンに入っていく後姿を見ると、うなじのあたりで赤い紐がひらひらし、肩も背も臀もまるだしである。	096-⑥		
1651	白い山塊が右に左にひきしまったり、ゆるんだりする。	096-⑧		
1652	ときどき空のどこかによこたわっているような気のすることがあ	096-⑨		
1653	夜があまりに静謐で澄明なため、半覚半醒でうつらうつらしていると、この大きなガラス箱が空のどこかに浮かんでいて、ガラス壁もソファもなくなり、むきだしのまま私は空に漂っている。	096-⑨		
1654	その感触がまざまざと全身につたわるのである。	096-⑪		
1655	私はこちらのソファによこたわり、女があちらの壁ぎわのベットで本を読むか寝るか、部屋のなかにただ乳黄色のやわらかいスタンドの灯と火酒のかすかな茴香の匂いだけがあるという時	096-⑫		
1656	そういう時刻に、風が足音をたてず、フクロウの鳴声もせず、ただ夜と森の深沈とした気配だけが感じられ、きれぎれだけれどたえまない私の回想もたまたまおだやかな遠景でしかないときには、私は肉の袋からぬけだし、よごれた脂肪と意識をあとにし	096-⑭		
1657	そのとき寂寥はあるが孤独はなく、自由はあるけれど焦躁はないのである。	096-⑰		
1658	入学試験や牛に追っかけられる夢のほかには子供のときからよく私は闇のどこかからふいに落下しはじめる夢で苦しめられた。	097-①		

1659	はるか下方に小さな粒として光るものがあり、地球だとわかっている。	097-②		
1660	それをめがけてまっすぐに落下していくのだが、ゴマ粒ほどの光点であるにもかかわらず私の体のどこかには、広大な、深い草の茂る、どっしりとした草原がそこにあると感じられる。	097-③		
1661	にもかかわらずそこに到着できるかがわからない。	097-⑤		
1662	衝突して粉ごなになるのではあるまいかということはちらとも考えず、ただそのことだけが不安でならない。	097-⑥		
1663	氷結しそうな、わくわくする不安で私は落下していき、よじれそうになり、思わず失禁しそうになって、そこで眼がさめる。	097-⑦		
1664	ふとんのなかで私は手や足がしびれ、冷たく硬直して、眼をひらいていた。	097-⑧		
1665	それ以後いくら年をとっても闇を一瞥すると、それがふちのまさぐりようのない闇だと、私のどこかにはきまってこの記憶が浮かんでくるのである。	097-⑨		
1666	けれど、どうしてか、いまは何かの条件が整備されているらし	097-⑪		
1667	革のうえで感ずる闇には墮落がおこらない。	097-⑪		
1668	額や肩からぬけだして揮発した私はクラゲのようにのびのびと夜空を漂う。	097-⑫		
1669	朝になると形がもどっている。	097-⑭		
1670	無碍の放下は消えている。	097-⑭		
1671	私は脂っぼい、大きな袋に封じこめられ、顔をねっとりした脂と汗で蔽われてソファかヤクの皮にころがっている。	097-⑭		
1672	日光といっしょに意識が射ってきて、しばらくうつらうつらしているあいだはいいけれど、ある無慈悲さに追われ、やがて浮かびあがっていく。	097-⑮		
1673	部屋は光と影で鋭い峡谷のように区切られているが、日に日に輝きや、微風や、熱には夏の進行していることが感じられる。	097-⑰		
1674	私はキラキラする汗でいっぱい巨大な明るい果実のなかによこたわっているらしいのだが、少しずつだが確実に足から力のぬけていくのを感じると、食べて吐くだけのミズになりつつあるような気がする。	098-①		
1675	私はのろのろ体を起こして浴室にはいつていく。	098-④		
1676	ひりひりするような、鋭くて熱い湯に全身を浸していると、火酒が苦汁といっしょにしぼりだされ、残酔がひどいときには湯が酒精の匂いをたてることがある。	098-④		
1677	森の苔の匂いのする熱い泡のなかに顎まで埋もれてしばらくじっとしててから、ふいにたちあがって冷たいシャワーをあび	098-⑥		
1678	それで霏のかたまりになったものが体となり、芽生えかかったぐにやぐにやしたものの葉や蔓が消える。	098-⑦		
1679	そのあと冷水で顔を洗い、口をゆすぎ、うがいをする。	098-⑧		
1680	ひねったり、つねったり、集めたり、こねたりして頬をいじりまわすが、冷水のなかでそうしているあいだはいいけれど、終って鏡をのぞくと、中年男の顔は脂っぼくて蒼白いもやもやである。	098-⑨		
1681	汚水があちらこちらにしみだしてて手のつけようがない。	098-⑪		
1682	一眼見て顔をそむけたくなる。	098-⑫		
1683	隣のキッチンに入ると、ステンレスの台にナプキンで蔽った皿がおいてある。	098-⑬		
1684	ナプキンをとると、サンドイッチと紙きれがある。	098-⑬		
1685	私はたったままサンドイッチを食べ、冷蔵庫をあけてインキ瓶のようなビールの小瓶をとりだす。	098-⑭		
1686	鍋、フライパン、皿、鉢、瓶、すべてがいつ見ても磨きぬかれ、輝き、きちんと整備され、汚点も垢も汗もついていず、まるで台所用品会社のモデル・ルームのようである。	098-⑮		
1687	ときどきここで仕事をしている女の後姿の臀のうごきを見ているうちによっていつてうしろからたったまま抱くことがあるのだが、したたったものの痕跡の気配など、いまはどこにもない。	098-⑰		
1688	紙きれに書いてある。	099-③		
1689	・本日の靈感 睡眠は脂肪である・	099-④		

1690	昨日は違っていた。	099-⑤		
1691	・本日の靈感・とあって、・眠れるのはまだ若い証拠ですよ・とあった。	099-⑥		
1692	サンドイッチを食べ、ビールを飲みほしてしまうと、ちょっと私は目的ある人の気分になる。	099-⑩		
1693	これからパンツをはき、シャツで蔽い、ベルトで腹をしめ、靴で足を固め、すっきり形をかくすことで形を作りあげ、いそぎ足に階段を戸外の夏へかけおりにいくのだという気分になる。	099-⑪		
1694	しかしそれは二歩か三歩いくうちに跡形もなく消え、私は腸をチクチク軽く刺すビールを感じながらソファのところまであるいてい	099-⑬		
1695	寝姿の皺を見るとひとたまりもなく体を倒し、ゆっくりと眼を閉じ	099-⑭		
1696	皺は音もなく私を吸いこみ、しっとりとしてよりそってくる。	099-⑮		
1697	体のあちらこちらにたちまち甘い弛緩が起り、形がとけはじめ	099-⑮		
1698	ゆらゆらと私は沈んでいく。	099-⑯		
1699	午後になってから女がいそぎ足でもどってくる。	099-⑰		
1700	ふいに鍵の音がするのでびくつとすることがある。	099-⑰		
1701	女は部屋に入るとすぐ全裸になって首からエプロンをぶらさげ、いったりきたりしながら大学や町で見聞したことを手ぶり口真似を入れて話をする。	100-①		
1702	トルコ式腰かけを持ってきて腰をおろし、日本の友人に送ってもらった石油罐いっぱい「柿の種」を足のあいだにおき、ポリポリとオカキを噛み砕きながら、いつまでもおしゃべりをする。	100-②		
1703	私は戸外へでて人まじりをするのができないけれど、女に濾過されたそれは学生の立話なので、聞くでもなく聞かないでもなく、うとうとしている。	100-④		
1704	耳よりはむしろ眼が、うとうとしながらも、乳房や、臍や、陰毛や、大陰唇が女のたったりすわったりするたびにエプロンのかげでどう出没するかを追っている。	100-⑥		
1705	ときどき起きていって女をおしたおし、湿り気味だったり乾いていたりする剥き身の胎貝を吸ってからソファにもどって話の続きを促すこともある。	100-⑧		
1706	女は髪の流れをなおしつつ少し遠くなりかかったまなざしで起きなおし、腰かけに腰をおろして、シュタインコップ教授が急進派学生と家庭訪問に挟撃されて苦しんだあげく日夜酒浸りになっている話をつづける。	100-⑨		
1707	ひとしきりしゃべってから、きつと女は、「今日は何してたの。	100-⑭		
1708	話して」という。	100-⑭		
1709	ほかに答えようがないので、私は、「寝てた」という。	100-⑯		
1710	女は苦笑いして、「昨日もそうだったわ」とつぶやく。	101-②		
1711	私は、「一昨日もそうだよ」という。	101-⑤		
1712	「外国へでると、いつもこうなの？」	101-⑧		
1713	「東京にいるときだっておなじだよ」	101-⑨		
1714	「いつ見ても寝てるんだもん。」	101-⑩		
1715	呆れるよりさきに感心しちゃう。	101-⑩		
1716	これはひょっとしたら一種の才能かもしれないと思ったりすることがあるわ。	101-⑩		
1717	きつと、よほどくたびれてるのね。	101-⑪		
1718	あなた、くたびれてるのよ。	101-⑪		
1719	だから嗜眠病みたいなんだわ。	101-⑫		
1720	ときどき死んじやったのじゃないかしらと思って心配になることがあるわよ」	101-⑫		
1721	「死んでるようなものだよ」	101-⑭		
1722	「死人にしてはイビキが盛大すぎるわね。」	101-⑮		
1723	イビキが聞えだすと、あ、生きてるな、って安心する。	101-⑮		
1724	市場で買物をしてると、私、ときどき妙な気持のすることがある	101-⑯		
1725	ギャングをかくまってる女とか、ヒモにみついでる女とかいうのはいまの私に近いのじゃないかしらと思ったりするのよ。	101-⑯		
1726	わるくない気持だけどさ。	102-①		
1727	何しろあなたって、一歩も外出しないで寝たきりなんですから	102-①		

1728	世話が焼けないのはいいけれど、ちょっとたよりないナ。	102-②		
1729	近頃ちょっとそんな気分ですよ	102-②		
1730	「すりきれかかっているんだよ」	102-④		
1731	「そうらしいわね」	102-⑤		
1732	「おれはすりきれかかっているんだ」	102-⑥		
1733	「外へはでない、パーティーはイヤだ、茶飲話もイヤだ、人に会うのもイヤでしょう。」	102-⑦		
1734	新聞は読まない、本も読まない、テレビも見ない、ラジオも聞かない。	102-⑦		
1735	ないないづくしですよ。	102-⑧		
1736	たまに夕方に外へでるのでオヤ珍しいと思ったら栗鼠に水をやりに行くだけだ。	102-⑨		
1737	出たと思ったらもう帰ってくる。	102-⑨		
1738	そしてまた寝ちゃう。	102-⑩		
1739	いま眼がさめたところなのにもう寝てる。	102-⑩		
1740	私がキッチンへ入って出てきたらもう寝てるのよ。	102-⑩		
1741	何だか子供みたいなどころがあるわ。	102-⑪		
1742	家をとびだしたらさいご半日も一日も帰ってこないのに、帰ってきたとなったらコロッと寝てしまってそれきりというのがよくいた	102-⑪		
1743	「それだ。」	102-⑭		
1744	それに近い」	102-⑭		
1745	「子供だというの？」	102-⑮		
1746	「男はいくつになっても子供だよ」	102-⑯		
1747	「そこが女にはつかみにくいよ。」	102-⑰		
1748	いつもそこでモメるのよ。	102-⑰		
1749	さっぱりわからないのよ。	102-⑰		
1750	男ってみんなおんなじだと見えることがあるけれど一瞬も油断できないというところもある。	102-⑰		
1751	それがたいてい、男のなかの子供の仕業なのよ。	103-②		
1752	世のなかのたいていのモメごとやドでかいことは男のなかの子供のせいですよ。	103-②		
1753	太郎ちゃん、じっとしてなさいといったって聞かないんだから。	103-③		
1754	いつのまにか天までとどく塔を建ててやろうなんて考えて、それを実行しようとするんだから、モメてくる。	103-④		
1755	たまにじっとしてるとなと思ったら三年寝太郎、むこう向いたきり	103-⑤		
1756	どうなっちゃってんだろといいたくなるわね」	103-⑥		
1757	「自然のいたずらだよ。」	103-⑦		
1758	君の言い草だが」	103-⑦		
1759	「神様の、とはいわないか」	103-⑧		
1760	「自然だね」	103-⑨		
1761	「意志なき偉大なのかしら、やっぱり」	103-⑩		
1762	女は両膝に肘をのせてまえかがみになり、足のあいだにおいた石油罐からオカキをつまんでちびちび食べ、真剣なまなざしでだまりこんでいてから、吐息をついてたっていく。	103-⑪		
1763	しかし、ピッツアはおいしい。	103-⑬		
1764	これは認めておかなければならない。	103-⑬		
1765	私は性か食か排泄かのためにしかソファからおりなくなってしまったが、女の作ってくれるピッツアはうまかった。	103-⑬		
1766	イーストを粉に仕込んで練りに練り、それを何時間も寝かせてふくらまし、すみずみまで巣穴がはびこって柔らかく香ばしくなるのを待つ。	103-⑮		
1767	それをのばしてたたいてうちわみたいにしてから、シャンピニオン、サラミ、アンチョビ、ハム、ベーコン、トマト、パプリカ・トマトなどをふんだんに盛りこみ、塩と酢に漬けた青い木の実も忘れずに入れ、ふちをオリーブで飾り、チーズとケチャップをたっぷりふりかけるのである。	103-⑯		
1768	オーヴンからとりだして、どこかから借りてきた大皿にのせ、眼の高さに支えて女が小走りにキッチンからころげだしてくる。	104-②		

1769	バターの香ばしくて熱い靄がゆらゆらするなかでとけたチーズの黄といちめんのケチャップの赤が灯のように輝いている。	104-④		
1770	ひときれ切りとって中心部のぐじゃぐじゃに熟したところを頬ばってみると、酸、苦、甘、辛、鹹がいっせいに声をあげて口のなかで踊りだすようである。	104-⑤		
1771	素朴なお好み焼だけれど材料に醗酵物がたっぷり入っているので饜の深さが成熟のうちに味わえるのである。	104-⑦		
1772	体を起さないではいけないのである。	104-⑧		
1773	「搾菜麺のときはお粥の話をしてうまくそらされちゃったけど、これなら大丈夫と思うわよ。	104-⑨		
1774	あなたをピンでとめておけると思うの。	104-⑩		
1775	もう何十回とテストしたんだもん。	104-⑩		
1776	プロがアマチュアをよそおって作った料理ですよ。	104-⑩		
1777	理想。	104-⑪		
1778	それに近いもの。	104-⑪		
1779	ですわヨ」	104-⑪		
1780	「うまい。	104-⑫		
1781	できてる。	104-⑫		
1782	おみごとだ」	104-⑫		
1783	「お粥の話、しちゃダメよ」	104-⑬		
1784	「しないよ」	104-⑭		
1785	「だされた料理を批評しないでほかの料理の話をするのは優しいけれど、作るほうにしてみればコタエたわよ。	104-⑮		
1786	いい勉強になったけど」	104-⑯		
1787	「うまい。	104-⑰		
1788	これはうまい。	104-⑰		
1789	イタリアへいったみたいだ。	104-⑰		
1790	きつくて、体があって、血が熱いや。	104-⑰		
1791	栄養と淫猥が手をとりあって踊ってるわ。	105-①		
1792	そういう味だ。	105-①		
1793	また眠くなりそうだな」	105-①		
1794	「いいわ。	105-②		
1795	寝てよ。	105-②		
1796	心に通ずる道は胃を通ってるっていうけれど、あなたの胃を通っていったら心はたどりつくまでに眠っちゃってるってわけよ」	105-②		
1797	「うまく眠れる料理ってざらにはないよ」	105-④		
1798	「ありがとう」	105-⑤		
1799	「それに、ひとことだけいわせてもらうけれど、一年三百六十五日のうちでほんとにいい眠りっていうのはホンの一回か二回あるきりなんだよ。	105-⑥		
1800	それもあるかなしか。	105-⑦		
1801	名作といえるくらいの眠りというのはほんとに稀れなんだ。	105-⑦		
1802	目下おれはそれを考えてるところだけれどね。	105-⑧		
1803	寝てるからってたのしんでるとはかぎらない。	105-⑨		
1804	凡作、愚作、駄作の眠りが大半なんだからね。	105-⑨		
1805	むつかしいですよ」	105-⑩		
1806	瓶の腰までを藁で巻いた安物の赤ぶどう酒はトゲトゲしく刺したり、ザラザラと舌をこすったりしたが、ピッツアの柔らかくて深い厚さがそれを忘れさせてくれた。	105-⑪		
1807	女は飲んだり食べたりしながらピッツア作りの苦心談や研究室での評判などをしきりに話したが、そのうち、今週中にもう一回焼いてシュタインコップ教授を招待したいといいたした。	105-⑬		
1808	教授は妻と別れて秘書と結婚したがっているがカトリック教徒であるため離婚を認められないので、いまは休暇にもいかず、大学では研究室、自宅では書齋にこもったきりだそうである。	105-⑮		
1809	先週、某夜、妻が書齋のドアのところへ椅子を持って行って徹夜をしたという噂がたった。	105-⑰		

1810	妻は叫んだり、ドアをたたいたりなどはせず、ただ椅子に腰をおろして一晩中ひそひそと泣きつづけたが、教授はドアを閉ざしたきりであった。	106-①		
1811	学者仲間ではいろいろの説と主張があるが、女のみるところではこれは性格の悲劇である。	106-②		
1812	教授、妻、秘書の三者のうち誰か一人をとりあげて“独立的に排除して”避難するということができないし、だから、誰か一人だけに同情するということもできない。	106-③		
1813	「……あなたにひきあわせるということなら先生を招待してあげられるのよ。	106-⑥		
1814	それで慰めてあげたいの。	106-⑥		
1815	あんまりひどいんですもの。	106-⑦		
1816	あなたは何もむつかしいこと話さなくてもいいのよ。	106-⑦		
1817	世間話でいいの。	106-⑧		
1818	魚釣りの話なんかでいいの。	106-⑧		
1819	先生はたいへんな酒飲みだからきつとあなたとは話があうと思	106-⑧		
1820	そうよ。	106-⑨		
1821	お酒の話でいいんだわ。	106-⑨		
1822	きつと先生、およろこびになると思うナ」	106-⑨		
1823	「おれは寝てたいんだけどね」	106-⑪		
1824	「くたびれてらっしゃることはよくわかるの。	106-⑫		
1825	あなたは病気なのよ。	106-⑫		
1826	そう考えたほうがいいと思うの。	106-⑫		
1827	でもね、たまに一人ぐらい、人に会ったっていいじゃない。	106-⑬		
1828	そのほうがいいのじゃないかしら。	106-⑬		
1829	パーティーのあとでまた寝るといいわ。	106-⑭		
1830	刺激のあとだからぐっすり眠れるわよ。	106-⑭		
1831	あなたがパーティーぎらいなのは知ってるけれどお客さんは先生一人なのよ、たまには私の顔もたてよ」	106-⑮		
1832	「すりきれかかっているんだ。	106-⑰		
1833	おれはいますりきれかかっているんだよ。	106-⑰		
1834	知らない人と会って握手したり挨拶したりと考えると、それだけで息がつまりそうになる。	106-⑰		
1835	山が崩れかかってくるような感じなんだよ。	107-①		
1836	いまにきみと話をすることもできなくなる。	107-②		
1837	それからさきどうしたらいいのかわからないの、一日のぼしにして考えないようにしてるけれどね。	107-②		
1838	できたらほっておいてくれないか。おねがいだ」	107-③		
1839	「ちっとも私のこと考えてくれないのね」	107-⑤		
1840	「そういうことじゃないんだよ」	107-⑥		
1841	「あなたは自分しか愛してないんだわ」	107-⑦		
1842	「……………」	107-⑧		
1843	「自分すら愛してないのかもしれない」	107-⑨		
1844	「……………」	107-⑩		
1845	ピッツアの熱と快活が消えた。	107-⑪		
1846	女のまなざしと口調に冷たいけわしさがあらわれている。	107-⑪		
1847	これまで何とか見ずにすませてこれたものがまざまざとあらわれている。	107-⑫		
1848	女は私の顔を見て眼をそむけ、ふいにしなやかだがすばやい動作でたちあがると、皿や、フォークや、酒瓶をキッチンへはこ	107-⑫		
1849	名のない憂鬱が薄い汚水のようにひろがりかけている。	107-⑮		
1850	それは私からにじみだしてあたりに漂い、早くも足を這いあがって腰までを浸している。	107-⑮		
1851	“愛”という言葉を知るとおぼえる、とらえようのない当惑と居心地悪さが憂鬱にまじってゆっくりとうごいている。	107-⑯		
1852	この言葉を耳にするたびに私は痛切と朦朧を同時におぼえてしまつてぼんやりとなる。	107-⑰		
1853	透明で柔軟だが貝殻のように不浸透の膜に包まれて外界を眺めるようなのである。	108-①		

1854	遠くの薄明に何人かの女の目や顔や裸の肩がみえる。	108-②		
1855	どの女もいま浴びせられたのとほとんど変わらないことばを口に	108-③		
1856	ある女は情事のこだまが消えるの待つてからおもむろに顔をあげて私が自身すら愛せないでいるのだといった。	108-④		
1857	ある女は屋下がりの料理店へ、それだけ言おうと思ってやってきて、私は女の下半身に惚れるけれど上半身にはまるで興味が抱けず、興味を抱こうとあせることも知らないでいるのだとい、フル・コースの食事を食べてでていった。	108-⑤		
1858	ある女は、これも情事のこだまが消えかかってからだ、丹念だかものうげなフェラチオをしながら腿のあいだからふと顔を上げて、私は空中から言葉をつかみだしているだけだといった。	108-⑧		
1859	それぞれふいで、また、えぐりたてるような痛烈があった。	108-⑩		
1860	愕然とする正確さがこめられているのだった。	108-⑩		
1861	女たちは私がそれらしいことを何もいってないのにとつぜんどこからか言葉をつかみとって口に、私がおどろき、そのおどろきが私につづいているのに女たちはもう忘れてしまったかのような顔をして、一瞬前の英智とはおよそかけはなれた、どこそこの店のアイスクリームはメリケン粉が入っているとかいけないとかの話題にいきいきと興ずるのだった。	108-⑪		
1862	そこで油断をしていると、いつかふいに切れた主題がとつぜん顔をだして、またしても必殺的な寸言をひよいと口にして私をおびやかす。	108-⑮		
1863	持続があるようであり、ないようであり、峻烈このうえなく、愚昧もこのうえない。	108-⑯		
1864	しかし、私が愕然とするのわ、思いがけないときに思いがけなく女たちが口にする峻烈さであった。	108-⑰		
1865	それは女のくちびるからこぼれ落ちた瞬間にそれ自体の質量を帯びて肉薄してくる。	109-①		
1866	女はとつくにどこかへいってしまっている。	109-②		
1867	トゲが刺さって痛がるのは私であるようだ。	109-③		
1868	私はそれがどこまで膜をやぶってなだれこんでくるかを待った。	109-③		
1869	しかし、女たちが“愛”を純溜しようとすればするだけ私はおびえつつ朦朧となっていくのだった。	109-④		
1870	すべての言葉には両極併存の朦朧でもあり寛容でもあるものがこめられているが、人事の原子単位の痛切を決定しようとするこの言葉が顕微鏡でありながら望遠鏡でもあるらしい気配を背負わされているために、広大と痛切のどこに自身をおいていいのか私にわわからなくなるのだった。	109-⑤		
1871	女に白い臀でなくて、“心”とか、“私”になると、いよいよすくんでしまう。	109-⑧		
1872	けれど、それを“愛しているか”とたずねられるとたちあがるまえにうずくまることを考える。	109-⑨		
1873	それが臀でなくて、“心”とか、“私”になると、いよいよすくんでしまう。	109-⑩		
1874	男は具体に執しながら具体に感溺していこうとする。	109-⑪		
1875	私は男根の先端と亀頭環に全神経を集中しつつも汗まみれになって何かべつの事を考えているけれど、女はうらやましいほどの没我の精力でまっすぐに腔へかけこみ、全身で動乱す	109-⑫		
1876	“愛”ははるか後方にはかなく漂っている。	109-⑭		
1877	にもかかわらず芝居が終わるとふいにそれが、それしかない立役者のように呼びだされてくる。	109-⑭		
1878	私の眼のまえをたくましくて白い腿と脛が長くて鋭い筋をいきいきと明滅させながらいったりきたりしている。	109-⑯		
1879	ピツアと赤ぶどう酒にみたされた私はとろりとなりかかっているが、苦汁があるので睡気はためらっている。	109-⑰		
1880	女は堂々とし、孤立して、怒っているそぶりである。	110-①		
1881	皿を洗い終るとキッチンからでてきてトルコ式腰かけに腰をおろし、私から少しはなれたところで、顔をガラス壁に向け、“柿の種”を威厳をこめてかじりはじめた。	110-②		

1882	エプロンのおかげで白い、みごとな胸がゆっくりと息づいている。	110-③		
1883	「きみがそうしていると金太郎さんみたいだね。	110-⑤		
1884	金太郎さんの前掛けにそっくりだよ。	110-⑤		
1885	金 のかわりにポパイがあるんだね。	110-⑤		
1886	面白い眺めだよ」	110-⑥		
1887	いつもなら女がさっそく私の冗談を上回る冗談で切ってかえすところだろうが、いってしまってからいそいで口を閉じたけれど、もう遅かった。	110-⑦		
1888	ふいに女はオカキを石油罐にすててたちあがり、エプロンをかなくりすてて全裸になると、すばやくブラジャーやGパンをつけたうえ、シャツまで着こみ、「……………！」	110-⑧		
1889	鼻と口をくしゃくしゃにしてイーッと私に見せつけてから、ベッドへ走って行ってとびこみ、壁のほうを向いたきり口をきかなくなっ	110-⑫		
1890	怒るかもしれないなど、ちらと思ったのだが、口にするととまらなくなつたのでついそのままいってしまったら、やはり女は怒ってしまった。	110-⑬		
1891	日のけじめがつかない。	111-①		
1892	女はその後パーティーのことを口にしなくなった。	111-②		
1893	教授の風貌や身辺についてはこまかいところによく気のつく女弟子としてじゆう話して聞かせるけれど、ピッツァ・パーティーをひらいてなぐさめてあげようとは、二度と口にしなくなった。	111-②		
1894	口にだしたいがそうするまいとしている気配はなにげないまなざしや話のはしばしに感じられることがあるけれど、おぼろに漂って消えていく。	111-④		
1895	研究室の残務整理が終ると大学へいかななくてもよくなったので女は部屋にこもり、ときどき食料品や新聞を買いにでかけるほかは外出しないで、食事をつくったり、本を読んだりしている。	111-⑥		
1896	寝て、食べて、おしゃべりをして、読んで、また寝る。	111-⑧		
1897	それだけの毎日である。	111-⑧		
1898	ときたま、夕方になって昼の暑熱が薄らぐ頃、二人で散歩にでかけることがあるが、なるべく人に逢わないですむ道を選び、栗鼠に水をやってから森をぬけ、河をしばらく眺めて、もどってく	111-⑨		
1899	ある日、とりたてて傑出したところのある黄昏ではなかったけれど、二人でバルコンにいるとき、ガラスの鳴る音が聞えてきた。	111-⑫		
1900	夏物の特価売出場を買ってきた安物のデッキ・チェアにもたれて女は氷を入れた紅茶をすすり、私は火酒を舐めているところ	111-⑬		
1901	毎日その時刻にきまってあらわれるしっとりとした優しさと爽やかさがあたりに漂い、空と森が昼いっぱいづいた暑熱のほとぼりを消してようやくとけあいかかっていた。	111-⑭		
1902	そのときどこからかガラスの鳴る音と幾人かの男女の笑声が聞えてきた。	111-⑯		
1903	ここからは淡い夕映えの樹海と空しか見えないので、まるで一群の男女が森のなかに集って灯のように笑いさざめくのを通りがかりに耳にしたようであった。	111-⑰		
1904	声は柔らかく、愉しげだったが、澄みきってひっそりした黄昏のなかで水晶質のこだまをひびかせて去っていった。	112-②		
1905	誰とも合わず、話さず、飲まないで暮すようになってからずいぶん久しいと感じさせられた。	112-③		
1906	何かの信号を聞いたような気がした。	112-④		
1907	女が頭をかしげ、「パーティーをしてる」とつぶやいた。	112-⑤		
1908	「インド大使館かしら」	112-⑧		
1909	私はだまって冷たい火酒をすすった。	112-⑨		
1910	女の声にはいきいきと羨望がうごいていて、いまにもとびたちそうな気配があった。	112-⑨		
1911	女のなかには清涼で澄明な黄昏にふれて一新された精力がしぼりたての牛乳のように泡をたててわきたっているらしいことがありありと感じられた。	112-⑩		
1912	夏とガラス箱と腔にとじこめられて女はいらだち、皮膚の外へでたがっている。	112-⑫		

1913	女は灯と人と匂いと言葉のなかを笑ったり冗談をいったりして船のようにすべっていきがっている。	112-12		
1914	「……インドじゃないかもしれない。	112-14		
1915	あれはもっと西のほうだったと思うわ。	112-14		
1916	どこかアフリカの大使館だわ。	112-14		
1917	リベリアとかガボンとかザンビアとか、そういう小さいのがこのあたりにかたまっているのよ。	112-15		
1918	国旗を見ても見当がつかないし、それにあの人たち、みんなマッチのさきみたいにくたくたく固そうな頭をしてるじゃな	112-16		
1919	ほんとに見わけがつかないわ」	112-17		
1920	女はおだやかにひくく笑った。	113-2		
1921	その笑声にはあらわな羨望が消え、窓の外に見とれながら病人の枕もとからうごごうとしないでいる看護婦の忍耐みたいなものがあらわれていた。	113-2		
1922	忍耐と精力があきらめのなかでひそやかながらも強くせめぎあっているらしい気配がたましかった。	113-3		
1923	私は冷たくてひそやかな苔の匂いのする薄暗がりのにびたまま重錘のように沈んでいき、だまって火酒をすった。	113-5		
1924	私の偏執のために女は不幸になりかかっているが、私はどうすることもできない。	113-6		
1925	ただグラスに酒をつぐだけである。	113-7		
1926	一昨日も、昨日も、今日も、私にはけじめがつかなくなってい	113-8		
1927	ソファに寝そべったきりで毎日ほぼおなじ回想とおなじようにきれぎれにたわむれ、しかもこのところ眠ることよりも眠りから浮きあがってきて半覚半醒の状態にあるほうを私は好み、なるだけ眼をあけるのをさきへさきへのぼし、いつまでもうつらうつらしてしようと努めるばかりなので、いよいよ日のけじめが朦朧とな	113-8		
1928	ソファの革は腹や背や頭のしたでぐにやぐにやになった。	113-12		
1929	俊敏そのもののサラブレッドが従順な稽古馬に変わったと知っているうちに、いまでは、骨だけがたくましくして筋肉も腱もすべてがだぶだぶにふやけゆるんでしまった廃馬と化したかのように感	113-12		
1930	廃馬のうえに廃馬がかさなって寝起きしているのである。	113-15		
1931	日は一つの鞆をでたり入ったりして、昨日が柄まで入ってからあつけなくていき、今日が柄まで入ってあつけなくていくのを私はよこになって眺めている。	113-15		
1932	入学試験に失敗したり、牛に追っかけられたり、地球めがけて墜落していったりすることはないが、そのかわりこの頃私は文章を書き始めた。	114-1		
1933	眠りからのさめぎわにきまって私は文章を書くのである。	114-2		
1934	小説か論文の一節らしいのだが、眺めている眼のしたで主題がのびのびとすこやかに育っていき、いくつかの副題がいい枝ぶりでひろがって全体に爽やかだったり、深かったり、愉しかったりする影を落してくれる。	114-3		
1935	主題が明晰にのびつづけるかたわら伏線があちらこちらにたくみに出没し、動機が堂々と述べられながら静機もはつきりと、しかしひそやかに姿をあらわし、単語はひとつひとつ雨を浴びたあとの光沢で輝きながら繁饒な茂みとなって意図や即興や必然や偶然の組みあわせを蔽うのである。	114-5		
1936	いつもそれは一本の樹木となってあらわれるのだが、私は育てるのに熱中しながら第三の眼で少しはなれたところから眺めてもいて、何よりも明晰さに恍惚となり、展開のあざやかさにうたれて茫然としてしまうのである。	114-8		
1937	しかし、眼がさめてしらじらしい日光といっしょに汚れた意識がもどってくると、それほどみごとな構築が跡形もなく消えてしまっ、いったいそれが小説だったのか、論文だったのか、それすら思いだすことができないのである。	114-11		
1938	ただあっぱれな明晰ぶりであったという意識のこだまだけが糸のような煙となって漂っているので、けっしてあれは夢ではなかったのだと感じられるのである。	114-13		

1939	うとうとしながら私はいま背を見せて遠ざかりつつある眠りのことを凡作とすべきか、愚作とすべきかとかんがえる。	114-⑩		
1940	疲労やしびれがどこかにのこっていないか、汗や体臭にまみれていないか、混濁がないかどうかとあちらこちらをまさぐってみ	114-⑪		
1941	そして理想としての眠りは理想としての酒とおなじくらい考えるのがむつかしいと考える。	115-①		
1942	食慾、情慾、運動、労働、思考、煩悶、愉悦、すべてが、いっさいがっさいが、生そのものが眠りによってのみ完成されるはずなのに眠るまえのことと、眠がさめたあとのことだけが論じられたり、評価されたりするのは不当でもあれば、ひどい手落ちではあるまいかと、うとうと考える。	115-②		
1943	せいぜい論じられるのは夢のよしあしによる後味ぐらいで、無数の作家たちが性の描写に熱中するほど眠りの描写に熱中しないのはどうしてだろうか、と、うとうと考える。	115-⑤		
1944	淡くて明るくて朦朧とした波のなかをたゆたいながら私はこれまでの四十年間に何のうてで寝たことだろうかと考えてみる。	115-⑦		
1945	ふとん。	115-⑨		
1946	ベッド。	115-⑨		
1947	フォームラバー。	115-⑨		
1948	鳥の羽根。	115-⑨		
1949	藁。	115-⑨		
1950	ハンモック。	115-⑨		
1951	床几。	115-⑨		
1952	駅のベンチ。	115-⑨		
1953	汽車の座席。	115-⑩		
1954	牧草地。	115-⑩		
1955	貨車の床。	115-⑩		
1956	梱包された荷物。	115-⑩		
1957	舗道。	115-⑩		
1958	畦道。	115-⑩		
1959	村道。	115-⑩		
1960	ゴミ箱のかげ。	115-⑩		
1961	ジャングルの枯葉。	115-⑪		
1962	女の腹のうえ。	115-⑪		
1963	じつにめまぐるしいばかりではないか。	115-⑪		
1964	めまぐるしいばかりの場所と材質についてこのうえない親密な関係を結んでおきながら大半を忘れてしまって、ありありと思いだせるものといえは心細いくらい少ない。	115-⑪		
1965	忘恩といってよいふるまいではあるまいか。	115-⑬		
1966	この減形のひどさはどうしたことだろうか。	115-⑭		
1967	阿片の眠りは減びてしまった無数の眠りのなかで珍しく形がのこっている。	115-⑮		
1968	ドラマめいたものは何もなかったのに大洋のなかの岩のようにそれだけは孤立して顔をこちらに見せている。	115-⑮		
1969	阿片を吸った直後にきたものは二度試しているのに全身と関節のけだるい弛緩の味のほかにこれといってほとんど何も思いだせないが、ホテルへもどってからベッドのなかで味わったゆりもどしとしての眠りはよくおぼえている。	115-⑰		
1970	その鮮明さはまったく予期しないものだったので、不意をうたれた愕きの味も記憶を手伝っているのだと思う。	116-②		
1971	酒を暴飲して翌朝ひどい宿酔に苦しめられても、一度眼をさましてからアルカ・セルツァーを呑んだり、熱い番茶に梅干をいれたのをすすったり、熱い風呂に入ったり、一連のおきまりの儀式をやったあとで、もう一度寝なおしてみると、ときにその二度めの眠りに思いがけぬいい味のものがくることがある。	116-③		
1972	阿片も私には二度が二度とも“ゆりもどし”の眠りがよかった。	116-⑦		
1973	あれはショロンの同慶大酒店のうらにある“国民中学校”という学校でテロがあったときのことである。	116-⑧		

1974	それはありきたりのみずぼらしい学校だが、そのみずぼらしい教室で男の先生と女の先生、四人が昼飯を食べているところへ二人の若者を護衛にしたオバサンがあらわれ、モーゼル連発拳銃をいきなり乱射して立去ったとのことであった。	116-9		
1975	私が現場へいったのは20分か30分後であった。	116-11		
1976	一人即死、三人重傷と聞いたが、死体はなくて、タイル張りの床におびただしい血が流れていた。	116-12		
1977	頭を射たれるとひどい量の血がでるものだが、血塊は早くも凝結しかかっている、それが血のかたまりというよりは、何かの生肉か内蔵のかたまりを投げだしたようにこんもり盛りあがっている	116-13		
1978	あたりにはサンダル、眼鏡、茶碗、箸などがころがり、あぶらっぽいような、淫らなような匂いがねっとりよどんでいた。	116-15		
1979	茶碗には御飯が盛ったままで、大きな鉢にはスープが入っている	116-16		
1980	その御飯は血でお茶漬けをしたようになり、スープはケチャップをとかしたようになっていた。	116-17		
1981	事件の原因はわからなかった。	117-2		
1982	警察で聞いたり、新聞記者に聞いたり、ベトナム政府の情報部で聞いてみたりしたが、誰も知らなかった。	117-2		
1983	サイゴンではしょっちゅうあることなので誰も特別の興味や関心を抱いている様子ではなかった。	117-3		
1984	テロリストが中年女だという点がちょっと珍しいといえはいるが、それはよその国のことで、ここではウドン売りのオバサンでも十八歳のタイピストでもテロリストになるのである。	117-4		
1985	これが華僑とベトナム人の抗争なのか、私的制裁なのか、政治的制裁なのか、華僑同士のそれなのか、華僑の北京派と反北京派のそれなのか、殺された先生たちは生徒に反共教育をしていたのか、親教教育をしていたのか、それともオバサンは息子が宿題をしなかったのを先生にとがめられたと聞いてカッと腹立まぎれにここではちょっと腹がたつと手榴弾やピストルや自動小銃やガソリンに手をだす習慣がある やったことなのか、私には何もわからずじまいであった。	117-6		
1986	妙な暗合ではあるがその学校のとなりが葬儀屋で、通りがかりにのぞいてみると薄暗い店のなかで人影がうごき、赤や黄をけばけばしく塗らた棺が天井まで積みあげられ、軒ばたにおかれた新品の棺のなかで赤坊が眠っていたのをおぼえてい	117-11		
1987	阿片屋へいったのはそれから二日後だった。	117-15		
1988	日本のある新聞社の支局で通訳としてはたらいっている中国人の青年に教えてもらったのである。	117-15		
1989	はじめのうちその通訳はいやがったり、私を脅したりし 外国人がうっかりたがいくと身ぐるみ剥がれたうえで眠っているうちに刺されてミト河岸の運河にほりこまれたりするといふのである 女を二人買えるだけの金をだして私は彼にむりやり地図を書かせ、誰にもいわないで、一人でいった。	117-16		
1990	ショロンのごみごみしたひどい裏町の、家というよりは小屋、小屋というよりは立小便で緑いろに腐った壁のなかの穴、そういうところだった。	118-2		
1991	むきだしの床にアンペラが敷いてあって、みんなどういわけかズボンやシャツをとって壁にかけ、パンツ一枚になって寝るので	118-4		
1992	そのため穴のなかは古着屋の倉庫のように見えた。	118-5		
1993	私がカタコトのゲトナム語と身ぶりでたのむとゴム草履をはいた小僧がでてきて煙管を仕立ててくれた。	118-6		
1994	コンデンスミルクの空罐に黒褐色の靴墨にそっくりのねばねばしたものが入っていて、それを長いピンの先でランプの火にかざして練り、ぷつぷつ泡をたてるのを煙管のなかへ、ドーナツ状にまんなかへ穴をあけるようにして仕立てるのである。	118-7		
1995	ひどく貧しい男たちがまるで骸骨を並べたように眠っていて、汗や垢の匂いが煙にまじってたちこめ、鼻や口がさまざまな音をたて、一本々々かぞえられる肋骨がゆっくりと上下するにつれて凄惨なほど薄くなった腹も上下し、臍が浮いたり沈んだりす	118-10		

1996	男たちは苦力、波止場人夫、三輪車曳きといった人々なのだろうと思う。	118-⑬		
1997	私はやがて全身が弛緩して行って、あとになっていくら努力しても味の思いだせない眠りを眠った。	118-⑭		
1998	そしてさめぎわにひどい嘔気をおぼえ、よろよろして穴から道路へでた。	118-⑮		
1999	ホテルへもどってベットにころがり、夕食は何にしようか、もう阿片はやめだと思ってるうちに私はうとうと、ゆりもどしの眠りにおちていったのだが、それがはからずも異郷をかいま見させてくれ	118-⑯		
2000	形のあるものは何ひとつとして登場しなかったけれど、昏睡におちこんでいるはずなのに意識がすみずみまで澄みきっているの	119-①		
2001	その澄明の感触がいまでも顔をこちらに向けている。	119-②		
2002	不安もなく、焦燥もなく、愉悦すらなく、感動もおぼえず、ただ冴えきった静穏だけがある。	119-③		
2003	骨、肉、内蔵、皮膚、すべてが消え、純粹そのものなのにきびしさがなく、ただおだやかな澄明が音もなくひろがっている。	119-④		
2004	その展開に面積や距離や方角は感じられなかった。	119-⑤		
2005	ただ私は安堵しきって澄明にまじまじと見とれていた。	119-⑥		
2006	いっさいの肉につきまとう属性が気化してしまって、眼がのこったという意識はないのに、見とれていたという感触がまざまざとさめてからあとにのこった。	119-⑦		
2007	眼をあけたまま眠っていたような感触がさめたときの私にあっ	119-⑧		
2008	安堵と澄明の徹底が熟眠の後の爽快となって全身に優しいこだまを漂わせていた。	119-⑨		
2009	私は茫然としてベットによこたわり、夜のサイゴンのざわめきが壁と窓をふるわせる気配に耳をかたむけた。	119-⑩		
2010	疲労のない忘我を私はそれまでに味わったことがなかったが、《無》の晴ればれとした澄明はそこまで浄化してくれたらしかっ	119-⑪		
2011	さめてしばらくすると私はさっそく言葉をさがすことにふけりはじめ、今日までにすっかりその周辺を塵芥捨場のようにしてしまっ	119-⑬		
2012	たが、いつかどこかでひろい読みで覚えたらしい『拈華微笑』という言葉がいつまでものこっていく。			
2012	文字を使わずにいっさいが通じあえる異境をさすのに文字を使わねばならないのがこの言葉の苦しい矛盾かと思われるが、それにこだわる気持ちがまったく私に起こらないのは、あの静穏で澄明な《無》が、いまだにどこかで、私のどこかで、指紋ひとつつ	119-⑮		
2013	けられなくて生きのこっている証拠であるかもしれない。			
2013	女が考えこんでから、ふと顔をあげ、「死んだらそういうところへいくのかしら」とつぶやく。	120-②		
2014	私がタバコに火をつけながら、「それだといいね」という。	120-⑤		
2015	女がひくく笑いながら、「だけど、どうかしら。」	120-⑧		
2016	阿片を吸わなければそんないい思いができない。	120-⑨		
2017	それはやむを得ないとしてですネ、その煙屋があなたみたいな汚穢趣味の人でないと潜りこめないというんじゃ、私なんか、とてもダメだ。	120-⑨		
2018	話を聞いただけでムカムカしてきそうだわ」という。	120-⑪		
2019	「ひどいなんてものじゃない。」	120-⑬		
2020	まるで糞溜めだね。	120-⑬		
2021	煙管の吸口には歯型がついていて、さきに吸ったやつのツバやら何やらでべちゃべちゃ濡れてる。	120-⑬		
2022	煙を吸うんだか、バイ菌を吸うんだか。	120-⑭		
2023	よくわからないね。	120-⑮		
2024	見ただけムツとくる。	120-⑮		
2025	それがあそこではいっこう平気で、気にも何にもならないね。	120-⑮		
2026	問題はそのあたりだ。	120-⑯		
2027	そのあたりから別れてくる」	120-⑯		
2028	「阿片も酒もよったあとのゆりもどしの眠りがいいってのはどういうわけかしら。」	120-⑰		
2029	どちらも暴力なのよ。	120-⑰		

2030	人体にはどちらも暴力なのよ。	121-①		
2031	脳が酔ってシビれてふらふらになるんだから。	121-①		
2032	二度めの眠りがおだやかでいいってあなたがいうのは、たたきのめされたあとで平衡をとろうとしてそういうのがでてくるのよ。	121-②		
2033	きっとそうだわ。	121-③		
2034	《拈華微笑》とやら、御大層なのは、疲労のあとのバランス作用の産物なんじゃないかしら。	121-③		
2035	右へいった振り子が左へもどろうとするとき一瞬停止するみたいに見えることがあるでしょ。	121-④		
2036	あの空白なのよ。	121-⑤		
2037	だから安らかなのよ」	121-⑤		
2038	「よくぞんじだね」	121-⑦		
2039	「上げ潮がひたひたさしてくるような感じじゃないかしら。	121-⑧		
2040	土左衛門が波うちぎわでぴちゃぴちゃと、ゆっくりゆれてるで	121-⑧		
2041	とても気楽で気持ちよさそうじゃない。	121-⑨		
2042	どうオ。	121-⑨		
2043	あんな感じじゃなかった？」	121-⑨		
2044	「とにかくあれは名作だったね。	121-⑪		
2045	阿片の力を借りてつくったから例外としておくべきだろうが、眠りというのは例外でないとおぼえておけないのかもしれないな。	121-⑪		
2046	あざやかなものだった。	121-⑫		
2047	いまだにおぼえてるんだからたいしたもんだ」	121-⑬		
2048	「わすれられないことがたくさんおありね」	121-⑭		
2049	「たくさんじゃないけど、あるね」	121-⑮		
2050	「私の知らないことがたくさんね」	121-⑯		
2051	「それ以上いっちゃいけないよ」	121-⑰		
2052	「いけないことがたくさん」	122-①		
2053	「おたがいにあるという意味ですよ」	122-②		
2054	「まあね」しばらくして女は本をベッドに伏せてたっていく。	122-③		
2055	明るく清潔な浴槽に入って歯を洗う。	122-④		
2056	私はものうくソファのうえで寝返りをうち、水の音を聞くともなく聞	122-⑤		
2057	やがて女はでてきてネグリジェに着かえ、デオリッシモをうなじに一滴、顎に一滴つけてから、おやすみなさいといってベッドにすべりこむ。	122-⑤		
2058	私は火酒をつぎ、タバコに火をつけ、棺のなかですやすや眠っている赤ン坊や、泡の音をたてる粘膏や、餓鬼のような男たちのぺちゃんこの腹のうえで上がったたり下がったりする臍のほうへもどっていく。	122-⑦		
2059	事件があって二日たってから阿片屋へ行ったのは、血は血、煙は煙だ、俺は血の記憶を煙で消そうとしてるのではないのだと弁解したいためだったように思う。	122-⑩		
2060	その二日間に私は警察、政府の情報担当官、顔見知りのアメリカ人や、ヴェトナム人の新聞記者たちに会って真相をたずねまわっているのだが、結果からすると、そういう無駄をやったおかげで、光景は遠ざかり、“一切不明”という形式のなかに半ば姿を埋め、最前線のジャングルや、病院や、水田のほとりをあれこれと思いうかべることをした。	122-⑪		
2061	私はどんな場所でも血を見ると平静でいられない。	122-⑯		
2062	何度見ても慣れることができない。	122-⑰		
2063	血は流れたのでも、凝固しかかったのでも、乾いたのでも、いつもじっとしていらぬ鮮やかさで迫ってくる。	122-⑰		
2064	ただ愕然として佇んだまま眺めるしかない鮮やかさである。	123-①		
2065	だからあれこれ思いだして比較するうちに時間がたってくれるのを待つしかないのである。	123-②		
2066	ショロンに向かって走る。	123-③		
2067	床に大穴があいてドアのハンドルが針金で代用してある四ツ馬印のルノーのなかで血は血、煙は煙だと内心で私がつぶやいていたのはとりまおさず血の影のなかにあった証拠である。	123-③		

2068	壁の穴に入っていきながら私がかつぎこんだのは“革命”や“正義”や“革命後”をめぐり、うんざりするほど毎日反芻しながらいつまでたっても朦朧にしか私をおいてくれない、指紋でよごれきった思惟の群れであった。	123-⑤		
2069	殺す覚悟か、殺される覚悟がなければ血を高声に批評する資格はないと私には思えた。	123-⑧		
2070	そしていずれかの覚悟は文章ではなく肚のなかに書かれることなのであり、それはもっぱら“革命後”に何事かを期待するかしないかの態度からくるものと思われたが、私はあまりにも剥げ	123-⑨		
2071	私にできることといえば、見ることだけであった。	123-⑪		
2072	私がそうしようとしたために右からか左からか銃弾か破片がとんでくるのなら私はただそれに耐えるしかなかった。	123-⑫		
2073	一匹の犬として殺される覚悟を精練するしかなかった。	123-⑬		
2074	床のところどころに豆ランプがおかれ、小僧がコンデンスミルクの空罐と、長いピンと、脂で飴いろに染まった煙管を持って薄暗がりのなかをうごきまわってる穴の光景は異様なものだったが、たちまち私は慣れてしまった。	123-⑭		
2075	餓鬼のようにやせさらばえた男たちは手術をうけにきた人たちの姿勢で眠りこけながら部屋を呼吸音でせわしくざわめかせていて、ふと私は、床屋か銭湯にきたような気持ちになることが	123-⑯		
2076	シャツとズボンをぬいでじとじと湿った壁の古釘にかけたあと、パンツ一枚でかたいアンペラによこたわり、はじめのうち私は自分が肥厚していることを恥じる気持ちでぐずぐずしていたが、ランプの淡い火のなかで小僧がところどころに優しさのある手慣れきったしぐさで煙管を仕立ててくれるのを眺めているうちに、	124-②		
2077	ところどころに象牙をあしらった長いラオスの竹の光沢、とぼしい灯に浮かんだ小僧の低い鼻、いきいきといたずらっぽそうな眼、熟練家の静穏なものうさなどが私をほのぼのとした安堵にさそい、ここへくるまでに重荷でならなかった役立たずの反省は、どうでもよくなってしまった。	124-⑤		
2078	いびき、吐息、ためらうような気配はあるがつかずにはいられないらしい深呼吸、歯ぎしり、塩辛い汗の匂い、甘酸っぱい膿んだ足の匂い、阿片の異香、それらにみたされた闇の、せわしいけれどつつましいところのあるざわめきのなかに、すぐ私はけだる	124-⑧		
2079	手を失い、腹を失い、形を失っていった。	124-⑪		
2080	となりの男の顔をちらと豆ランプの灯のなかでうかがうと、まさにやせさらばえて秋霜烈日の気配をたたえた荘厳の皺に荒されているが、手足をのびのびとのぼし、高い頬骨に輝くような血のいろを射していた。	124-⑪		
2081	彼が私よりはるかに年長であるらしい気配に私は安堵をおぼえ、静穏だが活潑に息づいているらしい気配にも安堵し、どうしてか、これほどの男までがきているのだからという気持ちになっ	124-⑭		
2082	薄いアンペラにおかれた手首が削ぎに削がれてマッチ棒のようになった骨で組まれているのが見えた。	124-⑯		
2083	それが眼のすみにのこって音が消え、匂いが消え、壁が消え	124-⑰		
2084	当時私は自身が剥げかかっているのを知りながら眼をそらすことにふけていたが、近頃は、ことにいまは、眼をそらすことができなくなっている。	125-②		
2085	私はすりきれかかっている、接着剤が風化して粘着力を失い、ちょっと指でついただけでたちまち無数の破片となって散乱してしまうように感じられてならない。	125-③		
2086	いつか女が駅前広場の早朝の酒場で外国暮しをしていて“人格剥離”が起るとつらいといったと思うが、私には“人格”と呼べるほどのものがあると思えないのに“剥離”だけがひどく	125-⑤		
2087	東京にいても外国にいても、道を歩いていてふいにたまらなくなってしまうと、ホテルのドアをすりぬけようとしたはずみに愕然とたちどまりたくなったり、夜なかに眼がさめてライターをとろうと手をのばしたはずみに凍りついてし	125-⑦		

2088	それはきざしもなく、予感もできず、ふいにやってきて瞬間的に私の足をすくってしまう。	125-⑩		
2089	人と話をしたり、酒をのんだりしているときに、とつぜん奈落におちこんでいるような衝動が起るのである。	125-⑪		
2090	雪崩れのようなだったり、足場の砂がくずれるようだったり、とつぜん足がガクンとなるようだったり、さまざまだが、一度それが起ると、私はしびれて阿呆みたいになってしまう。	125-⑫		
2091	必死でその剥落をかくそうとして私はひきつれたような微笑を頬にうかべるのだが、とつぜん流暢にしゃべっていた相手の男が眼をそむけてあいまいになったり、ぐずぐずしたり、倦んだそぶりになったりするので、眼が私を裏切っているらしいことが察しら	125-⑭		
2092	体が椅子からころげおちないようにテーブルのはしをつかんでいなければならない。	125-⑰		
2093	音もなく表層や内部を崩れおちて走っていくおびただしいものの気配に私はおびえ、子供のような眼をしているのだと思う。	126-①		
2094	瞬間は私がひとりであるときにも、人といつしよにいるときにも、雑沓のなかにいるときにもやってくる。	126-③		
2095	東京の地下鉄の構内でも外国の裏町でもやってくる。	126-④		
2096	食事のさいちゅうにも情事のさいちゅうにもやってくる。	126-④		
2097	気まぐれで、苛酷で、容赦なく、選り好みということがない。	126-⑤		
2098	一瞬襲いかかると、圧倒的にのしかかってきて、すべてを粉碎して去っていく。	126-⑥		
2099	会話、冗談、機知、微笑、言葉という言葉、すべてが一瞬にさらわれてダスト・シュートにさらいこまれてしまうのである。	126-⑥		
2100	待てと声をかけるすきもない。	126-⑧		
2101	気がついたときはいつも遅すぎて私は茫然として凍え、音も匂いもない荒寥の河原にたつて、あたりをまじまじと眺めている。	126-⑧		
2102	そうでなかったら、酒瓶や、皿や、コックの頬肉や、ピカピカ光るガラス扉や、その向こうに見える巨大なビルなどが、壮大で無慈悲な塵芥の群れ、手のつけようのない屑と感じられ、私は波止場におりたつたばかりの移民のようにたちすくんでしまう。	126-⑩		
2103	この十年間、私は旅ばかりしていたが、こうしてソファによこになって火酒をだらしない海綿のように吸いとりつつ考えてみると、ただあの瞬間に追いつ追われつして、逃げまどい、しよつちゅうさきを越しているつもりでいながらいつも待伏せしてたたきのめされ、ひとたまりもなく降伏して、あてどない渴望とおびえのなかでうろろうしていただけのように思えてくる。	126-⑬		
2104	たしかに旅の感動は出発にあるけれど、空港に向う暗いハイウェイの自動車のなかですでに私は火が消えかかるのを感じず	126-⑰		
2105	帰国となると日本茶、ソバ、海苔、冷や奴を食べたい一心ではあるけれど、他にはほとんど何もないのである。	127-①		
2106	むしろ嫌悪や憂鬱が空虚のふちにただようばかりである。	127-②		
2107	私の褪せやすさはこのガラスの部屋にきてから何日もたたないうちにただソファに寝てばかりという事実にもあらわれているよ	127-③		
2108	しかも出発にも帰還にもめざましいめざましさが何もないのに帰国してからものの三ヵ月もたつと私はそわそわして焦燥をおぼえはじめるのである。	127-④		
2109	沈殿をにくみはじめるのである。	127-⑥		
2110	すわったままで頭からじわじわ腐敗しだすように感ずるのであ	127-⑥		
2111	旅はとどのつまり異国を触媒として、動機として精機として、自身の内部を旅することであるように思われるが、自身をめざすしかない旅はやがて、遅かれ早かれ、ひどい空虚に到達する。	127-⑦		
2112	空虚の袋に毎日々々私は肉やパンや酒をつぎこんでいるにすぎないのではないか。	127-⑧		
2113	旅をしすぎたために褪せやすくなったのだとするなら気が楽であ	127-⑨		
2114	しかし、あの瞬間は旅をしてもしなくても、十八歳のときにも四十歳のときにも、まったくおなじ強さを持っているようなのだ。	127-⑪		
2115	子供のときから私は名のないものに不意をうたれて凍ったり砕けたりしつづけてきた。	127-⑬		

2116	いつ剥離するかしれない自身におびえる私には昂揚や情熱の抱きようがなかった。	127-⑭		
2117	情熱は抱くのもおそろしいがさめるのもおそろしかった。	127-⑮		
2118	昂揚のさなかにあの瞬間に襲われた場合を考えると何にも指をふれることができなかった。	127-⑮		
2119	私にはいつもどこかに人の視線の射さない薄暗い部屋が必要だった。	127-⑯		
2120	瞬間に剥奪されたときにそこへもぐりこんでうつらうつらしながらひたすら破片がもとへもどって“私”という心臓のある人形の形になるまで潮がさすのを待つようにしてられるひっそりとした小部屋が必要だった。	127-⑰		
2121	ときに瞬間は掃滅的に走るあまりその小部屋をも碎いて流し去ってしまうことがあったが、そういうときには昼だろうと夜だろうとかまっていられずに歩きまわり、顎が落ちそうになるまで歩	128-②		
2122	また一日につきからつきへのべつに七つの映画館に入ってはちょっと見て出てしまつてまたべつに入るというようなことをしなければならなかった。	128-⑤		
2123	白昼と闇とが句読点も文法もない支離滅裂の文章のように入りまじって、そのことに苦しむ力もなくなり、膝がふるえだすほどくたくたになってしまわなければならなかった。	128-⑥		
2124	無数の色をかさねてついに白となるのを待つような望みのない作業だが、闇から白昼へ、白昼から闇へ、昼のコウモリのようにせかせかとび歩いていると、懈怠にふけているはずなのにひよつとすると私は激情家、熱狂家なのではあるまいかと思わ	128-⑧		
2125	瞬間に襲われてトランプのお城よりも脆く崩れてしまった自身に耐えたり、たてなおしたりするのに、おそらく私は手を使うべき	128-⑫		
2126	事物を壊すのもいい、作るのもいい、ただ触れているだけでもいい。	128-⑬		
2127	手を使うべきだった。	128-⑭		
2128	バクチでもいいから手を使えといった中国古代の哲学者や指を水に浸して内的独自にふけるインドの哲学者に倣うべきだっ	128-⑭		
2129	しかし、私は牧場や工場をさがしにいってゆとりがなかったし、瞬間はいつ、どこであられるかわからなかった。	128-⑮		
2130	私は通りすがりの映画館に入って眼を酷使した。	128-⑰		
2131	呼吸のざわめきや、いやな匂いをたてるぐにやぐにやと温かい皮膚にみたまされ、たえまなしに色と音が変わりつづけているその闇にもぐりこんでいると潮のように迫ってくるものからしばらく体をかわすことができた。	128-⑰		
2132	そうするとひりひりする、それでいておぼろな不安にまじって、一抹の優しい安堵がにじんできるとようなのだ。	129-③		
2133	はるかかのちになって古着屋の納屋のような阿片屋の闇のなかでのびのび手や足をのばして晦冥に沈んでいったことを思いあわせると、十代、二十代、三十代の私を追いたてたものはやっぱりいまだに追ってきている。	129-④		
2134	映画館からでてそれがまだ白昼だと、外光にふれた瞬間にひどい一撃をおぼえる。	129-⑦		
2135	まるで背後からつきとばされるようである。	129-⑦		
2136	新宿や有楽町などのなじみの界隈だったときにはよく知った看板や建物があるので眼は吸収してハリボテのようなものでも形を私にあたえてくれるが、たまに五反田や江東などの見知らぬ地区でそうなると、まぎれもない東京なのに、まるで異星におりたような孤独をおぼえる。	129-⑧		
2137	滅形がたちなおるところか、いよいよ深く食いこんでくる。	129-⑪		
2138	それが夜だと私はどこにいても安堵をおぼえられる。	129-⑫		
2139	孤独はあるが、よく着なれてぴったり体にあい、洗濯されて繊維がすっかりいきいきとなったシャツを着るように体にまとうことができ、むしろ爽快をおぼえるほどである。	129-⑫		
2140	喜劇。	129-⑮		
2141	悲劇。	129-⑮		

2142	西部劇。	129-⑮		
2143	家庭劇。	129-⑮		
2144	笑劇。	129-⑮		
2145	ミュージカル。	129-⑮		
2146	マンガ。	129-⑮		
2147	探検。	129-⑮		
2148	戦争。	129-⑮		
2149	記録。	129-⑮		
2150	看板を見て私はそのときそのときどれだけの気力がのこっているかを測ってから闇に入っていく。	129-⑮		
2151	そして科白やシーンのちょっとしたきっかけにそよいでたちあがってしまい、またつぎの館へせかせかと入っていく。	129-⑰		
2152	顔の見えない人びとの嘆息、笑い、舌うち、声になりきらない嘲り、発作としての哄笑、それぞれのいくらかずつを破片として私は吸収し、科白や、視線や、光景の手のつけようのない玩具箱となって穢れた舗道を歩いていく。	130-①		
2153	破片にすぎないのに切実な科白や辛辣な科白が浮きつ沈みつして、私は煮込み鍋のようである。	130-③		
2154	暗示をうけ、えぐられ、広大なものを一語に短縮してみせたシナリオ・ライターの職人業におびえたり、舌うちしたりしながら最終の郊外電車にのる。	130-④		
2155	へへとにくたびれて息をつくのもやっとなというありさまだけれど、闇からいきなり白昼へつきだされたときのような苛酷さはな	130-⑥		
2156	酔った男、酔った女、酔えない男、酔えない女、荒廃した少女、無気力な若者、吐瀉物の泡と汁、競馬場のような紙屑などにみ	130-⑦		
2157	たされた古鉄の箱の蒼白い荒寥は、むしろ、私にふさわしいも	130-⑩		
2158	屑と騒音にみだされた深夜電車以上に私にふさわしいものはないように思える。	130-⑩		
2158	たがい自身を蔽う気力を失ってしまい、さらけだしてしまっ、魚か蛙のような眼になりながら、見かわしあって恥じることもなく、避けることもない。	130-⑪		
2159	ひとかたまりのスポーツ新聞が城のような影を床におとしてい	130-⑫		
2160	サイゴンで政権交替がかけろうのゆるるようにおこなわれていた頃、外国人の記者がその点を指摘すると、情報担当官は冷静なまなざしで、フランス大革命当時とおなじですよと答えたことがあり、その夜の記者たちのカクテル・サーキットで話題と	130-⑭		
2161	その返答を揶揄するかしないかでどうにでもなることだったが、記者たちはもっぱら大時代すぎると一点に拠ってにがにがしく嘲っていたようである。	130-⑯		
2162	からからに乾いた骨からでも脂汗をしぼりだしそうな蒸暑さにあえぎながら角度のにぶくなっただライ・マーティニをすすって私もいいかげんに、ただ嘲りだけは鋭くしようと構えて笑っていた一人だったが、自国でおこなわれつづける“大時代”には真摯なのに遠い異国でおこなわれるそれについては皮肉や機知を考	131-②		
2163	えることしかしないのは、どれだけこの国について肉でないかの証拠にほかならなかった。	131-⑦		
2163	ある日、私は日本の記者の一人と首相に会いに官邸にでかけ	131-⑦		
2164	質問の時間は短く限定され、記者だけが質問できて、私は黙っているしかない条件にあったのだが、一連の質問のあとで、記者はきわめて痛切な質問を發した。	131-⑦		
2165	「現在の戦争を終らせるためなら原爆を使用してもいいとお考えですか？」	131-⑩		
2166	首相は通訳の言葉を聞いてから、しばらく厚い首をさげて牡牛のように沈思した。	131-⑪		
2167	彼はのちに判明したことだが八十日か九十日ほどしか政権を担当することができなかったのだが、誰に聞いても、清廉、潔白、剛直の人物であった。	131-⑪		

2168	腐敗そのもののなかにあって断じて腐敗に染まることがなく、ディエム時代には主義をおなじくしながらプーロ・コンドール島に流島された惨苦の経験の持主でもあるのだが、不遇時代には三輪車曳きやタイプストをしたことまでであると伝えられ、少くとも清廉では右にできるものがないという噂さの人物であった。	131-⑬		
2169	彼は見たところ肉の厚い村長であった。	131-⑰		
2170	首も、手も、胸も厚く、機知や謀意で眼がうごくことなく、どこもかしこも野暮で重厚でにぶかった。	131-⑰		
2171	バナナの林でかこまれた遠い水田のほとりの村からふいに昼寝をたたき起されて泥や、重税や、果てしない苦役などを体現しつつ首相室に登場したようなところがあった。	132-①		
2172	首相は低い声で答えた。	132-④		
2173	「世界が同意するならそうします」貧しいが剛直で自身の信念のためにしか生きていないと思われるこの反共主義者が、狂信家の閃めきや熱情をどこにも見せずそうつぶやいたとき、私はぼんやりして、ただ彼の目焼けた、たくましい首すじにある、数知れない皺を眺めているだけであった。	132-⑤		
2174	非妥協の容赦なさを彼は私のまったく知ることのない離れ島の監獄や、ぬらぬらする三輪車のハンドルや、眠ってしまいたくなるようなタイプライターの音などのなかで精錬してきたはずで、その敵については日夜考えぬき、迷いぬき、観察しぬいてきたあげくのものとたって発言していると感じられた。	132-⑧		
2175	のちに私は彼が彼よりはるかに年下の三文役者たちに追放されたとき、原因が彼の頑愚なまでの清廉と剛直の性癖にあると知ようになった。	132-⑫		
2176	しかし、そのときソファに腰をおろしていた私にあったのは、蒸暑さのために汗にぬれしょびれて形を失ってしまった剥落感で	132-⑭		
2177	世界が同意するなら原爆を使ってもかまわないと低いがはっきりといいきるこの重厚な村長風の人物の決意にまったく私は触れていなかった。	132-⑮		
2178	否定もなく、肯定もなく、好意もなく、憎悪もなく、ただ私は眼をひらいて、淡々とした相手の横顔を眺めているだけだった。	132-⑰		
2179	東京の終電車に散らばる新聞屑の影をまじまじ眺めるようにその深い首すじの皺を眺めているだけであった。	133-①		
2180	外交辞令として彼が自身の信条の熱烈と徹底を表明したくていい慣れた科白としてそういったのか、どうか、私には察するすべがなかった。	133-②		
2181	私にわかるのは愛、憎しみ、嫌悪、侮蔑、共感、恐怖などの、どれも私にないことだった。	133-④		
2182	そのうちのどれも、ひとかけらとしてなかった。	133-⑤		
2183	あきらかに彼の惨苦をきわめたらしい生涯の、私どう逆立ちしても及びもつかないらしい経験の苦汁があちらこちら沁みだしている気配に圧倒されながら、いっぼうで私はエアコンがきかないために汗がしたたりつづけるのをわずらわしがりつつ、風邪をひいたゴムのようににぶい自身を持てあましていた。	133-⑤		
2184	夏が膿んでいる。	133-⑫		
2185	夏は熟するというよりは膿んできた。	133-⑪		
2186	早朝には森のほうで鳥の声が聞こえ、日光に軽快でわきたつ歓声のようなものがみなぎっている。	133-⑪		
2187	しかし、それはせいぜい十時頃までで、それをすぎると、空は白い輝きにみだされ、やわらかくて膜をかぶった膨張がいたるところにあらわれる。	133-⑫		
2188	バルコンのドアをいっぱいひらいておいても微風はたるんでだらけてしまい、ぬるま湯のようによどみ、さきほどまでの刃のような爽快さがどこにもない。	133-⑭		
2189	カーテンのうしろに大きな影ができて私はカニが穴に入るようにそこへ入って行って寝そべるのだけれど、淵の涼しさもなにもな	133-⑮		

2190	永い午後いっぱいへやのまわりにもなかにも熾った炭火の透明なゆらめきのようなものがたちこめる。	134-②		
2191	昼寝からさめると私はシャワーを浴びにたつが、膚を水が走っているあいだけ形がもどり、ソファにもどると、もうとけかか	134-③		
2192	熱くてむっちりしたゆらめきのなかをよこぎってソファと浴室のあいだをいったりきたりするだけで私はせいっぱいである。	134-④		
2193	いまは駄馬よりも蹴くちやで柔らかくみじめになったソファのなかで私は汗をかきつづけ、とけかかったバターのかたまりとなって	134-⑦		
2194	女がブラジャーひとつになって汗をぬぐいぬぐい粉を練りあげて作ってくれるピッツアはこってりとした栄養にあふれ、澱粉や脂肪や蛋白でいっぱいだが、私はそれを一片ずつ口にはこびながら、粉は腹にやわらかい肉をつけ、魚は頬に袋をつけ、サラミは胸にだぶだぶした蔽いをつけるように感ずる。	134-⑧		
2195	食事をすませてたちあがると全身が汗ばんでずっしりと重くなり、体のあちらこちらにわずらわしいさまざまなものがぶらさがるように感ずる。	134-⑪		
2196	「呑みこんではだし、呑みこんではだし、まるでこれはゴカイかミミズだね。	134-⑭		
2197	ミミズの平和だよ。	134-⑭		
2198	消費しているだけだ。	134-⑮		
2199	眼もなく、耳もなく、ただ太って、それでいて異義の申したてようがない。	134-⑮		
2200	甘くて無為。	134-⑯		
2201	ドルチェ・ヴィータとはとどのつまり太るということかね？」	134-⑯		
2202	「いいじゃない。	134-⑰		
2203	私は、気にならないわよ。	134-⑰		
2204	私の作ったもので太ってくれるのならたのしいわ。	134-⑰		
2205	いらいらしなくていいの。	135-①		
2206	あなたは目下休暇中なんだから食べて寝てたらしいのよ。	135-①		
2207	私の影のなかに寝そべて太るんですね。	135-①		
2208	どこにも逃げだせないくらい太らせてあげる。	135-②		
2209	たのしいわヨ。	135-②		
2210	親ネコになってるみたいな気分だわ」	135-③		
2211	「町はどうなってる？」	135-④		
2212	「毎日人が減っていくわ。	135-⑤		
2213	酒屋も食料品店もどンドン閉って、品物を見つけるのに一苦労	135-⑤		
2214	昨日まであいてたお店が今日は閉っていて、錠がおりて、三週間の休暇をとりますなんて紙が貼ってあるの。	135-⑥		
2215	休暇に今年は二千万人繰りだすだろうって新聞が書いてる。	135-⑦		
2216	有史以来のことだっていうの。	135-⑦		
2217	道路という道路が南行きも北行きもギッシリつまっちゃって、おとついななんか四時間もストップしたところがあるというわよ。	135-⑧		
2218	この分だと来年は二千五百万人ぐらい繰りだして、有史以来ということになりそうね。	135-⑨		
2219	毎年有史以来といって騒いでるわよ。	135-⑩		
2220	もっとも騒いでるのは新聞だけで、人民は誰も気にしちやいないけど」	135-⑪		
2221	「シュタインコップ先生は？」	135-⑫		
2222	「三人ばらばら。	135-⑬		
2223	先生は山へ行って、奥さんは海岸へ行って、秘書はどこか行方不明よ。	135-⑬		
2224	それを教えてくれた学生も今日からどこかへいっちゃうし、キャンパスも研究室もまるでからっぽになっちゃった。	135-⑬		
2225	学生運動もとつくに空中分解よ。	135-⑮		
2226	海岸で夏いっぱいかかって殴られたりシェパードに噛まれたりした傷を治して秋になったら帰ってきてまたやるんだといってるのもいるけれど、どうかしら。	135-⑮		
2227	休暇は何もかも流しちゃうわ」	135-⑰		
2228	「残っているのはおれたちぐらいか？」	136-①		

2229	「駅員とね」	136-②		
2230	うってかえすような口調で女はつぶやき、笑いにまぎらわして口のはたに鋭い嘲りの皺をきざむ。	136-③		
2231	ついこのあいだまではそれは諦めと忍耐のふちにただようよう翳りのようなものだったが、いまは日に日に鋭く、また、あらわになっている。	136-④		
2232	私は栄養といっしょに思い出で体重がふえている。	136-⑤		
2233	思い出も贅肉となって体のあちらこちらにだらしない姿でぶらさがっている。	136-⑤		
2234	毎日々々なぶりまわすものだからすっかり指紋でよごれてしまつて形も顔も失われてしまった。	136-⑥		
2235	それでいて私はソファにたおれこむときや、体を起こすときや、食事でテーブルにつくときなどに、思い出で体がずっしりと重くなっていると感じたがるのである。	136-⑦		
2236	日附や発送地名もすりきれてよく読みとれなくなった、あちらこちら崩れたり、ほどけたり、腐ったり、蒸発したりしかかっている、引取手のない梱包でいっぱいになった古倉庫なのに、まるで出港前日の船であるかのように感じたがるのである。	136-⑩		
2237	すりきれた赤いカーテンのかかっている部屋で寝たり起きたりしながら女のくるのを待っていたときのように、いつのまにか、ぐにやぐにやしたものが私から生えている。	136-⑫		
2238	根をひろげ、茎をのばし、葉を茂らせ、蔓をゆらめかせている。	136-⑭		
2239	私をからめとってソファへ身うごきできないまでにおさえこみ、無気力なまま繁茂しながら床へなだれおちてカーベットの這い、ヤクの毛皮を蔽い、壁いちめんをかくそうとしている。	136-⑮		
2240	そのざわざわとした、濃密に息づく気配は、ソファに寝そべっている私にのしかかり、蔽いかぶさってきて、全身を蔽わんばかり	136-⑰		
2241	体を起すと、一瞬たじろいで消えるが、部屋をよこぎって浴室に入り、シャワーの栓をひねろうとすると、もうそこに侵入してきて	137-②		
2242	頭から私を蔽いにかかり、肩や腹のまわりで音もなく繁殖してざわめき、脛から腿へ這いあがってくる。	137-③		
2243	冷たい水が頭に降りかかってくると、ちよつとたじろいでうしろへさがるが、水が頭、肩、胸、腹、睾丸、腿と流れおちるにつれて生温かくなっていくと、そのあとあとから私に抱きつき、からみつこうとかかってくるのが感じられる。	137-④		
2244	私は部屋だ。	137-⑦		
2245	うつろな部屋だ。	137-⑦		
2246	人もいず、灯もないのに鬱蒼とした蔦で壁を蔽われた部屋だ。	137-⑦		
2247	一昨日のことだった。	137-⑨		
2248	午後四時頃、私は昼寝からおぼろにさめかかっていたが、部屋いっぱい白い暑熱のゆらめくのをまぶたにおぼえ、眼を閉じたまま、うつらうつらしていた。	137-⑩		
2249	とつぜんドアのよこの壁のなかでベルが鳴り、しゃがれた男の低い声がひびいた。	137-⑪		
2250	私がかここにきてからは誰一人として訪れるものがないのでそういう装置があるとはわかっている、鳴るのを聞くのは、はじめてのことだった。	137-⑫		
2251	男の声は堅固、有能で、親しげだった。	137-⑭		
2252	二度、三度つづけて女の名を呼び、私の知らないこの国の言葉で何かつぶやいた。	137-⑭		
2253	部屋のむこうの壁にくっつくようにして寝ていた女がベッドからとびだし、何か高い声をあげながらインター・フォンへとびついて	137-⑮		
2254	ふきこぼれるように女は早口でしゃべり、高く笑ったり、小さく叫んだりした。	137-⑰		
2255	ひとしきり通話が終わると、女は裸の腰に手をあてがい、私を眺めた。	138-①		
2256	ここ何日もついぞ見かけなかった快活で活潑な、いきいきとしたいろが眼のなかで跳ねている。	138-①		
2257	女は笑いながらいった。	138-③		

2258	「シュヴァルツェンベルクさんがアメリカから帰ってきた。	138-④		
2259	大層な名前だけれど、ウィーンあのシュヴァルツェンベルク通りとは何の関係もないのよ。	138-④		
2260	ここの大学の数学の先生だったんだけど、調子があわなくてアメリカの大学へとびだしちゃったの。	138-⑤		
2261	それがいまくるというの。	138-⑥		
2262	もとはよくこの部屋でピッツァ・パーティーをしたものよ。	138-⑦		
2263	数学の教授だけれど、たいへんな野人なの。	138-⑦		
2264	自分の家を作るのに自分で森へ行って木を切ったり、斧で割ったりしてね。	138-⑧		
2265	そうしなきゃ気がすすまないってたちの人なの。	138-⑨		
2266	だもんで一事が万事、大学と調子が狂っちゃってアメリカへいったのよ。	138-⑨		
2267	釣りが大好きでね。	138-⑩		
2268	あなたと話があうと思う。	138-⑩		
2269	ちょっと挨拶だけしに立寄ったというの。	138-⑩		
2270	いまくる。	138-⑪		
2271	二年ぶりだわ」	138-⑪		
2272	それだけいうと女はベッドのほうへとんでいって、すばやく床からシャツをひろいあげ、デニムのズボンに体をよじて足をとお	138-⑫		
2273	それがすむと壁の鏡のところへかけつけて髪をなおしたり、香水をふったりした。	138-⑬		
2274	「ちょっと、あなた、寝てないで」女はいきいきと叫んだ。	138-⑮		
2275	ソファにぐずぐずと起きなおるうちに朦朧とした憂鬱がひろがりはじめ、ひろがりだしたとたんにそれはおさえようもなく全身にひろがってしまった。	138-⑰		
2276	私は裸の下半身に毛布を巻きつけてソファからおりと、皺をちょっとなおしてから、キッチンへ入っていった。	139-①		
2277	うしろでベルが鋭く鳴りわたって成熟した男の声がし、女がはずんで迎える声をした。	139-②		
2278	男はソファに腰をおろしたらしく、愉しげな談笑がはじまった。	139-③		
2279	そのあいだずっと私は息をひそめてステンレスの湯わかしに映る淡い靄のような自分の顔を眺めていた。	139-④		
2280	女は湯わかしもフライパンも皿も徹底的に磨きぬくのでキッチン	139-⑤		
2281	はしみも、匂いも、騒りもなく、何もかもが病院の清潔さで輝いてたえまなく女はしゃべり、高い笑声をまじえてたずねたり、答えたりしている。	139-⑦		
2282	澁刺と顔をひらいてはしゃいでいる気配がある。	139-⑧		
2283	声めざましいばかりに跳躍している。	139-⑧		
2284	それを聞いていると女が私といるためにどれだけ抑圧されているかがよくわかった。	139-⑧		
2285	いま浮いているだけ私に沈められているのである。	139-⑨		
2286	看護婦が勤務時間後にとつぜん女にもどったような気配があ	139-⑩		
2287	にがりがじわじわとひろがってくる。	139-⑪		
2288	体のあちらこちらにぶざまなこわばりがはびこり、私にはまさぐりようのない嫌悪とおびえに蔽われていた。	139-⑪		
2289	たった一人の大学教授と挨拶をかわす気力もない衰退がにがにがしく、また、重かった。	139-⑫		
2290	私は腰から毛布がずりおちないようにおさえながら湯わかしを眺め、指一本、持ちあげられそうになかった。	139-⑬		
2291	足を一步踏みだすこともできそうになかったし、キッチンからでていけそうにもなかった。	139-⑮		
2292	壁のむこうでゆらめく暑熱がむっとたちこめ、私は汗ばんで佇んでいた。	139-⑯		
2293	嫌悪は壁からも水道栓からも、皿、匙、瓶、それらの一ミリの乱れもない列や堆積のすべてからたちのぼってつよい酸のようにあたりいちめんによどんだ。	139-⑯		
2294	女が入口に佇んで声をかけた。	140-②		
2295	「こんなところにいたの」	140-③		

2296	「……………」	140-④		
2297	「どこへいったのかしらと思ってたら、こんなところにかくれていたのね。」	140-⑤		
2298	そんな恰好して、おかしいわ。	140-⑥		
2299	でておいでなさいよ。」	140-⑥		
2300	「先生はもう帰った？」	140-⑦		
2301	「帰ったわ。」	140-⑧		
2302	魚釣りの話をしたがっていたようよ。	140-⑧		
2303	会えないで残念だ。	140-⑧		
2304	またくるって。	140-⑧		
2305	ちょっと変ってるけどいい人なのよ。	140-⑧		
2306	今度は会ってあげてね。	140-⑨		
2307	あなたならきっと話があうと思う。	140-⑨		
2308	気楽にしていい人なのよ。」	140-⑩		
2309	「……………」	140-⑪		
2310	口をききかけて私は黙った。	140-⑫		
2311	教授の残していったものが女の顔の上で輝きながら優しく揺れ、女は眼も顔もひらいている。	140-⑫		
2312	痛切な手紙をもらった囚人のようだ。	140-⑬		
2313	かるやかにステップを踏まんばかりにはずんでいる。	140-⑬		
2314	私が廃物になってしまっていることにまだ気がつかないでいる。	140-⑭		
2315	感じないでいるか、感じて認めようとしなくていいかだ。	140-⑮		
2316	私は腰に毛布をまきつけたまま女のよこをすりぬけソファに寝ころんだ。	140-⑮		
2317	すでにみなれない皺と凹みができかかっていたが、体をたおすやいなや私の型があらわれてしなやかに体重を吸いとった。	140-⑯		
2318	息を一つか二つ、つくつかないかにぶわぶわした脂肪の重さがあちらこちらにあらわれ、またしても気配があって、もつれあからみあった、おびたしい葉と蔓が体を埋め、顔にかぶさ	140-⑰		
2319	いくらかの動作をしたために芽生えかかった力がたちまち萎えてしまった。	141-③		
2320	夕食にマカロニを食べたあとで、いつものようにデッキ・チェアをバルコンにだし、それに長く寝そべてサクランボを食べた。	141-⑤		
2321	空にいつもの重がかかった赤紫がひろがりかかっていたが、永い午後のたるみきった白熱に犯されて私は息をつくのがやっとという状態で、背後の室内には汗と体臭と膿汁がいっぱいになっているように感じられた。	141-⑥		
2322	私はデッキ・チェアにうちたおされ、サクランボの種子を一つ粒ずつ吐くの手に手をあげさげするのわづらしくてならないほど	141-⑧		
2323	何の話がきっかけになったのだろうか。	141-⑪		
2324	女はデッキ・チェアにのびておしゃべりをしているうち、体をけだるくのばしているのにいつのまにか昂ぶっていた。	141-⑪		
2325	はじめのうちは冗談めかしたいいつもの口調の雑談だったのだがばかばかしく私がうけこたえないので女がひとりでしゃべっているうちにそれはぬきさしならぬ痛烈さを帯びはじめ、自身の洩らす口調に自身が誘われ、女は蛇のように首をもたげてしま	141-⑫		
2326	「……日本人は眼鏡をかけてカメラをぶらさげて黄色いのがむこうからきたらそうだと一目でわかるというけれど、私にいわせたら、歩きかたね。	141-⑯		
2327	歩きかたで一目でわかる。	141-⑰		
2328	ヤマトはどういうものか歩きかたが下手なのよ。	141-⑰		
2329	ひどく下手なの	142-①		
2330	下手だけならまだしも、きたないのよ。	141-①		
2331	どこがどうっていえないけど、手のつけようが無いほどきたない歩きかたをする。	141-②		
2332	やりきれないわ。	142-③		
2333	眼をそむけたくなる。	142-③		
2334	あ、ヤマトがきたなって、一町手前でわかるわ。	142-③		
2335	横町へ逃げたくなるわね。	142-④		

2336	私もヤマトだからあんな歩きかたをしてるのかしら。	142-④		
2337	そう思うとゾツとするわね。	142-④		
2338	ベッドのセックス体操を近頃の女性週刊誌では写真入りで教えてるらしいけれど、そこまでやるならどうして歩きかたを教えないのかしら。	142-⑤		
2339	歩きかたがきたない上にやりきれないのはあの眼つきよ。	142-⑥		
2340	イヤな眼つきをしてる。	142-⑦		
2341	とてもいやな眼つきだわ。	142-⑦		
2342	妙におどおどしてるくせに傲慢なの。	142-⑧		
2343	自信のある人はかえって謙虚になるものだと思うんだけど、その裏返しね。	142-⑧		
2344	そうなのよ。	142-⑨		
2345	おびえたような眼つきのくせにふんぞり返ってるところがある	142-⑨		
2346	インテリにかぎってそうだわね。	142-⑩		
2347	レストランにいてもすみっこに壁へぴったりくっつくようにしてすわるか、日本人同志いっしょになってすわるかしないことには安心できないらしいし。	142-⑩		
2348	どうもヤマトは一人だと不安でしょうがないらしいんだナ。	142-⑫		
2349	それがお上りさんだけじゃなくて、そういうことをあざ笑ってる新聞記者や学者も同じなのよ。	142-⑫		
2350	新聞記者も日本人同士でかたまっで毎日おなじ顔ぶれでおなじレストランで御飯たべてるじゃない。	142-⑬		
2351	日本語で記事を書くんだから日本語をしゃべりつけていないことには根なし草になっちゃうんだなんて気のきいたことをいうのがあるけれどウソよ。	142-⑮		
2352	独立独歩出来ないのよ。	142-⑯		
2353	だからごらんなさい。	142-⑯		
2354	日本の新聞にでてる外国報道の記事が各社とも似たりよったりでしょう。	142-⑰		
2355	それも為替交換所みたいに仲間同士だけでやり取りした情報がネタだし、たいていはこちらの新聞にでた記事の焼直しよ。	143-①		
2356	ひどいもんですよ。	143-②		
2357	新聞記者というのは新聞にでた記事を書くから新聞記者というのよ。	143-②		
2358	ここの新聞記者たちが笑ってるわよ。	143-③		
2359	私は何人かつきあいがあるから知ってるんだけど、日本人記者というのはお笑い草よ。	143-③		
2360	しかも自分がお笑い草になっていることに気がつかない。	143-④		
2361	ぐずぐずと仲間同士でしか通じない悪口をいってなぐさめあつてるの。	143-⑤		
2362	その仲間同士も別れたらとたんに悪口だわ。	143-⑥		
2363	まだその姿が見えてるのに、いまのいままで仲よく笑ってたはずなのに、たちまち悪口をいいたすの。	143-⑥		
2364	もっともこれは記者だけじゃなくて、学者もビジネス・マンも、みなおなじだけどね。	143-⑦		
2365	ひどいもんだと思うわよ。	143-⑧		
2366	学者もやりきれないわね。	143-⑧		
2367	こちらででた論文をチャット訳して、横文字を縦になおして日本語にただけで、それがちょっと問題感覚がよくて日本のマスコミの動向にのれたらたちまち売れっ子になるんだもの。	143-⑨		
2368	いやそのすばやいこと、かなわないわ。	143-⑪		
2369	そういうのがこちらにきてるときはどうしてるかというやっぱり日本人学者同志べったりつきあつて、かげでおたがいの悪口のいいくらしてて、ただそれだけなの。	143-⑪		
2370	こちらの学者と正面からたちむつかけて切りあいをして、切りきざみあうか、切りきざまれあうかして、そのあげくに結論をうちだすものじゃないわよ。	143-⑬		
2371	とても、とても。	143-⑮		

2372	それならそれで日本に帰ってから論文を書くときにおとなしくしてたらかわいげがあるんだけど、何やらどえらい論争をしてきて、そのあげくの結論だというような口調でおやりになるんだから、またやりきれないわ。	143-⑮		
2373	そのうえ、横文字を縦文字になおすのに、これがまた、誤訳、珍訳、悪訳とくるんだから、たまったもんじゃないうわ。	143-⑰		
2374	こちらの論文だっていいかげんなのはたくさんあるけれど、そのいいかげんさはヤマトのいいかげんさとちょっと違うのよ。	144-②		
2375	京都の神様みたいにえらい中国文学者が中国語でスピーチをしたらそれをきいてた中国人がチンプンカンプンだったとか、東京のものすごい英文学者がロンドンかどこかのシェクスパア学会でスピーチをしたらこれまた何のことやらひとこともわからなかったとか、マ、そのあたりから考えなければならぬのよ。	144-③		
2376	外国語で日記を書くぐらい外国に身売りした専門学者がヤマトにはいるの。	144-⑦		
2377	岡倉天心以来聞いたことないわよ。	144-⑦		
2378	専門家というのはいそこまでうちこまなきやいけないうわ。	144-⑧		
2379	シェクスパア学者ならシェクスパア語で日記を書くべきですよ」	144-⑨		
2380	女はしのびよってくる黄昏のなかでサクランボを頼張っては種子を吐きつつ、けわしい、鋭い、ひたすら嘲罵の口調で話しつつ	144-⑩		
2381	蛇は一度頭をもたげたら必殺の打撃をあたえるべく一度体を躍らせるだけだと思いが、女は頭をもたげて体をゆらゆらさせ、つぎからつぎへと湧いてくる主題にとびついては噛みつき、とびついては噛みつき、噛みついてつぎの攻撃のために後退するた	144-⑪		
2382	相手を倒すための毒が自身にまわっていくような気配を帯びてきた。	144-⑭		
2383	自身の毒にそそのかされる焦燥の気配はまだあらわにあらわれてはいないけれど、忘我の口調はハッキリとそこかしこにあっ	144-⑮		
2384	女は日本人旅行者、新聞記者、学者などのつぎに、ホテルの廊下をステテコ姿でのし歩く農民団体を罵った。	144-⑯		
2385	外国旅行をする資力があるのならもっとほかに家庭の内部と周辺をしっかりと整備し蓄積すべきであるのにそれをしないで遠い外国へ観光旅行にでかけるその態度を罵った。	144-⑰		
2386	外地手当を貰って気の大きくなった貿易商社員が身分を忘れて浅薄な贅沢にふける態度を罵った。	145-②		
2387	外国人の男にちょっと口説かれただけでたちまちよろめいて妊娠してしまうヒッチ・ハイカーの娘たちを罵った。	145-③		
2388	酒を飲みさえすれば猥談をはじめる日本紳士が白人女を買いにいて裸体を目撃したらたちまち羨えてしまうくせに口さきだけは大きなことをいいたがるその態度を罵った。	145-⑤		
2389	ホテルのボーイだろうとキャバレーのタバコウリ娘だろうとおかまいなしに浮世絵切手やこけし人形をプレゼントしたがる旅行者たちを罵った。	145-⑥		
2390	イタリアのカメオ屋のおっさんが日本人と見ると相好をくずして”モシモシカメヨ、カメサンヨ”と呼びかけることを罵った。	145-⑧		
2391	大使館員が自宅にタクアンヤクサヤの匂いをはこびらせておきながらリンバーカー・チーズを罵ることを罵った。	145-⑨		
2392	一千万をこす人口を持つ東京がその六割から七割に達する人口のウンコを海で船に持って行って捨てるしかないのにハイウェイや高層ビルの建築に夢中になっていることを罵った。	145-⑪		
2393	日本人と日本人を罵る記者や学者や評論家を罵った。	145-⑬		
2394	翻訳文学者を罵り、出版社を罵り、新聞社を罵り、右翼を罵り、左翼を罵り、日本と日本人について思いつくかぎりのことを罵っ	145-⑬		
2395	それらすべての嘲罵の毒どくしい、えぐりたてるような口調のうしろにはまぎれもなく孤独があった。	145-⑯		
2396	聞いているうちにようやく私にもおぼろげながら察しられることがあった。	145-⑰		
2397	私のしらない、どうまさぐりようもない、この十年近くの歳月を女が何にすがつて生きてきたかが、ようやく察しられるようであっ	145-⑰		

2398	日本で”孤哀子”として生きるしかなく、しかし屈服するにはあまりにも自尊心が強すぎて流亡するしかなかった女は、おそらくここでも孤児として生きるしかなかったはずだが、ただひたすら日本と日本人を憎むことにすがって生きてきたのではないかと思	146-②		
2399	胸苦しい早朝にも、恐ろしいが親密な夜ふけにも、女は貝が石灰質を分泌するようにヒタスラ憎悪だけを分泌することにふけて毎日をしのできたにちがいない。	146-⑤		
2400	観光団の通訳や、レストランの皿洗いやキャバレーのタバコ売りや、日本商社のタイピストなどをして女はかつがつしのいできたはずだが、だとすれば、いま全開して息つくひまもなしにたたきつけてくる憎悪は、洗剤でとけそうになった手や、唇のとけそうになった紋切型解説や、のどのひきつきりそうなタバコの濃霧や、荒寥とした便所の粗壁などの分泌物である。	146-⑦		
2401	タバコの吸いがらなどが刺さったりしている脂っぽい肉や魚の冷めきった残飯から立ち上ってくるものであるはずだ。	146-⑪		
2402	闇の中のぬらぬら笑う濡れた目や、財布をとりだす白い巨大なウジ虫の様な指や、つばでひかかったあつくちびるや、シンバルのうつろな激情に満ちた叫喚などで、あやうく足を折られそうになりながらどうにかこうにかしぶとく耐え抜いて培養してきた、屋根裏部屋の呪いであるはずだ。	146-⑫		
2403	夕焼けのなかにいたはずだがいつのまにか夜になっていた。	146-⑯		
2404	午後の火照りがようやく空からも、バルコンからも、微風から消えかかって涼しさのきざしがちらほら明滅するようになった。	146-⑯		
2405	女はそれにも屈せず、私にというよりは闇にむかい、頭をもたげて、抑制はしているけれど高い声で何かえげつないことを嘲笑まじりに話しつづけていた。	147-①		
2406	「もういいよ。」	147-③		
2407	「そのへんでいいよ」	147-③		
2408	息をつくために女が黙った時に私はつぶやいた。デッキ・チェアの硬くてざらざらした帆布が冷たく膚にふれて気持ちよかったが、私はにぶい脂肪に蔽われていて、腐りかけた酸の不快さがどこにもあった。	147-④		
2409	「それだけ日本が憎めるのはうらやましいよ。」	147-⑦		
2410	いままできみはそれでやってきたわけだ。	147-⑦		
2411	たったひとりでやってきた。	147-⑦		
2412	問題はこれからだと思ふな。	147-⑧		
2413	君は博士号をもらうだろう。	147-⑧		
2414	きっともらえとおもうね。	147-⑧		
2415	おれは君の論文をしらないけれど、そう思う。	147-⑨		
2416	博士になったら君は日本に復讐できる。	147-⑨		
2417	みごとにできる。	147-⑩		
2418	するとそのあと、どうなる。	147-⑩		
2419	これまでのように日本を憎めなくなるよ。	147-⑩		
2420	大願成就するんだからね。	147-⑪		
2421	すると、憎悪という情熱が殺される。	147-⑪		
2422	酔いがさめる。	147-⑪		
2423	酔えなくなったら生きていくのはつらいよ。	147-⑫		
2424	つぎは何にすがったらいいか。	147-⑫		
2425	そこをどうおもう。	147-⑫		
2426	なにかよえるもの、夢中になれるもの、ある？」	147-⑬		
2427	突然の暗闇のなかで女が息を吸いこむ気配がした。	147-⑭		
2428	ふいをうたれたように女はだまりこみ、体をこわばらせた。	147-⑭		
2429	その敏感さが私には好ましくもあり、いたましくもあった。	147-⑮		
2430	私は自身にたずねることを女にたずねてしまったのだが、それまでの毒どくしい雄弁を一瞬沈黙がおさえてしまったらしい気配に女のおびえがまざまざとつたわってきた。	147-⑮		
2431	しばらくして私がつぶやいた。	148-①		
2432	「おれにはないんだよ」	148-②		
2433	女が息を吸って、低く、「私にもないわ」とつぶやいた。	148-③		

2434	しばらくして女はデッキ・チェアからたちあがり、何もいわずに部屋へ入って行っていったが、いつまでたってももどってこなかった	148-⑥		
2435	葉や蔓わひきずって部屋に入ってみると、おんなはソファに腰をおろして足もとのヤクの毛皮を眺めていた。	148-⑦		
2436	頬が蒼ざめ、眼がうつろで、くちびるを少しあけていた。	148-⑧		
2437	私は冷蔵庫から火酒の瓶をとってくと二つのグラスについた。	148-⑨		
2438	グラスはたちまちこまかい霜で霧がかかったように白くなったが、女は手をだそうとしなかった。	148-⑨		
2439	女はのろのろとつぶやいた。	148-⑪		
2440	「あなたはひどいわ。	148-⑫		
2441	恐ろしいことをいったわよ。	148-⑫		
2442	私がひたかくしにして恐れてるところをついたわよ。	148-⑫		
2443	ついただけじゃない。	148-⑬		
2444	いきなり足場を切りくずしちゃったの。	148-⑬		
2445	高いところにあるものを背のびしてとろうとしているのをいきなりやってきて踏み台をとっちゃうようなことをしたの。	148-⑬		
2446	カンはいいいけれど無情すぎるわよ」	148-⑮		
2447	「そんなつもりじゃなかったんだよ」	148-⑯		
2448	「わかってるわよ。	148-⑰		
2449	私をだまらせたかったんでしょ。	148-⑰		
2450	みんなそうだわ。	148-⑰		
2451	私が日本の悪口をいいたすとみんな顔をそむけるの。	148-⑰		
2452	それまでいっしょに悪口をいったのもだまっちゃう。	149-①		
2453	イヤなところが私にはあるんだわ。	149-②		
2454	体臭みたいなものね。	149-②		
2455	自分の体臭は自分にはわからないからつい私は夢中になっちゃうんだけど、イヤなんだと思う。	149-②		
2456	ときどき自分でもハツとして顔をそむけたくることがあるくらいなもの。	149-③		
2457	一人でこんなところにいるうちにいつのまにかこんなになっちゃったのよ。	149-④		
2458	あなたのいうとおりなの。	149-⑤		
2459	日本を憎むよりほかにすがりつくものがなかったの。	149-⑤		
2460	何から何まで憎かったの。	149-⑥		
2461	憎んで憎んで、それでただもう馬車うまみたいに走ってきたって気持ちだわ。	149-⑥		
2462	それが消えたあとどうするんだってあなたはいうけれど、コタエ	149-⑦		
2463	そのとおりなんだもの。	149-⑧		
2464	ときどきそこを考えてゾツとなることがあるのよ。	149-⑧		
2465	人前ではださないけどね。	149-⑧		
2466	ふいに奈落へおとされたみたいになるの。	149-⑨		
2467	しびれちゃって。	149-⑨		
2468	バカみたいにぼうっとなっちゃうの。	149-⑨		
2469	なっちゃうのよ。	149-⑩		
2470	体のなかをころがりおちていくみたいなの。	149-⑩		
2471	私、こわいわ」	149-⑪		
2472	つぶやきつつ女はゆっくりと顔をあげ、茫然と室内を眺めた。	149-⑫		
2473	ふいにやつれて幾歳も老けてしまったようだった。	149-⑫		
2474	くちびるのわきに傷のような長い皺がくつきりとかんでいた。	149-⑬		
2475	肩をおとし、背を丸め、すくんでいて、白皙で広い背や豊かな腰も日頃の精悍さをことごとく失い、どこもかしこも子供のようで	149-⑬		
2476	女はかつてなく閉じて凝固しているが、まだ破片になっていず、予感で苦るしんではいると思われたが、希薄になったためにかえて濃厚なものがまわりにたちこめているようでもあった。	149-⑮		
2477	「血洗いもしたし、タバコ売りもしたし、恋もしたし、旅行もした	150-①		
2478	黒の絹のストッキングをはいてパニー・ガール・スタイルでタバコを売って歩いたの。	150-①		
2479	首から木の箱ぶらさげてね。	150-②		

2480	でもキャバレーのおっさんにいわせると私の顔は悲劇的なんですって。	150-③		
2481	お客がしめっぽくなっちゃうんでしょね。	150-③		
2482	恋は熱烈なのをした。	150-④		
2483	何人という必要はないけれど、熱烈なのをしたの。	150-④		
2484	結婚しようかと毎夜徹夜で考えたのが二つあったのよ。	150-⑤		
2485	男は二人とも学者ですけどね。	150-⑤		
2486	日本人じゃない。	150-⑥		
2487	影のない男ではなかったわ。	150-⑥		
2488	実体も影もあって真剣だったわ。	150-⑥		
2489	だけど、とどのつまり、私はイザというところで踏みきれなかった	150-⑥		
2490	その頃、奨学金をもらえるようになって大学へかよいはじめていて、私はもう一度学生にもどって、日本でやろうとしてもできなかったことをフリダシからやるんだと意気こんで夢中だったから自由を失いたくないって気持ちが勝ったのよ。	150-⑦		
2491	少なくとも自分ではそっくり聞かせたのよ。	150-⑩		
2492	結婚しても勉強をつづけたらいい、協力するって相手はいつてくれたけれど、私は酔ってたな。	150-⑩		
2493	やっとなつかんだ自由に酔ってたの。	150-⑪		
2494	自由を捨てたい一心だったのがたまたま拾えたってところだったから酔っぱらってたのよ。	150-⑫		
2495	結婚なんかして捨てたくなかったし、傷つけたくなかったの。	150-⑬		
2496	だけど近頃になると、心細いことが多いもんだから、お金や暮しのことじゃないのよ、それはもう何の心配もいらぬの。	150-⑬		
2497	だけど、さっきいったみたいに心細いことがおおくてね、ふつと子供がほしくなったりするのよ。	150-⑮		
2498	以前には考えてみたこともなかったし、頭からふり捨てることにしてたんだけど、夜なかにひとりでタイプライターをたたいていると、ムラムラと子供がほしくなるの。	150-⑯		
2499	こんなとき子供がいたらどんなだろうかと思ったら、矢も楯もたまらなくなってくるのよ。	151-①		
2500	私は不具じゃないかと思えてきたりしてね。	151-②		
2501	バカな話よ。	151-②		
2502	断固として自由を守りぬきたい、そのためには日本も捨てる、結婚も捨てるって誓ったのが、あなたのいいぐさどおり何かを得るためには何かを捨てなきゃならないんだとってたのが、いまに	151-②		
2503	ときどきそれがひどくなると、男なんかどうでもいい、誰でもいい、試験官ベビーだってかまわないって気持ちになってくるの。	151-⑤		
2504	人口受精だって私は平気よ。	151-⑥		
2505	ててなし子だって何だって平気。	151-⑥		
2506	私がそうなんだから。	151-⑦		
2507	かまうもんですか。	151-⑦		
2508	何だろうと平気よ。	151-⑦		
2509	こたえない。	151-⑦		
2510	私にはやれるんだもん。	151-⑧		
2511	いままで、ほら、やってきたんだもん」	151-⑧		
2512	とつぜんまじまじと睨った女の眼から涙がふきだしてきた。	151-⑨		
2513	それはたちまち頬をつたって顎へしたたり落ちた。	151-⑨		
2514	女は白い拳をにぎりしめて、白い、たくましい膝においたが、涙は流れるにまかせておき、しばらく耐えていてから、とつぜんソファにおれた。	151-⑩		
2515	涙はつぎつぎとあふれ、女は声を殺して静かに泣きはじめ、ときどき嗚咽で肩や腹をふるわせた。	151-⑪		
2516	崩れてしまったことを恥じるか嘲るかのようなしぐさで二度ほど拳で、めだたないがはげしくソファを襲った。	151-⑫		
2517	その痛恨は従容とし、堂々としていた。	151-⑭		
2518	女はうめくように、「子供がほしいわ、いまほしいわ」といった。	151-⑮		
2519	私はじっとしていた。	152-①		

2520	何か二言か三言つぶやいたが、慰めにもならず、忠告にもならず、励ましにもならなかった。	152-①		
2521	それは冷たいまま狼狽したところから泡のようにあがってきたが、くちびるからこぼれたときにはあいまいな靄となり、たちまち散ってしまう。	152-②		
2522	形も質も量もある言葉はいまの私をどうゆさぶってもおちてきそうにない。	152-③		
2523	私はテーブルのよこに腰をおろし、藪医者のように手をつかね、火酒のグラスと女の横顔をかわるがわるにちらちらと盗み見て	152-④		
2524	いまうっかりと口をきいてはいけないという打算もどこかでいそがしくごいている気配であった。	152-⑥		
2525	それすらところを碎いて没頭できるようなものではなかった。	152-⑦		
2526	ただ冷たく、無気力で、朦朧とし、居心地わるくそこに腰をおろしているだけのことだった。	152-⑦		
2527	女が全身で痛恨しているらしい気配にむしろ私は羨望をおぼえ	152-⑧		
2528	それは畏怖に近かった。	152-⑨		
2529	女の体はむさぼったけれどそのところに触れたりたち入ったりすることをわずらわしがってきたことにはずかしさをおぼえさせら	152-⑨		
2530	怒張もなく、下降もなく、私はただもぞもぞと漂っていた。	152-⑪		
2531	しばらくして女は泣きやむと、拳で頬や顎の濡れたところを拭っ	152-⑬		
2532	ソファの革のこまかい、しなやかな皺をまじまじと眺めた。	152-⑭		
2533	まなざしがうっとりとし、口調はひそひそとしているがしぶとかつ	152-⑮		
2534	「日本をでるとき、送ってきてくれたのはトキちゃんだけだった	152-⑯		
2535	トキちゃんは横浜まで送ってきてくれたの。	152-⑰		
2536	私は家財道具って何もないけど、下宿のおばさんやトキちゃんのところ	152-⑱		
2537	に少しずつおいてきたのよ。			
2537	どういうものかトキちゃんとは、私、気があうの。	153-①		
2538	トキちゃんはいいわ。	153-①		
2539	結婚してね、もう二人か三人 ベビーちゃんがいるのよ。	153-②		
2540	私はかれこれ十年かかって女子大生になっただけだけれど、トキちゃん	153-②		
2541	はもうコロコロ子供を生んじゃってね。			
2541	写真を送ってきてくれたりするの。	153-③		
2542	ここの子供もシャンパンの泡みたいでかわいいけれど、日本の子供	153-④		
2543	ってかわいいわよ。			
2543	眼も鼻もチマチマツと小さくて、髪が黒くてまっすぐでね。	153-⑤		
2544	まるでクワイカコケシみたいだわ。	153-⑤		
2545	あんなの抱くと気持ちいいだろうなって思っちゃう。	153-⑥		
2546	するともう何もわからなくなってしまうのよ。	153-⑥		
2547	しっとりとしていて、ポワポワやわらかくて、それでいてズシツと実	153-⑦		
2548	のつまった体重がこちらの腕にくるのよ。			
2548	全的に私にもたれかかってきて、全的に私を必要としてくれるの	153-⑧		
2549	それだわ。	153-⑨		
2550	そんな子供を一人持ったら親父なんかどうだっていいよ。	153-⑨		
2551	勝手にほっつき歩いて女房の悪口をいっては浮気してりゃいいのよ。	153-⑩		
2552	父親なんかいららないな。	153-⑩		
2553	私は抽象的鍛練についちゃいささか精進したから誰の子だっていいのよ。	153-⑪		
2554	人類の母親になってみせるわ。	153-⑫		
2555	自信あるわよ。	153-⑫		
2556	どこの馬の骨ともわからない男の精液だってもらってきて、それで子供	153-⑫		
2557	を作って、それを乳母車にのせて公園へつれていってやって、私は毛糸の靴下を編むか、時代おくれのブロークの詩			
2557	を読むかしてね。			
2557	ときどきその馬の子にバババババ、ブーツ、ブワッていってやるのよ。	153-⑭		
2558	その子が大きくなって私を捨てようとうしようと、かまわない。	153-⑮		
2559	徹底的に奉仕してやるの。	153-⑯		
2560	そのものと化するのよ。	153-⑯		

2561	どうしようもないナ。	153-⑯		
2562	母は醜いし、されど美わしってところよ。	153-⑰		
2563	あれをやってみたいの。	153-⑰		
2564	私のおなかには皺がないといってあなたよろこんでるけれど、これ、種子なき大地なのよ。	153-⑰		
2565	そんなこと、考えたことないでしょ」	154-①		
2566	女はゆっくりとソファから体を起すと、小指をたてて火酒のグラスをつまみあげ、一口すった。	154-③		
2567	そして舌うちせんばかりの苦い顔を作ってからそれを消し、浴室に入ってしまった。	154-④		
2568	しばらくしてでてきたときにはかすかなディオリッシモの香りがただよい、ふりあおぐと暗い眼がキラキラと輝いていた。	154-⑤		
2569	いきなり私の鼻さきに剥げちよろけのトゲトゲちゃんをつきだすと、ポンとテーブルに投げ、威嚇とも嘲笑ともつかず女は、「ババババ、ブー、ブワッ！……」叫ぶような声をたてた。	154-⑥		
2570	女は息を荒らげて、威風堂々、「私にはそれだけしかないの」といった。	154-⑩		
2571	ふいに異様な声をあげたと思うと女はソファにかけつけてころがりこみ、拳であたりを撃ったり、たたいたりしながら、身もだえして号泣しはじめた。	154-⑬		
2572	白い背や、たくましい腰から、しぼりだすようにして、ウェーン、ウェーンはばかりのことを知らない声をたてて女は泣きはじめた。	154-⑭		
2573	明るい乳黄色の灯に輝いていたガラスの箱がとつぜん音をたてて崩れたようであった。	154-⑯		
2574	完璧の技術を凝らして作られたこの部屋も女のためには原始の森にすぎなかった。	154-⑰		
2575	女はソファをのたうって号泣し、たくましい腿をひらいたり、閉じたりし、拳をにぎりしめ、哄笑に似たひびきをたててひたむきに泣きつづけた。	155-①		
2576	私はその声が高くなったり低くなったりするたびに体のそこかしこに堅固で具体的な打撃をおぼえつつ、火酒のグラスを持ち、ぼんやりしとたっていた。	155-②		
2577	ただぼんやりとたっていた。	155-⑤		
2578	バルコンへ逃げだそうと思いつきながら何となくできないままに女の髪が発作のたびにひらいたり閉じたりして花の香りや汗の香りをたてるのを見おろしてたっていた。	155-⑤		
2579	暗い夜空のなかにむきだしでそうしてたっているように感じられ	155-⑦		
2580	いままでにない荒寥がおそいかかってくる葉や蔓が消えた。	155-⑧		
2581	くねくねして息づまるようにのしかかってくる葉や蔓が消えた。	155-⑧		
2582	私はおぼろに、「どこかへいこうか」とつぶやいた。	155-⑩		
2583	山の湖へいった。	155-⑭		
2584	“バックテイル”とは鹿の尾のことだけれど、それをあしらった毛鉤をそう呼ぶこともある。	155-⑮		
2585	ふつう毛鉤はさまざまな鳥の羽で作るが、これは獣の毛で作	155-⑯		
2586	鹿の尾、北極熊、栗鼠の尾、山羊などの毛である。	155-⑯		
2587	自然色のもあるが、さまざまに着色したのもある。	155-⑰		
2588	まず、軸の長い鉤を買ってきて、その軸に赤や黄のモールを巻きつけ、金糸や銀糸で縛る。	155-⑰		
2589	それから鉤の首のところへ一房の毛を、いろいろな色を配合して絹糸で縛りつけ、接着剤で固定する。	156-①		
2590	この毛鉤を水のなかでしゃくりつつひくと、毛の房が花のろうにひらいたり、閉じたりする。	156-②		
2591	どんな水の色か、ときにどんな色の毛鉤を使うか、キメ手はその選びかたである。	156-③		

2592	羽虫、幼虫、小魚など、餌に似せて作った鉤を“イミテーター”、ただ色や閃めきや波動などで魚をひきつけるのを“アトラクター”と呼ぶが、私が釣ろうと思っているのはパイクで、これは前途をよこぎるものは羽のあるもの、毛のあるもの、鱗のあるもの、鱗のないもの、何にでもとびついて一呑みにする暴君だから、彼をひきつけるための毛鉤は、“イミテーター”も“アトラクター”もけじめがつかないということになりそうである。	156-⑤		
2593	私は女につれられて釣道具店へいき、いろいろな毛鉤の材料を買ったあと、セットになっている初心者用のごく安いリールと竿	156-⑨		
2594	そのついでにスピナーも買った。	156-⑪		
2595	これについている三本鉤をはずして私の作ったバックテイルをとりつけて投げてみようと思う。	156-⑪		
2596	スピナーを錘りがわりに使うわけだが、ただの錘りとはちがって回転翼がついているから、それが水のなかで回転して小渦を作り、毛の開閉や明滅を手伝って効果をあげてくれるのではあ	156-⑫		
2597	釣師が荒らしてさえないければ、湖の葦の茂みや睡蓮の葉かげにひそむ生無垢の魚にとっては、水のなかに小渦を作ったり、閃いたり、よるめいたりして進むものは、餌か枯葉のほかは何もないはずである。	156-⑮		
2598	だから……	156-⑰		
2599	鱒を釣りたかったのだけれど、あまりいい季節ではないし、フライ竿が高価なので、手をだしかねたのである。	157-①		
2600	パイクは釣りやすい魚だけれど、それでもいまは春でもなく、秋でもないし、どんな魚でも釣れない日はどう足掻いても無駄であ	157-②		
2601	釣道具店のたくましい肩と胸をした主人は親切にこの季節のパイク釣りにいい湖を四つか五つ教えてくれたが、私は赤鉛筆を片手に地図にかがみこみ、標高、地形、川が流れこんでいるかいないか、観光客がきているかいないか、あれこれを考えて一つにしぼっていった。	157-③		
2602	パイクは孤独、暗鬱、貪婪な一匹狼で、口じゅう歯だらけで、舌にまで歯があるといわれたり、味蕾が舌ではなくて咽喉にあるといわれたりするが、もともと冷水を得意とする魚だから、この盛夏には標高の高い山岳地帯か高原の湖を選ばねばならなかつ	157-⑥		
2603	火酒を飲みつつ地図をさまよったあげく一つの湖をやつとのことできめたが、女はその場でてきぱき鉄道地図や時刻表などを繰り、どういふふうにかたちまち湖の旅館の電話番号も調べたし、必要な知識を十分かそこらで手に入れた。	157-⑨		
2604	「よさそうよ。」	157-⑬		
2605	あなた。	157-⑬		
2606	匂ってきたわ。	157-⑬		
2607	いま電話で聞いたら、高原のあまり大きくない湖で、パイクは二年前に十三キロもあるものを釣った釣師がいたそうよ。	157-⑬		
2608	けれど、釣師はほとんど来ないって。	157-⑭		
2609	観光客はどうオって聞いたら、近くの森にキャンプ場はあるけれど客が少なくてひまだっていたわ。	157-⑮		
2610	キャンプ客は宿へ食事にくるけど釣師は目下一人も来ていませ	157-⑯		
2611	ついでにボートのことを聞いてみたら、宿の主人が鴨撃ちに使う四人乗のを貸してあげますっていった。	157-⑰		
2612	どうオ。	158-①		
2613	匂ってきたじゃない」	158-①		
2614	「人が少ないというのがいいね」	158-②		
2615	「うぶなパイクがいっぱいよ、きつと」	158-③		
2616	「そうだといいね」	158-④		
2617	「私はデニムのズボンにスポーツ・シャツだ。」	158-⑤		
2618	それに何か大きな、部厚い本を一冊持って行くの。	158-⑤		
2619	あなたといっしょだと行先地でいつ籠城になるかわからないも	158-⑥		
2620	そうなったときに何か読むものを持って行くの。	158-⑥		
2621	救急書物、救荒読みものってところね。	158-⑦		
2622	でないと、オチオチしてられないわ」	158-⑦		

2623	女は地下室へおりたり部屋のなかをさけまわったりしてスーツケースを荷造りすると、いつでも持ちだせるようにベットのそばにおき、壁のほうを向いて寝てしまった。	158-⑨		
2624	女にいわせると、これが近頃の反都会主義的訴求の典型だということで、一瞥して笑いだしてしまっただが、宿は馬小屋か乾草小屋だったものを改造し、それを廊下で母屋と連結していた。	158-⑪		
2625	深い森のはずれにある小さな宿屋で、二階には狭いバルコンが張りめぐらされ、そこにいちめん箱植えの赤いゼラニウムの花が咲きみだれ、白い壁がまるで花綵でふちを縫われたように	158-⑬		
2626	柱、ドア、壁の横木、すべてが馬小屋らしく頑強で、太ぶとしく、重かった。	158-⑮		
2627	天井のひくい、小さな部屋にはベットと洗面台があるきりで、ベットは高く、這うようにしてのぼるのだが、羽根ぶとんなので、体が深ぶかと吸いとられる。	158-⑯		
2628	とびこむと、体が海のようにどこまでもしっとりと沈んでいき、爽快な、バリバリする白に全身埋もれてしまうのだった。	158-⑰		
2629	女はネコのように体をくねらせ、「まるで棺桶か、ゆりかごだわ」と笑った。	159-③		
2630	宿をでて森に入ると、ほの暗い道をしばらく歩いて、湖岸にで	159-⑥		
2631	一本の小道が湖に沿って走っているの、それをつたっていけば湖のおおよその地形はつかめた。	159-⑥		
2632	深さはかなりあるらしいが大きさはちょうどまんなかあたりにたって左右を見わたせば両端の森が小さなながらも見きわめられる程度だった。	159-⑦		
2633	こちら岸は、森と、牧草地と、丘、あちら岸は、丘と、牧草地と、牧場になっていて、丘の頂上には教会がある。	159-⑨		
2634	それらの背後にきびしい顔だちの山塊がそびえたっている。	159-⑩		
2635	こちら岸もあちら岸も水ぎわまでは湿地げ、葦が密生し、それは人を呑みこむほど高く、濃くて、たけだけしい。	159-⑪		
2636	森のなかを流れてきた川が二箇所湖にゆるく水を吐きだしている。	159-⑫		
2637	「ここだな。」	159-⑭		
2638	ポイントはここだと思う。	159-⑭		
2639	ボートを持ってきて沖にとめ、そこから岸に向かってキャストイングをするんだね。	159-⑭		
2640	川の吐きだしが葦のなかに水道を作っている。	159-⑮		
2641	この水道のなかと、出口の左右、その周辺だね。	159-⑮		
2642	パイクはこういう浅場が好きなんだよ。	159-⑯		
2643	ここで釣れます」	159-⑯		
2644	「自身満々ね。」	160-①		
2645	たのもしいわよ。	160-①		
2646	やっと元気がでてきたみたい。	160-①		
2647	うれしいわ。	160-①		
2648	頑張ってるね。	160-①		
2649	もう釣れたみたいだ。	160-②		
2650	匂いが消えちゃった。	160-②		
2651	匂いって近づきすぎるとかえってしなくなるものなの。	160-②		
2652	その証拠に自分の匂いというものがまるでわからないでしょ	160-③		
2653	「釣れる釣れないは魚のその日の御機嫌だよ。」	160-④		
2654	やってみなくちゃわからないし、やってみたってわからない。	160-④		
2655	こういう山地だと風向きというものもあってね。	160-⑤		
2656	どうい風が魚にいいのかわるいのか、土地のでないとわからない。	160-⑤		
2657	おまけに女を釣りにつれていったらダメだという国際的ジंकスもある」	160-⑥		
2658	「それは昔の話。」	160-⑧		
2659	いまは魚もかわったんですよ。	160-⑧		
2660	いまの魚は女をつれてきてくれ、それなら釣れてやろうっていうのよ。	160-⑧		

2661	女も魚も濡れるものなんだから。	160-⑨		
2662	そこはわかるの。	160-⑨		
2663	いい。	160-⑨		
2664	明日私をおいてけぼりにしちゃダメよ。	160-⑨		
2665	私、どこまでもついていきますからね。	160-⑩		
2666	あなたに釣れなきゃ、私、奥の手をだしてあげます」	160-⑩		
2667	森の道を宿に向かって歩いていると、ふいにまわりの幹や、笹や、道が暗くなり、雨がはげしくふってきた。	160-⑫		
2668	森のなか蒸れたように生温かくなり、枯葉、苔、樹液の匂いがいっせいにきつく匂いたった。	160-⑬		
2669	そして急速に冷えこみはじめた。	160-⑭		
2670	はしゃぎたつた匂いたちは小さな足音をたてて森のあちらこちらへ姿を消した。	160-⑭		
2671	雨の雨、剛直な山の雨が葉からしぶいて額を濡らし、眉を濡らしはじめた。	160-⑮		
2672	女といっしょに森からかけだしてみると、いつのまにか空は雲に閉ざされ、黄昏のように眉のところまでおりてきていて、眼のすみに見た森のはずれの湖面は霧がたちこめたみたいになって	160-⑰		
2673	私は草むらゝを走りながら小溝で緑いろのものが閃くのを見た。	161-②		
2674	「蛙だ、蛙だ」	161-③		
2675	いそいで溝にとびこみ、ぬらぬらびよんびよんするのを両手でおさえようと、泥まみれになって草のなかを這いまわった。	161-③		
2676	「蛙だ、最高だ、パイクが喜ぶぞ」	161-⑥		
2677	眉や眼にしぶく雨を肘でぬぐいぬぐい深い草のなかを追って	161-⑥		
2678	つるつるすべる足を踏みしめ踏みしめあちれをおさえたり、こちらをおさえたりしていると、ふいに胸をつかれた。	161-⑦		
2679	手や足にあざやかに音たててさかのぼってくるものがあつた。	161-⑨		
2680	不安なほどそれがいきいきしていたので私は、ふと、息がつまりそうになった。	161-⑨		
2681	こんなふうにとびこみ草のなかを跳ねまわるのは二十年ぶりだろう	161-⑩		
2682	三十年ぶりだろうか。	161-⑪		
2683	女は溝のふちにたつて眺めていたが、私がやつのことで蛙をつかまえ、泥まみれになってあがっていくと、体をよじって笑い、「おかみさんに空瓶をもらってくるわ」	161-⑫		
2684	高い声をのこしてははっていった。	161-⑮		
2685	夜、食事のあとで、部屋に引揚げて毛鉤を巻いた。	161-⑯		
2686	シーツにいろいろな材料をならべ、私はベッドに半身をうめて、鉄と、糊と、糸の手仕事にふけた。	161-⑯		
2687	赤と白、黒と黄、赤と茶、いろいろなコンビネーションの鉤を作り、どれにもスピナーをつけた。	161-⑰		
2688	「疑似鉤の四原色は赤、黄、白だというんだけど、とくに赤らしいいね。	162-②		
2689	赤は水のなかでいちばんめだつ色なんだよ。	162-②		
2690	それに、一説では、小魚の鰓の内側の色だからいいんだともいうんだ。	162-③		
2691	大魚が小魚を追いかけると小魚はもがいて逃げる。	162-④		
2692	そのとき鰓がひらいてチラリと赤いのが見える。	162-④		
2693	その記憶があるし、魚は近眼だしで、赤がチラついたとたんに夢中でとびついちゃうんだね。	162-⑤		
2694	つまり赤はおいしい色だというわけだ。	162-⑥		
2695	これが水のなかでひらいたり閉じたりするのを、毛鉤が息をする、というんだけど、そこがむつかしいところさ」毛を巻いたあと鉤を一本ずつ油砥石で研ぎあげた。	162-⑥		
2696	三方から研ぎはなして槍の穂先のように仕上げるのである。	162-⑧		
2697	爪にたててしっとり吸いこまれるように深く喰いこむかどうかをためしてみる。	162-⑨		
2698	あけた窓から爽やかな夜風が流れこみ、それにはさかんな森の吸気と柔らかくて厚い肥料の匂いがあり、乾草や牛や蜜蜂が含まれていた。	162-⑩		

2699	私はのびのびして指にころろを集めることができた。	162-⑪		
2700	破片のつきめや罅や穴がどこにも感じられなかった。	162-⑫		
2701	いつからか内乱が遠ざかり、葉も茂らず、蔓も生えださず、根もはびこっていなかった。	162-⑫		
2702	水のなかへゆっくりと落ちていく鉛の錘りのように静穏だった。	162-⑬		
2703	女のひっそりとした寝息を聞きながら私はやっと安堵をおぼえ	162-⑭		
2704	深夜に町を通過する列車に乗ったのだったが、ここまでのどりつけるかどうかはわからなかった。	162-⑯		
2705	無数の破片をかき集め、かろうじて形をつくって、リュックをかついでガラスの部屋をでたのだが、いつ私は崩れるかわからな	162-⑰		
2706	いつ体全体になだれ落ちていくものの気配が起るか、足のしたがりゆれてふいに穴があくか、知れなかった。	163-①		
2707	駅へいき、夜行列車のベッドにもぐりこみ、小さな読書燈に照されたぶつぶつだらけの鉄壁に岩砂漠を感じ、ペンキの甘い匂いをかぎ、早朝に大乘換駅につき、食堂で時間をつぶし、また列車にのりこみ、ある晴れた田舎の駅でおり、ベンチで時間をつぶし、午後遅くにやってくる緑色の古ぼけた高原列車にのり、森や、牧場や、谷のふちをゆっくりとはこばれていった。	163-②		
2708	そのあいだずっと私は網目模様かと思うほどすみずみまで罅が入ったのを接着剤で貼りあわせてようやく保っている肉の薄い古壺を抱くように感じていた。	163-⑥		
2709	湖まで何とかしてそれを保たせなければならなかった。	163-⑧		
2710	湖につきさえすれば宿がある。	163-⑨		
2711	剥落しても後退できる部屋がある。	163-⑨		
2712	ベッドがある。	163-⑨		
2713	けれど田舎の小さな乗換駅のベンチで砕けたらどうしていいのかわからない。	163-⑩		
2714	ときどき女が顔を覗きこんで、「……大丈夫？」とたずねた。	163-⑪		
2715	しばらくするとサクランボの袋をさしたして、「まだ大丈夫？」とたずねた。	163-⑭		
2716	大乘換駅の朝の食堂で蒸したソーセージと揚げたジャガイモを食べていると、女はジャガイモのかけらをつまんで、「これね、ロンドンでは屋台で“フィッシュ・アンド・チップス”といって売ってる	163-⑰		
2717	ジャガイモの揚げたのと、イワシか何か小魚の揚げたの。	164-③		
2718	あれを買うと新聞を三角にした袋に入れてくれるわね。	164-③		
2719	そのとき注意しなけりゃいけないっていうのよ。	164-④		
2720	あれを下宿までさめずに持って帰ったかったらエロ新聞に包んでもらえてっていうのよ。	164-④		
2721	そうしたらいつまでもホカホカあたたかいんですって。	164-⑤		
2722	まかりまちがっても『タイムズ』で包んでもらっちゃいけない。	164-⑥		
2723	たちまち冷凍になるそうよ」苦笑まじりに低い声で女は話したが、そのそぶりにはハンバーガーを口いっぱい頬ばって笑っている女子大生のようなところが、どこかにあった。	164-⑦		
2724	しかし、田舎駅のベンチで白い、苛酷な陽に照されて汗ばみつつ列車を待っているときとか、ディーゼル車があえぎあえぎ深い溪谷のふちをわたっていくときとかに私がだまりこんでいるのを見て「……大丈夫？」とたずねるときなどには、女は眼や頬のそこかしこでおずおずしていた。	164-⑩		
2725	私によりそおうとしながら一歩手前で踏みとどまり、茶碗のふちごしに人を見るようなまなざしになり、声はゆっくりとしたたる水滴の静けさを含んだ。	164-⑬		
2726	そういうときの女には膿んでいながらかろうじて形を保っていることの忍耐がありありと感じられた。	164-⑭		
2727	先夜の溢出をけって恥じてはいないが自身の力におびえている気配があった。	164-⑯		

2728	窓のかなたにちらほら見える牧場の牛の斑紋が平野から高原へのぼっていくにつれて次第々々に変わっていくという話を、あちこちらと指でさしつっしながら、紙袋からサクランボを一粒々々口へはこぶその横顔を眺めていると、やっぱり定住者というよりは放浪者と見えてくる。	164-⑩		
2729	自身におびえつつ事物のあいだをすべっていく放浪者と見えて	165-②		
2730	女は自身と私を傷つけまいとしてところを砕いているようであっ	165-③		
2731	どこかに稚さのあるその気配がいたましかった。	165-④		
2732	朝早く起きておかみさんから弁当をつめたバスケットをうけとり、そのついでに魚を測るための巻尺を借りた。	165-⑤		
2733	許可証は釣道具店で買ったが、それによるとこの地方では四十五センチ以下のパイクは逃がしてやらなければならないことになっている。	165-⑥		
2734	そのあとで宿の主人に会った。	165-⑦		
2735	彼は湖岸の葦原のなかに小屋を一つ持っている。	165-⑧		
2736	小屋は水のなかに建っていて床下が高くなり、そこへボートを入れるようになっている。	165-⑧		
2737	ボートは鉄の鎖と南京錠でとめられている。	165-⑨		
2738	主人はその鍵を貸してあげようといってくれた。	165-⑩		
2739	初老だが頑健な体躯をした男で、小さくてすばしこくごくが慎重な気配もある淡青色の眼で私をじっと見た。	165-⑩		
2740	彼は清潔なスポーツ・シャツを着ていたが、薄暗い小部屋には織機、手回しオルガン、鍛冶屋の革ふいご、風見の鶏などの古道具がたくさん並べてある。	165-⑪		
2741	壁には巨大なパイクの頭がトロフィーとして飾ってあって、虎かと思まがうほどの口をカットあげ、無数の鋭い歯をむきだしてい	165-⑬		
2742	これほどの逸品を見ると、北方の古い譚詩のなかでは昔パイクの肋骨を家にしてそこに人が住んでいたことがあると伝えられているのを思いだが、まんざら誇張ではあるまいとさえ思えて	165-⑭		
2743	「今日は一日じゅう雨です。	166-①		
2744	ときどき晴れるといいますが、いつ晴れるのか、わかりません。	166-①		
2745	私は釣りはしない。	166-②		
2746	鴨撃ちはやります。	166-②		
2747	ここは季節になるといい鴨がくるんです。	166-②		
2748	だから小屋を建てたんです。	166-②		
2749	小屋にはベッドもあるし、ランプもある。	166-③		
2750	自由に使ってください。	166-③		
2751	日本人と聞いてうれしいですな。	166-③		
2752	日本人をはじめて見ました。	166-④		
2753	戦争中はよく聞きましたが……」	166-④		
2754	主人は微笑してたちあがり、メートルはたつぷりあると思われる腰から鎖をひっぱりだして、鍵を一つ、はずした。	166-④		
2755	湖岸の道かれそれで湿地のなかの小道へたどっていくと、まるで藪をこいでいるようだった。	166-⑦		
2756	頭に蔽いかぶさってくる葦から朝露が雨のように降りかかり、たちまち全身ぐしょ濡れになってしまった。	166-⑧		
2757	鋭い葉からも強い茎からも露がはげしく降りかかる。	166-⑨		
2758	とつぜん女が、「ヒルシュ！」と叫んだ。	166-⑩		
2759	「鹿よ、鹿よ、二匹」	166-⑬		
2760	のびあがると、大きな鹿と小さな鹿が二頭、疾走している。	166-⑬		
2761	どこか近くにいたのが足音におどろいたのだろう。	166-⑭		
2762	彼らは葦の穂さきを、にぶい朝陽を浴びて金褐色の炎のようにきらめきつつ、跳躍するというよりはかすめるようにして、森のほうへ消えていった。	166-⑮		
2763	小屋には小さな棧橋がついていて、そのしたに手をまわしてさぐってみると、すぐ鉄鎖が見つかった。	166-⑰		
2764	それをたぐると、古くて傷だらけだが頑健そうなアルミのボートがゆらゆらでてきた。	167-①		

2765	南京錠に鍵を入れて鉄鎖からはずし、私はボートを棧橋のしままでひいて行ってオールをととのえたり、釣道具を積みこんだり	167-②		
2766	「ねえ、このあたりの人はおかしなことをいうのよ。」	167-④		
2767	私、ここははじめてだけど、この地方は何度も遊びにきてるの。	167-④		
2768	このあたりの人はね、夫婦、恋人、親子、何でもいいけれど、親しいものどうしのあいだでは、ウンコ、ネズミって呼びあうのよ。	167-⑤		
2769	ほんと。	167-⑥		
2770	ハニーとか、ダーリンとかいう調子でね。	167-⑥		
2771	わが愛するウンコよ、とか、わがいとしきネズミよっていうの。	167-⑦		
2772	シュタインコップ先生に聞いてみたら、そうです、おかしいけれど古い習慣ですって肯定したわよ。	167-⑧		
2773	どこか大きな町へ遊びにいったときはそんなことはおくびにもださならしいけれど、ここではおおっぴらにやっているのよ。	167-⑨		
2774	ウンコよ、ネズミよって。	167-⑩		
2775	私、それで考えたんだけど、あなたのことをそう呼んでもいいかしら？」	167-⑩		
2776	「どう呼ぶんだい？」	167-⑫		
2777	「あなたっていわないでウンコって」	167-⑬		
2778	「ちゃんをつけてごらん」	167-⑭		
2779	「ウンコちゃん」	167-⑮		
2780	「そうそう。」	167-⑯		
2781	それならいいよ」	167-⑯		
2782	「ウンコちゃん、ネズミちゃん」	167-⑰		
2783	「そのバスケットをとってくれ」	168-①		
2784	「いや。」	168-②		
2785	ネズミちゃんていって、いって」	168-②		
2786	「舟出だぞ、ネズミちゃん」	168-③		
2787	「私がこぐ。」	168-④		
2788	ウンコちゃん」	168-④		
2789	身ぶるいして女はしゃがんでいたのからたちあがり、バスケットをとりあげると、暗い空のしたで何か炸けた声をあげてボートにおりてきた。	168-④		
2790	そしてさっさと腰をおろすと、鈍重、頑固なオールをにぎり、浅瀬のあちらをついたり、こちらをついたりして、葦の生えた入江から湖はたくみに漕ぎだしていった。	168-⑥		
2791	オールが一搔するたびに渦と泥が水のなかで起るが、無数の”！”型の何かの稚魚の大群が右に左にゆらめくのも見られ	168-⑧		
2792	この湖はよほど受胎力に富むと思われて私は浮きあがった。	168-⑨		
2793	午前中釣りをして、正午近くになると昼食をしに鴨撃小屋へもどり、夕方までそこにいてから、もう一度釣りにでかけた。	168-⑪		
2794	宿の主人のいったことは的中して、午前も午後も空はひどい下痢にかかって、じっとしてくれなかった。	168-⑫		
2795	空が額までさがってきてどしゃ降りになり、ついでじめじめと霖雨になり、やがて雲が切れて晴れる。	168-⑬		
2796	しばらくすると、しとしと降りはじめ、空は閉じ、どしゃ降りにな	168-⑭		
2797	一日じゅうそればかりを繰り返していた。	168-⑮		
2798	山の雨は冷たい。	168-⑮		
2799	痛烈で、骨にまでひびく。	168-⑯		
2800	しかも湖はただひろがるばかりでどこにも隠れる場所がない。	168-⑯		
2801	ちょっと風が吹くと濡れしょびれた全身から熱が奪われて凍えそうになる。	168-⑰		
2802	どしゃ降りのときは激情をおぼえるのでしのぐ方法があるといえ ばいえるが、じめじめした冷たい霖雨だとかまえようのない憂 愁に浸され、ただ身ぶるいしながらうなだれてくちびるを噛んで いるしかなく、梅毒に犯されつつあるような気持ちになる。	168-⑰		
2803	私は着ていたジャンパーをぬいで女に貸してやり、シャツ一枚 になったが、そのシャツもたちまち濡れてぼったりと重くなった。	169-③		
2804	ズボン、靴下、パンツ、雨はすきまというすきま、乾いた箇 所々々ヘアミーバーのようにのびていき、全身を蔽ってしまっ	169-⑤		

2805	肛門の皺のすみずみまで濡れてしまった。	169-⑥		
2806	女は私のジャンパーを着たけれど大差なかった。	169-⑥		
2807	たちまち髪が風呂からあがったみたいになり、鼻や顎から雨滴がぼたぼたしたり落ちた。	169-⑦		
2808	小屋へもどって昼食のサンドイッチを食べたあと、私は女を全裸にして膚が真紅になるまで両手で摩擦をし、火酒を飲ませた。	169-⑧		
2809	「きみは昼からはここにいなさい。	169-⑩		
2810	今日はきっと一日こんな天気だよ。	169-⑩		
2811	女のでてくる日じゃないよ。	169-⑩		
2812	夕方近くになったらおれはもう一度でかけるけどね。	169-⑪		
2813	きみはここでおとなしく本でも読んでいなさい」	169-⑪		
2814	ひしがれていた女が顔をあげた。	169-⑬		
2815	髪がびったり額にはりつき、頬が蒼白になり、くちびるが紫が かっている。	169-⑬		
2816	女は体をふるわせつつ火酒の小瓶を私からうけとってラッパ飲 みをし、手でくちびるをぬぐった。	169-⑭		
2817	眼に不安とも激情ともつかない閃きが走った。	169-⑮		
2818	「いいの。	169-⑰		
2819	私もいくわ」	169-⑰		
2820	女は帆布の簡易ベッドによこたわり、「気にしないでいいのよ、 ウンコちゃん」といって本をとりあげた。	169-⑰		
2821	「気にしないでいいのよ、ウンコちゃん」といって本をとりあげた。	170-①		
2822	一人の人間に何人もの、ときには無数の人間が瞬間々に棲 みつくように、湖もまた、たえまなく変った。	170-③		
2823	水は輝いたり、翳ったり、剛直になったり、柔和になったり、冷た くなったり、とろりとなったり、非常に変りつづけた。	170-④		
2824	葦原が輝かしい金褐色の麦畑と見えたり、極地の荒野と見えたり した。	170-⑤		
2825	睡連の群生が亜熱帯のそれと見えたり、ツンドラ地帯のそれと 見えたりした。	170-⑥		
2826	湖は陰惨な隠り沼となったり、観光地の池となったりした。	170-⑦		
2827	私は船首にすわってあちらこちらへ、こちらへと指をさし、女は いわれるままにオールをだまって操った。	170-⑦		
2828	空の気まぐれな発作のたびに私もひらいたり閉じたりした。	170-⑧		
2829	しかし、照応は永くつづかなかった。	170-⑨		
2830	私は壊れ、すりきれかかった。	170-⑩		
2831	髪や、眉や、顎から氷雨がぼたぼたしたり落ち、一滴落ちて いくたびに私の何かがとけていくような気がした。	170-⑩		
2832	雨のさそいだした濃い霧があたりいちめんの水をかくしてしま い、森も、葦も、睡連も、何も見えなくなり、ただ雨とオールの軋 む音があるだけとなったとき、私のなかにはもうほとんど手でさ われるものはなくなっていた。	170-⑪		
2833	何もかもがふやけ、糊が流れ、塗りが剥げ、かるく指さきで一突 きしただけで私は崩れそうだった。	170-⑭		
2834	にぶくなり、陰鬱にだまりこみ、いらいらして、冷酷だったが、誰 かに一突きされたらその場で私はボートの底に落ち、ひとかた まりの水浸し古紙となってしまうことだろう。	170-⑮		
2835	冷酷にはあてどない殺意までがまじりはじめた。	170-⑰		
2836	寒さからではなくて体がふるえだしそうだった。	170-⑰		
2837	竿とリールを投げだしてボートのふちに両手でしがみつきたく なった。	171-①		
2838	女は何もいわずにオールをゆっくりと漕ぎつづける。	171-①		
2839	その音を聞いていると私の動作をくまなく観察しながら女が背後 からゆっくりとした足どりで追ってくるのではないかという気が	171-②		
2840	パイクは浅場の物かげにひそむ魚である。	171-⑤		
2841	物かげから物かげへひっそりとすべっていく殺し屋である。	171-⑤		
2842	そこで睡蓮の葉と葉のすきまへ毛鉤を投げようとする。	171-⑥		
2843	買ったばかりのリールと竿は手ではなくて義手のようである。	171-⑥		
2844	調子がわからないのでたちまち鉤が葉に刺さる。	171-⑦		

2845	爪に刺さるくらい鋭く研ぎあげたので、鉤はちょっとでもかすめるものがあるとたちまち食いついてしまう。	171-⑦		
2846	睡蓮の葉に刺さり、茎に刺さり、葦の茎に刺さり、腐れ根に刺さ	171-⑨		
2847	湖はふやけて、ねばっこく、からまりあっていて、しぶとかった。	171-⑨		
2848	あらゆる方角に無数の触手をひろげて待機し、生きていて、かすめるものをすかさずとらえる。	171-⑩		
2849	その触手と触手のわずかなすきをひらひらゆらゆらと縫うように、そしてひらいたり閉じたりさせつつ、手鉤をひかねばならないのである。	171-⑪		
2850	触手にはぬらぬらとした、雲のような水苔が触手の触手としてついていて、一本、また一本と鉤を吸いとった。	171-⑬		
2851	昨日の蛙をマーマレードの空瓶に入れて持ってきたのだが、腿に鉤を刺して投げたところ、用心に用心して投げたのに、たちまち葦の根に食われてしまい、ひっぱったり、はじいたり、知っているかぎりの工夫をこらしてみたが、ついに回収できなかった。	171-⑭		
2852	糸を切ってその場からはなれるよりほかなかった。	171-⑰		
2853	夕方近くになって、それまで一日じゅうひっそりとしていた湖が、ふいに前方で声をあげた。	172-①		
2854	二度、水音がした。	172-②		
2855	そしてまた静まりかえった。	172-②		
2856	私は体を起し、いそいで毛鉤をとりかえ、黒・黄を赤・白に変え	172-③		
2857	「……でできたようだよ。	172-④		
2858	あそこの葦と葦の切れめ。	172-④		
2859	あそこの沖へボートを持って行って。	172-④		
2860	十メートルほどはなれたところにとめて。	172-⑤		
2861	静かにね」いいながらちらとふりかえると、女はびしょびしょに濡れ、顔をあげることもできず、下ちびるを噛みしめてふるえてい	172-⑤		
2862	かすかにうなずき、体を折ってオールをとりあげると、女はゆっくりと体を倒したりたてたりしはじめた。	172-⑦		
2863	一回めはだめだった。	172-⑨		
2864	毛鉤を回収して二回目を投げ、三手か四手リールを巻いたとき、ふと竿をしゃくた瞬間に糸が張った。	172-⑨		
2865	電撃が竿から手、手から全身へ走った。	172-⑩		
2866	あやしみながらぐいと竿をたてると、おそらくそれで鉤は魚のくちびるをつらぬいて骨に食こんだ。	172-⑩		
2867	糸が水を切って右に左にすべりはじめた。	172-⑪		
2868	「かかった、かかった、かかった！」	172-⑬		
2869	「ほんと?!」	172-⑭		
2870	私が叫び、女があやしみながら叫び、オールを捨ててたちあがった。	172-⑮		
2871	ボートがにぶく右に左にゆれた。	172-⑮		
2872	私は一瞬で更新された。	172-⑰		
2873	私はとけるのをやめ、一拳に手でさわれるようになった。	172-⑰		
2874	全体が起き上がり、ふちが全体にもどり、眼が見えなくなった。	172-⑰		
2875	戦慄が体をかけぬけ、そこへすべてが声をあげて走りより、冷酷も、焦燥も、殺意も消えた。	172-⑰		
2876	眼のすみではなく顔をふりむいて女が見られた。	173-①		
2877	女は私の肩に手をかけ、こきざみにふるえながら眼を輝かせて炸けた。	173-②		
2878	「見えてきた、見えてきた、そこを走っている。	173-④		
2879	ほら消えた。	173-④		
2880	でた、でた。	173-④		
2881	やった、やった、ウンコちゃん。	173-④		
2882	やったじゃない。	173-⑤		
2883	ウンコちゃんのねばり勝ちだ」	173-⑤		
2884	女は音をたてて腕をたたいた。	173-⑥		
2885	灰青色の冷たい水のなかを一匹の魚が走っている。	173-⑧		
2886	鮮緑色の膚に白斑を散らした、足のない鰐のような一匹の魚が走っている。	173-⑧		

2887	四十五センチぐらいだろうか。	173-⑨		
2888	私は用心しつつ糸を張って右に左に魚を走らせ、やがてくたびれきって浮かびあがってくるのを舷側へゆっくりとひきよせた。	173-⑨		
2889	「巻尺で測ってごらん」	173-⑫		
2890	「四十九センチよ」	173-⑬		
2891	「逃してやりなさいよ」	173-⑭		
2892	「制限サイズをこえてるわよ」	173-⑮		
2893	「いいじゃないか」	173-⑯		
2894	「これは持って帰ってもいいのよ」	173-⑰		
2895	「逃してやれよ」	174-①		
2896	ボートの底で音と水を散らしてあばれる魚を手でおさえようと幼稚なしぐさであせりつつ、女は困惑とも憤慨ともつかぬ眼をあげ	174-②		
2897	それは真摯に怒っているようでもあった。	174-③		
2898	「これだけ一日じゅう雨に降られて、ボートを漕いで、鉤もとられてよ、蛙もとられたしさ、肺炎になるのじゃないかと私、思ったわ	174-④		
2899	そのあげく釣ったのを逃すって、どういこと。	174-⑤		
2900	しかもこれは制限サイズ以上なのよ。	174-⑥		
2901	持ってかえってもいいのよ。	174-⑥		
2902	政府はですね、あなたを肯定しているのよ、ウンコちゃん。	174-⑥		
2903	あなた、ふるえてるわね」	174-⑦		
2904	「最初の一匹はいつもこうなんだ。	174-⑧		
2905	大小かまわずふるえがでるんだよ。	174-⑧		
2906	釣りは最初の一匹さ。	174-⑧		
2907	それにすべてがある。	174-⑨		
2908	小説家とおなじでね。	174-⑨		
2909	処女作ですよ。	174-⑨		
2910	だからおれは満足できた。	174-⑨		
2911	もういいんだ。	174-⑨		
2912	魚は逃してやりなさい。	174-⑩		
2913	おれたちは遊んでるんだ」	174-⑩		
2914	「遊びにしてはひどすぎるわよ」	174-⑩		
2915	「だからいいんだよ」	174-⑫		
2916	「いまになってそんなことを」	174-⑬		
2917	女はおとなしくなった魚の口からずいぶん血を流して鉤をぬきとった。	174-⑬		
2918	両手でその体を水につけてやり、魚がやがて力を回復して自分から泳ぎだすまで、じっと支えて待つてやる。	172-⑭		
2919	力がもどってくると魚は尾をゆっくりとふりだす。	174-⑯		
2920	そうなればもういい。	174-⑯		
2921	手をはなしてやってもいい。	174-⑯		
2922	パイクは金環にかこまれた黒い隆起した眼をまじまじと睜り、しばらくゆらゆらと水のなかを漂ってから、やがていちもくさんに暗がりへ向って頭から突進していった。	174-⑰		
2923	女はぼんやりと水を眺めている。	175-②		
2924	「湖が自分のものになったような気がしないか？」	175-③		
2925	声をかけると、女は眼を怒らせて、「キザなことを」といった。	175-⑤		
2926	しばらくしてから、「いい気なもんだ」といった。	175-⑦		
2927	つぎには何回かのキャストイングのあとでおなじ場所で、四十三センチのが釣れたが、それも逃してやった。	175-⑩		
2928	それから少し漕いで、睡蓮の大群生と小群生のあいだに細い水路がひらけているのを発見したので、そこでやってみると、八十三センチのが釣れた。	175-⑪		
2929	ずっしりと重く、それまでの二匹とはくらべものにならないくらい力があつた。	175-⑫		
2930	糸が風にこすられてヴァイオリンの高音部のような“鳴り”をたてるということはなかったけれど、底へ、底へとひきこむ力には眼を睜りたいものがあり、ハリスを牙で食い切られる恐れが頭をかすめたので、指をリールのつまみに走らせた。	175-⑬		

2931	しめやり、ゆるめたり、圧をかけたり、緩和したり、たえまなく糸は張りつめながらも魚を泳がせるようにして、たっぷり時間をかけ、十センチ、二十センチ、少しずつ、少しずつ、ひきよせた。	175-⑩		
2932	三匹めになると私は戦慄もせず、眼もくらまない。	176-①		
2933	むしろ引き味をたのしみつつ魚と遊ぼうとする。	176-②		
2934	くたびれきって白い腹をかえして浮きあがってきたところを、両眼に指を入れておさえつけようとしたがぬらぬらすべるばかりなので、女からぐしょ濡れのハンカチを借り、それを手いっぱい巻きつけてから、白い歯のトゲトゲする大口にさしこみ、下顎をつかんでボートにひきずりあげた。	176-②		
2935	それでも痛みが走ったので見ると手の甲に血が二筋流れかけていた。	176-⑤		
2936	これはいままでの“ペンシル・パイク”ではなかった。	176-⑦		
2937	白い腹がどっぷりと太り、鮮緑に白斑の膚は美しいが、眼の威迫的な隆起、下ちびるの傲然とした反りかえり、むきだしにした牙の凄味、醜怪としかいいようがない。	176-⑦		
2938	しかし、壮年の男の孤独な冷酷というか、精悍、貧婪だが何事かに諦観してしまったようでもある気配がどこかに漂い、一種の気品があるということはいえそうであった。	176-⑨		
2939	ボートのなかで鰓を大きく開閉しながらとどり、バタッと跳ねるのを見て、女は気味わるがり、席からたちあがった。	176-⑪		
2940	「イヤなものを釣っちゃったね」	176-⑬		
2941	「いや。」	176-⑭		
2942	そうでもない。	176-⑭		
2943	これくらいの大きさになると、そろそろ風格がでてくるよ。	176-⑭		
2944	これもでかかってる。	176-⑭		
2945	それにね、パイクっていうのは、ヘンな顔をしてるけれど、とてもおいしいんだよ。	176-⑮		
2946	肉は白身でひきしまっているし、匂いなんかなくて、どんなソースにもあう。	176-⑯		
2947	こいつのおなかに匂いのいい草をいっぱいつめて、バターとアンチョビをつめて、蒸し焼きにしてごらん、顔のヘンな魚ほどうま	176-⑯		
2948	人間もおなじさ。	177-①		
2949	醜男、醜女ほどおいしいのだよ」	177-①		
2950	「ウンコちゃん、あなたはひどいわね。」	177-③		
2951	自分だけはちゃんと食べて知ってるんだ。	177-③		
2952	それでいてああだ、こうだといって、人には食べさせない。	177-③		
2953	不公平というものよ。	177-④		
2954	私、怒るナ。	177-④		
2955	これだけは持って帰って食べましょうよ。	177-④		
2956	今晚、おかみさんの顔のまえへ、ぬうッとさしだすの。	177-⑤		
2957	びっくりするわよ。	177-⑥		
2958	今晚はこれをサカナにビールをやりましょうよ。	177-⑥		
2959	二人で、さしむかいで。	177-⑥		
2960	独立排他的にしあわせになれるわよ。	177-⑦		
2961	ね。	177-⑦		
2962	女が一人冷えてるのよ」	177-⑦		
2963	「いいでしょう。」	177-⑧		
2964	特別に認めましょう。	177-⑧		
2965	こいつを殺すと小魚たちがワツとよろこぶよ。	177-⑧		
2966	小魚も中魚もアヒルの仔もよろこぶね。	177-⑧		
2967	きめた。	177-⑨		
2968	蒸し焼きにしてみよう。	177-⑨		
2969	昔、樺太があった頃にはこいつのことを“ヨアカシ”と呼んでたらしいよ。	177-⑨		
2970	一晩がかりでこいつをサカナに飲める、徹夜で飲めるというので、そう呼んだらしい。	177-⑩		
2971	これなら二人には多すぎるな。	177-⑪		
2972	席をかわろうや。	177-⑪		

2973	釣りはもういい。	177-12		
2974	今回はおれが漕ぐよ、ネズミちゃん」	177-12		
2975	氷雨にうたれるまま何時間もすわったきりだったので、たちあがると体のあちらこちらが音をたてた。	177-13		
2976	しかし、もういい。	177-14		
2977	大丈夫だ。	177-14		
2978	私は更新された。	177-14		
2979	簡潔で、くまなく充填され、確固としている。	177-14		
2980	対岸にむかってゆっくりと漕いでいくうちに雨がやみ、空がひら	177-16		
2981	水がとろりとなり、まばゆく輝いた。	177-16		
2982	葦原や、睡蓮や、森が燦めきわたった。	177-17		
2983	雲が大山塊のかなたへ速く流れ、澄みきった淡青色の空が黄昏の赤や紫や金をまじえながらほひろがりつつあった。	177-17		
2984	対岸の葦原にボートをのり入れたが、藪が濃すぎ、広すぎたので、前進できなくなった。	178-1		
2985	私は靴と靴下をぬぎ、ズボンもぬいで、水のなかにおり、船首のロープを肩にかけてボートを一歩ずつひいていった。	178-2		
2986	「たのもしいわ、ウンコちゃん」	178-5		
2987	「なに、濡れついでさ」	178-6		
2988	「いつもそんなふうだといいんだけど」	178-7		
2989	水は腿まできたが、表面はとろりと生温かく、底のあたりは峻烈な冷たさをたたえている。	178-8		
2990	夏はまだ泥にまで達していないらしい。	178-9		
2991	おそらくこの冷たさのまま秋になるのだろう。	178-9		
2992	冷えびえとした闇のなかを足指でまさぐって鋭いもの、とがったもの、さえぎるものを避けつつ進んでいくと、葦が音をたててゆれ、鴨が三羽とびたち、兎ほどもある、茫然となるような野ネズミが一匹、およいでいった。	178-9		
2993	ころころに太っていて、図々しく、私の顔をふりかえりふりかえりものうげに逃げていった。	178-12		
2994	それともこれは川獺か何だろうか。	178-13		
2995	ボートを葦に縛りつけておいてから湿地をちよっとわたると、そこが岸で、牧草地だった。	178-15		
2996	見わたすかぎりなだらかな高原で、遠くに教会の尖塔と森と大山塊があり、牛と木がところどころにあるほかは、何もなかつ	178-16		
2997	牛がたったりすわったりすると首の鈴がガラン、ガランと野太い、おだやかな音をたて、それは葦原をこえて湖をわたってい	178-17		
2998	牧草はふさふさとしていて柔らかく深く茂り、濡れてはいるが黄昏のさかんな匂いをたてはじめている。	179-1		
2999	女が寒がるので火酒を飲ませ、楡の木のしたへつれていって裸にし、小屋でしたように全身を摩擦してやった。	179-2		
3000	乾布摩擦がいいことはわかっているが乾いたものが何もないので、両手でした。	179-4		
3001	はじめのうち女はこそばゆがって体をくねらせていたが、そのうち膚に血がのぼってあたたかくなってくると、されるがままになっ	179-5		
3002	果実のように冷たくて重かったのがはげしくそがしくこするうちにやわらかくほどけ、私の体とふれたためか、葦の腐った匂い、生きた匂い、湖そのものが全身のそこかしこでゆれた。	179-6		
3003	血は白い臍を漉してゆっくりと沸きつつ膚にのぼってきた。	179-8		
3004	深い草のなかによこたわって空のしたに小さくなって落ちていると見えていたものが、やがて淡桃色のあたたかい靄がきざしてくると、それだけが浮きあがってきた。	179-9		
3005	女が眼を閉じて、低く、「ねえ、ウンコちゃん」	179-12		
3006	ささやいた。	179-14		
3007	やや暗みがかってきた冷たい草のなかに女が沈んでいて、頭、耳、顎、頬のまわりにぎっしり牧草がこめられている。	179-15		
3008	それに蔽いかぶさろうとしたとき、とつぜん女が死体に見えた。	179-16		
3009	そして、とつぜん、まったくおなじことが近頃あったという感触におそわれた。	179-17		

3010	それはすぐ思いだせた。	179-⑱		
3011	はじめて女の住むガラスの部屋につれていかれ、火酒をちよつとすすつたあとで、巨大な浴槽にシャウムバードとオード・トワレットをませたときだ。	180-①		
3012	女は緑がかった緻密な白い泡に全身を埋め、顔だけあわのなかからだしてよこたわり、その顔が、ふと棺のなかのそれを私に連想させたのだ。	180-②		
3013	その連想が女にしみて、自作の詩を二行だけ聞かされたのだった	180-④		
3014	朝の寝床は大理石のひつぎ	180-⑦		
3015	草のなかから女が腕をあげて、微笑し、私の肩を抱きよせた。	180-⑩		
3016	つい、いまさき、菌糸のように全身にからみついて肉にしみこみ骨を腐らせそうだった氷雨のなかで私は殺意のゆらめきをおぼ	180-⑩		
3017	それにおびえながらもすがりついたのは激情でたえるためだったが、体がふるえだしそうだった。	180-⑫		
3018	あの殺意のゆらめきのなかに女がめざされていたのではなかったか。	180-⑬		
3019	女が私を獵師のように追跡していると感じたのではなかったか。	180-⑭		
3020	そのことに凝縮してみたかったが、ここは室内ではなかった。	180-⑭		
3021	秘儀としての思惟は煙のようにもたちのぼらない。	180-⑮		
3022	私は充填され、簡潔で、汚穢を一掃されている。	180-⑮		
3023	意識が腐っていなければ思惟は芽生えようがない。	180-⑯		
3024	思惟も、字も、言葉も、芽生えようがない。	180-⑰		
3025	舌も指も技巧にふけらない。	180-⑰		
3026	獣のように純潔でつましやかだ。	180-⑰		
3027	牛が歩いていく。	181-①		
3028	鈴が鳴る。	181-①		
3029	私は牛で、鈴で、空だ。	181-①		
3030	湖からの爽やかな微風が草をわたってきて私の肩と腹に達し、羽毛のように撫でてから臀へまわり、肛門の皺のひとつひとつを舐めてくれる。	181-①		
3031	皺が飲んでひりひりしている。	181-③		
3032	笑み崩れそうになっている。	181-③		
3033	背骨までとけてしまいそうだ。	181-④		
3034	女が眉をよせ、歯ざしりしつつ、「そこ、そこなの。	181-⑤		
3035	ゴツンとあたる。	181-⑥		
3036	ゴツンとあたるのよ。	181-⑥		
3037	はまってる。	181-⑥		
3038	そこがゴツゴツとあたるの」	181-⑥		
3039	ふいに叱咤するような、激しい、低い声を洩らし、女は私をのせたまま反った。	181-⑧		
3040	乳房がゆれ、背骨が弓のように反り、私は草からゆらりと浮きあがった。	181-⑧		
3041	ころげ落ちないようにしがみつくのが精いっぱいだった。	181-⑨		
3042	白い膩は炉のように火照り、汗でつるつるし、どこに手をかけていいのかわからなかった。	181-⑩		
3043	しばらくして女が眼のしたで眼をひらいた。	181-⑫		
3044	さらに暗くなった草のかげのなかでもそれが青みわたって澄んでいること、しかも白熱がどこかにあることは、眺められた。	181-⑫		
3045	「アーベントロートよ。	181-⑭		
3046	「ごらんなさい」	181-⑭		
3047	「赤い夕焼けってこと？」	181-⑮		
3048	「そう。	181-⑯		
3049	この国の名物」	181-⑯		
3050	「雨のち晴だね」	181-⑰		
3051	「山の、本物の」	182-①		
3052	肩ごしにふりかえると全景が見えた。	182-②		
3053	思わず女から撤退してたちあがりかけ、それから草のなかにあぐらをかいた。	182-②		
3054	白い熔岩がたらたらと太腿に流れたが、私は忘れた。	182-③		

3055	女は草のなかによこたわったまま、優しく微笑し、ものうげにつぶやいた。	182-③		
3056	「こんなのは珍しいわ」	182-⑤		
3057	空いちめん光がみなぎっていた。	182-⑥		
3058	さまざまな地帯の国でこの時刻を見てきたが、夕焼けではなくて、何かまったく新しいものを見ているような気がした。	182-⑥		
3059	真紅、紺青、紫、金、銀、無数の光が縞となり、靄となり、層となって、それぞれの色に徹しながらかさなりあって氾濫してい	182-⑦		
3060	色はかさなりあいながらも濁らず、それぞれがすみきったまま、たがいにゆずりあったり、蔽いあったりし、透明をきわめた混沌を現出していた。	182-⑨		
3061	湖や森や牧草地を侵しているものはすでに夜だが、それに呼応してか、あらゆる光彩のうちで赤と紫が空の前景となっていた。	182-⑩		
3062	あの学生町では毎日、黄昏どきのある一瞬に出現して、人びとの顔、服、手を血や葦のいろに侵しては去っていきものがあつたが、ここではそれが大山塊の岩、皺、よじれのひとつひとつに濃い翳と輝きをあたえつつ、湖の対岸の葦の一本の茎までをまざまざとみせているのだった。	182-⑫		
3063	もし鴨がこの澄明な燦爛のなかをよこぎったとすると、私には大羽根、小羽根の一本々々の怒張や休止がよめるのではないかと思われる。	182-⑮		
3064	巨大な構築物が煙をたてずに炎上しているかのようである。	182-⑯		
3065	ある帝国の勃興か崩壊のようである。	182-⑰		
3066	音もなく、声もなく全景はわきたつ大合唱でくまなく埋められ、どれほど大声でわめいても微動もせず自身に秩序でうごいていくようでありながら、指一本うごかしてもどこかに罅を入れてしまいそうであった。	182-⑰		
3067	対岸の暗い森に小さな灯が見える。	183-④		
3068	宿の灯だと思う。	183-④		
3069	私と女はどちらからともなくたちあがって、あちらこちらに散らかしたズボンやシャツを身体につけた。	183-④		
3070	それらはべとべと濡れて肩や腹にからみついてきたが、どうしてか、みじめさはどこにも感じられなかった。	183-⑤		
3071	牧草を踏みしだいて岸までおり、一步步用心深く湿地を手をつないでわたり、水がひそかに光っている葦原へきて、ボートのロープをほどいた。	183-⑥		
3072	水、泥、藻、枯葦などがいっせいにあざやかな夜の匂いをたて、女をのせて私がボートを水におしだすと、まだ生きていたらしいパイクが、バサッと音をたてて跳ね、深い吐息をついた。	183-⑧		
3073	まるで人の嘆のようであった。	183-⑩		
3074	あちらをついたり、こちらをついたりして葦原のなかを進んでいくと、鋭くて暗い葉が女の髪にたわむれかかる。	183-⑪		
3075	それを払おうとして女が顔をふりあげると、眼も、頬も、口も、葦いろに染って見えた。	183-⑫		
3076	「今日はよかったわ、ウンコちゃん」	183-⑭		
3077	「いろいろあったね」	183-⑮		
3078	「私、これがつづくといいわ」	183-⑯		
3079	「……………」	183-⑰		
3080	葦原をぬけて湖にでてみると、もう、赤や紫は消えかかり、西にこだまのような残光が燃えているだけだった。	184-①		
3081	暗い湖のあちらこちらに魔が顔をだしてたわむれあい、拍手喝采しあっている。	184-②		
3082	山をおりた。	184-⑥		
3083	「……ねえ、あちらのこちらへいってみない。」	184-⑦		
3084	このままだといいいんだけど、とてもつづきそうに思えないのよ。	184-⑦		
3085	お家に帰るのが不安なの。	184-⑧		
3086	またぶりがえすんじゃないかと思ってね。	184-⑧		
3087	だから体かわすのよ。	184-⑧		
3088	あそこへいってみましょうよ。	184-⑨		

3089	私もしばらくいってないの」	184-⑨		
3090	十日ほどたってから、ある午後、牧草地の榆の木陰に寝ころんで、女がそういった。	184-⑦		
3091	深くて永いたのしみのあとで眼がうるみながらも冴え冴えと青みがかっていた。	184-⑩		
3092	柔らかい草のなかにのびのびと体をのばし、女は遠くをじっと眺めるまなざしでいてから、ひっそりとした声でそういった。	184-⑪		
3093	おびえは遠方のどこかに姿をあらわして、女はいちはやくそれを目撃したが、いまはまだ距離を目測しているだけでいいと自信を持っているような様子であった。	184-⑬		
3094	翌日、山をおりて、乗ったり降りたり、乗ったり降りたりを何度かかさねて、“あちらのこちら”に到着した。	184-⑮		
3095	これまでに私は二度訪れたことがあって、それぞれこの市で何日かをすごしている。	184-⑯		
3096	市のマークは黒熊だが、昔はこの国の壮大、華麗な首都であつ	184-⑰		
3097	市は戦争で徹底的に破壊されたが不死身の精力で再建され、そのことでよく東京とならんであげられる。	184-⑰		
3098	しかし、市は“東地区”と、“西地区”に二分され、境界線にはベトンの長い壁が張りめぐらされ、首都ではなく、国際政治のショーウィンドーとなった。	185-②		
3099	壁の両側で住民たちはそれぞれむこうのことを“あちら”と読んでいる。	185-③		
3100	この国そのものが東と西に二分されたので、西で“あちら”と呼ぶのは壁の東側だけでなく、東の国全体をそう呼ぶのである。	185-④		
3101	東につけられた新しい国名を呼ばないで、ただ“あちら”と呼ぶのである。	185-⑥		
3102	この市は東の国土内に孤島として位置しているが、そのうえ壁で二分されている。	185-⑥		
3103	二分された国のなかでさらに二分されているのである。	185-⑦		
3104	だから、たまたま西にいて東のほうを向いてこの市の西側のことを話すと、なると、“あちらのこちら”となる。	185-⑧		
3105	たまたま私は壁が構築された直後に東から西へ、できたばかりの壁のなかを歩いてぬけてたことがある。	185-⑩		
3106	スーツケースをさげて細い通路を歩いていくと検問所の小屋があり、きびしい、鋭い顔をした無口な兵がパスポートを嚴重に取り	185-⑪		
3107	パスポートを返され、スーツケースを持ち上げてあるきだすと、とつぜん白い無人の道を歩いていることに気がつくが、厩大な影からふいにぬけだしたと感ずる。	185-⑫		
3108	白い道はとところどころコンクリートの皮がやぶれて雑草が生え、淡い冬の陽がゆらめいて、ひっそりしている。	185-⑭		
3109	壁の裂けめに到着し、そこから一步踏みだすと、たくさんの観光客、バス、望遠鏡、カメラ、タクシー、アイモなどがひしめいていたが、ただざわざわとひしめきつつそこに佇んでいるだけであつ	185-⑮		
3110	ここには白い道はなく、たちまち私はタクシーで騒音の海のどこかへはこばれていった。	185-⑰		
3111	影と狂騒のあいだにあった100メートルほどの白い荒れた道が私にとっての“あちら”と“こちら”の距離であって、壁そのものはほとんど記憶から消えかかっている。	186-①		
3112	あの白い道を歩いているとき体を蔽っていたいっさいの石灰質の殻が音もなく消え、脱皮したばかりでまだつぎの皮や殻がどこにもきざしていない裸の幼虫のような不安をおぼえたが、それが日頃おぼえたことのないみずみずしさにみちていたのはなぜ	186-③		
3113	無碍は閃くよりほかの手段を知らないのだろうか。	186-⑦		
3114	“こちら”から“あちら”へいくことは壁にもかかわらず誰にでもできる。	186-⑨		
3115	観光バスに乗ってもいいし、市の上空を走る環状線の高架鉄道への階段をあがってもいい。	186-⑨		
3116	電車に乗って東地区のからっぽの駅についたら階段をおりる。	186-⑩		
3117	そこに検問所があって、きびしい、鋭い顔をした無口な兵がい	186-⑪		

3118	パスポートや荷物を厳重に調べてから二十四時間の滞在許可のスタンプをドンと音たてておしてくれる。	186-12		
3119	二十四時間後にもどってきてもう一度おなじことを繰り返して階段をのぼっていく。	186-13		
3120	電車は環状線なので“あちら”へ入ったり“こちら”へ入ったりしながら昼夜休むことなくは知っている。	186-14		
3121	地下鉄は“こちら”の経営だが、高架鉄道は“あちら”の経営で	186-15		
3122	昔は市の大動脈だったのだが、いまはおそらくほかに乗物がたくさんあるからだろう。	186-16		
3123	利用者が非常に少ない。	186-17		
3124	いつ乗ってみても電車はがらあきである。	186-17		
3125	古ぼけていて、ギンギン音をたて、ドアは手動式になっていて、赤い錆を散らして走るのが眼に見えそうだが、頑健、有能、正確な鉄箱である。	186-17		
3126	“あちら”と“こちら”に分裂はさせられても世界に冠たる清潔癖はいつまでも変わらないので、とくに政府が号令を発して人民を大動員したとも聞かないのに“あちら”にも“こちら”にもハエはいないし、この電車も座席や床には紙屑ひとつおちていない。	187-2		
3127	雑誌も、新聞も、汚物もない。	187-5		
3128	古いけれど清潔ですみずみまで磨きあげられ、そして空虚なのである。	187-5		
3129	からっぽの駅からからっぽの駅へからっぽの鉄箱が何輛もつながって走っていくのである。	187-6		
3130	頑健、有能、正確に、毎日々々、昼夜を問わず、十年も二十年もそうやって走りつづけ、断固として休止しようとしないのであ	187-7		
3131	誰でも乗れるのに誰も乗ろうとせず、乗ろうが乗るまいがおかまいなしに電車は到着し、出発し、旋回しつづける。	187-8		
3132	そして西から東へ入ったところにある最初の駅のカマボコ型の屋根には狭いバルコンがついていて、なにげなく見あげると、自動小銃を肩からさげた兵がゆっくりといたりきたり、また、佇んでいたりするのが眼に入り、ここはまぎれもなく“最前線”なのだ	187-10		
3133	誘拐、盗聴、蒸発、街路やホテルでの不自然死、トンネル掘り、窓からのとびおり、スパイ、転向者、再転向者、擬装転向者など、壁ができるまえも、できてからも、この市の新聞は東から西へおびただしい移動と西から東へのときどきの移動にからまる数知れぬ事件のニュースや、声明や、インタビュー記事でみたされつづけてきて、いまでもときどき、ときに精妙、ときに発作的な異常が発生することがある。	187-14		
3134	けれど旅行者はそのような現場にも顔にも出会えない。	188-14		
3135	長い壁とからっぽの電車を後頭部のどこかに感じつつ私は目抜きの大通りの広い歩道を漂っていき、ゼラニウムの赤い花にかこまれたカフェの白いテラスのよこをすぎ、人びとの夏に倦んだ眼のうえをかすめていく。	188-2		
3136	人びとは栄養で過飽和になり、はちきれそうになり、厚い、濡れたくちびるをかすかにあけて苦しげに息をついている。	188-4		
3137	白い、巨大な、幾筋かの太いくびれのある脂肪のかたまりが陽に照射されてジリジリとけかかっている。	188-5		
3138	刺すようなまなざしをした無気力な若者が陰毛ひげのなかにうづくまって陰鬱に怒っている。	188-7		
3139	市のはずれの大きな、とろりとした湖では白や赤の帆を張ったヨットが浮いている。	188-8		
3140	公園では巨大な鋼鉄の蛸の足が空をよこぎって美えかくれす	188-9		
3141	空のあちらこちらに鋭くて大きくて高いコンクリートの箱がそびえたち、市はガラスと鋼鉄の燦めきにみたされている。	188-9		
3142	歩道に何メートルおきかに作られた立方体のガラス箱のなかには時計や、香水や、毛皮がおかれ、鉱物質の閉じた輝きが精緻に乱反射している。	188-11		
3143	ここもどうやら私には場違いのようだ。	188-12		
3144	予感がはやくもきざしかけている。	188-13		

3145	歩道におかれた椅子に腰をおろしてビールを飲むことにした。	188-14		
3146	よく冷え、奥深い味がし、こまかくて精妙でねっとりとした泡がのどをすべっていく。	188-14		
3147	それが腸に渓谷の小流れのようにしみていくのを感じているあ いはいいが、やがてゆるんでだぶだぶした生温い水となり、 体内にぼったりとした熱い靄がひろがりはじめると何が起るか。	188-15		
3148	それはまだ遠い。	188-17		
3149	予感はあるけれど形にはなっていない。	188-17		
3150	タバコ売場や、ゼラニウムの植えこみや、あちらこちらペンキの はげかかったテーブルの木目などのうしろにかくれている。	189-1		
3151	にかくれているという気配すらみえない。	189-2		
3152	木目には陽が射し、かすかな凹凸のある縞の流れが地図の山 脈のようでもあり、潮がひいたあとの渚のようでもある。	189-3		
3153	ビールは鮮明で冷たい跡をのこしつつ熱い腹のなかを流れおち ていく。	189-4		
3154	「いつきてもたいした繁栄ぶりだわ。」	189-6		
3155	政府が税金をやすくしたり何やかや補助をしてここに人間や会 社を誘致しようと躍起になるけれど、昔をなつかしがってる老人 のほかは人気がなく、どんどん人口が減る。	189-6		
3156	人口の新陳代謝が起らない。	189-8		
3157	いつ何が起るかかわからないというんで中年者も落着かない。	189-8		
3158	だからそのうちここは自然消滅するんじゃないかという説をとき どき聞かされるんだけど、どうかしらね。	189-9		
3159	いつきても豪勢になるばかりみたいだわ。	189-10		
3160	これだけ金をかけたんだもの。	189-10		
3161	ちょっとやそつとでは手放す気になれないでしょうよ。	189-11		
3162	ほかにもいろいろとね。	189-11		
3163	東にたいする面あてばかりじゃないわ。	189-12		
3164	そう思うな」	189-6		
3165	女はちびちびとビールをすすりつつ眼を細めて大通りのかなた を眺め、元気よくしゃべっていたが、ふいに黙った。	189-13		
3166	眼のすみでちらと私をながめ、気づかわしげな低声で、「大丈 夫、ウンコちゃん？」とたずねた。	189-14		
3167	私はジョッキをおいてタバコに火をつける。	189-17		
3168	陽のなかで熱い火がゆらめく。	189-17		
3169	煙が眼にしみる。	189-17		
3170	やがてタバコ売場や、大通りのあちらこちらや、テーブルの木目 にひどい影響をうけることになるだろう。	190-1		
3171	予感があてどない嫌悪に変わり、酸のようにじわじわとひろがっ ていくものが形をあらわすだろう。	190-2		
3172	道を歩いていてふいに靴のしたで地面が揺れるのを感じずるだろ	190-3		
3173	「……いまのところは大丈夫だよ。」	190-4		
3174	ただどこを飲んだら引揚げたほうがいいと思う。	190-4		
3175	そんな気がする。	190-4		
3176	しっかりしているうちにね。	190-5		
3177	これを飲んでるあいだぐらいはもつよ。	190-5		
3178	それだけはいえるね」	190-5		
3179	「ホテルに帰るまでもつかしら？」	190-7		
3180	「そう思うけどね。」	190-8		
3181	そうでないかもしれないよ。	190-8		
3182	湖でずいぶん預金をした。	190-8		
3183	それがまだ残ってる。	190-8		
3184	だけど、いつ一挙に破産しちゃうかわからないんだよ。	190-9		
3185	おれはしょっちゅうそんなことを繰り返してるんだ。	190-9		
3186	積木細工を息つめて積みあげたかと思うと壊され、壊されては またひとつひとつ積んでいく。	190-10		
3187	その繰り返しかえしたね。	190-11		
3188	何度やっても上手にもならなければ下手にもならない」	190-8		
3189	「ウンコちゃんて不思議だわ。」	190-13		

3190	魚釣りとなるとあれだけひどいめに会っても平気でき、二時間も三時間もねばりぬくの、いまはビール一杯飲んでるあいだもおちおちしてられない。	190-13		
3191	どういことかしら。	190-15		
3192	都会がいやだということなの？」	190-13		
3193	「それでもあり、そうでもない。	190-16		
3194	何でもいから手や足をつかわなければいけないということはおわかってるんだけど、それだけでもないような気がする。	190-16		
3195	どうすればどうなるかということがこの年になってもわからないんだよ。	190-17		
3196	わからないと口にだしていえるだけ老けて鈍くなったんだけど、事態はいっこう改善されないね。	191-1		
3197	いつまでたっても内乱状態だ」	190-16		
3198	「だまってるほうがいいみたいね」	191-3		
3199	「賛成だ」	191-4		
3200	ホテルは空港の案内所で紹介されたものだが、大通りの中心からちょっとはずれた位置にある。	191-5		
3201	階下がカメラ店や服飾店になっていて、暗くて頑強な階段をのぼっていくと、二階の薄暗い廊下に小さな帳場がある。	191-6		
3202	オーケストラの指揮者かとまちがうような荘厳な額をした初老の男が新聞にかがみこみ、テーブルのかけからサンドイッチをとりだしてはネズミのようにちびちびかじったりかくしたりしている。	191-7		
3203	女が鍵をうけとりながら、「ねえ。	191-10		
3204	こういうおじさんに、いまから壁の向うへちよっといってくるからそのあいだ荷物を預かっていてくれって行ってごらんさい。	191-11		
3205	ハイ、ハイといったあとでちよろつとよこをむいて、罰あたりめが、というわよ。	191-12		
3206	きつと何かいうわよ。	191-13		
3207	経験あるの。	191-13		
3208	ちょっとやってみましょうか」	191-13		
3209	男は鍵を釘からはずしながら、女の言葉に耳をかたむけ、ききおわると二、三度うなずいてから背後の事務室のドアを指さしたきりテーブルにもどって新聞を読みはじめた。	191-15		
3210	女は舌をペロリとだし、不機嫌そうに、「日本語がわかったのかしら」といった。	191-17		
3211	廊下は天井がふり仰ぎたくなるほど高くて闇がよどみ、部屋はドアが厚くて大きく、やっぱり天井が高い。	192-3		
3212	浴槽もトイレもないが、部屋は体操ができそうなほど広い。	192-4		
3213	そして、窓にはどっしりとした枯葉色のカーテンがかかり、床には赤い粗織のカーペットが敷かれ、どちらもすりきれていないし、ほころびてもいない。	192-4		
3214	壁やテーブルにはしみもないし、傷もさほど目立たず、小さな読書燈のいささか古びた胴には親密がただよっている。	192-6		
3215	にもかかわらず、どうしてか、荒寥がしみだしてくる。	192-7		
3216	物置小屋か家畜小屋のようなところがある。	192-8		
3217	何年も捨てられたままで誰も立入らなかったというようなところがある。	192-8		
3218	スポーツカー、タクシー、オートバイなどの軋み、叫び、唸りがつきからつきへ部屋のなかになだれこんできては疾過していく。	192-10		
3219	ひよつとすると倒されてしまいそうである。	192-11		
3220	まるで街路にいるようだ。	192-11		
3221	窓を閉ざし、カーテンをしめ、灯を消し、全裸になってシーツにもぐりこむ。	192-12		
3222	午後おそくの暑熱がむっとたちこめているが、白くて固いシーツがひんやりして溪流の水のように鋭くとがっている。	192-13		
3223	火酒をひとくちすすった。	192-14		
3224	淡い茴香の匂いのする熱のかたまりを いっぱいに頬ばり、少しずつうごかしてあちらこちらにたっぷりしみこませたうえで一滴、一滴、のどへすべらせる。	192-14		

3225	この酒にはしばらくぶりで会う。	192-⑬		
3226	この瓶は空港をでるときに売店で買ったのだ。	192-⑬		
3227	湖の宿ではビールしか飲まなかった。	192-⑭		
3228	それも夕方になってへとへとに疲れて宿へもどってきから “アーベントロート” を眺めつつゆっくりと一杯のむだけだった。	192-⑭		
3229	この火酒に手をだしたことがないではないけれどまるで何かの強い酸をくちびるにのせたようだったので、一度か二度でやめにしてしまった。	193-②		
3230	それがいま飲める。	193-③		
3231	味わいつつ、飲める。	193-③		
3232	またしても私は変ってしまったのだ。	193-④		
3233	「ウンコちゃん、ねえ」	193-⑤		
3234	全裸になって女がすべりこんでくる。	193-⑥		
3235	冷たくてとがった鼻をそとよせてきて、かるくのどをくすぐり、胸にすりつける。	193-⑥		
3236	「あそこではたのしかったわ。」	193-⑧		
3237	いろいろ教えられたし。	193-⑧		
3238	あなたのことを知ったし。	193-⑧		
3239	金いろの夏だったわ。	193-⑧		
3240	鹿のこと、おぼえてる。	193-⑨		
3241	親子でとんでいったでしょう。	193-⑨		
3242	朝ね。	193-⑨		
3243	あなた、朝露で、腰からしたのズボンがまるで水からあがったみたいにくしょ濡れだったわ」	193-⑨		
3244	「おぼえているとも、ネズミちゃん」	193-⑪		
3245	私は火酒の瓶をナイト・テーブルにおき、敷布を子供の陣取り遊びのように両手でかこってみせ、そこに顔を伏せて、「おまえ、こうすると牧場が見えるよ、牛が見えるよ」	193-⑫		
3246	薄暗がりのなかで女が低く深く笑った。	193-⑮		
3247	私は顔を伏せたまま、「鹿も見える、バイクも見える、乾草小屋も見える」	193-⑯		
3248	いいつづけた。	194-①		
3249	「……ウンコちゃん、ウンコちゃん」	194-②		
3250	女は髪をふりみだし、笑ったり呻いたりしながらすりよってくる、うつ伏せになっている私の背に全身でおぶさった。	194-③		
3251	たくましい腕を肩にまわして女がしがみついてくると、乳房が肩甲骨のあたりでおしつぶされたり、はみだしたりするのが感じられ、茂みが臀のうえでざわざわおさえられた。	194-④		
3252	耳のうしろ、肩のさき、首すじ、つぎつぎと女はゆっくりと噛み、いそがしくうつついていった。	194-⑥		
3253	「……ああ、ウンコちゃん、ウンコちゃん」	194-⑧		
3254	女はいそがしく腋のしたにもぐりこみ、「おにいちゃん」とつぶや	194-⑨		
3255	湖では毎日、朝早く起き、夕方おそく帰ってきた。	194-⑫		
3256	おかみさんの作ってくれたサンドイッチとサクランボと本を籠に入れて湖畔へいき、鴨撃小屋の床下からボートをひきだして漕	194-⑭		
3257	藪かともがうほどただけだけしい葦をかきわけているときまって二頭の鹿がきまった場所からとびだして消えていったが、おんなはそれを日によって夫婦といたり、兄弟といたり、親子と	194-⑯		
3258	いつもおなじように一度沖へ漕ぎだしてからゆっくりと、そしてひっそりと岸へよっていき、葦の茂みや睡蓮の葉かげのあたりを狙ってキャストするのだが、毎日、最初の一匹にすべてが	194-⑯		
3259	二匹めからはたつぷりと時間をかけて悶えたり、暴れたりさせ、とろりとした水のなかで鮮緑と白斑の胸がゆらめいたり、閃いたりして泳ぐところを眺めていたのしんだ。	195-②		
3260	何匹釣っても大小かまわずにみな逃がしてやったが、鰐のようにせりだした巨眼をギラギラさせているこの暴君も私の手からはなれて暗がりへ消えていく後姿には小犬のようなところがあっ	195-③		
3261	昼寝のために一度宿へ引揚げてから夕方近くまた出直す日もあったが、一日じゅう湖にいる日もあった。	195-⑥		

3262	午前も陽が高くなると水がぬるみ、足をつけてみると犬の舌に舐められているような感触だが、そうなるとボートを対岸に漕ぎよせて上陸した。	195-⑦		
3263	女が腕に籠をさげ、私が肩に水筒をつるし、牧草地から牧草地へ歩いたり、丘から丘へ歩いたりした。	195-⑧		
3264	頑健なオールをあやつり、ボートをあちらこちらへ持っていき、草いきれと汗にまみれてあえぎあえぎ歩いていると、骨の芯からアルコールとニコチンがしぼりだされてくるようだった。	195-⑨		
3265	手、足、肩、腰、膝の、痛苦でふるえる箇所や汗のふきだす箇所から、汗といっしょにねっとりした膿汗となって鬱積したひとりごとや自己反省が膚へあふれだし、微風にさらわれて消えて	195-⑪		
3266	私たちは身軽になり、透明になり、腸のすみずみまでくまなく陽に照射されたが、批評することもされることも忘れ、沈思や下降をおぼえなかった。	195-⑭		
3267	牧草地にはほところどころに牛が夕立やにわか雨を避けるよう小屋が作ってあって、そこには扉がなく、ただ乾草が積まれてあるだけだが、いきいきした冗談のふちや、ふとかわしたまなざしのはしで感知しあうと、ためらうことなく小屋に入った。	195-⑮		
3268	そして入口に釣竿をつきたて、竿のさきにハンカチを結んでおいてから、乾草のなかでまじわりあった。	196-①		
3269	乾草は香ばしく匂いたち、その匂いはいきいきとひらいてうごくがしっとりとした重いところがあった。	196-②		
3270	たがいのものをくまなく眼で眺めあい、舌でまさぐりあっていると、ときどき乾草の一筋、二がまぎれこんできて毛といっしょに噛むことがあったが、上と下とで低く爽やかに笑えばすむこと	196-③		
3271	私は、「そこだ、顎のうらだ」といったり、「うん、その縫目のところをずっと」といったり、「皺しわを軽く噛んでみて」といった。	196-⑥		
3272	乾草のなかで眠っていると、ふかふかと柔らかいし、このうえなく香ばしく、ときにはきつすぎて眠れないほどだが、小屋の壁板のすきや節穴から日光が射しつづける。	196-⑬		
3273	それが薄いまぶたとどいて、射精の動揺や女の呻吟や男根の波立ちの記憶などといっしょになり、私は眠りながらも浮揚し	196-⑭		
3274	どこかの涼しいかげで沈むようにして眠るというよりはあかあかと陽の射す溪流のなかをもてあそばれて浮いたり沈んだりしつづ流されていくような気配がある。	196-⑯		
3275	眼がさめると陽はよほど通過し、よこで女が薄く口をあけて眠りこんでいたり、真摯なまなざしで本を読んでいたりと、どこか牧草地の遠くで淡い花をつんで、草むらにうづくまって花輪を編んで	197-①		
3276	私が眼をさまして小屋の入口にでていき、湖、葦原、村、そのかなたの牧場を眺め、それらすべてのうえにある淡い、赤い夕焼けのきざした雲を眺めていると、誰もいないと思った牧草地から、ふいに女がそこにやってきていて、花束や花輪を手にわたし	197-③		
3277	「これ、菊みたいだけど」	197-⑦		
3278	「アレチノギクじゃないかな」	197-⑧		
3279	「ウンコちゃんは何でも知ってるのね」	197-⑨		
3280	「あてずっぽだよ、ネズミちゃん」	197-⑩		
3281	「ごけんそんを」	197-⑪		
3282	広い肩や、たくましい腰を見せ、威風堂々、草を踏みしだくようにして歩いているように見えるのに、女が後姿を見せて遠ざかっていったり、草むらにかがみこんで花をさがしたりしているところを見ると、おびえてもいず、さびしがってもいないのに、いつもどこかはかないところがあった。	197-⑮		
3283	それを見ると、いつか、あの豪華なガラスの部屋のなかで床いっぱい一流品をならべてみせて意気揚々と女はこわいわよと笑いつつ叫びながら、それらの事物いっさいに指紋ひとつつけられることもできないで孤立していたように見えたことがまざまざと	197-⑮		
3284	女はアザラシのコートをいつまでも新鮮に保って孤立していたようにアレチノギクからも孤立し、分離されているようである。	198-①		
3285	女がいくら此牧草地を歩いても足跡ひとつのこらないのだ。	198-②		

3286	はかないと私が見るものはそこからきた。	198-③		
3287	「さあ、ウンコちゃん、元気をだして」	198-④		
3288	女は草に跪くと、そっと私のズボンに指をふれて、ファスナーをさげ、たったいままで眠りこけていたのに、ふと細い指でふれられたばかりに見る見る昂揚してしまったものを、眼を閉じて一度口いっぱい頬ばってから音たててはなし、クローバーの花輪	198-⑤		
3289	女は体を折って哄笑し、軽く拍手して、あたりを跳ねてまわっ	198-⑧		
3290	薄く暗みかけた赤い黄昏のなかで、その声は、湖にわく夕霧や、遠くの牛の首鈴の音や、ひめやかな微生物たちのざわめきをこえ、たじろぐほどの遠くまで鋭くわたっていった。	198-⑧		
3291	とつぜんスポーツカーが一台、野太くたくましいが甲高いようでもあるのだ声で唸りながら部屋のなかをかすめた。	198-⑪		
3292	部屋は窓ごと身ぶるいしてから、怒って身構えつつ静かになっ	198-⑫		
3293	シーツの底深くに潜って丹念で緻密な、小鳥がくちばしでつつくような仕事にふけている女を私はひきあげる。	198-⑬		
3294	腰や、横腹や、胸にふれつつ女がゆっくりとあがってくる。	198-⑭		
3295	女はくぐもった声でつぶやいた。	198-⑮		
3296	「バイクがよくつれたわね。	198-⑯		
3297	あんな魚がいるとは知らなかったわ。	198-⑯		
3298	十年ここで暮していながら知らなかった。	198-⑯		
3299	おかみさんが香草をつめて蒸してくれたけど、あんなおいしいものどわね、しらなかったわ。	198-⑰		
3300	反省させられちゃった。	199-①		
3301	村の常連があなたのことをほめていたわよ。	199-①		
3302	ほんとの釣師でほんとの男だって。	199-①		
3303	あの人たちは毎晩あそこへ定時に飲みにくるそうよ。	199-②		
3304	毎日、毎晩ね。	199-②		
3305	それで、ちゃんと誰の席はどこときまってるの。	199-③		
3306	いつかあなたが大物を一匹プレゼントしたでしょう。	199-③		
3307	だからおっちゃんたち、はしゃいでたわ。	199-④		
3308	いいことをしてあげた」	199-④		
3309	「二つとおなじ湖はないっていうけれど、一つの湖だってしょっちゅう変る。	199-⑤		
3310	それをのみこむのに時間がかかるね。	199-⑤		
3311	それとバックテイルのしゃくりかただね。	199-⑥		
3312	あの湖にはあの湖の癖というものがあるのだよ。	199-⑥		
3313	バイクは何にでもとびつくんだけど、食わないときは食わない。	199-⑦		
3314	どんな名人も歯がたたないらしいや。	199-⑦		
3315	春や秋じゃなくて夏のさなかに釣れたんだから、そこを買ってください。	199-⑧		
3316	おかげでおれは救われた。	199-⑨		
3317	ちょっと自信がついた」	199-⑨		
3318	「私、台所へ入っておかみさんが料理するのを見てたのよ。	199-⑩		
3319	勉強になったわ。	199-⑩		
3320	ホワイトソースがむつかしいところで、これはもっと研究しなくちゃいけないけれど、アンチョビを入れるのがコツだとにらん	199-⑩		
3321	アンチョビを入れると塩味がバイクの白身にまわっていいらしいのね。	199-⑫		
3322	今度からは私が作ってあげるわ。	199-⑬		
3323	私とフライパン一つ持っていったら何日でも野宿できるわよ、ウンコちゃん」	199-⑬		
3324	「それはいいな。	199-⑮		
3325	もう一回やって夏の宿題の総仕上げとするか。	199-⑮		
3326	明日、ここの釣道具屋をさがして情報を聞きこんできてくれ。	199-⑮		
3327	なるだけたくさんがいいね。	199-⑯		
3328	それを集めて、整理して、分析する。	199-⑯		
3329	穴場はここといいあててみせるよ。	199-⑰		
3330	いったこともない穴場を地図であてるのはたのしいよ。	199-⑰		
3331	きみは斥候だ。	200-①		

3332	報告するだけでいい。	200-①		
3333	おれが参謀総長さ」	200-①		
3334	「いいわよ。	200-②		
3335	まかしといて。	200-②		
3336	そういうふうにいってくれとうれしいのよ。	200-②		
3337	いつもその調子だとうれしいわ。	200-②		
3338	あなたが崩れてるのを見るとつらいの。	200-③		
3339	こちらまで狂っちゃう。	200-③		
3340	私は男まさりだけれど、ある点をつかれると瓦壊しちゃう。	200-③		
3341	そういう点があるの。	200-④		
3342	そこをあなたは御自分は崩れて寝たままで遠慮会釈なくえぐってくるからこのあいだみたいなことになるのよ。	200-④		
3343	あなたは容赦しないわね。	200-⑥		
3344	人前ではかくしてらっしゃるけどね。	200-⑥		
3345	かくそうとしなくてもそうなっちゃうらしいんだけどね。	200-⑥		
3346	あとで自分をせめたてる。	200-⑦		
3347	その刃が自分と他人を同時に切ってしまうて、また苦しむ。	200-⑦		
3348	だから冷酷なんだ。	200-⑧		
3349	女に惚れることができないのよ。	200-⑧		
3350	賭けることもできないんだ。	200-⑧		
3351	我をわすれるということができないんですからね。	200-⑨		
3352	私は、そう見てる。」	200-⑨		
3353	「我を忘れるということがないから、逃避することもできないんだ	200-⑩		
3354	外へいこうが内へいこうが、おなじことだ。	200-⑩		
3355	逃避などということはあり得ないよ」	200-⑪		
3356	「濡れ場にしては妙な科白になってきたわね」	200-⑫		
3357	「だけど、そのとおりだよ」	200-⑬		
3358	「あたってますか」	200-⑭		
3359	「不足だけれど、まず十分だよ」	200-⑮		
3360	「いやだ、いやだ」	200-⑯		
3361	ふいに柔らかい髪がオートバイのかけぬけるなかで顔にふりかかってきた。	200-⑰		
3362	くちびるがはげしくそこかしこをむさぼって歩いた。	200-⑰		
3363	敏くなって薄紙のようになった膚に熱い刻印がめまぐるしくおされた。	201-①		
3364	それはふるえながら流れたり、ふとたちどまっていつまでもそこにぐずぐずしていたり、とつぜん法外な方角にとびたったりした。	201-①		
3365	ひとつひとつの刻印がやがてとけあって鬱蒼とした熱の森がひろがりはじめた。	201-③		
3366	髪が額や鼻に蔽いかぶさるたびに女が小屋のなかで含み笑いしながらつぎつぎと乾草を投げつけてきたことが思いだされた。	201-④		
3367	くちびるほど外光と視線にさらされ、たえまなく酷使されて、ほとんどそこにあることを感じさせられることも、めったに思いださせられることもなくなった器官はあるまいと思われるが、二時間も、三時間もかけて吸っていると、ふいにいっさいがとけてしまう	201-⑥		
3368	いつ、どこからくるのかわからない。	201-⑨		
3369	おたがいの体が重量を失ってしまう。	201-⑨		
3370	ぶざまな骨、重苦しい筋肉、わずらわしい脂肪、すべてが、熱れすぎてむっとした夏の遅い午後のなかでとろとろにとけあう。	201-⑨		
3371	どこもかしこも柔らかくて、熱くて、深く、濡れぬれとしている。	201-⑪		
3372	泥とも蜜ともつかない広い不定形が炉のように闇を含んで白熱しながら、くによくにやになったシーツの皺や、ベットや、軋みから浮びあがって漂う。	201-⑪		
3373	おだやかな混沌がたぶたとひろがる。	201-⑬		
3374	くちびるも、歯も、顔もとけて、舌のさきのほんの小さな一点が感じられるだけだが、そこから混沌が背後にではなくて眼前に	201-⑭		
3375	明るい海で二頭の小さな海獣が浮きつ沈みつしてたわむれあっている。	201-⑮		
3376	秋の黄昏の湖で水が棧橋の足にぴちゃりぴちゃりと音たててい	201-⑯		

3377	くらげなして漂う白い肉のうえによどみながら私はたわむれがひきだした無辺際をまじまじと眺める。	201-17		
3378	女がけだるく手をあげて、「……………」涙をぬぐっている。	202-2		
3379	三時間めになると閉じているのは肛門だけになってしまった。	202-5		
3380	肛門はきまじめに小皺を集めて固く閉じているが、それすら沼に蔽われ、没してしまって、もう吸うまでもない。	202-5		
3381	オー・ド・トワレットの香りがふくよかにひらいてうごき、女の匂いとまじって、むせそうに熱い揮発があたりに起る。	202-6		
3382	その霧のなかで浸透していくと、いつものくちずけのあとで出会う、ざわめく右壁もなく、左壁もなく、熱い沼があるだけである。	202-8		
3383	恋矢のいくつかがいつもの箇所には達して、待ったり、佇んだり、そのあたりをこつこつあたってみたりしても、ひとつもあらわれな	202-9		
3384	ほとんど繊維質をとろかきってしまうまでに果肉が熟したのだろうか。	202-11		
3385	繊維も筋も核もただいちめんの火照りのなかにかくれてしまったようである。	202-12		
3386	湯滴の内側にすべりこんで茫然としながらたちこめる靄のなかをゆっくりと往復する。	202-12		
3387	それからとつぜん、どうしたとか、きっかけも予感もないうちに、一瞬がきた。	202-13		
3388	混沌が暗んで消えた。	202-14		
3389	下から上へとつきあげられているのに肩にのしかかってくるものがあり、私は崩れた。	202-14		
3390	背骨がふるえ、下腹に火をおぼえ、はげしいざわめきにみちた闇のなかに、あちらこちらで形がはやくも起きあがってくる気配を感じながら、墜ちていく。	202-15		
3391	どこかでぼんやりした声が、「…、…」つぶやいている。	203-1		
3392	けれど、つづかなかった。	202-4		
3393	ほとんど毎朝、女は眼をさますと腕をながめる習慣である。	203-5		
3394	シーツのなかから裸の腕をつきだし、おぼろな影のたちこめる微光のなかで表返したり裏返したりしながらくまなく点検するの	203-6		
3395	ガラスの部屋でもそうだし、田舎宿でもそうした。	203-7		
3396	しばらくだまって観察したあと、ひとりごとのように、うん大丈夫といたり、私も老けたもんだとなげいたりする。	203-8		
3397	ときどき、どう、見てちょうだいといってさしだしてることがある。	203-9		
3398	たしかに逸品といいたくなる朝があった。	203-10		
3399	ふれた指をはじくよりはしっとりと吸いこむようにしてそこにとどめておくような肌理のこまかい膚のしたに精妙な肉と冷たい脂の気配がある。	203-12		
3400	うぶ毛も、ソバカスも、しみもなく、毛穴があることも感じられず、血を深く沈めてどこもかしこも蒼く冴え、しかもどっしり重いので	203-13		
3401	一日の自信をおくにふさわしい荘重がある。	203-15		
3402	「李朝や明代の壺もこうはいかないわよ。	203-16		
3403	いつか美術館で見てね、こっそりくらべてみたの。	203-16		
3404	明代のも宋代のも李朝のもあったけど、とても私の腕には及ばないと思ったわね。	203-17		
3405	いまやおちぶれて腕だけしかのこっていないのはくやしいけど、これはまだまだ売れるわよ。	203-17		
3406	玉膩玲瓏 というものですよ」	204-2		
3407	今朝も女は枯葉色のカーテンから洩れる明るい光のなかで腕をためつすがめつしたあとそういって笑い、ベットからでていっ	204-4		
3408	くしゃくしゃになった枕を胸にかいこみ、わたしは新鮮な牛乳にみたされたようになって、うとうとしていた。	204-5		
3409	すでに街路から騒音がたちのぼりはじめ、まぶたに射す光は爽やかだが微熱がそこかしこにきざしている。	204-6		
3410	「えらいことが書いてあるはよ、ウンコちゃん」	204-7		
3411	女が片手に新聞を持ち、片手で口の歯ブラシを使いながら、含み声でいった。	204-8		

3412	部屋のなかをゆっくりいったりきたりしながら女は声をだして新聞を読んだ。	204-⑧		
3413	「……………当地では最近三週間から四週間に見られた兆候の結果からして、近く共産主義軍がサイゴンに総攻撃をかけてくるのではあるまいかという議論がしきりである。	204-⑩		
3414	今年二月の総攻撃以来彼らは全土総蜂起を呼びかけ、五月にも諸都市に攻撃をしかけたが撤退し、三度めの大波を企画しているものと思われる。	204-⑪		
3415	これにたいして南ベトナム政府は全軍民に警告を発し、外出禁止時刻を従来より一時間繰あげた。	204-⑬		
3416	米軍指令部の高級将校は“彼らがやってきても不思議ではな	204-⑭		
3417	ここでは何でも起る。	204-⑮		
3418	こちらの準備はできている。	204-⑮		
3419	コミーがきたらたたきかえしてやる”といっていると。	204-⑯		
3420	“コミー”って“赤”のこと？」	204-⑯		
3421	「そう」	204-⑰		
3422	「威勢のいいこといってるわよ」	205-①		
3423	「通信社はどこ？」	205-②		
3424	「WAPよ」	205-③		
3425	「ほかに何と書いてある？」	205-④		
3426	「それだけ。」	205-⑤		
3427	ほかにはないわ。	205-⑤		
3428	やるんですって。	205-⑤		
3429	すごいな。	205-⑤		
3430	いよいよ大詰めかしら。	205-⑤		
3431	寝てられないわよ、ウンコちゃん。	205-⑤		
3432	でも、ヨタかもしれないわね。	205-⑥		
3433	私には匂ってこないわ。	205-⑥		
3434	私、わりあいこういうことには鼻がきくんだけどナ」	205-⑦		
3435	「わからないよ。」	205-⑧		
3436	あそこでは毎年春と秋には戦争がはげしくなるんだ。	205-⑧		
3437	雨季かどうか、米のとり入れがすんだかどうか、そういうことと関係があるんだよ。	205-⑧		
3438	米と農民をどちらが手に入れるかという問題なんだからね。	205-⑨		
3439	春と秋だけじゃない。	205-⑩		
3440	いつでも起る。	205-⑩		
3441	何でも起るといするのは正しいね。	205-⑩		
3442	それ自体は正確だ」	205-⑪		
3443	「ここだってそうだわね」	205-⑫		
3444	女は新聞を持ってくと枕もとにそっとおき、洗面台のところへいって顔を洗った。	204-⑬		
3445	私は起きなおって新聞をとりあげたが、どの欄に記事がでているのか読めない。	205-⑭		
3446	やっと“サイゴン”という活字をひろった。	205-⑮		
3447	大きな欄ではない。	205-⑮		
3448	遠い国の地震か、自国人ではない大使の誘拐を報道する程度の面積しか占めていない。	205-⑯		
3449	女に匂ってこないのも無理はない。	205-⑯		
3450	「じゃ、私、ちょっと外出してくるわ。」	205-⑰		
3451	買うのはひげ剃りクリームとジレット、それに ティッシュ・ペーパーね。	205-⑰		
3452	釣道具屋を一軒ずつあたってまわって情報を集めたあと、地図をひとつ買ってくるわ。	206-①		
3453	お昼はいっしょにしましょう。	206-②		
3454	ビールでも飲みながら分析してちょうだい。	206-②		
3455	大物の穴場をうまくあててね」	206-③		
3456	バイ、バイと手をふって女は部屋をでていった。	206-④		
3457	いつのまにか女は貝が貝殻を分泌するように主婦になってしまっている。	206-④		

3458	堅固な、したたかなまでの気配が肩や腰にある。	206-5		
3459	いきいきとし、自信にみちて、眼も顔も安堵しきってひらいてい	206-5		
3460	いつか私は、ママごと以上にしてくれるなどといったけれど、まるで子供のたわごとしか思えない。	206-6		
3461	ふいに私は命名できない憂鬱がひろがりはじめるのを感じた。	206-7		
3462	おぼろな焦躁がそれをふちどっていた。	206-8		
3463	私が十八歳で知ってしまったことを女はいまになってようやく手に入れたと感じている。	206-8		
3464	いたましいまでいきいきしている。	206-9		
3465	しすぎている。	206-10		
3466	女が部屋をでていったあと、私はからっぽのなかでタバコをふかしたり、ベッドに寝そべったりした。	206-11		
3467	にぶい強い一撃を浴びたあとのこだまがそこかしこに感じられ	206-12		
3468	いきなり頬をうたれたようでもあり、何か新しいものを見たようでもあった。	206-12		
3469	ふいに顔のない動物があらわれ、こちらを襲うのでもなく、うかがうのでもないそぶりで、けれどしぶとい気配でそこにうずくまって、かさばっている。	206-13		
3470	それは蛙呑み男や、ガラスの部屋や、栗鼠や、女の泣き声や、どしゃ降りの湖や、とろとろにとけた女陰などのうしろを注意深く足音をしのばせて歩き、見えるときはいつも後姿だけで、すっかり私を油断させておいてから、やにわに登場したのだ。	206-15		
3471	私はぼんやりとなってしまう、それが部分であるのか主題であるのかさえしばらくわからないでいた。	207-1		
3472	窓の騒音に耳をかたむけ、昨夜の名残りの体液のしみたシーツに鼻をあて、天井や壁で踊る陽を眺めていると、私はベッドに縛りつけられたままぶわぶわ肥り、息がつまりそうになって形を失い、そして、とどめようもなく根がのび、葉が茂り、蔓がからみあってかぶさってくる。	207-2		
3473	このままの姿勢で腐ってしまいそうな気配をおぼえる。	207-5		
3474	湖で一挙に更新されて蓄積されたものはもう尽きかかってい	207-5		
3475	むっとした暑熱のなかで醗酵がはじまりかかっている。	207-6		
3476	女が帰ってきたら読めるようメモを書いてテーブルのまんなかにおき、私は部屋をでて、駅へいった。	207-8		
3477	駅を見つけ、案内所を見つけるのは造作もないことだった。	207-9		
3478	私は英語で通信社の支局があるかないかをたずね、アドレスと電話番号を紙に書いてもらおうと、それをタクシーの運転手に見	207-9		
3479	支局は大通りからよこへ入った古めかしいビルの薄暗い三室を占め、何人かの男女がタバコをふかしたり、タイプライターをたたいたりしていた。	207-11		
3480	テレックスが唸ったり連打したりしては電文紙を吐きだし、それはリリウムの床に何重にも折れてのたくっていた。	207-12		
3481	私は入口の近くにいた大男に用件を告げ、三年前に新聞社の臨時移動特派員としてもらった身分証明書や、米軍の従軍許可証など、財布のすみにいつも古い記念品としてのこしてあるカード類をみな見せた。	207-14		
3482	そして、その通信社の当時サイゴン支局員としてはたらいっていた記者とカメラマンの名をあげた。	207-16		
3483	はじめ大男は怪訝そうでもあり、迷惑がっているようでもあったが、その男の名がでたので微笑した。	207-17		
3484	その男のあだ名や性癖について私は大男と少し話しあった。	208-1		
3485	大男はたっていて二冊か三冊のファイルを持ってくるとテーブルにおき、椅子をひとつひっぱってきて私にすわるように、そして自由に読むようにとってくれた。	208-2		
3486	「あなたは記者ですか？」	208-5		
3487	「いや。」	208-6		
3488	小説家です。	208-6		
3489	ときどき記者の仕事をしませどね。	208-6		
3490	ふだんは小説を書いています。	208-6		

3491	いまは休暇中です。	208-⑦		
3492	たまたま今朝、あなたの社のニュースを読んだのできたのです」	208-⑦		
3493	「何か記事を書くのですか？」	208-⑧		
3494	「いや。」	208-⑨		
3495	個人的興味ですよ」	208-⑨		
3496	大男は納得したらしく、きつい腋臭を匂わせて、むこうの席へいき、椅子にもたれて仲間とけだるそうに雑談をはじめた。	208-⑩		
3497	そこをでたのは午後遅くになってからであった。	208-⑫		
3498	ほとんど半日を費したのだが眼をとおすことのできた情報はごくわずかだった。	208-⑫		
3499	それも読むことは読んだけれど背後にあるものを察することはほとんどできたとと思えない。	208-⑬		
3500	過去半年ぐらいに限定してファイルを選んでみたのだが、無数の戦闘の記録、つまり無数の地名と数字にみたされていて、それぞれをつなぎあわせているはずの糸が容易に見つからな	208-⑭		
3501	いっぽう政治的現象もまた無数の声明や高官の談話などのなかに漂っていて、どれが野外の流血から派生したものなのか、枝鉤であるのか、ないのか、それもまた容易にわからなかった。	208-⑯		
3502	私は紙のなかをさきへ進んだり、あとへもどったり、速く繰ったり、ぼんやりと放心したりした。	209-①		
3503	苛酷な霧がたちこめていてすべてが顔を失っているがしばしば私が通過したり泊ったりしたことのある小さな町の名に出会うと、あまりたびたび回想したので指紋でべとべとになってしまったはずのものがふいにあざやかな光景を閃めかして眼と紙のあいだをよこぎっていくことがあった。	209-②		
3504	それらはたえまなく修正に修正をかさねられ、おそらく原形をとどめないまでになっているはずで、いわば私は私だけの国の光景を眺めているのにちがいがなかったが、ありありと照射されるの	209-⑤		
3505	島ほどのウォーター・ヒヤシンスの群生を浮かべてゆっくりと流れる黄いろい大河や、ランプの灯に照されたじつとりと湿った壁を這いまわるヤモリや、水のように黄昏のしみてくる密林のなかを遁走する私たちを追って死んだ兵の犬がどこまでもついてきたことなどが、眺められた。	209-⑧		
3506	部屋にもどると女がベッドから体を起し、「……どこへいった	209-⑫		
3507	メモはあったけど心配したわよ。	209-⑬		
3508	病人がそうひとりでお出歩いちゃいけないじゃないの。	209-⑬		
3509	ちょっと目をはなしたら、たちまち逃げちゃうのね。	209-⑭		
3510	油断もすきもあったもんじゃないわ、ウンコ」といって怒った。	209-⑭		
3511	シャワーを浴びたあとでベッドによこになったが眠れなかった。	209-⑰		
3512	タバコに火をつけたり消したり、つけたり消したりしているうちに夕方になった。	209-⑰		
3513	静かなところでゆっくり湖の相談をしたかったのといつて女は夕食用に買ってきた品をいそいそとテーブルにならべた。	210-①		
3514	ロースト・チキン。	210-②		
3515	生ハム。	210-③		
3516	ゴルゴンゾラ・チーズ。	210-③		
3517	パプリカ・トマトの甘酢漬。	210-③		
3518	オリーブの塩漬。	210-③		
3519	サクランボ。	210-④		
3520	赤ぶどう酒。	210-④		
3521	ポケット・ナイフ一本で女は一羽の鶏を手早く巧みに各部分に切り分けると、つぎに新聞を皿がわりに切ってテーブルにおい	210-④		
3522	今朝のあの欄はたちまち脂とソースにまみれ、一時間後には紙屑箱へ捨てられた。	210-⑤		
3523	ハムを包んだ紙も捨てられた。	210-⑥		
3524	チーズを包んだ紙も捨てられた。	210-⑦		
3525	鶏も一群の骨となって紙に包まれ、いくらか大きい玉となって捨てられた。	210-⑦		
3526	「鶏でも鴨でも皮のところおいしいね。	210-⑨		

3527	それからいいのはお尻のまわりの肉だよ。	210-9		
3528	三角形になってとびだしているところ、あれがうまい。	210-9		
3529	食べてごらんよ。	210-10		
3530	わかるから」	210-10		
3531	話しつつ赤ぶどう酒のなだらかでぽってりした霏のなかで私は未知でなさすぎる穴がひろがるのを感じた。	210-11		
3532	言葉のうらにも後頭部にも穴はひろがり、じわじわと私を吸いこみにかかった。	210-12		
3533	女はぶどう酒をちびちびすすりながらテーブルに地図をひろげてメモ用紙をおき、今日一日じゅうかかって歩きまわった釣道具店で聞きこんだ情報をこまかく話した。	210-14		
3534	この最前線の市には何でもあるが釣道具店もあるらしかった。	210-15		
3535	教えられた湖の名をつぎつぎとメモ用紙に書きつけ、地図でさがし、ひとつずつ印をつける。	210-16		
3536	赤鉛筆を片手に地図のうえにかがみこんでいる女はすっかり影からぬけだし、はずんでいて、堅牢だった。	210-17		
3537	「……ひとつだけポツンと独立した湖よりは川の流れこんでいるのがいい。	211-2		
3538	川がたくさんあればあるだけいい。	211-2		
3539	それから、川が流れこむだけでなしに流れだしてるのもいい。	211-3		
3540	いちばんいいのは大きい湖や小さい湖が川でつながりあってるやつ	211-3		
3541	つまりめいめいひらいた湖だけれどそれがひらいたままでつながりあってるようなのがいいのね。	211-4		
3542	システムとかいったわね。	211-5		
3543	勉強したわ。	211-6		
3544	御注文どおりのはこのあたりじゃ“東”にそれに近いのがある	211-6		
3545	“西”だと遠走りしなきゃいけないの。	211-6		
3546	一度飛行機でここをぬけだして、どこか大きな町へ行って、それからだわね」	211-7		
3547	「今晚考えてみよう。	211-9		
3548	いそぐことはないよ。	211-9		
3549	秋になればなるだけパイクは食いがたってくるんだから、遅いほどいいというものだ。	211-9		
3550	これはゆっくり待ってられる問題だ。	211-10		
3551	待てば待つだけいいんだ。	211-10		
3552	だけれどね、こちらのはそうでもないらしい。	211-11		
3553	やばいところがあるな。	211-11		
3554	ちょっと匂いかけてる」	211-11		
3555	「聞かせて。	211-13		
3556	聞かせてよ」	211-13		
3557	「政治の話だ。	211-14		
3558	戦争の話だから政治の話だ。	211-14		
3559	つまり、石みたいにしっかりと手ごたえがあるがどこまでいってもウナギみたいにツルツルすべってつかまえようがないんだ。	211-14		
3560	友情を失いたくなければ政治の話をするなということになってい	211-15		
3561	名言だけれどね。	211-16		
3562	いいのかな。	211-16		
3563	まずいことになりやしないかと思うんだ。	211-16		
3564	いままでロクなためしかなかった。	211-17		
3565	きっと何かまずくなるんだ。	211-17		
3566	賭けてもいいな」	212-1		
3567	「いいわよ。	212-2		
3568	覚悟してるわよ」	212-2		
3569	「どうかね」	212-3		
3570	「いいの。	212-4		
3571	お話して」	212-4		
3572	「小説のなかで政治の話をするのは音楽会へ行って演奏を聞いているさいちゆうに耳もとでいきなりピストルを射たれるようなも	212-5		
3573	誰だったかな。	212-6		

3574	そういつている。	212-⑥		
3575	スタンダードか。	212-⑥		
3576	誰だっていいけどね。	212-⑦		
3577	こらも名言だよ。	212-⑦		
3578	ずいぶんわけ知りの名言だ」	212-⑦		
3579	「いいわよ。	212-⑧		
3580	こういう時代だ。	212-⑧		
3581	しょうがないわ。	212-⑧		
3582	あなたがひとりだまりこくってモグモグ牛みたいに何か反芻してふくれてるのを見るよりましだわ。	212-⑧		
3583	それに音楽会といったいろいろあって、ミュージック・コンクレートの会場へいってごらんさい。	212-⑨		
3584	耳もとでピストル一発どころじゃないわよ。	212-⑩		
3585	いまはそういう時代なのよ。	212-⑪		
3586	あなたにすみっこでふくれられるよりはましだわ。	212-⑪		
3587	知らないでイライラするよりは知ったうえでそうなるほうがまだしもってところがあるわ。お話して」	212-⑫		
3588	「後悔すると思うがね」	212-⑭		
3589	「かまわないの。	212-⑮		
3590	お話して」	212-⑮		
3591	部屋の灯を消して読書灯だけにすると女はぶどう酒のグラスを持ってベッドにあがり、そっとよりそってきた。	212-⑯		
3592	私は重くて熱くなった体を起し、上体を枕板にもたれさせて、タバコに火をつけた。	212-⑰		
3593	柔らかい、強壯な体が静かに息づくのが腕や胴に感じられ、爽やかなあたたかさがしみてくる。	213-①		
3594	窓が赤くなったり青くなったりし、ときどき闇をエンジンやタイヤが走ってぬける。	213-②		
3595	私には朦朧とした苛酷とぶどう酒であたためられた重い腹があるきりで、洪水をどこへ導いていいのかわからない。	213-③		
3596	あそこでは旧暦がおこなわれているので二月が正月である。	213-⑤		
3597	正月といってもモンスーン地帯だからじつと蒸暑い。	213-⑤		
3598	人びとは貧しいながら着飾り、御馳走を食べ、親類知人を訪ねあい、子供は爆竹を鳴らして走りまわる。	213-⑥		
3599	銃声にそっくりでまぎらわしいからと政府が禁令をだしてもおかまいなしである。	213-⑧		
3600	花商人はどこからかおびたしい花を持ちこんできて売る。	213-⑨		
3601	ハイビスカスやブーゲンヴィリアなど、熱帯の花のほか、菊、水仙、桃、梅、薔薇など、温帯の花もある。	213-⑩		
3602	戦争は四十八時間とか七十二時間とかに限定して休まれる習慣である。	213-⑪		
3603	双方がそれぞれ一方的に宣言して休戦する習慣である。	213-⑪		
3604	今年は反政府側が一月二十七日から、政府側が二十九日から、それぞれ休戦に入った。	213-⑫		
3605	しかし、一月三十一日、反政府軍はとつぜん総攻撃をかけてき	213-⑫		
3606	ダナン、ホイアン、コンツム、ニャチンの省都、基地、軍事施設などに浸透し、襲撃し、爆破した。	213-⑬		
3607	その翌日、三十一日にはサイゴン、フエ、及びのこる全地域が攻撃された。	213-⑭		
3608	サイゴンではアメリカ大使館に十九人の特攻隊が攻撃をかけ、大破したのち、全員射殺された。	213-⑮		
3609	いたるところで市街戦がおこなわれた。	213-⑯		
3610	フエでは二十四日間の市街戦となった。	213-⑯		
3611	約四万五千人の人口のうち約三万人が難民となったと伝えられ	213-⑰		
3612	浸透した反政府軍は約六千人と伝えられる。	213-⑰		
3613	“開放民族戦線独立第4、第5、第6、”の各連隊を中心とする	214-①		
3614	と伝えられる。 二四日間の攻防戦のうちに反政府側は“臨時政府”樹立を宣言し、大学教授を省長に任命し、人民裁判を開いたと伝えられ	214-②		

3615	反政府側は数千人殺され、アメリカ兵が数百人殺され、政府側兵士がすう百人れ、市民は約二千五百人殺されたと伝えられ	214-③		
3616	こういう数字は“数千人”を“数百人”としていいかもしれない	214-④		
3617	あるいはいっさい数字をあげないで、市民は逃げつつ殺され、アメリカ兵はたたかいつつ殺され、反政府兵はたたかいつつ殺され、政府兵は逃げつつ暴行略奪しつつたたかいつつ殺されたといったほうがいいかもしれない。	214-⑥		
3618	「……これが二月に起こった事件で、いわゆる“テット攻撃”というものなんだが、五月にも規模は小さいがやっぱり二回めの総攻撃を全土にわたって展開して引揚げた。	214-⑨		
3619	二月にやってきて引揚げ、つぎに五月にやってきて引揚げて	214-⑩		
3620	このあいだに三ヵ月の間隔がある。	214-⑪		
3621	それからかぞえると、第三波は八月ということになる。	214-⑪		
3622	政府側もそれにたいして準備するだろうから、もう一ヵ月遅らせて九月になるかもしれない。	214-⑫		
3623	例年秋には秋季攻勢といって戦争が激しくなるんだけどそれとからみあわせて考えると第三波はこの八月から十一月にかけてきつとあると考えたほうが言いように思う。	214-⑭		
3624	雨季か乾季か、とり入れがすんだかどうかという問題のほかにこの時期はハノイと開放戦線にとっていろいろな記念日がある	214-⑯		
3625	それをさがすことだね。	214-⑰		
3626	それと土曜の夜、お月様のでない土曜の夜だね、これが記念日と一致するとやばい。	214-⑰		
3627	一致しなくても前後にくると、やばい。	215-①		
3628	今日それを調べようと思ったけれど、さすがにそこまでの資料はなかった。」	215-②		
3629	「……………」	215-④		
3630	「いっぽうこういうことがある。	215-⑤		
3631	テット攻撃が二月で、北爆の部分停止が三月、つぎに第二波が五月にあって和平会議の開始されたのが五月十三日なんだ。	215-⑤		
3632	双方がどういって頂上接触をやったのかはおれにはまったくわからないのだが、和平のきざしが見えだすと戦争が激しくなるといって生理が戦争にはあるらしい。	215-⑥		
3633	人びとなべて平和を語るとき突如として大いなる災厄のいたることあるべしという昔からの生理だよ。	215-⑧		
3634	ディエンビエンフーはジュネーブ会議のまっさいちゅうだ。	215-⑨		
3635	一面交渉、一面戦争というやつだ。	215-⑩		
3636	議論を終わらせるには戦争するしかないという。	215-⑩		
3637	そのいいかたが甘ったるいというなら、ツバをとばすことをやめさせるには血をとばすしかないともいうか」	215-⑪		
3638	「……………」	215-⑬		
3639	「ここまでのダイジェストだけれど、これは東京にいてもおおむね新聞で読んで知っていた。	215-⑭		
3640	誰でも知ってる大枠だよ。	215-⑮		
3641	ところが今日調べてみてポー・グエン・ジャップ将軍がテット攻撃以前に短気決戦論をとなえていたらしいとわかった。	215-⑮		
3642	なぜか。	215-⑯		
3643	その動機や原因がわからない。	215-⑯		
3644	ところがここに“第9決議”というものがある。	215-⑰		
3645	これは“ベトナム労働党政治局第9戦”というもので、ハノイの党中央委員会政治局で作られ、それが南のジャングルや村へおりにいくらしんで、いわば最高指令らしいんだが、その第9というやつがテット攻勢のあとであらわれ、大部隊による大攻撃は戦術上の誤りであったと分析しているらしい。	215-⑰		
3646	ふたたびゲリラ戦にもどれと指示しているらしい。	216-④		
3647	つまりテット攻撃は失敗だったのだ。	216-④		
3648	五月の第二波の規模が小さかったのわこのせいかもしれない。	216-④		

3649	もともとハノイから見ればあそこの戦争は長期持久戦で、少しずつ少しずつゲリラ戦や局地戦で食いかじり、陰惨きわまるシャドウ・ボクシングみたいな戦争をアメリカにやらせる。	216-⑤		
3650	そのうちアメリカは兵隊の死体の山の影におびえ、うんざりし、不景気におちこみ、平和勢力が進出して国内は分裂する。	216-⑦		
3651	つまり、いきなり心臓に刃をつきたてないで、あちらを少し、こちらを少しと傷つけ、結果として大出血になる。	216-⑨		
3652	そういう戦争方式をとるしかないし、とっているのだし、成功しつつあるとおれは見ていた。	216-⑩		
3653	だから、なぜ、テット攻撃をしかけたのか、よくわからなかった。	216-⑪		
3654	ジャップ将軍が短気決戦論をだしていたのだとわかって、動機はやっぱりわからない。	216-⑫		
3655	政治局が失敗だったと判定しているのなら、戦争で過ちを犯すは一方だけではないということだな。	216-⑫		
3656	あたりまえといえばあたりまえだが、これがまたしょっちゅう忘れる。」	216-⑭		
3657	「するとジャップ将軍が誤ったためにあそこの人は正月のお祭りをしているさいちゅうにいきなり何千人と殺されたり何万人と難民になったりしたというわけ？」	216-⑮		
3658	「北爆の部分停止ということと、アメリカに防ぎきれないということを徹底的に思いしらせたこと、サイゴン政府は役人も軍隊も腐りきった藁人形なのだという事実をあらためて天下にさらけだしたこと、以上をのぞくと、そういうことになる。	216-⑰		
3659	むしろおれのうけた印象では、ハノイが誤ったのは、こちらから攻めこんでいったら人民が歓呼して迎え、いっしょに武器を持ってたちあがってくれるのではないかと思ひこんでいたところがそうではなかった、というところなのじゃないか。	217-②		
3660	“全土総蜂起” というスローガンには “全軍” のほかに “全人民” が入っていたのではないかしら。	217-⑤		
3661	フエでもあちらこちらでもごく一部の学生と市民は銃を持って呼応したらしいけれど、全体からすると物の数ではなかったらし	217-⑥		
3662	少くとも町の住民は蜂起しなかったのだ。	217-⑦		
3663	たちあがらなかったんだ。	217-⑧		
3664	第9決議の結論とはべつに、依然として “全土総蜂起” は叫ばれているらしい	217-⑧。		
3665	もっとも、これは初期からずっとたえまなしのスローガンなので、はじめがつかない」	217-⑧		
3666	「あなたの話はらしいとか、かもしれないとか、ばかりだわね。	217-⑪		
3667	妙だわ。	217-⑪		
3668	正確になろうとするとあいまいになるってのは妙だわね。	217-⑪		
3669	こちら側に流された情報ばかりで判断しようとするのを警戒するからそうなるのかしら。	217-⑫		
3670	これだけ何やらものすごい話なのに何やらあいまいをきわめてもいるって印象だわ」	217-⑬		
3671	「ファイルで探ただけだからね。	217-⑮		
3672	紙と字のなかを這ってまわっただけだからね。	217-⑮		
3673	それ以上、どういようもないのだよ。	217-⑮		
3674	推論はかさねるが断定はできないよ。	217-⑯		
3675	この眼で見ていないのだから。	217-⑯		
3676	この眼で見ても断定はむづかしいな」	217-⑰		
3677	「じゃ全部いままでの話はヨタだといってもいいのかしら。	218-①		
3678	断定できないのだとなるとそういってもいい自由があるということになりそうよ。	218-①		
3679	いままでの話は全部ヨタかもしれないといいなおしましょうか。	218-②		
3680	そういってもいいのじゃない？」	218-③		
3681	「何をいいたいの？」	218-④		
3682	「ちょっと感じたことがあるの。	218-⑤		
3683	でも、まだハッキリしないの。	218-⑤		
3684	もう少し固まってからいうことにするわ。	218-⑤		

3685	まちがってないような気がするけど、わからないこともあるの。	218-⑥		
3686	どこまで調べたか、聞かせてちょうだい。	218-⑥		
3687	特攻隊はどうやってサイゴンにもぐりこんだの？」	218-⑦		
3688	「もぐりこむことそのものは何でもない。	218-⑨		
3689	ザルの目を水がどうやってとおるのかとたずねるようなものだ	218-⑨		
3690	もともとはじめからそこにいるのだし、外から入ってくるのだからお茶の子だね。	218-⑩		
3691	通行許可証がなければとおれないということになってるけれどこんかものはいくらでも偽造できる。	218-⑪		
3692	タクシー、渡し舟、シクロ(三輪車)、バスでぞくぞく繰りこんだ。	218-⑫		
3693	棺桶のなかに機関銃を入れて持ちこんだ。	218-⑫		
3694	花のかけにロケット砲をかくして花屋のトラックで持ちこんだ。	218-⑬		
3695	番兵は金属探知器を持っているけど、ちょっと二、三枚にぎらせたらしい。	218-⑭		
3696	にぎらせるまでもない。	218-⑭		
3697	ひとにらみしたらすむだろうね。	218-⑮		
3698	そこで特攻隊だけについていうと、ごくふつうの人間の恰好をしていた。	218-⑮		
3699	ワイシャツを着たのはボタンをきちんとかけ、農民の黒パジャマを着たのは腕に赤の腕章を巻いていた。	218-⑯		
3700	ほかにいくつも彼らだけみわける工夫をしていたのだろうと思う	218-⑰		
3701	これも、らしいとつけておくけどね」	219-①		
3702	「要するに正月だけといってノンビリ寝ているところへ玄関から花にかくれてなぐりこみをかけたというわけね。	219-②		
3703	だまし討ちじゃないの。	219-③		
3704	人民軍がそんなことしていいの？」	219-③		
3705	「トロイの木馬はどうなる？」	219-④		
3706	「でも…」	219-⑤		
3707	「ワシントンもクリスマスに川をわたってお祭りのさいちゅうのイギリス軍になぐりこみをかけたはずだよ。	219-⑥		
3708	似たようなものじゃないか。	219-⑦		
3709	人民軍も軍隊は軍隊だ。	219-⑦		
3710	人民戦争も戦争なんだ。	219-⑦		
3711	例外でもないし、新しくもない。	219-⑧		
3712	軍隊であって戦争であるからにはいくら美德をモットーにしても、いっぽう同時に、美德は徹底的に戦術戦略として意識されねばならないし、行使されるだろうよ。	219-⑧		
3713	ひとたび戦術戦略からはずれたらその部分は容赦なく切って捨てられる。	219-⑩		
3714	アツというすきもない。	219-⑪		
3715	人民軍も人民を平気で切って捨てることがある。	219-⑪		
3716	革命前も革命後もそうだ。	219-⑪		
3717	これにも、らしいとつけるんだけどね	219-⑫		
3718	「しかし、アメリカ大使館になぐりこみをかけた特攻隊が全員死んじゃうのは覚悟のうえだからしょうがないとしても、それで一般住民が巻添えを食うたら、目的のためには手段を選ばないとか、手段は目的によって形成され、規制されなければならないとか、いくらいったって、目的と政治では効果の問題でしょうけ	219-⑬		
3719	それで住民の支持が得られたのかしら。	219-⑯		
3720	アメリカがいるからこんなことになるのだ、というのなら効果があつたわけでしょうけれど、アメリカもアメリカならヴェトナムだということのなつたらどうしようもないんじゃないかしら。	219-⑰		
3721	そのところはどうなの」	220-②		
3722	「あそこでは二つに一つしかない。	220-③		
3723	政府側か、反政府側か。	220-③		
3724	殺すか、殺されるかだよ。	220-③		
3725	だから、結果から見ていくと、沈黙が余剰だということのはならないんじゃないか。	220-③		

3726	沈黙すると、どちらかの邪魔をしない、またはどちらの邪魔もしないということになるが、つまりどこかでそれはどちらかを支持するという結果になる。	220-④		
3727	どちらも住民に沈黙されるのはつらいだろうけれど、どちらがそれで腐敗しやすいかとなると、いうまでもないだろう。	220-⑥		
3728	そうでなくても外国へだされた軍隊は根なし草になるからかならずダメになる。	220-⑦		
3729	解放戦線は政府軍の兵営にビラをまいて、諸君を殺そうとは思わない、できたらわれわれを助けてほしい、それができなければ邪魔をしないでどこかにかくれていてほしいとアピールしている	220-⑧		
3730	沈黙は参加なのだよ。	220-⑩		
3731	加担なんだ」	220-⑪		
3732	「本心かしら、戦術戦略かしら」	220-⑫		
3733	「状況による。」	220-⑬		
3734	「どちらでもある」	220-⑬		
3735	「断定したわね」	220-⑭		
3736	「いや。」	220-⑮		
3737	「まだしていない」	220-⑮		
3738	「したわよ」	220-⑯		
3739	「おしゃべりをしただけだ」	220-⑰		
3740	「状況によるといったじゃない」	221-①		
3741	「状況を見ずにね」	221-②		
3742	ふいに女が体をひいた。	221-③		
3743	腹と腕から何かを剥がれるようだった。	221-③		
3744	私は軽くなり、シーツのなかに空洞ができた。	221-③		
3745	ふりかえると小さな灯のなかでたちあがる広い腰と白い臀が見え、女はゆっくりとした足どりで闇のなかに入ってしまった。	221-④		
3746	どこかでかすかな金属の軋る音がし、爽やかな微風が騒音といっしょに流れこんできて、あちらこちらにあざやかな縞をつく	221-⑤		
3747	しかし、女が体をひいた瞬間に発生したざわめく林のようなものは見る見る部屋いっぱいひろがり、風に消されなかった。	221-⑦		
3748	女はそのなかを酒瓶をさげてゆっくりとよぎってくると、私のよこにたたずみ、からっぽのグラスにぶどう酒をついた。	221-⑧		
3749	「またあそこへいくつもりね」	221-⑩		
3750	「……………」	221-⑪		
3751	「私から逃げたいことが一つね」	221-⑫		
3752	「……………」	221-⑬		
3753	「いきいきしてたわ」	221-⑭		
3754	「……………」	221-⑮		
3755	ひっそりとつぶやいたが、えぐりたてるような痛烈さがあった。	221-⑯		
3756	灯が乳房までしかとどかず、淡桃色の靄のような絹ごしに胴と、臍と、陰毛がほの見え、酒瓶の首をしっかりとぎった手が見えるきりだが、私は女の獣のような敏さにひしがれた。	221-⑯		
3757	のびあがるが、ふり仰ぐかして闇のなかで女の眼をさがすのがおそろしかった。	222-①		
3758	それは誤解だと主張する気力がどこにもなかった。	222-②		
3759	無慈悲な完璧さで女は正確だった。	222-③		
3760	私が長広告にうつつをぬかしているあいだに女はとつくにさきまりして、よこたわって息をひそめ、ただ待っていただけではないだろうか。	222-③		
3761	さいごに私がぐずついたので女はちょっと手をのばしておしゃつ	222-⑤		
3762	それでよかったのだ。	222-⑤		
3763	はずかしさが泥のようにひろがってきて穴からあふれだした。	222-⑥		
3764	「三年間のことをお話して。」	222-⑦		
3765	いままであなたが話そうとしなかったからこちらでも聞こうとしなかったんだけど、阿片屋じゃなくて、ジャングルではどうだった	222-⑦		
3766	まずそれからだわ。	222-⑧		
3767	ただ聞いておきたいだけ。	222-⑨		
3768	それだけよ。	222-⑨		

3769	気にすることないわ。	222-⑨		
3770	こうと知ってたら遠慮するんじゃない」	222-⑨		
3771	女はゆっくりとベッドのふちをまわって、そっとシーツに肩からすべりこんだが、私の体からはしなやかに遠ざかり、自分の体のつくった凹みに音もなくはまりこんで一ミリとはみださなかった。	222-⑪		
3772	娼婦の眼をしていた。	222-⑭		
3773	また毛鉤を作ることとなった。	222-⑮		
3774	毎朝、新聞を読むことをはじめた。	223-①		
3775	眼がさめると顔を洗って近くのカフェへ食事をしにいき、新聞売場で私に読めるだけの数の新聞や週刊誌を買いこんで国際欄を読む。	223-②		
3776	私に読めないこの新聞は女に訳しれもらう。	223-②		
3777	あそこではあちらこちらで毎日、“食いかじり”と思われる戦闘がおこなわれているらしくて、それすら凄惨をきわめたものであるはずだが、地名と数字が報道されているきりである。	223-③		
3778	私は地名を薄暗い頭のなかにひろがるなじみ深い地図に書きこみ、それがたまたまの接触だったのか、それとも何かの企図の分泌物なのだろうかと考えてみる。	223-⑤		
3779	独立したものでしょうか、それとも予兆なのでしょうかと考えてみ	223-⑦		
3780	ゼラニウムの花のかけにすわり、卵を割ったり、パンに薔薇のジャムをぬったりしながら、ゆっくりと食事をする。	223-⑧		
3781	新聞を読んでいてときどき手をとめ、しばらくしてからまたうごか	223-⑨		
3782	凄惨は顔をこちらに向けているようだったり、横顔を見せているようだったりするが、眼も見えず、傷口も見えない。	223-⑩		
3783	それはひときれのパンをこえてくるができない。	223-⑪		
3784	観念がつぎからつぎへうかんでくるが、なぶっているうちにどれもこれこたちまち肉が流れ、汁がこぼれて蝦のぬけ殻となってし	223-⑪		
3785	指をのばすまでもない。	223-⑬		
3786	ちょっと眺めているうちに眼のしたでそうなる。	223-⑬		
3787	女は新聞の外電欄をすみからすみまで読んでから、ゆっくりとした手つきでパンを割り、バターやジャムをぬって口にはこぶ。	223-⑮		
3788	頬がもくもくとうごき、歯がパンの皮を砕く音がぐもって洩れてく	223-⑯		
3789	女は挑むような、辛辣な眼でちらと見る。	224-①		
3790	「第三波なんてどこにもでてにいわよ。	224-②		
3791	昨日もでてなかったし、今日もでていない。	224-②		
3792	あなたの話だと何かの記念日の当日かその前後、週でいえば土曜の夜、それもお月様のでない土曜の夜とかいうことだったけど、どうったことないじゃない。	224-②		
3793	小競りあいばかりのようよ。	224-④		
3794	異常なしだわ。	224-⑤		
3795	静かよ。	224-⑤		
3796	あなたの思いすごしということがあるのじゃないかしら、ウンコちゃん」	224-⑤		
3797	「そうかもしれないね。	224-⑦		
3798	だけど、静かだということと動きがないということとは別問題なんだよ。	224-⑦		
3799	動きは見えるか見えないかだけでね。	224-⑧		
3800	あそこはいつでも動いてるんだよ。	224-⑧		
3801	ことに、ある集団は動いている。	224-⑧		
3802	動きつづけている。	224-⑨		
3803	自分もじっとしていないかわり人もじっとさせておかない。	224-⑨		
3804	刺激がありさえすればそれおめがけてあらゆる方角へのびてい	224-⑩		
3805	刺激がなければ刺激をつくりだしてでものびつづけ、動きつづけるね。	224-⑩		
3806	それに、小競りあいといってもね、あの作戦だって小競りあいだ	224-⑪		
3807	地元の新聞でもたかだか何行というくらいのもだった。	224-⑫		
3808	外人記者にはヒマ種にすらならなかったね。	224-⑫		
3809	けれど、戦闘が一段落終わったところかぞえてみたら、おれのいた大陸は二百人いたのが十七人になっていた。	224-⑬		

3810	おれはそのうちの一人だ。	224-⑭		
3811	十七分の一だった」	224-⑭		
3812	女はだまりこみ、そっと眼をそらして、丸いパンの腹にナイフを刺してくるくるまわし、二つにしてから、ジャムをぬる。	224-⑯		
3813	私はシャツの袖で眼鏡をぬぐい、新聞を読みつづけた。	224-⑰		
3814	新聞を読んでいるあいだは仕事をしているのだという感触があるが、読み終るとそれは消え、休暇は終わったのだという感触があらわれる。	225-①		
3815	誰にたのまれたのでもなく、誰と約束をしたのでもなく、新聞社と契約も結んでいないが、かつて臨時海外特派員の真似事をしていたときにつけた習慣のなごりかもしれない。	225-②		
3816	それはすぐに遠のくが、消えることはなく、いつまでも耳のうしろあたりに漂っている。	225-④		
3817	どうやら遠景が私にはできてしまったようである。	225-⑤		
3818	食事をすまして新聞をおくと私は空虚になり、女とつれだって散歩にでかける。	225-⑥		
3819	市はガラスと鋼鉄とコンクリートに制覇されつつも聳立し、成熟をすぎて少し萎えのきざしかけた夏のなかで輝いている。	225-⑥		
3820	歩道をいくとガラス箱の赤と金と黒のなかで香水瓶が燦めき、たくさんの観光客たちがバスで壁見物にはこぼれていく。	225-⑧		
3821	彼らはあちらに入って、バスのなかにすわったままで、窓ごしに道路や建物を眺め、またこいらにもどってくる。	225-⑨		
3822	水族館では三メートル近い怪物ナマズがどんよりした白膜のかぶった小さな眼を光らして荘重に息づいている。	225-⑩		
3823	動物園ではたくましい栗の木かげで楽団が『聖者の行進』をけばけばしい甘酸っぱさで奏で、老婆が鳩の餌を売っている。	225-⑫		
3824	その燕麦を椅子にすわってビールを飲みながら足もとにこぼすと、どこからか鳩の大群が雪崩れおちてくる。	225-⑬		
3825	鳩がよちよちと歩いていくとそのさきざきをくすんだ雀がすばやくよこぎって麦をとってしまう。	225-⑭		
3826	「第三波くるとどうなるの？」	225-⑯		
3827	「市街戦だろうね」	225-⑰		
3828	「どうなるのかしら」	226-①		
3829	「大競りあいだろうね」	226-②		
3830	「あなた、また最前線へいくの？」	226-③		
3831	「わからない。	226-④		
3832	その場できめる。	226-④		
3833	予定は何もたてないことにしてる。	226-④		
3834	でていくかもしれないし、部屋のなかでふるえてるかもしれない」	226-④		
3835	「部屋のなかだって危ないんでしょう？」	226-⑥		
3836	「そうだね。	226-⑦		
3837	二月と五月のケースでいくと、ずいぶん家が破壊されたいらしい。	226-⑦		
3838	郊外から浸透してくるからね。	226-⑧		
3839	町はずれやスラム街が戦場になった。	226-⑧		
3840	双方とも重火器を使ったし、空からはヘリコプターがロケット弾を浴びせたいらしい。	226-⑨		
3841	家のなかにかくれたままで死んだ人もたくさんだろうね。	226-⑩		
3842	部屋のなかもそも、変りかないね。	226-⑩		
3843	全面、全体戦争だからね。	226-⑪		
3844	あそこではそれを、寝床のなかに死体があるというらしい。	226-⑪		
3845	何度か聞かされた。	226-⑫		
3846	あその人は言葉が上手だよ」	226-⑫		
3847	「いくときめちゃったみたいね」	226-⑬		
3848	私はテーブルに燕麦をこぼし、それをはしへよせて、少しずつ水滴のようにおとす。	226-⑭		
3849	鳩と雀はおしあいへしあいで大騒ぎをし、羽ばたき、テーブルへとびあがってくる。	226-⑭		
3850	雀はせかせかと私の手にとびあがり、爪をしっかりと膚にたてて、首をつっこんでくる。	226-⑮		

3851	鳩はビールをみたしたグラスとグラスのあいだをよちよちと無器用に歩きまわる。	226-16		
3852	つまっていて重そうな体だが雀ほどの精妙なバネがない。	226-17		
3853	私が死んでも鳩は毎日このままだ。	227-1		
3854	とつぜんその思いが起り、どこかをかすめ、かなりの面積に影をひいて消えた。	227-1		
3855	地崩れが起るのを待ったが、淡いけれどまばゆい日光が、遠鳴りを感じるだけですませてくれた。	227-2		
3856	鳩を眺めていた女が、とつぜん、「バイク釣りにいきましょうよ」といった。	227-4		
3857	女は低い声で静かにいっづけた。	227-7		
3858	「飛行機は毎日、いくらでもあるのよ。」	227-8		
3859	いまからホテルに帰って電話でチェック・インして荷物をまとめたら三十分後には発てるわよ。	227-8		
3860	テイク・オフよ。	227-8		
3861	地図も買ってきたし、情報も聞きこんだし、システムも見つけて	227-8		
3862	あのあたりも牧場と湖だわ。	227-9		
3863	私は一度いったことがある。	227-10		
3864	この国で私のいかないところってないの。	227-11		
3865	だからさ、いきましょうよ。	227-11		
3866	よその国の戦争のことなんか忘れちゃいなさい。	227-11		
3867	誰も口でいうほど本気にしちやいないのよ。	227-12		
3868	本気にしたら寝ていられないはずだわ。	227-12		
3869	あそこのことをみんなが大きな声でしゃべるのは遠いよその国だからなのよ。	227-13		
3870	政治問題は遠い国のことほど単純に、壮烈にしゃべりたくなるものなのよ。	227-14		
3871	自分の国のことになると一ミリの振動でもびくびくしてたちまち口ごもってしまうくせに、そうなのよ。	227-15		
3872	つまり、きれいに苦悩できるのよ。	227-16		
3873	これは魅力だわよ。	227-16		
3874	責任をとらずに雄弁がふるえるんだし、それでどちらから殺されるということもないんだから、魅力よ。	227-16		
3875	そこへいってあなたが命をかけて事実をつかんできたって、左右ともに自分の気に入った部分を読んで宣伝に使うか自己満足に使うかだけで、あとの部分はどうでもいいってこと。	227-17		
3876	それだって使われたらマンなほうで、いまじゃあの国のことは峠が見えたというんで、誰もソッポむいてるわ。	228-2		
3877	アメリカがいるからみんな何だかだというけれど、いなくなったら誰も何もいわないわよ。	228-4		
3878	アメリカの入っていない血みどろ騒ぎはあっちこっちにあるし、残虐も陰謀も御同様らしいけれど、誰も何もいわないじゃない。	228-5		
3879	要するに役者芝居の見物人とおなじことよ。	228-6		
3880	大役者がでるときだけつめかけけるんだな。	228-7		
3881	あとはかまっちゃいられないというわけ。	228-7		
3882	ね、ウンコちゃん。	228-7		
3883	だから、今度はもうよしなさい。	228-8		
3884	あなた一人がヤキモキしたって、要は歴史の消耗品よ。	228-8		
3885	そんなこと、一から十まで知ってるくせに、あなた、愚直だから自分が避けられないのよ。	228-9		
3886	湖へいってバイクを釣りましょうよ。	228-10		
3887	私にもキャストイング、教えてよ」	228-10		
3888	女は話しながらちらと私を見て眼をそらしたり、しばらく鳩を眺めてだまっていてから、また話をはじめ、私をちらと見て眼をはず	228-11		
3889	抑制し、熟慮し、観察をかさねてきた聡明の気配が漂っていて、聡明のうらには諦観のひそんでいるたたずまいが感じられたが、あてどない激情もひそんだいるようであった。	228-12		
3890	そして、どうしてか、女がうつむくと、瓶から酸をこぼしたように、髪や、たくましいうなじから、不幸がつんつん匂いたつのだっ	228-14		

3891	夜になって大通りのパイプ屋の角の闇を右へ折れると、中国料理店『南華』と看板がでている。	228-⑯		
3892	闇のなかにふいに赤と金と黒が浮きあがる。	228-⑰		
3893	その小さな店のなかでは壁のなかでたえまなく娘が鋭く高く精力的にうたいつづける声がこだましている。	228-⑰		
3894	壁や柱のいたるところに双喜字があり、紅唐紙に肉太の金泥で書き流した対聯が壁にかかっている。	229-①		
3895	女はドライ・マーティニにはしゃぎ、それを読んで歎んだ。	229-②		
3896	南軒酒美青梅熟	229-⑤		
3897	華夏肴佳玉粒香	229-⑥		
3898	「シーサンにはかなわないわ。	229-⑧		
3899	いつもうきささせてくれる。	229-⑧		
3900	そのくせ荘重なんだな。	229-⑧		
3901	ジャオ先生のところには、太太の書いた聯があつてね。	229-⑧		
3902	寿比南山松不老	229-⑩		
3903	福如北海水長流	229-⑪		
3904	そういうんですけどね。	229-⑭		
3905	句はありふれたものだけど、書は立派だわ。	229-⑭		
3906	だけどこちらのほうがいいわね。	229-⑭		
3907	食慾がでる。	229-⑮		
3908	好きよ。	229-⑮		
3909	もっともあなたなら玉粒香ルじゃなくて玉門香ルっていいところでしょうけど」	229-⑮		
3910	女はマーティニをすすって声にだして笑い、いたずらっぽく舌をだし、肩をすくめた。	229-⑰		
3911	高い頬骨のあたりが薔薇いろに染り、いつもの、どこかに苦笑のある眼でじっと私を見た。	229-⑬		
3912	女は、マーティニのグラスをおくと、顔を私に近ぢかとよせてきて微笑しながら眼を覗き、「私の玉門、香ってる？」	230-②		
3913	気づかわしげにたずねたあと、くちびるから言葉がおちるかおちないかに、顔をひき、傲然とした冷淡のそぶり、螺鈿の青貝がこまかく閃めく黒漆の衝立を眺めた。	230-④		
3914	食後にどっしりとなってジャスミン茶をすすり、くちびると舌のあぶらを洗っていると、女が手をそっとのばして私のジッポのライターをとりあげた。	230-⑥		
3915	傷だらけになり、油と煤にまみれ、ところどころメッキが剥げて黄いろい地金がでている。	230-⑦		
3916	油が少し洩ってポケットをよごしてしょうがないけれどよくはたらいてくれるし、手の一部となってしまったので、もう何年となく私は持ち歩いている。	230-⑧		
3917	裏と表に銘がきざんである。	230-⑩		
3918	女は眼を近づけてしげしげと眺めた。	230-⑩		
3919	「これ、何のこと。	230-⑫		
3920	“トロイ・ダット・オイ”と書いてある。	230-⑫		
3921	書いてあるみたい。	230-⑫		
3922	どこの言葉？」	230-⑫		
3923	「あその言葉だよ。	230-⑭		
3924	“チョーイ・ドッ・オーイ”と読むんだけどね。	230-⑭		
3925	“チョードッコイ”と聞える。	230-⑭		
3926	直訳すると、ああ、天の神さま、地の神さまというようなことらし	230-⑮		
3927	“チョーイヨーイ”というもある。	230-⑮		
3928	天か地か、これはどちらか神さまが一つだったと思う」	230-⑯		
3929	「こちらは英語だわね。	230-⑰		
3930	長いナ。	230-⑰		
3931	たとえ、われ、死の影の谷を歩むとも、われ怖れるまじ。	230-⑰		
3932	なぜってわれは谷のド畜生野郎だからよ。	231-①		
3933	何のこと。	231-①		
3934	これ。	231-①		
3935	てんでわからない」	231-①		

3936	「弾丸よけのおまじないだよ。」	231-②		
3937	それをライターにきざんでおいたら弾丸にあたらないというん	231-②		
3938	アメリカ兵のおまじないだよ。」	231-③		
3939	兵隊はどこの国でもおまじないをととても気にするんだよ。」	231-③		
3940	たよるものが何もないからね。」	231-④		
3941	それでおれもきざんでもらった」	231-④		
3942	「ジャングルへいくとき持っていったの？」	231-⑤		
3943	「そうだよ」	231-⑥		
3944	「それからずっと持ってるのね」	231-⑦		
3945	「そうだよ」	231-⑧		
3946	「肌身はなさずに？」	231-⑨		
3947	「そうだよ」	231-⑩		
3948	女はだまってライターをもどした。	231-⑪		
3949	それまでひらいていた顔があらゆる箇所でふいに閉じ、苦笑が 消えた。	231-⑪		
3950	眼がうつろになり、頬がしまつてきつくなった。	231-⑫		
3951	これれまでに湖でも、部屋でも、枕もとでも、朝となく夜となく、あ らゆる場所で女はそれを眺めてきたはずだった。	231-⑫		
3952	けれど、眼にもとまらなかったそれがふいに前面にでてきて、場 所をふさいでしまったのだ。	231-⑬		
3953	女は愕いた様子で、茫然と茶碗を眺め、拒まれた自身を眺めて いた。	231-⑮		
3954	全体はいつも細部にあらかじめ投影されてある。	231-⑮		
3955	いつもそのことを私たちは忘れてしまう。	231-⑯		
3956	そのため、全体に熱狂してやがて細部に復讐され、細部に執し て全体に粉碎されてしまうのだ。	231-⑯		
3957	部屋にもどると私は窓をあけてから椅子に腰をおろし、リュック のなかから壊れかかった紙箱をとりだす。	232-①		
3958	毛、糸、爪切り、接着剤の小瓶などをテーブルにならべて毛鉤 を巻にかかす	232-②		
3959	女はネグリジェに着かえ、ベットによこたわって新聞を読んだ り、週刊誌を読んだりしているが、やがて投げだして、話しはじ	232-③		
3960	ベットからでてきて、たわわな乳房のしたに両腕を組み、荒寥と した暗い壁にもたれて、はなしはじめる。	232-④		
3961	ひそひそとした声で、憎むでもなく、罵るのでもなく、しかし執拗 な気配で、話しはじめるのだ。	232-⑤		
3962	はじめから匂ってたわ、と女はいうのだった。	232-⑥		
3963	あなたは愚直な人だわ。	232-⑦		
3964	愚直で無器用なのよ。	232-⑦		
3965	知らなかったわ。	232-⑦		
3966	自分を避けることができないのよ。	232-⑦		
3967	これまでずっと二人きりで、あなたは人にも会わず、外出もせ ず、散歩にもいかなかった。	232-⑧		
3968	いくら私がシュタインコップ先生とピッツァ・パーティーをしようと いってもイヤがった。	232-⑨		
3969	大学の研究室にも一度か二度、それもしぶしぶ義理について いってくれたぐらいだった。	232-⑩		
3970	あとは毎日、部屋にこもって寝てばかり、寝ては食べ、寝ては食 べ、ただそればかり。	232-⑪		
3971	人がくるとおびえちゃってキッチンにかくれたこともあったわね。	232-⑫		
3972	私のヒスにおびえてバイク釣りに湖へでかけたけれど、それで も人と会って話をすることは避けていらしたようね。	232-⑬		
3973	けれど、ここへきて、第三波と聞いたら、どうでしょう。	232-⑭		
3974	ひとりで町にとびだして行って、見も知らない通信社へ入っ て、図々しくむかしの従軍証など見せて電文のファイルをし らべたらしいわね。	232-⑭		
3975	それも、何時間もぶつつづけでさ、おどろいちゃうわね。	232-⑯		
3976	匂うというのはそのあなたの態度よ。	232-⑰		
3977	まるでいきいきして充実してたの。	232-⑰		

3978	子供みたいにヒリヒリしてるの。	232-17		
3979	そこのよ。	233-1		
3980	あなた、私に会うよりこのニュースをどこかでつかまえようとして東京をでてきたんじゃないの。	233-2		
3981	私と寝ながらお尻ごしに何かこないかなと、ただ待ってただけじゃないの。	233-2		
3982	私は乗換駅の食堂みたいなもので、つぎの列車がくるまでの時間つぶしじゃなかったかしら。	233-3		
3983	あなたのことだ。	233-4		
3984	東京で第一波と第二波のニュースを読んで第三波があるとにらに、どこかの新聞社と特約を結んで、とびだしてきたんじゃない	233-4		
3985	ブンブン匂う。	233-6		
3986	匂いまた匂ふわよ。	233-6		
3987	吐いちまいなさい。	233-6		
3988	それかちがう、と私がいう。	233-6		
3989	それは誤解だ。	233-7		
3990	あれはまったく偶然なんだよ。	233-7		
3991	あの朝君が新聞を読んで聞かせてくれなかったらそれまでなん	233-7		
3992	いまごろおれはバイク釣りにいってるところだよ。	233-8		
3993	これはほんとなんだ。	233-8		
3994	第一波と第二波は知っていたけれど、第三波は予想していなかった。	233-9		
3995	いまでも半信半疑だよ。	233-9		
3996	わかってこないかな。それが目的ならこんなところにいるはずじゃないじゃないか。	233-10		
3997	とつくにあそこへ行って待っているはずだよ。	233-10		
3998	アパートの部屋にベットのまわりや窓ぎわに砂袋を積みあげて、防空壕みたいにして、そこで寝たり、読んだり、酒を飲んだり	233-11		
3999	明けても暮れても猥談だ。	233-12		
4000	チ・チ・コニャック・ボク・ボク・ソーダだ。	233-13		
4001	いったいそれ、何のこと、と女がいう。	233-13		
4002	コニャック・ソーダのことだよ、と私がいう。	233-14		
4003	“チ・チ”はフランス語の“プティ”で、“ボク・ボク”は“ボークー”	233-14		
4004	コニャック少しにソーダをたくさんということだよ。	233-15		
4005	それを飲んで、砂袋のかげで、ヒヒがキャッキヤッと騒ぐのだよ。	233-16		
4006	日本人の外国語は妙なものが、あそこのもずいぶん妙だね。	233-16		
4007	“ノー・キャン・ドゥー”というのがある。	233-17		
4008	“NO CAN DO”ということだね。	234-1		
4009	どうしようもないとか、一巻の終りとか、手がつけられないとか、そういうときにそういう。	234-1		
4010	フィニともいうね。	234-2		
4011	チョーイヨーイともいう。	234-2		
4012	チョードッコイは説明した。	234-2		
4013	ノーキャンドゥーでフィニでチョーイヨーイのディンキー・ダウだ。	234-3		
4014	これは気ちがいということだよ。	234-3		
4015	ふざけないで、と女がいう。	234-4		
4016	だまされないわよ。	234-4		
4017	チ・チだか、ボク・ボクだか知らないけれど、あなたが新聞社と特約したかしないかはさておいて、たまたま私が新聞を読んだためだとしておきましょう。	234-4		
4018	これは偶然だね。	234-6		
4019	それは認めます。	234-6		
4020	しかし、問題はね、あなたがそれにとびついたってことなのよ。	234-6		
4021	あなたは偶然をたちまち必然に転化してしまったのよ。	234-7		
4022	それよ。	234-8		
4023	あなたの必然は飢えていたのよ。	234-8		
4024	カードが一枚足りない、足りない、いいつづけてたのよ。	234-8		
4025	それで私と寝てみたり、バイク釣りをしてみたり、いろいろしたんだけど、どうしても埋らないのよ。	234-9		

4026	そこへとつぜんエースが降ってきたの。	234-⑩		
4027	パッと手も見せずにあなたわつかんじやった。	234-⑩		
4028	もうそれから離れられないの。	234-⑪		
4029	私は駅の食堂、ピッツァ・スナックだったのよ。	234-⑪		
4030	はじめからあなたは私のこと、愛してなんかいなかったの。	234-⑫		
4031	いつか申上げたことだけれど、女どころか、あなたは自分すら愛してないのよ。	234-⑬		
4032	だから危険をおかしちゃうの。	234-⑬		
4033	空虚な冒険家なのよ。	234-⑭		
4034	自分の空虚を埋めるためなら何でもするし、どこへでもいく。	234-⑭		
4035	あなたは観念をいじってるだけじゃすまされないの。	234-⑮		
4036	ベッドのなかでおならにむせているのがイヤなのよ。	234-⑮		
4037	だけど何をしたいか、わからない。	234-⑯		
4038	そこで他人の情熱を借りようとするの。	234-⑯		
4039	糞は悪い夢を食べるそうだけれど、あなたは他人の情熱を食べにでかけるのよ。	234-⑰		
4040	そのためには何だってやっちゃう。	235-①		
4041	愚直にとことんまでつつこんじやうの。	235-①		
4042	それは敬服のほかないので、氷の焰だって申上げておくわ。	235-①		
4043	私と何度寝たって、あなたは事実としか寝ていないのだから。	235-②		
4044	そうでない身ぶりをしようとするけれど、すぐさめちゃう。	235-③		
4045	あなた、あそこへ行って何をしようっていうの。	235-③		
4046	阿片を吸いたい。	235-④		
4047	阿片はもう一度やってみてもいいな、と私がいう。	235-④		
4048	あそこは遠いし、君は知らないから、ここをたとえにしてみよう	235-⑤		
4049	これは君のほうを知っている。	235-⑤		
4050	ここは壁で東と西に区切られている。	235-⑥		
4051	どちらへいっても壁のむこうのことをあちらと呼んでいる。	235-⑥		
4052	東にいわせれば壁はファシスト防止壁だ。	235-⑦		
4053	西にいわせれば監獄の壁だ。	235-⑦		
4054	東で子供が監視兵に感謝の花束を持っていくと、西では壁をこえようとして射殺された人間に弔いの花束を持っていく。	235-⑧		
4055	おれはどちらの当事者でもない。	235-⑨		
4056	ここでも、あそこでも、当事者じゃない。	235-⑨		
4057	非当事者のくせに当事者であるかのような身ぶりをすることはできないよ。	235-⑩		
4058	したい人はしたらいい。	235-⑪		
4059	おれにはできないね。	235-⑪		
4060	当事者と非当事者のへだたりのすごさというものをつくづくさとらされたのだ。	235-⑪		
4061	だからここでもあそこでも、おれのいる位置は、壁の東でも、西でもない。	235-⑫		
4062	しいていえば壁の上ということになるだろうか。	235-⑬		
4063	おれは東が見えるなら東を見る。	235-⑬		
4064	西が見えるなら西を見る。	235-⑭		
4065	壁も見ると、空も見ると。	235-⑭		
4066	壁の東にいる人間でなければつかめない現実があるだろうし、西にいる人間でなければつかめない現実もあるだろう。	235-⑭		
4067	どちらもそれを唯一の本質といたがる。	235-⑯		
4068	けれど、壁の上にいる人間でなければつかめない現実というものもあるはずじゃないか。	235-⑯		
4069	それも本質だ。	235-⑰		
4070	おれには唯一の本質など、ないね。	235-⑰		
4071	眼のふれるもの、ことごとく本質だね。	236-①		
4072	もし生きのびられておれが何か書いたらどちらの側もめいめいに都合のいい部分だけをぬきとって自分たちの正しさの証明に使うだろうね。	236-①		
4073	君のいうとおりだよ。	236-③		
4074	使えないとわかれば嘲笑、罵倒、または黙殺だね。	236-③		

4075	使えるあいだはどちらかからか、どちらからもか、歓迎してくれるだろうが、あとはпойだな。	236-③		
4076	本質は一つしかないと叫んでるくせに困ると色つかずの第三者を証人に使いたがるというのはいい気なもんだね。	236-④		
4077	遠い国の政治問題ほどきれいに苦悩できるのが魅力だと君はいったが、正確だな。	236-⑥		
4078	殺すか、殺されるかの覚悟がなかったらなんでも語れるし、論じられるよ。	236-⑦		
4079	どうだっていいわ、そんなこと、と女がいう。	236-⑦		
4080	女が愛せないのなら、それでもいいの。	236-⑧		
4081	そのままでもいいの。	236-⑧		
4082	いままでのままで、もう一ヶ月、私といっしょに、いて。	236-⑧		
4083	いてよ。	236-⑨		
4084	そのあと、どこへでもおいでなさい。	236-⑨		
4085	私にも肚をきめるだけの時間がほしいのよ。	236-⑩		
4086	これじゃ、あんまりよ。	236-⑩		
4087	駅の食堂だわ。	236-⑩		
4088	スナックだわ。	236-⑪		
4089	もうちょっとがまんして、私といて。	236-⑪		
4090	こんなことをいうなんて、私もおちぶれたもんだわ。	236-⑪		
4091	いやな女だと思われるのがわかってるのにさ。	236-⑫		
4092	いわれなくてもわかるの。	236-⑫		
4093	逃げたいのなら、ハッキリいっちゃいなさいよ。	236-⑫		
4094	もうおまえが鼻についたのさ、バイバイってさ。	236-⑬		
4095	捨てられるのには私、慣れてるの。	236-⑭		
4096	こちらも捨てたしね。	236-⑭		
4097	潮さきが変わっただけのことじゃない。	236-⑭		
4098	それがあまりふいすぎたってわけよ。	236-⑮		
4099	それだけのことだわ。	236-⑮		
4100	女は頬が落ちて、顔が蒼ざめ、魚のような眼をしていた。	236-⑯		
4101	輝きながらうつろで、欄々としつつ、愕然としているようでもあつ	236-⑯		
4102	香ばしい肉が消えた。	236-⑰		
4103	黄昏の牧草地で拍手しておどっていた娘が消えた。	236-⑰		
4104	堂々とした主婦も消えた。	237-①		
4105	ふいに女は十歳も老けてしまい、けわしい陰惨と、あざけるような冷酷のなかによこたわっていた。	237-①		
4106	自身の無類の正確さに大破されながらそれと気づいていないような様子があった。	237-②		
4107	すみずみまで明晰でありながら同時に朦朧をきわめてもいた。	237-③		
4108	女がにわかにかさばって感じられた。	237-④		
4109	女はふくれあがってふちからはみだし、部屋いっぱいひろがり、隙間という隙間をぎっしりみたしてしまった。	237-④		
4110	女はベッドからおりてのろのろと部屋をよこぎり、顔を洗ったり、髪をなぶったりしてからベッドにもどった。	237-⑤		
4111	あぐらをかいて足のうらの魚の目をしげしげと眺め、新聞をつまらなそうにひろってベッドにたおれ、ファッションの頁を読みはじ	237-⑦		
4112	眼をあげることができないので私は毛鉤を眺め、爪切りで余分の毛をつんだり、糸をしっかりと結ぶのに注意をそそいだりした。	237-⑨		
4113	私は居心地わるくて息苦しく、嫌悪がいたるところにただよふのを感じた。	237-⑩		
4114	女の指摘はことごとく正確で、えぐりたてるような容赦なさがあつ	237-⑪		
4115	まるで無影燈のしたにさらされるようだった。	237-⑫		
4116	眼をしばたたくこともできず、手で蔽うこともできず、ただ私はたちすくんでいた。	237-⑫		
4117	女がニュースを読んで聞かせてくれたとき私はかくされていた主題がふいに出現したように感じたのではなかっただろうか。	237-⑬		
4118	待ちつづけていたものがとつぜん形になったように感じたのではなかったか。	237-⑭		

4119	昂揚をおぼえたのは出発できると瞬間感知したためではなかっただろうか。	237-⑮		
4120	逃げだせると感じたのではないか。	237-⑯		
4121	女は新聞をおいてベッドから起き、「阿片なの、女なの？」とたずねた。	237-⑰		
4122	じろりと私を眺め、「かくしてないで、いってしまいなさいよ」しばらくぐずぐずしてから、魚の目をまた眺め、吐息をついてベッドにたおれた。	238-③		
4123	そして広い背をこちらにむけ、顔を見せないで、ひとりごとにしては高い声で、「湖ではあんなにうまくいったのに。	238-⑦		
4124	うまくいってると思ったのに。	238-⑦		
4125	私としたことが、つい深入りしてしまったんだ。	238-⑦		
4126	馬鹿な話だわ。	238-⑧		
4127	信じちゃったのよ。	238-⑧		
4128	お笑い草よ。	238-⑧		
4129	流行歌だわ。	238-⑧		
4130	駅の食堂なみなんだとは爪からさきも知らなかった。	238-⑧		
4131	にぶくなったもんだ。	238-⑨		
4132	一夏、棒にふっちゃった。	238-⑨		
4133	こうとわかっていたらシュタインコップ先生といくんだったわ」	238-⑩		
4134	はげしく舌うちする気配がした。	238-⑪		
4135	私は自身をすら愛していないのかもしれない。	238-⑫		
4136	女のいうとおりだ。	238-⑫		
4137	自己愛をとおして女を愛することもできないのだ。	238-⑫		
4138	私は自身におびえ、ひしがれていて、何かを構築するよりは捨てることで自身に憑かれている。	238-⑬		
4139	忘我になるということがない以上、逃避などというものはないと、いつか、女にいったことがあるように思うのだが、旅がなくて通過があるだけのこの時代には出発は廃語でしかあるまい。	238-⑭		
4140	また一カ月、瞬間と剥離にびくびくしつつ無気力な内乱を抱いて女と暮していかなければならないのだろうか。	238-⑯		
4141	ベッドに呑みこまれてじりじりと肥りつつ葉に蔽われ、蔓を生やし、根をのばして、体液の乾いた粉にまみれていなければならないのだろうか。	238-⑰		
4142	私とかさなりあった地帯では女は一瞥で全地形をおぼえてしまう老朽な獵師だった。	239-②		
4143	ほとんど指一本あげる手間もかけずに女は風のそよぎだけで私をかぎつけ、藪からつつきだし、崖ぎわに追いつめてしまっ	239-③		
4144	しかし、自身とかさなりあわない地帯については何も感知できないかのようだ。	239-④		
4145	私をひきずりこもうとしている力は過去からくるが、その経験を私が話したのに、木の葉一枚のそよぎもつたえられなかったように感じられる。	239-⑤		
4146	その記憶もまた歳月のうちに私は原形をとどめないまでに修正してしまっただけと思われるが、あのとき膚にうかびあがってくるままに言葉に変える努力をした。	239-⑦		
4147	女は聞き終わっても、何もいわなかった。	239-⑨		
4148	頬にも眼にも新しいものはなかった。	239-⑨		
4149	小さな読書燈のなかに裸のずっしりした腕をさだして、と見こう見しながら、だまっていた。	239-⑨		
4150	私は空瓶に言葉を吹きこんで栓もしないで海へ投げたような気がした。	239-⑩		
4151	事実だけを列挙するとしてもそれはおしゃべりにすぎない	239-⑪		
4152	おしゃべりはおしゃべりである。	239-⑫		
4153	かさねればかさねるだけいよいよそれは遠ざかり、朦朧となっ	239-⑫		
4154	言葉はみな虫食いになっていた。	239-⑬		
4155	指紋でよごれた孤独がおぼろに胸や肩のところにひろがって	239-⑬		
4156	話しながら嫌悪がこみあげてきて私はいらいらし、何度も口を閉ざしてしまいたくなった。	239-⑭		

4157	何よりもそれは何十回でも何百回でも言葉に変え、他人に話せるものとなってしまっている。	239-⑩		
4158	酒の肴にできるのだ。	239-⑩		
4159	経験は非情な独立だが、ぬけ殻はなぶればなぶるだけ粉末になるばかりである。	239-⑩		
4160	地図にない島のまわりを潮にのせられるまま巡回しつづけ、岸の森や川や渚を細密に眺めながら一歩も近づけないでいるような気がした。	239-⑪		
4161	土曜の夜に立ち会うためには木曜日か金曜日に南回りの便をつかまえてここをでなければならぬが、電話をとりあげさえすればいつでも席は予約できる。	240-③		
4162	そう思うことにして私はぐずぐずと新聞を読んだり、ビールを飲んだりし、週の後半を椅子のなかで肥りつつすごしてしまった。	240-④		
4163	もう八月も末である。	240-⑥		
4164	新しいけれど凡庸で鈍重な、他のどの週ともけじめのつかない週がきた。	240-⑥		
4165	陽はいよいよ萎えかかり、黄昏に市のはずれにある森のなかを歩いていると、草や影や幹から荒寥とした秋がわきだしてしのびやかにさまよい歩くのが見られる。	240-⑦		
4166	女がたわむれに茸を摘むのを小径に佇んで待っていると、冷たさが額にも手にもしみてくる。	240-⑧		
4167	女は誘うとどこへでもついてくるが、蒼ざめて、肉がおち、口数がすっかり少なくなってしまった。	240-⑨		
4168	晴朗、辛辣、即興、敏感、夏いっぱい女が没頭していたそれらのものはことごとく消えてしまった。	240-⑪		
4169	動作や言葉は、はしがおぼろで見えなくなり、けだるくて、ものうげだった。	240-⑫		
4170	『南華』で夕食をしてから部屋にもどり、灯をつけたり、窓をあけたり、部屋のなかをゆっくりとよぎっていくのを見ると、思わず声をかけたくることがあった。	240-⑫		
4171	二人とも体が閉じてしまい、眼でおたがいを盗み見ては自身の内部へ後退していくのだが、ときにはそれが避けあっているのか、狙いあっているのか、わからなくなる。	240-⑭		
4172	私は毛鉤作りに没頭するが、材料がなくなることを恐れて、たんねんに一本を完成すると剃刀でバラバラにほぐしてしまい、またはじめからやりなおす。	240-⑯		
4173	組みたててはほぐし、ほぐしては組みたて、それだけを窓ぎわで繰りかえしている。	241-①		
4174	女は部屋いっぱいにかさばって息苦しいまでにあたりにみなぎっているのだが、倉庫に新しく到着した荷物のようなところも	241-②		
4175	壁からも、ベッドからも、ときにはネグリジェからも孤立しているように見えることがある。	241-③		
4176	靴も、歯ブラシも、スーツケースもはなればなれになっている。	241-④		
4177	女がものうげに手をふれるとそれらは集ってくるが、手をはなすとたちまち関係はほどけ、破片となって、孤立してしまう。	241-⑤		
4178	ふと女が起きあがる。	241-⑦		
4179	ベッドから両足をたらし、病みあがりの人のように背を丸めて顎をだし、陰険な低声でたずねる。	241-⑦		
4180	「あなたのお友達なんか、どうしてるの？」	241-⑨		
4181	「近頃めったに会わない」	241-⑩		
4182	「みんな家庭におさまって、たいくつだけれどしっかり暮してるの」	241-⑪		
4183	あなたみたいにキョトキョトしてないわよ。	241-⑪		
4184	あなたは軽蔑してるらしいけれど、これだって大変なことなの	241-⑫		
4185	貝が真珠をくるみとるようなことなのよ」	241-⑬		
4186	「とんでもない。	241-⑭		
4187	軽蔑なんかしてないよ。	241-⑭		
4188	それも誤解だね。	241-⑭		
4189	ただおれはがまんができないだけなんだ。	241-⑭		
4190	じっとしてると頭から腐っていきそうな気がしてくる。	241-⑮		

4191	毎日をどうやってうっちゃるか。	241-15		
4192	おれはそれだけで精いっぱいなんだ。	241-16		
4193	弱いんだよ。	241-16		
4194	虚弱なんだ」	241-16		
4195	「いい年をして子供っぽいことをいってるわ。	241-17		
4196	弁解にしても三流だよ。	241-17		
4197	墮ちたわね。	241-17		
4198	せっかくウアラウプ(休暇)をとったのにこんなところで女にイジめられたり、バイバイとひとこといえないばかりにグズグズしたり	241-17		
4199	いい気味だわ。	242-2		
4200	バイバイっていわせないわよ。	242-2		
4201	いつまでもそこでそうやってなさい」	242-3		
4202	「大学にのこったのは助教授になってる。	242-4		
4203	父親の会社をちいだのは社長になってる。	242-4		
4204	新聞社ならデスクとか次長とかだね。	242-4		
4205	みんな太るか禿げるかで、顔形がすっかり変わってしまって、見わけもつかないよ。	242-5		
4206	会えば病気がゴルフの話だね。	242-6		
4207	糖尿や血圧なんかがいい。	242-6		
4208	病気の話をはじめるといきいきしてくる。	242-6		
4209	そうでなかったら戦争中、子供のときに豆カスやハコベを食べた話、これもいきいきできる。	242-7		
4210	無限に語れるね。	242-8		
4211	病気と豆カスの話をするなどいわれたら両手を縛って川へほりこまれたようなもんだ。	242-8		
4212	豆カスの話はいいな。	242-9		
4213	夢中になるよ。	242-9		
4214	おれたちの世代の絶対不可侵なるものといえば豆カスだね。	242-9		
4215	豆カスが聖域だね。	242-10		
4216	ほかに何も無い」	242-10		
4217	「それであなたは腐るのがイヤなばかりに独楽みたいに回転しつづけてるってわけね。	242-12		
4218	回っているあいだはたっぺいられる。	242-12		
4219	止ったら倒れる。	242-13		
4220	誰にたのまれたわけでもないのにあんなところへ行って、ゴミ箱のおかげで犬死をして、それが本望ってわけ。	242-13		
4221	御苦労さま、だ。	242-14		
4222	いい気味だわ」	242-14		
4223	髪を白い指さきでなぶっていた女が、顔をこちらにふりむけた。	241-9		
4224	顔いちめんを髪で蔽われ、そのなかで眼が爛々と輝き、噛みしめたくちびるに酷薄と冷嘲がまざまざと浮んでいた。	242-16		
4225	蛇が怒って頭をもたげたようであった。	243-1		
4226	叫ばれるか。	243-1		
4227	襲われるか。	243-1		
4228	私は毛鉤をおいて女を凝視した。	243-1		
4229	女は、ふちまできて、体をのりだしていた。	243-2		
4230	しかし、どうしてか、ひきかえしていった。	243-2		
4231	女は眼を髪に蔽われたままベッドへ荷物のようにころがった。	243-3		
4232	私も分離している。	243-4		
4233	また毛鉤をとりあげて巻きにかかるが、房毛にも鉤にも自身を密封できない。	243-4		
4234	組みこむことも、結びつけることも、固定することもできない。	243-5		
4235	完成もしないし、ほぐすこともできない。	243-5		
4236	それは眼のしたで蝶か花のように起きたり、倒れたりするが、ある決意を集めることができない。	243-6		
4237	晩夏の夜の冷たい微風と、コカコーラのネオンをうけてたえまな赤くなったり青くなったりする壁のなかで、ゴミ箱のかげの死にどう備えていいのかわからない。	243-7		
4238	朦朧のままではここからでていけない。	243-9		

4239	すわりこんで、火酒でぼってり火照りつつ太って、頭から腐って	243-⑨		
4240	ベッドに呑みこまれ、シーツの皺に糊づけされ、女を抱くこともできなくなる。	243-⑩		
4241	本や新聞やフォークをとりあげるためにだけ手を使う、繊維で膨張した芋虫となる。	243-⑪		
4242	ひとりごとしかいわない芋虫となる。	243-⑫		
4243	ここでは壁を東から西にこえようとして人びとは射殺された。	243-⑫		
4244	壁ぎわのビルの窓からとびおりて射殺された。	243-⑬		
4245	壁のしたにトンネルを掘ってぐりぬけようとして射殺され、運河を渡ろうとして射殺され、西行き古電車にかけこもうとして射	243-⑬		
4246	けれど、レストランの窓には手榴弾よけの金網が張ってない。	243-⑮		
4247	ホテルの入口には機関銃がいない。	243-⑯		
4248	ベッドのまわりに砂袋の防壁がない。	243-⑯		
4249	野ネズミを洗面器で煮てたべることもない。	243-⑯		
4250	中学校の先生が昼飯のさいちゅうに背後からうどん売りのおばさんに射たれて頭を砕かれることもない。	243-⑰		
4251	いつ降ってくるかもしれない追撃砲弾を待ってカンヴァス・ベッドで靴をはいたまま寝ることもない。	244-①		
4252	何から決意を集めていいのか私にはわからない。あそこでは蜂のように何からでも集められたが、いまの私は、いわば、下腹が柔らかくなっている。	244-②		
4253	美食と好色と役たらずの内省でぐにやぐにやになっている。	244-④		
4254	ひとりごとの重さだけでも自身の足で自身の体がはこべないま	244-④		
4255	紙魚のように食いあさってわたり歩いてきた無数の本の片言隻語がつきつきと浮かんで、どこか一方所を痛烈にえぐりたてるか、骨に錆びついてくるかし、同時にまったくあべこべのことが完全に	244-⑤		
4256	この期に及んでも他人の言葉に束縛される。	244-⑨		
4257	女のいうとおりだ。	244-⑨		
4258	私はベッドに顎まで毛布におぼれておならにむせているのだ。	244-⑨		
4259	ときどき恐怖が、広い、冷たい、濡れた背をもたげてつきあげかかってくるが、体をこわばらせて眺めているとやがて沈んでい	244-⑪		
4260	やむをえず私は畦道、病院の死体安置室、爆破された酒場、ジャングルなどで目撃した、臨終や、大破されたがまだ生きている肉の袋や、固型化してしまったそれなどを思いだそうとするが、どれもおぼろで、役にたたない。	244-⑫		
4261	それは口で描写すると、ひよとした瞬間に女をおびえさせることができるかもしれないが、ぬけ殻であることを私が感じすぎて	244-⑭		
4262	女がこわばっている背のうしろで私はたるむということになる。	244-⑯		
4263	おなじ事物を、いま、ここで、目撃したら、私は声を吞んでしまうにちがいない。	244-⑰		
4264	死体はいつでもぎこちなくて痛烈に新鮮であり、野卑でみすぼらしい。	245-①		
4265	何度見てもおびえないですませられたことがない。	245-①		
4266	異物が侵入してくると私はこわばって黙りこんだり、そのあとでこわばりをほぐす気配を見せつつ笑ったり、おなじ状態にある同席の人々をほぐすためにふいに一挙に声にだして笑ってみたり、異物の周辺を畏怖をこめて語ってみたり、挨拶としてそれを語ってみたり、どう語るかにこころをわずらわしたり、無数の小さな、ぶざまな動作と言葉で異物を消化することに努める。	245-②		
4267	しかし、生きているものはたえまなくぐのくのだ。	245-⑥		
4268	その流れが釘のように食いこみ錆びこんできつつ、異物もまた生き物のように流転していく。	245-⑦		
4269	おしゃべりは梅毒である。	245-⑧		
4270	内省も梅毒である。	245-⑧		
4271	いまの私には平和が梅毒である。	245-⑧		

4272	それらはまさぐりようもなく、避けようもないのに私をひっそりとしぶとい気配で腐らせにかかり、椅子へすわりこませてしまう。	245-⑨		
4273	萎えて柔らかくなった下腹に脂がみっしりとつみかさなり、盛りあがり、はみだしてくるのをおぼえつつ、ベットにかさばった女の体を眺めて、毛鉤を巻く。	245-⑩		
4274	トイレにいくのにはベットからでて靴を足につっかけ、ドアをあけて、長くて暗い廊下をいかなければならない。	245-⑬		
4275	廊下もまた古風なので天井が高く、壁の胸あたりから暗くなっていて、ふり仰いでも天井は見えない。	245-⑭		
4276	便器も浴槽も、頑強で、大きく、太く、厚く、傷だらけである。	245-⑮		
4277	女が帰ってきて、部屋に入り、いくらかわらいた口調で、鏡にむかって、「いま、私、考えたんだけどね。	245-⑰		
4278	あなたがああいう経験をしたのなら、たいいていのことはバカバカしくなってまともに相手にする気になれなくなったのじゃないか。	245-⑰		
4279	だから、ああして、昼寝ばかりしてたのじゃないかしら。	246-①		
4280	それにイライラしていた私がバカだったのじゃないかしらと、思えたわ。	246-②		
4281	ふとそう思ったの。	246-③		
4282	風呂のお湯の出がわるくて、ちっともあたたかくなれなかった」	246-③		
4283	清朗なような、媚びるような、詫びるような柔らかさで女はそういったが、ベットに入っていく横顔を見ると、けわしく肉を削ぎおとされて口を噛みしめ、眼のしたについぞ見たことのない鬚りが	246-⑤		
4284	枕を少し手ではたいて形をなおし、ふたたび女はだまりこくってシーツのなかに沈みこんだ。	246-⑦		
4285	ゆるやかな呼吸のたびに肺のうごくのが見えた大穴や、黒いインキのようにひろがっていくと見えた緑の野戦服の血や、もだえも泣きもしないまるで日光浴をする人のようにタバコに火を吸いつける私の手を眺めていた黒い眼などを私は思いだそうと努め	246-⑨		
4286	それらはあらわれもし、没しもした。	246-⑪		
4287	回想という不断の指紋まみれの仕事のためにそれらは毛鉤をこえてくることができないほど損傷されてしまい、眼も口も見わけがつかなくなっている。	246-⑫		
4288	しかも、それらは、呼びおこされてついそこまでやってきはしたものの霧にさえぎられてたちどまったり、佇んだり、茫然とした顔つきでいる気配であった。	246-⑬		
4289	手もとまで呼びよせようとして私が躍起になって濃くなろうとすればするだけそれらは稀薄になり、おぼろになり、見えなくなった。	246-⑮		
4290	微風や壁に浸透されたくないばかりに私は夜となじんでその力を借りつつ自身に固い殻をかぶせようとするのだが、そうすればするだけ剥がれた貝の肉になるような感触があった。	246-⑰		
4291	微風にも、明滅する壁にも、森の茸にも、女のひそやかだが聞こえよがしと感じられる吐息の音にも私は浸透されなくなかつ	247-②		
4292	しかし、恐怖はそうして正面から追っていくと人形だけをのこしてどこかへ消えてしまうのだが、なにげない瞬間にたちもどって容赦なく襲いかかってきた。	247-③		
4293	罎の黄いろく、大きく広がった便器に小便をそそぎこんでいるさなかとか、暗い廊下をゆっくりと壁に沿って歩いているときとかに、それはふいにあらわれ、一瞬で私をしゃにむに砕き、思わず心臓のとまるようなものを間のなかに見せて、去っていった。	247-⑤		
4294	夜ふけにそれがくる。	247-⑨		
4295	潮がまたまわってきたらしい。	247-⑨		
4296	どこかで私を狙っているらしい。	247-⑨		
4297	ベッドによこたわっていると、どうかしたはずみに激震が起る。	247-⑩		
4298	強烈な衝撃がふいに全身をかけぬけるのである。	247-⑩		
4299	びくっとして体が跳ねそうになることがある。	247-⑪		
4300	雪崩れが走っていく。	247-⑪		
4301	地表の木も石も柔らかい土壌も、何もかもを刃でこそいで消えていくのが眼に見える。	247-⑫		

4302	回想や内省や模索にふけたあとのくすぶりも、そのむこうに明滅する想像、予感、たわむれの思惟もいっさいがっさい、音もなくさらわれてしまう。	247-12		
4303	手と足がしびれたようになり、身うごきならなくなる。	247-14		
4304	冷たい汗のようなものがにじむこともある。	247-15		
4305	ベッドも壁も市も消え、足もとのほうに広い闇がたちあがって際限なくひろがっている。	247-15		
4306	恐怖でこわばったまま私はその荒寥と静寂を贖める。	247-16		
4307	学生時代にも私はこれにしばしば襲われて、そのたびごとにいっさいが霧散するので、おびえたあまり、過剰な生が進行するために肉が置去りにされ、その真空が剥離をひきおこすのだと考えたことがあったが、“過剰”や“進行”には指摘よりも主張	247-17		
4308	その主張は無力を認めたくない衝動からする強弁だったから、しばらくは得意になったり、全身をゆだねたりしたが、何度抵抗しても敗れるばかりだと知らされると、いつとはなく消えてしまっ	248-3		
4309	いま決意を集めたいばかりにつきからつきへ惨禍と苛烈を思いだすことにふけているためにそれがくるのではないと思われ	248-5		
4310	激震のあとでは回想もその場しのぎのたわむれにすぎないと感じられる。	248-6		
4311	それはいつでもくる。	248-7		
4312	湖が消え、アーベントロートが消えた。	248-7		
4313	魚の閃めきが消え、乾草小屋が消えた。	248-8		
4314	ガラスの壁が消え革張りのソファが消えた。	248-8		
4315	寂寥はあたりにひろがり、体のなかにもひろがり、骨や内臓も消えてしまって、皮膚すら感じられない。	248-9		
4316	ゆりもどして味わった阿片の眠りにも寂寥はあったが、あれには明澄をきわめ、冴え冴えとした安堵の虚無があったのに、この虚無には凍りつくような広大さがあるばかりで、私は子供のよう	248-10		
4317	ある夕方、タバコを買いに外出した女が、部屋にもどってくると、そっとタバコをテーブルにのせてから、「いまそこを歩いていた	248-13		
4318	「頭のなかでガラスの割れる音がしたわ」	248-17		
4319	竦んだ眼でちらと私を見ると、静かに服を着かえにかかったが、ズボンをぬぎはしたものの、力がそこで尽きたように、そのまま	249-1		
4320	ベッドにすべりこんだ。			
4321	しばらくしてから、女は顔をふせたまま、「抱いて」といった。	249-3		
4322	「ここへきて抱いてちょうだい」	249-6		
4323	低い、細い声だったが、異様な気配があった。	249-7		
4324	いそいでベッドにすべりこみ、女をうしろからそっと抱くと、女はその手をにぎった。	249-7		
4325	にぎったというよりは触れたというほうが正しかった。	249-8		
4326	少し汗ばんでいるが冷たくて、指のどこにも力がなかった。	249-9		
4327	私の指に触れているだけが精いっぱい、いつ落ちるかもしれない気配であった。	249-9		
4328	女は枕に顔を埋めたままぶるぶる全身をふるわせたが、しばらくくすると静かになり、水に浸った藁のようにぐにやぐにやになった	249-10		
4329	が、ふいにまたこわばりがあちらこちらに走って小刻みにふるえ			
4330	枕のなかでぐもった声が、「お母さんみたいになりたくない」ぼんやりとつぶやいた。	249-13		
4331	「お母さんみたいになりたくない」	249-16		
4332	その声には激情がなかった。	249-17		
4333	激しくなる力をことごとく消費してしまっている気配があった。	249-17		
4334	苦しめなくなっているらしかった。	250-1		
4335	これまでに見たことも想像したこともなかった虚弱があらわれ、女はその言葉にすがって耐えているというよりは、すでに異域にすべりこんで漂っているのではあるまいかと感じられた。	250-1		
4336	不安が私を走りぬけた。	250-3		
4337	手や足や胸がふいに冷たくなった。	250-3		

4336	女の肩から手がすべり落ちそうになった。	250-④		
4337	「どうしたの？」	250-⑤		
4338	「……………」	250-⑥		
4339	「お母さんがどうしたの？」	250-⑦		
4340	「……………」	250-⑧		
4341	大きく女の胸を抱いてそっとこちらにむきかえると、女はされるままに仰向けになり、枕のうえで頭をぐらぐらさせた。	250-⑨		
4342	覗きこむと顔が廃墟になっていた。	250-⑩		
4343	このあいだのような噴出する痛恨はどこにも見れず、ただ蒼ざめて、口を少しあげ、深く皺をきざみこまれ、稀薄な静穏があっ	250-⑩		
4344	これまで女が自分からすすんでしゃべりだすときのほか私は身上話をたち入って聞こうとしたことがなかったし、女は笑いながらできる身上話のほかに何もしゃべろうとしないで、そのままできたのだが、母は異域の人だったのだろうか。	250-⑫		
4345	かつて女のまわりに漂う匂いのなかにまざまざとあった不幸はそこからきていたのだろうか。	250-⑭		
4346	孤哀子だった娘ざかりのある時期に母を養っていたのだろうか	250-⑮		
4347	そのために何が避けられなかったかと考えるとかつての私の妄想は正しかったのだろうか。	250-⑯		
4348	だからこそ日本を憎みぬくことができたのだろうか。	250-⑰		
4349	とつぜん女がこちらに送りかえされた。	251-②		
4350	顔が廃墟でなくなった。	251-②		
4351	眼に焦点がででき、おだやかな微光が漂い、女は私を見てひきつけた微笑をうかべた。	251-②		
4352	「私、何かいったかしら」	251-④		
4353	「いや。何もいわなかったよ」	251-⑤		
4354	「そう」	251-⑥		
4355	「ふいにおかしくなっただけだよ」	251-⑦		
4356	「私、タバコを買って道を歩いていたら、いきなり頭のなかでガラスの割れる音がしたの。	251-⑧		
4357	それでいそいで帰ってきたんだけど、それきりフワツとなって、わからなくなったの。	251-⑧		
4358	何だかへとへとだわ。	251-⑨		
4359	ちょっと寝ます」	251-⑩		
4360	女は憔悴したそぶりでのろのろとネグリジェに着かえると、小さな声で、おやすみなさいといい、ちょっと頭が痛いわとつぶやいているうちにかすかな寢息をたてはじめた。	251-⑪		
4361	一時間ほどして女は眼をさまし、御馳走を食べたい、『南華』へいってチャプスイのいいのを食べたいわといった。	251-⑬		
4362	角のパイプ屋には明るい灯がついて、天井から床までのコルク壁全面を埋めて数知れぬパイプが褐色の宝石として静かに輝いているのが、窓ごしにちらと見えた。	251-⑭		
4363	『南華』は客でたてこみ、赤と金と黒のなかで、うるんで閃めく淡青色の眼や、汗ばんだ頭頂や、薔薇色の頬などが明滅していたが、螺鈿をちりばめた屏風のかげに席が一つだけあいていたので、そこにむかいあってすわった。	251-⑯		
4364	スーパー・ドライ・マーティニを二つ注文し、給仕の傲然とした謙虚の顔にしてはあまりにも貧弱すぎ、乏しすぎるメニューのなかから、涼菜にクラゲと豚の胃袋、スープに鱈のひれと卵白をからめたの、温菜にチャプスイ、小蝦の揚げ団子を選んだ。	252-①		
4365	チャプスイは屑物の交響楽で、いろいろな漢字をあてられる皿だが、ここでは『八宝菜』となっている。	252-④		
4366	ためしに手帖を一枚やぶって『全家福』と書いて給仕にわたしたら、彼は中国人なのに漢字がまったく読めないらしいそぶりで	252-⑤		
4367	紙きれを持って調理場へ消えていったが、やがてとろけそうに笑いながら残飯箱のゴマ油炒めをはこんできた。	252-⑥		
4368	バターでなくてゴマ油の匂いがするので中国料理だというのなら認めるしかないが、むしろこれは馬の餌であった。	252-⑧		
4369	女は眼を細くしておいしいおいしいといって食べた。	252-⑨		

4370	私は何もいわずに半分をたべた。	252-⑩		
4371	この店には中国人はいるが料理人はいないらしい。	252-⑩		
4372	南軒酒美青梅熟	252-⑫		
4373	華夏肴佳玉粒香	252-⑬		
4374	「……これならおれでもできるよ。」	252-⑮		
4375	屑物野菜の五目炒め学生ヤケクソ風というようなものだね。	252-⑮		
4376	これで銭がとれるというんだから世間は広いね。	252-⑯		
4377	香港へ行ってこんなことをしてごらん。	252-⑯		
4378	苦力にぶったたかれるよ。	252-⑰		
4379	あそこの波止場の苦力はじつにうまい屑を食べているのだ。	252-⑰		
4380	ゴミ箱のかけでモツの五目入りのお粥をすすってごらん。	252-⑰		
4381	混沌、かつ静穏だよ。	253-①		
4382	ここのシーサンはいったいどこでとれたんだろう」	253-①		
4383	「わかってる。」	253-③		
4384	わかってるの。	253-③		
4385	大きな声をださないで。	253-③		
4386	私はこれで満足したの。	253-③		
4387	これでも私にはたいへんな御馳走なのよ。	253-③		
4388	いろいろひどいことをいったけれど、私、あなたにはすっかりお ごられてしまった。	253-④		
4389	「おわびしたいわ」	253-⑤		
4390	ふいに声音が低くなったので、いそいで覚悟をきめにかかった が、今日はあのことからずっと女はそうなのだった。	253-⑥		
4391	オリーヴのかすかな塩味に冷たいジンの苦みが交じったなかで 眼をすえてみると、蒼ざめた、高い頬に血の灯が射しかかっ ているが、肩にも首にもこれまでいつもそうだった機敏と不屈が消	253-⑦		
4392	ポートのなかにはちあがって腕をぴしゃりとたたいた娘も、アザ ラシのコートを全裸へ羽織って鏡のまえでゆるやかにすべっ ていた女も消えている。	253-⑨		
4393	冷たい酒精と温かい料理のために頬がほんのりと雪洞になっ ているが、テーブルの白布に腕をおいて眼をふせている上体は、 ずっしりとしながらも、昨夜の姿がどこにもなかった。	253-⑪		
4394	ほとばしる流れや、そのなかでもゆるくうごく渦や、陽とたわむ れる浅瀬や、思いがけない豊饒なくらい淵や、水が澄みきって いるのに泡だけが黄ばんで緩慢にふるえている落ちこみなどが すっかり消えてしまい、女は眼も肩も腕も、冬の陽のようになっ	253-⑬		
4395	どこもかしこも淡くて、憔悴、柔らかく、寒い。	253-⑮		
4396	腰骨を貫通されたのに何が起こったかわからないというまなざ して足を折ってしまった鹿のようなところがあった。	253-⑯		
4397	女は銀血のふちから眼をあげないで、皿よりは自身の後頭部の 内側を眺めているようなまなざしで、ひそひそ、つぶやいた。	254-①		
4398	「私ね、子供のときに絵本で読んだのだけれど、どこかの漁師 の歌があるというのよ。」	254-③		
4399	スコットランドだか、インドネシアだか、それはどうでもいいけれ ど、漁師の歌だというの。	254-③		
4400	男は	254-⑥		
4401	はたらかにやならぬ	254-⑦		
4402	女は	254-⑧		
4403	泣かにやならぬ	254-⑨		
4404	つまり、そういうことなの。	254-⑪		
4405	変れば変るだけ、いよいよおなじということ。	254-⑪		
4406	それなんだとわかったの。	254-⑪		
4407	タバコ屋の店さきでフツと思いだしたの。	254-⑫		
4408	そうしたらあとはボートとなっちゃった。	254-⑫		
4409	はたらくつもりであなたがいくのかどうかわからないけれど、 やっぱりそういうことになるでしょうよ。	254-⑬		
4410	あなたは冷酷については慣れていらっしやるけれど、優しさにつ いては無器用そのものよ。	254-⑭		
4411	もう追及しないわ。	254-⑮		

4412	どこへでもいらっしやい」	254-15		
4413	諦めでもなく冷嘲でもない、ある透明な自由さで女はそうつぶやき、マーティニのグラスの底にのこっていた二、三滴をすすって、かすかに眉をしかめた。	254-16		
4414	優しい口調だったが私には墜落が起こった。	254-17		
4415	とつぜんプールの跳躍台のさきにたたされてうしろから眺められているような気がした。	255-1		
4416	求めているものが得られたはずなのに昂揚よりは下降しかなかった。	255-2		
4417	女は異域を背のうしろの赤い闇に持っていて、いつそこへすべりこむかしれず、すでに半身を犯されているのかもしれないのに、暗い、澄んだ眼でじっと灰皿を凝視し、しかもそれにとらわれてはいなかった。	255-2		
4418	女の大羽根のかげに体をかくしながら顔だけ外へだして躍起となっていただけのことではなかったか。	255-5		
4419	ふとそう思うと私は崩れかかるのをおぼえた。	255-6		
4420	女は半ば狂いながらも堂々としているのに、私は混乱そのままに正気をよそおうことに腐心している。	255-6		
4421	安堵しながら不安がわきあがってきた。	255-8		
4422	わくわくするような、肚にこたえる孤独が音なく襲ってきた。	255-8		
4423	裸の貝の肉にそれがしみてきた。	255-9		
4424	死がテーブルのはしのあたりにやってきて背とも顔ともつかむものを見せて佇んでいる。	255-9		
4425	すぐそこにきている。	255-10		
4426	手をのばせば触れられそうである。	255-10		
4427	形がわかりそうである。	255-11		
4428	女が、遠くで、「お手紙をちょうだい」	255-12		
4429	つぶやいた。	255-14		
4430	まだ遅くはない。	255-15		
4431	はずかしくもない。	255-15		
4432	手のこんだいたずらだったことにして解消してしまってもいいの	255-15		
4433	バイク釣りにいってもいいのだ。	255-16		
4434	睡蓮の葉かげの暗い秋の水のなかを一メートル近い、ずっしりとした体がひそやかにうごきまわっているはずである。	255-16		
4435	東京へ帰って書齋へすわってもいいのである。	255-17		
4436	これは日本人の戦争ではないのだ。	256-1		
4437	単純でむきだしで巨大なその思いが胸にきてすわりこんだ。	256-1		
4438	絶対的自由主義者であるらしい私がこの期に及んで血縁や血縁によりそいたがるのは失笑するしかないが、事実であった。	256-2		
4439	日本人の戦争であってほしかった。	256-3		
4440	国家の強制や命令や要請であってほしかった。	256-4		
4441	憎悪や絶望に根があってほしかった。	256-4		
4442	私をいたむ弔辞で述べられるかもしれないいくつかの観念が明滅し、そのいずれもがいくらかずつは真実であることが感じられたが、だといって全部をあわせても私を蔽うことにはなりそうではなかった。	256-5		
4443	それらの壮語はことごとく広大で稀薄すぎ、言葉でありすぎて、体をゆだねることもできず、跳躍板となりそうにもなかった。	256-7		
4444	死はついそこにきているが、私がここにはいない。	256-8		
4445	私は虫と人のあいだを漂っている。	256-9		
4446	私は決意していない。	256-9		
4447	私は私にまだ追いついていない。	256-9		
4448	決意もできず、追いつくこともできず、いつでもひきかえせるのだと思いつつ、おぼろなままで、でていく。	256-10		
4449	中世の僧はテーブルに頭蓋骨をおいて日夜眺めて暮した。	256-11		
4450	私は生温かい亜熱帯の土のなかで腐っていく自身の死体を、蒼白い蠟状からはじまって灰いろの粉末となるまでの過程を想	256-12		
4451	「公園にでもいってみる？」	256-14		
4452	「それより電車にのってみたいな」	256-15		

4453	「電車？」	256-16		
4454	「この環状線だよ」	256-17		
4455	「いいわ」女は淡い顔をしてたちあがった。	257-2		
4456	あらゆる駅は灯と色と閃きの誘蛾燈だが、その駅だけはちがっ	257-3		
4457	駅に近づくにしがって通りは暗くなり、店も、灯も、人影も、匂	257-3		
4458	いも分泌されなくなる。			
4458	からっぽの溝に女と私の靴音がひびく。	257-4		
4459	ところどころ歩道のコンクリートが裂けて雑草が生えているの	257-5		
4460	が、さびしい草のように立つ街燈のとぼしい円光のなかに見え	257-6		
4460	駅は限界を不感症にしたが、駅そのものも廃墟である。	257-6		
4461	壁は汚れるままに汚れ、ドアは乾割れ、どこからか古い小便の	257-7		
4461	匂いが漂ってくる。			
4462	女が窓口へよって行って切符を買ったのでやっとながらいるとい	257-8		
4462	うことに気がついたが、それも顔というよりは蒼白い霧のひとかた			
4463	まりとしか見えない。			
4463	階段をあがってプラットフォームにでたが、人は誰もいず、と	257-9		
4464	ころころに円光が落ちているだけである。			
4464	眼のしたに広大な灯と騒音の干渉がひろがっている。	257-10		
4465	女は靴音をひびかせてむこうへ歩いていき、しばらくして円光を	257-11		
4465	よこぎって闇からもどってきた。			
4466	寒そうに首をすくめ、「ゲートの詩をごぞんじかしら」	257-13		
4467	「たくさんあるよ」	257-14		
4468	「あなたなら知ってるわよ。」	257-15		
4469	なべての頂に憩あり	257-17		
4470	このことをいってるのよ、あれは」	258-3		
4471	女は組んでいた手をほどいて何となくあたり一帯をさしてみせ、	258-4		
4471	いたずらっぽく低い声で笑った。			
4472	やがて電車が闇のなかからあらわれた。	258-6		
4473	何輛も連結してあるがどの箱にも乗客は一人か二人いるき	258-6		
4473	り、なかにはまったくからっぽのもあった。			
4474	おりる人もいず、乗る人もいない。	258-7		
4475	女と私がドアをこじあけて乗りこむと、電車はギシギシきしみな	258-8		
4475	がら走りだした。			
4476	古鉄の箱は老いているけれど頑強で、そして清潔であった。	258-8		
4477	新聞紙もキャンデーの包紙も唾も落ちていず、リノリウムの床は	258-9		
4477	ところどころ剥げて穴となっているが、清潔である。			
4478	誰も乗らないだから汚れようがない。	258-10		
4479	つぎつぎと駅につくが、どの駅もこの駅もおなじようになら	258-11		
4479	ずっぽく荒寥としているので、不動の一つの駅があつて			
4480	そのまえをとめどなく走りつづけているような気がしてくる。			
4480	まるで幽霊船だった。	258-13		
4481	しばらくすると女が、「東に入ったわ」といった。	258-15		
4482	またしばらくすると、「西に入ったわ」といった。	258-17		
4483	乗ったまましていると、電車はいつまでも市の上空を旋回しつづ	259-3		
4484	“東”に入ると、その入口の駅で止まるが、あとはどの駅にも止	259-3		
4484	まらないでかけぬけて、“西”に入る。			
4485	その地区では一つ一つの駅に止まって、やがて“東”へいく。	259-4		
4486	各駅停車とノン・ストップのちがいはある。	259-5		
4487	しかし、どの駅もみなおなじ無人境なので、各駅停車もノン・ス	259-6		
4487	トップもおなじことだった。			
4488	頑固に、勤勉に、正確に、止まったり、かけぬけたりするが、お	259-7		
4488	なじことだった。			
4489	入ってきて、人生と叫び、出て行って、死と叫んだ。	259-8		
4490	女が、「また、東よ」という。	259-10		
4491	しばらくすると、「西だわ」といった。	259-12		
4492	“東”は暗くて広く、“西”は明るくて広がった。	259-15		

4493	けれど、止まったり、かけぬけたり、止まったり、かけぬけたり、おりにいく背も見ず、乗ってくる顔も見ず、暗いのが明るくなり、明るいのが暗くなるのを、固い板にもたれて凝視していると、“東”も、“西”も、けじめがつかなくなった。	259-⑮		
4494	“あちら”も、“こちら”も、わからなくなった。	260-①		
4495	走っているのか、止まっているのかも、わからなくなった。	260-①		
4496	明日の朝、十時だ。	260-③		

英文訳	
I know thy works,that thou art neither cold nor hot;I would thou wert cold or hot. BOOK OF REVELATION CHAPTER 3,VERSE 15	
In those days I was still doing some traveling.	
I had just left one country and entered another.Sleeping and waking,I passed one day after the next in a cheap hotel in the students' quarter of the capital city.	
It was the beginning of summer,most of the inhabitants had already gone south on vacation,and the city was deserted,like a vast cemetery or an empty valley.	
Every day,the rain began in the morning and the sky hung low like an old,greasy wad of cotton.There was no warmth or brilliance anywhere.	
Summer was ailig wiht some terrible incontinent sickness and there was nothing but the cold,wet and dark.	
There was no sense of burgeoning life or growth.	
That appealed to me.	
A river flowed in front of the hotel,and a cathedral stood on the opposite bank amid a grove of trees.	
Whenever I looked,the river was a muddy gray-yellow and dimpled by numerous raindrops,and the gargoyles of the cathedral roof were drenched.	
The gargoyles had frozen in the midst of turning aroud to roar;having been stared at,they had turned into stone.	
I sat on the bed,sipping vodka,and wathched the circles continuously expanding and then disappearing across the surface of the yellow river.	
And as I Stared,the fungus threads of the rain soon vanished,and it seemed as though only one solid stream of rain was falling.	
I would become bored with it after a while and fall asleep.	
Waking,I would go out to buy bread and ham,not even stopping at bookshops,movie theaters,or restaurants. I would return to eat in bed,and then sleep some more.	
It seemed as though my body had disappeared and my brain had melted away;	
I could go on sleeping endlessly no matter how much I had already slept.	
The room was in a students' boardinghouse.	
The old wallpaper had been torn here and there,and was streked with brown bloodstains,apparently traces of crushed bedbugs.	
The mirror in the bathroom had a large Y-shaped crack; there was a bathtub,in which hot water was only occasionally available.	
A bed and a table crowded the room,so that one had to turn sideways to pass between them.	
Red curtains resembling bur-lap bags hung over the window.	OKUYAMA.GRP
They imparted a blood-red cast to the entire room,whenever I switched on the small,old,tulip-shaped lamp,and the desertfaded out,leaving only a soft warm	
Shadows of cliffs,forests,caves,and skies took from on the walls and ceiling.	
While watching, smoking a bitter cigarette made of pickled black leaves wrapped in cornpaper,I would begin to doze again,although I had only just awakened.	
No one knocked;no telephone rang; no books,no discussion.	
Icontinued to sleep in my red cocoon.	

My cheeks and stomach bulged with pale,flabby fat ,and whenever I wokeI felt as though I were wearing a mask.	
Imprisoned in heavy flesh,I would try to digest the memories of the past ten years,but I would only be overcome by lassitude,and all difficulties and joys would lose their substance,appearing like dusky shadows and distant landscapes.	
The lassitude proliferated like a greenhouse vine that has run over from a flowerpot onto the floor,and still continues to grow even though it has not the strength to lift stem or	
The vitality that evapo-rated from my body crawled over the wolls, sprawled across the ceiling,filled the room,and thrived like an internal confu-sion.	
Strands of monologues, words, and concepts entangled themselves wihtout any connection; they entwined, opened leaves, and reached out with grasping tentacles.	
When going out to buy bread, if the rain happened to diminish, I would climb the gentle slope of the bouleard leading to the park.	
I took secret pleasure in waching one not-quite old man working there. I would sit on a bench a little away from him.	
Whenever I was in the city, I had to check whether he was still in good health.	
I had done so the previous year and also three years	
He must have earned a fair living doing this same work over the past several years; com-pared to the first time I hadseen him, his abdomen had grown round and protruding, and bags had formed under his eyes. His back was stooped.	
But his art, which consists of swallow-ing and spitting out a flog, which he sees pedestrians approaching,	
He appears on the road,opens his mouth wide,and suddenly dangles his large,thick tongue covered with yellow-green fur.	
He places a frog on it and gulps it down.	
He blinks his eyes,	
raisis his right hand, and hits his potbelly fiercely wiht the edge of his hand.	
Water gushes out of his mouth, splashing all over,	
and dumping out the frog. Covered with gastric slime, the frog jumps around on the sand.	
The man picks it up again and returns is to the fishbowl.T hen he stretches out his open palm to the audience.	
The spectators fumble in their pockets and place one or two coins in the man's hand and then leave absent-	
Throughout the entire display,the man maintains his silence.	
He dose not utter a sound,	
not even a snicker.	
He seems to earn a living by swallowing the frog and water and spitting them out so many times a day.	
He is not a deaf-mute, for I had spotted him drinking at a bar, fishbowl at his side, talking and laughing with the	
I wonder if he didn't live through the war, swallowing and ejecting the frog for the masses of people who were rushing about in confusion.	
I wouldn't be surprised if it were his intention to do so until he died.	
Anyway, I have decided to believe he will.	
I feel content watching his total contempt.	
I cannot help giving a sigh of relief.	

I realize that there's a way out yet; and a way out such as this.	
I buy bread and ham at a store and return to my room, and taking off the shirt and shoes I had just put on a few minutes ago, I fall back into my bed.	
The blanket has a mold, shaped by my body, and I fit right back into the shell.	
As soon as my cheek sinks into the pillow,drowsiness begins to rise like smoke.	
Bits and pieces, soft things, shapeless ob-jects again begin to grow their leaves, stretch their vines, and fill the entire	
Early one morning,I put on a windbreaker and went to the railroad station.	
It was empty and cold,and the night was still crawling in the twilight of the street corners, as though leaving	
A large green shadow hung in the dark station and pink glints of light from the restaurant sparkled; but the walls were dismal and night and morning were surreptitiously vying with each other.	
The faces of men and women were either buried in wrinkles or evaporating at the edges of coffee cups.	
Many hitchhikers were crouched in sleep near the restaurant entrance,resting their heads on knap-sacks or dufflebags; a tacky smell,like that of the dirt between toes, rose from their hair and necks, and they kept thire waterry eyes open blankly, dropping their chins on their chests and retiring completely into their pubic-hair-like musutaches, in ways that reminded one of soldiers who surrender before	
I took a seat and asked for a hot rum.	
As the drops of hot rum,giving off a delicious aroma soaked into the softened, tired folds of my intestines, each drop felt as though it were causing a flower to open.	
Uderneath the stagnant fatigue, came the first slow stirring of anticipation.	
Then it started to grow rapidly, minigling with the rum and giving off vapors; it started to tower and began to hover over me without showing its face.	
She is coming by slieping car; I wonder if she slept well ...	
... It's been ten years.	
Roughly ten years.	
Everything is vague.	
I can't recapture it.	
My lethargy is beginning to take the upper hand again,thogh I am now in a crowd.	
Just the day before yesterday,when she sent me a telegram from the suburbs of the small capital of a meighboring country, my memories were reliable.	
I would pass the time in my blanket by constructing and recon-structing her voice, eyes, and surroundings, separating one scene and staring at it for hours.	
In the midst of flashing faces of numerous other women, one face loomed in the dusky light in front of them all.	
She laughed, arching her white throat, bit her thin lips, lowered her eyes, and brushed her hair from her forehead.	
But now all I can see is a small, distant scence of the day we parted, in the sweet aroma of the rum and the smoky fog of cigarettes.	
It was abut eight in the evening, at a suburban station in T okyo.	

Summer festers on.[p108]	
Summer has become diseased rather than ripe.	
Early in the morning,the chirping of birds is heard from the direcyion of the forest,and the sunlight is filled with buoyant excite-ment.	

I could not tell "over there" from "over here." I no longer knew whether the train was running or standing still.	
Ten o'clock...tomorrow morning ...the plane to Vietnam.	